

いのち ささげて

—— 戦中学徒・遺詠遺文抄 ——



国文研叢書  
No. 19

社団法人 国民文化研究会

いのちささげて

——戦中学徒・遺詠遺文抄——

## はしがき

「いのちささげて」と題したこの本には、——戦中学徒・遺詠遺文抄——といふ副題が添へられました。

これは、大東亜戦争における戦歿学徒の遺詠遺文のほかに、学徒出陣でありながら終戦直後に壮烈な自刃をした者の遺詠遺文、さらには、これらの諸君が出征する以前に、これらの諸君とともに一心共同体となつて、当時全国の旧制高等学校、旧制専門学校、ならびに官公私立の旧制大学に在学中、それらの学内にはびこつてゐた「日本の精神文化に対する軽蔑の言辞」またそれを不問に附してゐた「学風」に対して、学生の身を以て身を挺して戦ひ続け、つひに不幸にも病魔に斃れていつた諸君についても、その遺詠遺文をあはせてここに収録いたしました。そのため、戦歿学徒のものが主ではありますが、あへて「戦歿学徒」とはせず「戦中学徒」の名を本書の副題に冠したわけであります。

学業半ばにして軍籍に投じ、苛烈な戦局にあつて壮烈に戦ひ、その魂魄を祖国日本の

悠久の生命に投じた人々と、死せる場所は戦場とかかはりなくとも、尊い生命を燃焼しつづけて学園の正常化に身を挺した人々との間に、深い友情の絆が結ばれてゐることを確認しつつ編集されたのが、この書物であります。なほ本書は続刊も計画されてをり、計約五十名の「戦中学徒」の遺稿が収録される予定になつてをりますが、本書には戦歿学徒七名、自刃学徒一名、病歿学徒四名、計十二名（数へ年十七歳から二十九歳まで）のものを収録いたしました。これらの青年の間に通ひ合つてゐた「祖国日本の伝統への随順と没入」の精神は、必ずや読者各位のお心に深い感銘を与へずにはおかぬであらうものがあると信じてをります。

この「遺詠遺文抄」の編集は、これらの諸君とともにその時代に学徒であつた仲間たちによつて、戦後直ちに企画され、その後、昭和三十一年に現在の「国民文化研究会」が生れて、鹿児島県霧島で「第一回合宿教室」を開いたその時から、さらに一層の熱意をもつて取り組み出したことであります。しかし、いくたびかの挫折をのりこえ、やうやくにして第一冊目をここに上梓する運びに至りました。三十年といふ月日は、それ



は過ぎて見ればアツといふ間のやうでもありますが、さき逝きし友らのありましし日々のことは、年月を経るに従つて鮮明に甦つてまゐり、委員諸氏を中核にして多くの同人の方々の「果たさずにはやまぬ」追憶の一心が凝つて、ここに至り得たのであります。

住所もわからぬご遺族を探し求めて遠く訪ねる作業も、各委員諸氏が、多忙な生業・勤務生活の合間を縫つてのことでありました。さき逝きし友らへの敬仰と思慕の情なくしては、到底なしうることはなかつたと思ひます。逝きし友らの「死にやう」「生き方」が、本書を通じて、いまの若い人々に通ふものがありとするならば、在天の靈もいかばかりか喜びたまふことと思はれます。かくあれかし、と祈念しつつ、この「はしがき」の拙文とさせていただきます。

なほ、本書の題名『いのちささげて』は、本書の編集委員に終始助言を惜しまれなかつた、亜大教授・夜久正雄氏のご提案によるものであつたことを付言いたします。

昭和五十三年一月十五日

(社)国民文化研究会理事長  
亜細亜大学教授

小田村寅二郎

読者のご参考に供するために、本書に収録した学生諸君が、その生前に所属してゐたグループとそのグループ活動について、左に簡単にご説明させていただきます。

一

これらの戦中学徒諸君が、その学生時代に具体的に所属してゐたのは、「日本学生協会」と名づけられたグループ（戦後になつて、同じ名前の会が、下宿幹旋業として東京に出来ましたが、それとは全く関係がありません）で、そのメンバーは、当時の全国の官公私立の大学・高専校にわたつてゐた。この「日本学生協会」は、昭和十五年五月に結成されたが、この会には「道統」の前身があり、また上部団体として、昭和十六年二月に結成された「精神科学研究所」といふグループを持つてゐた。後者は、すでに学窓を出て社会人となつてゐる先輩たちのグループであり、この二つが一体となつて、学園ならびに社会にみられる思想の混迷を是正すべく、渾身の努力を展開してゐたのである。そして、この二つの団体の理事長は、ともに一高・東大出身の若冠三十歳の田所広泰といふ方であつた。なほ、この「日本学生協会」の顧問に就任してくださった方々は、公爵・近衛文麿、海軍大将・末

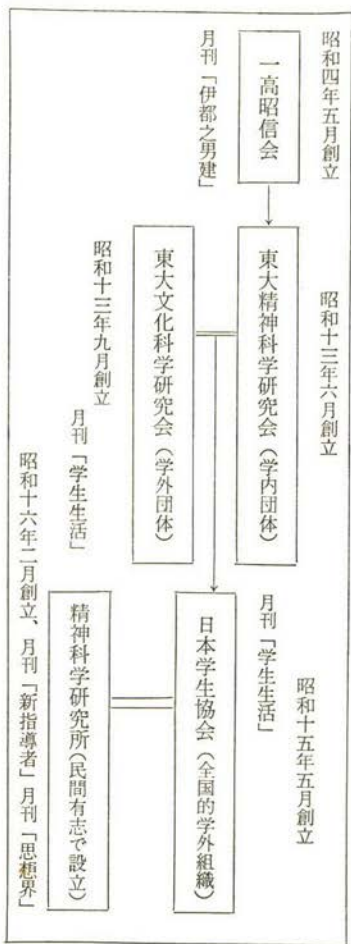
次信正、中島知久平、徳富猪一郎、平生鈞三郎、安井英二、陸軍中將・筑紫熊七、陸軍中將・柳川平助、白鳥敏夫、松井春生、宇田尚、文学博士・吉田熊二、文学博士・西晋一郎、栗本勇之助、堀切善次郎、文学博士・常盤大定、医学博士・暉峻義等、文学博士・鹿子木員信、清水重夫、角野久造、大坪保雄、三井甲之の諸先生であられた。

また、先に記した「日本学生協会」の前身といふのは、昭和十三年九月に生れた「東大文化科学研究会」（東大の学内団体としては「東大精神科学研究会」）であり、この「東大文化科学研究会」が発展的解消をとげて「日本学生協会」ができたのである。なほ、この「東大精神科学研究会」は、昭和十三年六月に東大の学内に創立されたが、これは、昭和四年五月に、旧制一高の中のできた「一高昭信会」の出身者たちが作ったものであった。この「一高昭信会」は、わづか三十歳で他界された篤学者、黒上正一郎先生を師と仰ぎ、聖徳太子と明治天皇の御思想を学問の中心として学んだグループであつた。

ついでには読者のご理解の便のために、左にこの道統を図表にして示しておきたいと思ふ。

## 二

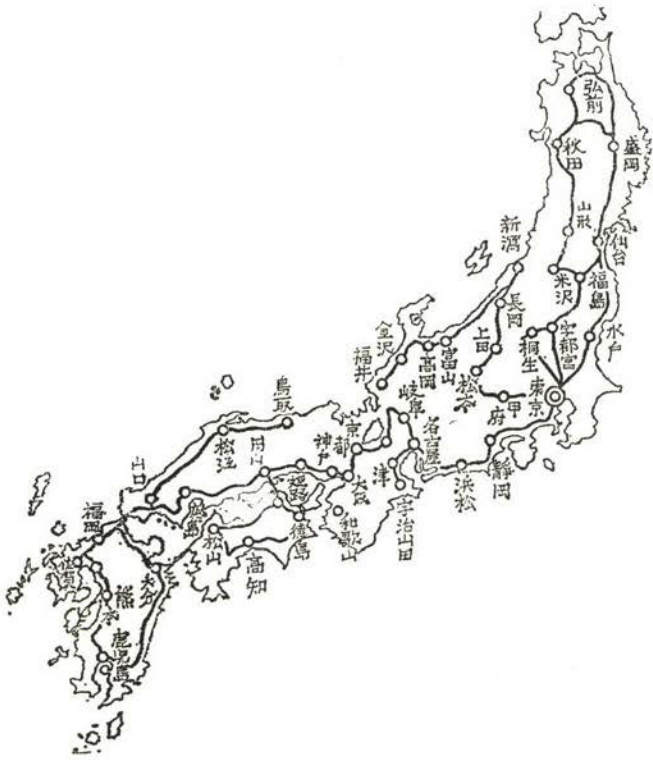
次に、右の「日本学生協会」が、どのやうに全国的な連絡網をもつてゐたかもお知らせしておきたいので、当時の月刊機関誌『学生生活』に掲載されてゐた、数次にわたる「全国巡訪地図」の一つをあとの九ページに掲載することにした。



### 三

当時、連絡がついてみた学校はほぼ全国にまたがってをり、具体例をもつて紹介すれば、昭和十五年七月、信州菅平高原で開催した「全国学生合同合宿」には、遠く満洲の建国大学、朝鮮の京城帝大、台湾の台北高商などからも参加者があり、八十四校、三百九十一名の学生の参加者がみられた。その学校名は次のごとくである。

旧制大学の部



昭和15年の全国遊説コース

東京帝大、京都帝大、大阪帝大、東北帝大、九州帝大、北海道帝大、名古屋帝大、京城帝大、東京商大、大阪商大、神戸商大、広島文理大、東京工大、新潟医大、建国大学（満洲）、満洲医大、慶応大学、早稲田大学、明治大学、拓殖大学、法政大学、日本大学、中央大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、国学院大学、慈恵医大。

#### 旧制高等学校の部

一高、二高、四高、五高、七高、八高、新潟高校、松本高校、山口高校、姫路高校、佐賀高校、福岡高校、水戸高校、松江高校、松山高校、高知高校、東京府立高校、浪速高校。山形高校

#### 旧制専門学校の部

山口高商、福島高商、福岡高校、長崎高商、大倉高商、大阪高商、高岡高商、和歌山高商、台北高商、長岡高工、米沢高工、浜松高工、東京高工、名古屋高工、広島高工、徳島高工、福井高工、仙台高工、秋田鉱山専門、東京高師、国士館、東京美術学校、東京外語学校、大阪外語学校、天理外語学校、九州医専、宮崎高農、千葉高等園芸、関西学院、横浜専門学校、二松学舎、大東文化学院、奉天科学院、北京興亜学院、青山師範、正則予備校、日本聖書学校、日本神学校。小樽高商

#### 四

ちなみに、右の信州菅平高原での約四百名による「全国学生合同合宿」は、それに引続いて参加

者全員が上京して、日比谷公会堂で大演説会を開いた。そして、満堂に溢れる東京都民の前で、思想混迷の日本を直ちに建て直すべし、と強く訴へた。今は亡き文士の尾崎士郎先生は、その壇上において力強い激励演説をしてくださったのである。

また、菅平での合宿の実況をはじめとして、右の日比谷公会堂における大演説会の模様はすべて、三十五ミリのトーキーフィルム（藤原ラボラトリー製作、解説のアナウンサーは、NHKの竹脇昌作氏が担当してくださった）に収められ、『文化の戦士』と名づけられて、内務省の検閲を経て、文部省より「一般用映画」としての認可を受けてゐる。このフィルムは今日も保存されてゐるが、この遺稿集の文中にも、時をり『文化の戦士』といふ名前が出てゐるが、それは、一つには登場者たちが自らを「文化の戦士」と自負してゐたことを指し、あはせてこの映画の題名をも兼ねてゐるのである。

## 五

この遺稿集の原稿は、「日本学生協会」本部の出版物をはじめ、各大学、高専校のサークル活動の中から生れた、手書きの謄写印刷のさまざまなレポートから抽出されてゐるので、それらによつたものについては、各項の末尾にその出典を記した。それら一つ一つのレポートは、当時学生たちによつて心をこめて作られたものであつた。

（小田村寅二郎、香川亮二記）



## 凡例

一、本書ならびに次に予定されてゐる本書の続刊には、合計約五十名の方々の遺稿を収録するつもりですが、今回はそのうち十二名について収録しました。

一、副題につけた「戦中学徒」の「戦中」の意味については「はしがき」に記しましたが、収録した遺稿の筆者は、昭和十六年から昭和二十年ごろまでに死歿された方々であります。

一、本書に収録した遺稿は、各人ともかなり大量のものが残されてゐて、その中から選びましたが、その種類は、「和歌」「詩」「俳句」「書簡」「論文」などにわたつてゐます。また、配列は、それらの種類別に行ふことはせず、執筆年月の順序に従つて配列しました。執筆年月が確認できかねたものは、内容から推定した時期によつて配列しました。

一、登場人物の年齢は、当時の習慣にならつて、すべて「数へ年」にしました。

一、採択した「書簡」などにつけられてゐた宛名の氏名については、そのまま掲載しましたがすべて敬称を省略させていただき、「○○宛」といふ形式に統一しました。なほ、それぞれの末尾に、



発信年月と発信地とが、判つてゐるものについては、記しておきました。

一、「仮名づかひ」はすべて「歴史的仮名づかひ」によりましたが、「ふりがな」は、和訓で読むものについては「歴史的仮名づかひ」を、漢字音で読むものについては「現代仮名づかひ」を用ひました。また、漢字の字体は、当用漢字によりましたが、一部については、字体から受ける感覚を考へて、正漢字を用ひたものもあります。

一、遺稿の文中に出てくる会名・地名その他固有名詞や、古い用語などについては、読者の便をはかつて、所々に編集委員によつて若干の「註記」を付しました。

一、採択した遺稿の中には、すでに同人たちによつて活版ならびに謄写印刷されてゐたものがあり、それから一部を引用してゐますので、それぞれの末尾に、その印刷物の名称を『』カッコで記しました。

## 目次

——表紙写真……「はにわ」武人——

はしがき……………3

ここに登場する学徒たちが、在学中に所属してゐた

グループとそのグループ活動について……………6

凡 例……………12

一 寺尾 博之……………(自刃・二十五歳)……………19

二 百武 禮之……………(戦死・二十五歳)……………67

三 吉田 房雄……………(戦死・二十九歳)……………93

四 名川 良三……………(戦死・二十七歳)……………153

五 石綿 一郎……………(戦死・二十五歳)……………175

六	米重 政行	………	197
		(戦死・二十四歳)	
七	加藤 信克	………	213
		(戦死・二十七歳)	
八	和多山儀平	………	247
		(戦死・二十二歳)	
九	藤原 邦夫	………	279
		(病歿・二十歳)	
一〇	池田 正一	………	315
		(病歿・十八歳)	
一一	石田 安治	………	351
		(病歿・十七歳)	
一二	江頭 俊一	………	367
		(病歿・二十四歳)	

あとがき	………	439
------	-----	-----

いのちささげて

——戦中学徒・遺詠遺文抄——

一、寺尾博之



寺尾博之

大正十年、京都市に生れる。昭和十四年、旧制高知高等学校に入学。翌十六年比叡山で行はれた全国学生合同合宿（註「日本学生協会」主催）に参加。昭和十七年、東京帝国大学農学部に入學、その後全国の大学、高専を遊説するなど強力に思想改革を目指す学生運動を推進した。十八年十二月、学徒出陣して海軍に入隊。大竹海兵団から土浦、

館山、横須賀などを経て、軍需省に出向。終戦当時は福岡の九州軍需管理部に所属してゐた。

彼は、貴公子の風手で、一見武人とは縁遠い存在に見えたが、内に凜烈たる志を秘めてゐた。二十年三月二十九日、最愛の弟尚之君を沖繩戦で失ひ（敵船団に特攻機で突入）、寺尾家を継ぐ者は、もはやほかにゐなかつたが、彼は終戦後の八月二十日、福岡市郊外の油山で、同じく九州軍需管理

部に勤務してをられた長島海軍技術中佐と共に、自決の道を選んだ。

二人が自刃した場所は、油山の中腹東方に何ひとつさへぎるものもない見晴しのよい高台であつた。十九日の夜は油山にある正覚寺に泊り二十日未明、庵を出てそのまま帰らず。残されたトランクの中に遺書と住職への礼状が入つてゐた。自刃にあたつてはまず彼が長島中佐の介錯を行つた。その介錯ぶりは古式に則つたもので首の皮が僅かに残されてゐた。彼の自刃もまた古式に則つてゐた。刃を力の限り腹部に突き刺し、その刃先は背中にまで貫通してゐたのである。その死顔は、すべてをなし遂げたといふ安らかな微笑さへ浮べてゐたといふ。これは検屍に立会つた憲兵准尉の証言である。時に、数へ年二十五歳。現在その場所には有志の手によつて高さ五メートルの石碑が建立され「海軍技術中佐長島秀男、海軍少尉寺尾博之自刃之地」と刻まれてゐる。

ここにあはせて、長島中佐の御略歴を紹介しておきたい。中佐は埼玉県秩父郡横瀬村の出身。埼玉師範学校に進み卒業まで首席を通された。その後東京高等師範学校から東京文理科大学に進み、卒業後千葉師範学校に勤務され、二十七歳の時、九州歯科医学専門学校の物理化学の教授に任命された。三年有余の後、期するところがあつて、九州帝国大学工学部に専攻科生として入学、物理学を研究。昭和十二年、海軍に身を投じた。海軍に入つてからは魚雷の研究に没頭し、その方面における日本海軍の第一人者であつたといふ。行年三十九歳。

昭和十七年——二十二歳——

## 巡回報告

(註 当時、日本学生協会の会員が全国各地の旧制高等学校、専門学校を訪れ、その志を訴へ、同志を求めすることに努めた。以下は、本人が、その一員として他の二名とともに四国地方を巡った時の報告書簡である)

十月十二日 車中にて 今かうして書いて居ります眼の前に出発式の時の友らの眼が浮かんで参ります。神前の御光が今朝程目にしみた事は、友の顔が今朝程大きく見えた事は、ありませんでした。寮を出てから宝辺兄に送られて橋本・川井両兄(註三名とも東大の同輩)と四人で宮城ををがみました。不気味な程に鮮やかなお堀の色、深く冴え切つた緑のお堀でした。宮城の御前に進んだ時はもう巡回も何もなく、たゞかうしてお傍近くをろがみまつり得る事の喜びで一杯でした。あの橋の上に畏くも出御遊ばされ民草の誠に答へさせ給うたのだといふことが思ひ浮かべられ、本当に命がけて行く気がしました。土手の緑と壁の白さが汽車に乗つてからも焼きついてはなれませんでした。

私共はたゞ此の喜びを 陛下に仕へまつる喜びを共にして参ります。御製を共にをろ

がみまつる所に生まれる宗教的感激こそ一切であります。日本全学生が共に一体と実感出来、本当に学生としての生の意義を確信することが、此の時代を支へる唯一の力であります。

東大合宿にて友らと登りし箱根山を見て

かの山よ友と登りし箱根とて教へらるゝに友らなつかし  
秋空を振り仰ぎつゝすゝき原わけゆく姿の浮かびくるかな

初島

トンネルを出づれば広き大海の沖に浮かべり一つ小島の  
かの島ぞ実朝公の伊豆の海や沖の小島とよましゝ島は

百武(尚美)兄の遺稿を読みて(註 旧制佐賀高校生だった後輩)

うつゝには見ざりし君のみ姿の御文し読めば浮かびくるかも  
たからかに我防人と心勇むとをたけびましゝ御姿偲ばゆ  
力強き君がみうたをよみゆけば胸の底ひゆ力湧き来も



天がける君がみたまともろともに友を求めて下りゆくなり

車中雑詠

手を腰に立ちてゆたかにみのりたる田づら見渡す翁見えけり  
種おろすよりの苦しみ思ふらむゆたかにみのる田に立つ翁は

白菊

秋草の中にまじりて一もとの色けざやかに見ゆる白菊

あらがねの岩のさけめゆ根をはりて花をつけけり野辺の白菊

四国に渡ればあたり俄かに明るく日の光実**に強し**

讃岐路さぬきぢやわれ入りくれば山のはゆ湧く白雲に夏は残れり

秋風にはだへ涼しく思へども日ざしは強し讃岐路の野辺

山の上は風強からむ群雲むらくもの飛ぶが如くに流れゆくなり

十月十六日 只今合宿所の護国会道場（註 高知市）に参りました。あやにく雨が降り  
出しましたが本当に一生懸命に頑張るつもりです。

十月十七日 昨夜は『明治天皇御集研究』（註 三井甲之著）の読み合はせを行ひ色々

話し合ひました。今朝は聖徳太子の御本を読み、午後から『神洲不滅』『進めこのみち』

を始め軍歌を一緒にうたひ、しきしまのみちを朗吟しました。夜は今しきしまのみち会

を実に自然に開きました。本当にすなほな、思ふことを何とか表現せんとされるまごこ

ろのにしみ出たみ歌にたゞ／＼うたれました。本当に我等の修行は常に新しい気持で行

はねばならぬことを痛感せしめられました。何れも始めて作られたのですが、本当に力

強い喜びと決意が溢れてゐると思ひます。いよ／＼明日で終わりますが今から、御集研究

を勉強し明日忠霊塔の前で解散します。昨日より降りつゞいた雨も昼前にはすつかり止

み、青空にゆつたりと白雲が浮かんでゐます。その彼方まで遠く遠く都の友らへ響けと

うたふ新しき友らの『神洲不滅』！それこそ祖国永久生命の信証であり、われらの戦ひ

の客証でありませう。新しき道は必ず開けます。すなほなる雄々しい若い友らの間に生

まれる高きやはらかいこの雰囲気に新しい同信会の誕生が出来たのです。たゞ／＼神の

守り友の守りと嬉しくてしかたがありません。本当に一日も早く、この喜びを自分でお話

したいと思つてをります。時代がいかに乱れ統制がいかに強化されようと、生まれな

がら与へられてゐる日本人本来のまごころは、必ず若き青年の内心深くたゞへられるのであります。友よ、全国ゆわき起る若き生命の雄叫び。あゝ学生運動の再建！

ふりこめし雨も上りて白雲のゆたかに高き南の空

昨日よりの雨をさまりてたわゝなる柿の肌へに夕日かゞやく

雨やみてすみわたりたる大空にそびゆる杉に夕日かゞやく

ちはやぶる神のめぐみぞかく友と共に進みて語らひうるは

都辺にわれ待つ友のいかばかり喜びまさむしらせまつれば

世はいかに乱れゆくとも若人の高き雄々しきいのちたえめや

うつしよは悲しくあれど新しき友と会ひ得るこのうれしさよ

新しき友と集ひしよるこびにわれら生きなむたゞ一すぢに

新しき友と集ひて聖王しょうおうの御文ををろがみよむぞかしこき（註 聖王、聖徳太子）

力強き友らのみしらべよみゆけば胸の底ひゆうれしさの湧く

共に共にたゞ一筋にしきしまのやまとことばを守りつがなむ

限りなく乱れゆく世を正さなむ神代ながらの道を学びて

大御歌道のしをりといたゞきて共に進まんしきしまのみち

新しき友と手を取り青空を仰ぎつ歌ひぬ『神洲不滅』（註「日本学生協会」式典歌）

天がける友の御たまもきゝまさむ友らとうたふ『神洲不滅』

新しき友とつぎ／＼知りゆくぞ神洲不滅の客証ならずや

十月十八日 只今鏡川畔忠霊塔の大前に新しき友らと跋かに合宿解散の式を行ひました。遙かに宮城ををろがみまつれば、お堀の、深くたゝへし水の色、松の緑と白壁の、けざやかに眼の前に浮かび来り、正大寮を立ちて最後のお暇を乞ひに参った時の気持が又しのばれます。大空にそゝり立つ忠霊塔に向って全国の友らへとゞけとうたふ『神洲不滅』！歌譜を眺めつゝ、たど／＼しく歌ふ新しい友らのこのよろこびに溢れた声！

その眼の輝き。東京をたつてからはじめて青空を仰ぎました。橋本・名賀石両兄と手をとりあつて、あゝこの身体の底ひからぞく／＼湧いてくる喜び！ 神洲不滅われらは信

ず！

（講究劇『神代ゆ今に』第一号昭和一七・一〇・一七、第二号二一・一一）

## 巡訪のをはりに（大阪から）（註 報告書簡）

四国を廻って帰りに第四回大阪・世界観大学講座（註「精神科学研究所」主催の文化講座、東京および大阪において開催）に出席したのでありますが、本当に軌道に乗つたといふか、強固なものになつたと心底より嬉しく思ひました。講座は二八、二九、三〇の三日間で定員は六百名でしたが、前日までに申込は五百八十名を越え、第一日目は立つてでも良いから聴かせてくれといふ人々で八百名にもなりました。その人々が皆実に熱心で、眼を輝かして食ひつくやうに聞いて居られました。（中略）最後が『文化の戦士』（註 昭和十五年、菅平における「日本学生協会」主催の合宿の記録映画）を上映してから田所大兄（註 日本学生協会理事 長 田所広泰）の講義でした。田所大兄は世界史の必然といふ名にかくれる不逞意志を徹底的に批判し尽され、これまで動乱を続ける全世界を統一せしめるのは決して単なるスローガン・標語のなし得る所ではない、ただ我等臣民が本心に心一つにする事であり、唯全国民がもろともに御製を拝誦するところにあるのみと絶叫され、直ちにこの所

より御製拜誦運動をまき拵げむと唱導されると、聴講生は既に予定の八時半を過ぎ九時  
を廻つても一人の立つ人もなく眼を輝かせてきゝ入り、田所大兄が朗々と拜誦しつづ  
けられる。後水尾天皇より 今上陛下までの歴代天皇の御製の大御調おほみしらべに 天皇に直属しま  
つる日本臣民の喜びと、もろともにただまけのまに／＼生死せんとする決意に燃え上る  
生の躍動を感じました。

我等の運動はただ人の心と心をつなぐ運動であり、そは一切の假定、一切の理知の思  
弁を排してただ、御製ををろがみよみまつり、大御心をいただきまつる所に生まれるの  
であります。

先輩方の死を賭して戦はれる力源こそ実にこの同信協力の確信であり、そは先輩のみ  
あとをついで戦ふものの唯一の使命であります。今こそ素朴なる学生運動が全日本学生  
の心と心をつなぐ純一に戦ひ行く生命が生まれねばならぬと信じます。

（写真劇）同信句報・たかひ「昭和一七・一〇・一五」

（書翰から）憶念とは具体的な実感であります。胸に迫ってくる同一感です。

総合的な生活体験こそ、われらの真の學術の根柢であり、思想の母胎であります。日々の生活において學術はありません。(昭一六・一〇・二二)

## 經濟否認の經濟論 (論文)

所謂綜合雜誌七月号の經濟に関する論文をひとわり目をとほしてみても、読みごたえのあるやうな論文は殆どないといつてよい。何でも「自由主義資本主義の時代はすでに去つた、今や計畫經濟の時代である。」といふ一つ覚えの公式論を振廻して、その埒内で、とかくの戲論をしてゐるだけである。大東亜共榮圏の建設などと、口を開けば大きなことをいふけれども、その内容にいたつては極めてお粗末なものである。国民生活の疾苦を思はず机上の概念操作に日を暮してゐる。學者、評論家の無氣力怠慢は憤激にたへない。

1. 寺尾博之  
難波田春夫氏が先月だつたか読売新聞「第一線」欄の「經濟統制の目標」といふ小文において



「何のために統制を行ふのか。——今日必要なことはこの問ひの意味をはつきりさせることではなからうか。経済再編成を説く多くの人々は、このやうな問題があることをすら忘れてしまつてゐた。さうして統制経済は資本主義の発展の結果必然的に成立するものであると考へて、経済が如何にあるべきかといふことを現実の必要からではなく、資本主義からの必然的発展の結果としての統制経済を、したがつてまた統制経済をそれ自身から考へてゐたのであつた。」

といつて警告を發してゐるが、世上流行の統制論はまさにそのとほりである。

島田晋作といふ人が『文芸春秋』「戦時経済の再強化」において「従来の方式その儘では大東亜戦争勃発以後の新情勢に対応し切れない。」といつてゐるが、何故に然るかについては少しも具体的に究明しようとしなない。従来の方式は、従来の方式の故にいけないといふのでは話にならぬ。従来の方式は一切これを否定して、企画院や統制会の権限強化による一元的統制機構を確立するのが、論者の所謂戦時経済再強化の内容なのだから、論者にとつては統制の強化それ自身が目的であつて、戦争はそのための副次的条件にすぎぬのではないかとさへ疑はれる程である。この論からゆくと大東亜戦争も国内



經濟變革のための戦争となりはしないか。最近支那事變の再認識が改めて提唱されるが、支那事變がこのやうな經濟史觀と無關係でないといふことはわすれてならない重大な事實である。

統制論を裏付けるものとして、自由主義資本主義機構の革新にとゞまらず、機構を運用する人間の精神の方向を正さねばならぬといふ見地から經濟倫理の樹立が提唱されて来たことは周知の事實である。小畑忠良氏が『中央公論』所載の「經濟の倫理化」においてのべるところは——従来は「經濟人」は他人をおしのけ、ふみたふしても私利私益の追求をはかり或は政黨に万金をつぎこんで独占権を獲得し、なるべく楽をして儲ける工夫をした。当時はそれを何人も怪しまなかつた。それが經濟の常道であつた。今日は臣道実践、職域奉公、大政翼賛の言葉が全国民にゆきわたつて、倫理がすべての生活の基調となつた。經濟人はこれまでのやうに私利を追求することは許されぬ、自分はどうなつてもよい、すべて國家のために物を生産せねばならぬ。——といふのである。これは、昨日は昨日、今日は今日、明日はまた明日の風が吹くといふにひとしい呑気きはまるナンセンスだ。しかも従來のやうな、私益追求を建前とする社會經濟機構の中に這入

りこめば、人は私利私益を事とする以外に途はないので、日本人がいかに心掛けても「経済の倫理化」は実現することを得ない。——といふ。つまり自由主義資本主義の体制より社会主義或は全体主義体制に社会経済機構を組替へねば、倫理が経済のみならず政治文化一切の生活の基調とならぬといふのである。暴論といはうか、出鱈目といはうか評しようもないが、倫理は経済の論理によつて規定せられるといふ公式論を鵜呑みにして、それを実際にあてはめようといふのだ。このやうな議論が正しい意見として世の中にうけいれられてゐるといふことは吾々の深く考へねばならぬところである。それは時代の問題が制度機構のそれではなく、もつと深いところに根ざすものが、即ち国民思想に禍源ありといふことである。

これらのイデオロギー的公式論に対して日本経済新報紙上松本徳明氏が「大東亜戦争と思想戦対策の重要性」の中においてのべてゐることは穏健中正の論として注目される。「中小商工業の整備統一の結果は国民の一部が従業員となり、労務者となる。反対に極めて少数の大資本家のみが安全に残り、その究極する所遂には階級闘争を誘引する」惧れあることを警告してゐる点は、目先のことにのみ追はれてゐる者の気付きがた

い重要事である。

又「利潤追求を以て経済活動の原動力なりとするが如き理念は許さるべきではない。」と、いつてゐるが、利潤は経済活動の目的ではなく、その目安であり、経営の健全性を示すバロメーターである。個人企業たると国営事業たるとを問はず、経済的採算を無視しては経営は成立たぬし、健全の発展を期待しうべくもない。

『現代』と『中央公論』において、配給対策について座談会を行つてゐるが、現在各地に継起してゐる種々の非経済的事象、殊に公定価格制の欠陥が語られてゐることは注目をひいた。これらの事象の由つて来るところを洞察して活用すれば、今後の経済政策改善に資するところ大であらう。その二、三を引用しておく。

「今は目方売ですからいゝ物も悪いものも値段が同じだ。さうすると恐らくいゝ物は闇で売れて了ひ、悪い物許り我々の方へ廻つてくる様な場合もあるかと思ひます。それから野菜の方も、地元で売れるのも都会へ輸送して売れるのも余り値段の差がないといふ関係からせう、地方は腐る程あるが都会には一寸もない。」（『現代』——農林省食糧管

理局外地課長石川氏)。

「實際我々として考へますと、生鮮食糧品に公定価格を付ける事の無理これはよく分ります。天然物でありますから天候の加減によつて増減がある。御承知の通り中央市場法が出来て中央市場が公式に設けられた。その前に問屋があつたと致しましてもその時すら結局生鮮食糧品は外の生産品とは違つて生産物によつて原価は必ずしも計算出来ない。現物を見なければ評価原価というものは出なかつた。さういふ事から致しまして、これは公定価格をつける事に無理があらうと思ふ。」(『中央公論』——京浜地区魚類

配給統制協会常任理事伊藤氏)

「最近卵などが隣組を通じて配給されてゐますけれども、腐敗した卵が相当配給されてゐる。これは専門の業者が扱つてゐれば消費者は、これは腐つてゐるぢやないかと言へるのですが、隣組の場合には泣寝入りで貰はなければならぬ事になる。」

このやうな物資流通の不円滑は何故に招来されたのであるか。商工省振興部商務課長岡田氏は「機構が段々變つて来ますから、その機構改編の過渡期に於て配給の旨くゆかなくなつたこともあると思ひます」(『現代』)といひ「結局機構の問題です」といふ。又

家庭国民食糧中央会理事山岸晃氏は折角生産地から配給機構の最末端の業者までは統制され割当てられてゐても、最末端の配給業者（小売商）から消費者に物が動く時には自由販売が行はれてゐる。「こゝに間違ひがある。」（『中央公論』）といひ、「消費者組織といふものを確立する必要があるんぢやないか」と提言し、『中央公論』の記者がこれに調子を合はせて「切符制にし全体を総合的に考へてゆけば、消費生活の計画化といふ事が立つと思ふのです。」といつてゐる。配給の不円滑は機構に欠陥があるからで、これを改善するためには配給機構の整備のみならず、消費者組織を樹立することによつて取引の自由を一切禁ずればよいといふのだ。このやうな考へ方は難波田氏のいふごとく「経済が如何にあるべきかといふことを、現実の必要から考察せぬ」ところの、従つて経済を指導する力なき者の思ひつき、御都合主義である。消費の計画化といふごとく、需要を一切無視して頭割による配給の全面的強化実行が、いかなる結果を招来するかはソ連の経験に徴してみるも明かである。

東大助教授大河内一男氏は「生産—配給—消費を貫いた一元的統制機構」の創設を説いて消費者の組織化を提唱し、



「大衆性の強い庶民的食品に公定価格を出来るだけ低く定めるといふのは一の社会的道義であり、明らかに一つの正しい思想を含むものである。けれども低い公定価を附せられた食品は生産の根元に溯つて統制が行はれないかぎり、市場に出廻りにくいといふ事も亦商品経済に於ける嚴然たる事実である。前者を経済生活における倫理と稱ぶなら、後者はまさに、経済生活における論理だと云へるであらう。この二つのものはこのままでは永久に両立することが出来ないものであり、早晚何れかの側に一元化されなければならぬ。」といつてゐる。これを書きなほすと次のやうになる。

「大衆向の食料品に対して出来得るかぎり低い公定価を付けることは無産階級の生活保護であつて、社会的道義に適ふ。しかしかに低い公定価をつけても、社会主義的生産が行はれぬかぎり、換言すれば、私益追求を建前とする自由主義体制の下においては商品が市場に出廻つても、有産者のみとその恩恵を蒙ることとなり、社会的道義に反する。自由主義資本主義的生産と社会主義的生産は両立し得ぬものであつて、何れか一方に一元化されねばならぬ。」「生産—配給—消費を貫いた一元的統制機構」の意味するところはこれで分明とならう。（『中央公論』—「問題解決のために」）

東京商工会議所副理事今村武夫氏の所論（『現代』—「企業整備と物資の配給」）は、以上のべたやうな事実無視の公式論に対するつよい反駁であり、その誤謬を余すなく指摘したものである。その一部を引用しよう。

「こゝで最も警戒を要することは会社組織その他の合同形式をとる場合に配給能率の低下を来してはならぬといふことである。すなはち企業合同により会社や組合が取引の主体となり、仕入から販売までを共同に行ふ場合には、競争が停止し、そこに一種の独占が作用するので、商品取扱ひ数量の減少を恐れる業者は配給品の品質を鑑別する余裕を与へられない。延いてはまたその下の段階に位する小売商に対して品質の良否を論ぜず、あてがひ扶持で商品の引取りを命ずる結果となる。そして結局は小売商が消費者に対して商品の選択を禁ずるので悪貨は良貨を駆逐することになり勝ちであるのみならず、物資の入手難がつのるに従ひ、いはゆる『逆流サービス時代』を招来し、買手が売手にサービスせねばならない傾向を助長する。今日では消費者が小売商へ、小売商が問屋へ、問屋は生産業者へといふやうにサービスが逆流する珍現象を見るに至つた。」

といつて、配給会社による配給の結果起る品質低下の理由を指摘し、経済には高度の創意、いはゞ能率と競争とは絶対に無視することを得ないものであつて、「能率の悪い者が退陣し、能率の良いものが残つてゆくやうな機構にしてこそはじめて国家の目的たる生産増強を達成される」と、公式論者の氣付かぬ「計画経済の非能率性」を警告してゐる。そして最近の商人道の頹廢を歎いて、競争を停止せしめ、創意と能率の發揮を困難ならしめてゐるために、問屋は取扱ひ商品の減少をおそれて品質の良否を問はずして生産者に叩頭するといふ有様で、かつて生産者を指導してゐた問屋氣質は全く失はれてしまつたといつてゐる。

「商業者は何等生産に寄与せぬからとの理由で、その存在を抹殺しようといふやうな風潮も一時は確かにあつたが、今日のやうに商業者は殆どその機能を喪失し、消費者自体が配給の仕事を代行せねばならなくなつて見て、はじめて商人といふものの有難さがつきり理解されたのではあるまいか。消費者がその各々の職域に奉公するため  
の貴重な時間を潰してまで、商業者の役割を代行せねばならぬといふことはどう考へても変態であり、また戦時下における総力發揮の途に副ふものでない。」



と、現状をながめての悲痛なる体験的批判は一部の者には自由主義擁護の非難を蒙るであらうが、多くの国民の共感を喚起するものがあらう。

「従来からの配給業者は自己の営業の危険においてこの実需を測定して来たのであるが、機械的な整理合同を強行すると配給網の混乱が起り、実需の測定がすこぶる困難になるからである。切符制による配給を実施する場合にもやはり実需の測定はついて廻るのであって、従来のやうに役場区役所町会隣組が単純な人口頭割りに基いて切符を配るといふのであると、そこには実需測定的作用が伴はず、未使用切符の潜在量をつきとめる事が出来なくなる。」

1. 寺 尾 博 之

といつてゐるのは配給制の根本的欠陥をついた意見で、机上計画者の見逃しやすい、しかも見逃してはならぬ重要問題である。物資の流通面を掌る商業の機能や任務を認めつつ、これを行ふ主体や形式をこれまでのやうな商人による単位形態として認めず、他の形式を以て代行せしめんとしそれで問題が解決されるごとく考へるのは現実遊離の形式論で、実際には、商業機能否定として結果するであらう。世上滔々として公式的な計画経済論が横行潤歩してゐるとき、實際上の体験から配給制度の根本的欠陥をつき、商業

機能の復活を提唱してゐる今村氏の所論をよんで胸のすく思ひがする。

『日本評論』「大東亞經濟の基調」座談会において、東大助教授高宮晉氏と慶大教授兼東大講師永田清氏が「具体的には広域經濟になると思ひますが」、「広域經濟といふのは一つの全体としての計畫經濟でなければならん訳ですから、さうするとこゝに自由の經濟として与へられて居る單位としてはやはり従來の自主的經濟としても全体の中の自主的經濟それ自身が計畫的の様式をとらなければならん經濟ですね。随つてさういふやうにやはり何か大東亞広域全体を貫く一つの經濟様式の統一性といふものがないと、全体的の計畫といふものが円滑にゆかないのではないかといふ気がする。」と盛んに彼等の「構想した世界」を主張するに對して、貿易統制理事杉村広藏氏だけが「大東亞經濟といふものの中に構造を考へるといふ時にどこかすぐそれを同じにしたがる、止つたまままで同じやうに整理してゆきたがるといふ気持が相当働いてゐるのではないか。」と批判的見解を披瀝してゐる。しかしその杉村氏にしても、同質性とか異質性とかいふごとき概念的論理にとらはれてをり、かかるイデーを一刀兩断して、真に大東亞各地の実情

に即応せる理論を展開されんことを期待したい。

『現代』には前記高宮氏の「大東亜広域経済論」があり、『中央公論』は、土屋清氏の「大東亜経済建設の現実と推進」が掲載されてゐる。これらに対しても厳密に批判すべきであるが、それを論じてゐると紙面がなくなつてしまふからやめておく。ただ彼等の盛んに提唱する「広域経済」の概念内容は、「資本主義」を止揚したところの超国民的経済統一体を意味し、かゝる経済的基礎構造の上に東亜の秩序が樹立さるべきである、といふものなること、さういふ思想法に立脚してゐることを指摘しておかう。そしてまたそこに戦争の意義目的を見出してゐるのだ。

中西仁三氏の「満洲経済の再認識」(『改造』)は満洲経済の实情を分析検討したものであるが、概念的な大東亜経済構想論の誤謬の指摘であると共に、今後日本の大東亜に対する経済政策樹立について多くの示唆を含み、方向を与へるものとして注目すべきであらう。

「此等経済組織並びに経済発展の段階を異にする各種産業を一括して統一的に統制せんとする処に、満洲経済政策と満洲経済の現実との背反著しきものを生み、随つて満

州經濟政策が机上の空論なりとか、ペーパープランなりとか、種々の批判を受くるに至るの原因が存在するものである。」

「政策は現実より浮上り、政策の空廻りを演ずるに至り、現実には政策を裏切り、政策の間隙を利用して所謂闇取引によつて旧態を維持し、其の間に不当なる巨利を博せんと之れ努むるに至るものである。」

と、政策と現実の矛盾を鋭く批判し、

「日滿兩國の經濟的共通性とは、採らるべき經濟政策並びに經濟制度を兩國間相等しきものたらしむべき事に非ずして、獲得する經濟的結果に於て兩國同一目的に邁進すべしとなすものに外ならないのである。」

と、眞の經濟的協調を高唱されてゐる。「獲得する經濟的結果」を「同一目的に」帰向せしめるのが、政治の力であつて、究極するところ日本の政治的支配の確立なくして、經濟的協力は実現せられない。こゝに綜合的文化工作の確立実行の重要意義がある。東亞全域にわたつて「經濟政策並びに經濟制度」を相等しきものたらしめようとするのは、政治と經濟との關係を逆立ちさせた考へ方といふものだ。

中西氏は更に満洲における農産物出廻りの減少の事実が「農産物の価格を一定の公定価格にて統制規制したるところ」に重大なる原因の存することを指摘し「以上の点を放置して単に農産物の価格並びに配給組織の点を如何に改良するも真の目的は達し得ざる事を知らなくてはならない。」といふ。物的規制を碎破せねばやまぬのが人間の精神であり、その自由が確保せらるゝことによつて、経済の発展も、文化的向上も期し得らるのだ。

大東亞諸地域に対するわが経済政策は、中西氏のいふごとく「従来満洲経済に対処して得られたる貴重なる知識体験、利用活用」秩序は維持され難くなり、闇取引のごとき変態的事象が発生する。大河内氏のやうに「生産—配給—消費を貫いた一元的統制機構」を創設すべしといふのは経済否認論であつて、これを強行すれば変態的事象はなくなる代りに経済そのものが失はれる。政治の経済に対する優位は経済を政治化することでありと考へる者があるとしたら、誤りのこれより甚しきはないであらう。難波田氏のいふごとく、統制論者は「経済が如何にあるべきか」といふことをわすれて経済を論じてゐる。経済否認の経済論が流行経済思想の潮流である。

(月刊「新指導者」昭和一七年八月号)

昭和十八年——二十三歳——

富士山麓の友らより今日も亦絵葉書をいたどきまつりて

今日もまた演習地なる友らより絵葉書つきぬ三ひらの絵葉書

白銀の富士を仰ぎてつはものゝわざねりたまふ友らともしき

月読のひかりに白く輝ける高嶺仰ぐとうたふ友はも

あるはまたさしづる朝日に白雪の照り輝くと歌よむ友はも

くだくし思ひ投げうち大自然のさなかにあそぶ友らともしも

久方の天つみ空の空高きひばりの声にうたよむ友よ

はげしかる訓練のさなか大空のひばりのこゑに心とどめますか

一時の暇もあればあふれくる思ひのまゝにうたふ友らは

あゝわれも銃とりともに勇ましきものゝふの道をさめむものを

もろともに富士の裾野にあるごとき心地するなり友のうたよめば

(月刊「新指導者」昭和一八年六月号)



母君の投げ入れましゝ柱掛けのあやめの花の今日開きたる

紫にまたふじ色に咲きいでしあやめの花の色美しき

咲きいでしあやめの花のむらさきにはほふその色見れど飽かぬかも

(月刊「新指導者」昭和二年六月号)

江頭兄(註 江頭俊一、旧制佐賀高校生の友人へ本書に収録)の御墓に詣でて

わが胸に友はいくると思へども墓石見ればひたに悲しも

忘れえぬ君がおもわをしぬぶにも悲し墓石黙し立つなり

おくつきの前に咲きでし白菊ををりて手向けぬ友らとともに

おくつきの御前にたてし線香のけむり流れて消えてゆくなり

秋空に消えゆく香の白けむり見つゝし居ればひたに悲しき

ポケットのたばこに火をつけおくつきにそなへぬ我も共に吸ひつゝ

おくつきにそなへしたばこいつの間に消えにしものか煙ものぼらず

友のもちきたりし僅かのぶどう酒をそなへぬ君が御墓の前に

亡き友のおくつきの前に友らと飲みし酒腹の底までしみしその味

さがてぬ思ひにたゝずむおくつきの上を飛びつゝ勝鳥鳴く



(註 かがらす、佐賀地方に生息する鳥)

うつしよにあひえぬわれらがとこしへにともにしあるべき世をし思ふも

うつそみの生命捧げてとこしへに共に生きなむ時を待つなり (若桜集)

賢ちゃん(註 江頭俊一弟・賢二、中学一年生)より便りをもらつて

賢ちゃんのたよりよみつゝにこゝと笑ふおもかげしぬび居るかな

うつしよに共に過しゝは短かかれどまことの弟とわれは思ふも

あんな良い兄さんなくした淋しさはいかばかりかとおつねに思ふも

兄さんの事を思へば勉強してますら男の子になれよ賢坊

賢ちゃんが一生懸命勉強すれば亡き兄さんは喜びます

亡き友を思ふにつけて賢ちゃんが早く大きくなれよと思ふ

長年月育てしいとし子をなくなした母さん思へばつとめよ賢坊

賢ちゃんが一生懸命勉強すれば母さんの心もなぐさめられん

いづ方にゆくとも賢坊ともろともに送りし日々を僕は忘れじ

賢ちゃんが僕を思つてくれる時僕も賢ちゃんの上をしのばむ

吉野神宮にて

天つ日もくもにかくれてふく風に尾花さゆらぐさぶしまゐりぢ  
花見にととひくる人は多かれどまうづる人もあらぬこの宮  
悲しくも悲しき御最期しぬびまつり涙こぼれぬをろがみまつりて  
今もなほつきせぬ君がみうらみのこもるが如き峯の松風 (『若桜集』)

霧島温泉にて

再びは見る日もあらじきりしまに友と眺むる月の影かな  
ゆけむりの上に輝く月かげにうせにし友をしのぶ夜かな  
再びはくる日もあらじ霧島のいでゆに遊びし夜忘れめや  
友どちと露天の風呂にひたりつゝ木の間がくれの月を見るかな  
友どちのねがほを見つゝせゝらぎの音聞きをればうづまく我が胸  
つゝがなくあれば今夜もともぐくに遊びしものと友を恋ふかな  
きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ (『若桜集』)

最後に（註 大竹海兵団に入營の際）

大竹の駅に迫りぬつき／＼と恋しき人をしぬぶそのまに  
人々の深きみなさけいたゞきてすぎこし生をたゞにかしこむ  
限りなき大御心をしぬびまつり仕へまつらむ生くる限りは（若桜集）

大君のみこと畏み一すぢに戦ひゆかむ友偲びつゝ

丈夫の道は一すぢ大君にいのち捧げて御国護らむ

倒れたる友を嘆かずいつの日かあもたどりゆく道と思へば（註 あ、吾）  
生き死にをこえてつらぬく日の本の丈夫男子の行く道ぞこれ

昭和十九年——二十四歳——

新しき年を迎えてはるかにも君が宮居ををろがみまつる  
都にあらば先輩友らもろともに代々木の宮に詣でをらむに

さしのぼる朝日と共に大君の御稜威輝く年となさばや

(謄写刷『まほろば』第二号 昭和一九・一 大竹海兵団にて)

加藤兄に (註 加藤敏治、九州帝大生であった友人、本書「あとがき」に記載)

はからずも友と遇ひえてなつかしき君しぬびつゝ語らひをるなり  
うつしよに再びあへぬ君がおもわひたにしぬばゆ友とかたれば

北の辺の新防人といでまさむりゝしき御姿しぬびまつるも

心こめて君がつくりしすりぶみを今日はからずもわれは得にけり  
出征を前にひかへていそがしきなかにすりましゝこれのすりぶみ  
先だちて召されし吾らしぬびつゝすりたまひけむこのすりぶみは  
戦地にてこれを手にしてふるさとをしぬべとしるしゝ君の言葉よ

うつそみはあひえずともことのはにしぬびあはなむ生くる限りは

(謄写刷『まほろば』第三号 昭和一九・三)

昭和二十年 — 二十五歳 —

## 尙之戰死

(註 弟・寺尾尙之、沖繩沖の敵船団を攻撃し、昭和二十年三月戦死)

うたもつくり得ず

詩すらも書き得ぬ

くさくさの思ひ胸にうづまきて

たゞ悲し!

悲しといふ言葉よ

おさへむともとゞまらざる涙よ

汝がうつしゑを眺むれば涙とゞまらず――

すがしき眼

まこと汝こそは丈夫なれ

母の心配を懼れて

堅き決意を内に秘め

1. 寺尾博之

たゞ黙々としが務めにいそしみし汝よ（註 しが、自分の）

初陣にて而もいさぎよく散りし汝よ

僅か二十三才

われと異り

母上を案じ

たゞひたすらに母に仕へ

日頃の務めにまごころを尽しし汝よ

何一つ

正に何一つ己の為にする事なく、

全てを母とわれに捧げつくしし汝よ

かくも早く逝くものならば

今少し

可愛がつてやればと歎きはやまず

きよらかな汝が生涯

さればこそ神は召され給ひしか

悲し悲し

故郷にます母

いかばかり歎きますらむ

いかばかり驚きまさむ

あゝ肉親の死とはかくも悲しきものか

汝すでに世になし——

三月二十八日深更

沖繩本島に迫る敵輸送船団攻撃の命下る

月明の夜

堅き決意を秘めらるゝ園田機長のもとに

汝は尾部機銃員として再び帰らざる

祖国を飛び立つて行きしか



1. 寺尾博之

時正に二一時三五分

悠々

黒々と眠るつくしの島を眺めつゝ

敵艦むらがる沖繩の戦場へ

本土の西

慶良間けらまの北（注 沖繩本島西方慶良間諸島）

敵艦艇群を発見

突入——

時 昭和二十年三月二十九日午前〇時廿九分！

若桜

ああげに汝こそは若桜なれ

うつろ

何一つ為す気も起らずたゞなれの姿偲びつゝ一日過しぬ

帰らむと外にいづれど膝なえて歩まむとすれど足の進まず

汽車にのりおかれてなれを偲びつゝあてどもあらずさまよひあるきぬ

町ゆけば人々すべてせはしげにわきをも見ずに急ぎゆくなり

町ゆけど野道をゆけど友をなみなが名呼びつゝ一人悲しむ

うつそみの身はすでになくなりてあふてだてなし思へば悲しき

高橋鴻助先生の御供をして江頭兄の御墓に詣づ（註 江頭俊一の恩師）

おくつきのみまへに低く項うでたれて念じますすみ姿見るに耐へずも

長い間みじろぎもせず念じます先生の御心偲ぶも悲し

勇ましき君がおもわのうちゑみて浮かびましけむ御胸内に

同じ時よめる

君がみ墓見るになつかし勇ましき姿のたゞにあらはれ来りて

まうでえぬ友らの名をば一人々々心に呼びつゝをろがみまつる

前線の友らの上を偲ぶだにかくまうで得るわが身畏し（讀享劇『不知火』第二号）

母  
—山中の小駅にて—

遺骨箱も

重たげに

腰をまげたその姿

幾年月

心を痛め

身をつくして

育てしいとしご

畏くも

天子様の御為に

いのち捧げて

今

ものはいはねど

再び帰りきぬ

いとしのせがれ

よぼ／＼と

しかし

しつかりと

遺骨箱をだきしめた

小さき母の姿――

国の為つとめつくして丈夫は今帰りきぬたらちねの手に

ものいはぬせがれをいなくその母の小さき姿のたゞに悲しき

幾年月心いためてそだてけむまがりし姿をろがみまつる

よろ／＼としかししつかりと遺骨箱を抱きしむる心よいかにますらむ

やがてかく弟の遺骨を迎へますわがたらちねの上を思ひぬ

和多山喜一宛（注 旧制熊本高工生であった友人、和多山儀平八本書に収録Vの殿父）

拜復 貴翰只今拜受繰返し拜誦致候 儀平兄遂に御戦死との由 言語を絶し申候 祖国危急の今日予ねて御覚悟とは申せ 小父上様 小母上様 又姉君様の御心中如何許りかと遠察申上候 今更愚痴とは申しながら或は万一を願居候ひしに遂に水泡に帰し申候 乍然元氣一杯の兄に候へば さぞかし御立派な御最期たるべく 何れ親しくお伺ひ出来得る日を待ち居り候

実は一昨日 智子様より御手紙中内報有之たる旨御座候間 如何なる報せにやと心配致居候その節の詩

いかならむ内報ありしか 生か死か

幾月日悩みたまひ迷ひ給ひし父君母君

又姉君の 御心よ

をゝしき友の姿　にこやかに笑みつゝ

今まなかひに迫り来　友よ

さまざまの思ひを　ひたすらに君が上祈る家人にのこして

杳として消息を　絶ちし友よ

恐らくは既に護国の神と　大空を　北は千島満洲より

南はニューギニア　ラバウル迄

太平洋の空高く　天がけりつゝ戦ひいまさむ

内報いたる　迷ひは悲しみに

悲しみはいかりに

二十幾年ひたすらに育て来し親の心よ

ああ　全日本をおほふ「親」の嘆きといかり！

小母様の御心中遙かにお偲び申上候　儀平兄は今南海の大空高く祖国無窮の生命となり給ひてにこやかにかけり給ひて戦ひますべく　またひたすら御両親の上を護りをらる

1. 寺尾博之

べく お嘆きは尤もながら飽くまで御身御大切に被為遊度あそばされたく 儀平兄に代りて願上候  
(中略) 何れ拜眉の日を待居候 草々 (昭和二〇・三・四 福岡)

和多山兄のうつしゑの前にて

勇ましき君がうつしゑ仰ぐにもかく生きながらふる身こそくやしき

一すぢに丈夫の道ふみゆきて花と散りにし若桜君

君と共に安房にすぐしゝ月日はもとに忘れず今もうつゝに

ありとある苦しみに耐へひたすらに戦ひましぬ丈夫君は

勇ましき君が思ひ出しぬぶだにわが身くやしきいきどほろしも

こまごまとしるしゝ君が日記よみて今更のごとく過ぎし日偲ぶも

一すぢのものゝふの道きはめつる君がいのちのひたにともしも

もろともに君が御楯と召されつゝ武運拙きわれぞかなしき

いつの日ぞたふれし友のあと追ひて護国の鬼と生命捧ぐるは

一日はもひとひとく仇うちて大君の御心安めまつらざらめや



沖繩も遂に陥り各都市は爆撃烈し今日この頃は

不逞なるえみしことくうちくたく日も遠からじひたに待つかな

全国民最後の力いそぎて戦ふ時も近づきぬ今は

見よ夷<sup>よみ</sup>今にしらすむ天つ神はじめたまひしわが国ぶりを

全国民死もてたゝかふ時まちてかたづをのむとしらずやなれら

天地ときはまりあらぬうらやすの国しらざるかおぞの醜ばら

くはしほこ千足<sup>ちたる</sup>の国のとこしへにゆるぐべしやは神洲不滅

われ一人生きてあらばとふ楠公のみことばつぎてたゝかひぬかむ

亡き友のみ霊と共に夷等をはふりつくさむ時を待つかな 『和多山遺稿集』昭和二〇・六・末か

(書翰から) 死んでいった友を此の頃は本当にへだたりない思ひに生きて居ります

(昭和二〇・六・二二)

和多山茂平・智子宛

(註 和多山儀平弟・姉)

(前略) われわれ一人々々は死んでも魂はとこしへに友らの心に、神洲不滅のうたごゑ

1. 寺尾博之

に、大日本帝国のある限り、生きて居ります。

兄さんは決して死んだものではありません、君の心の中に、永久に生きて居られます。私も弟の戦死を知った時本当に何もする元気もなく悲しみました。しかし今は弟は何所かに生きてゐる、そして私と一緒に居ると思つてゐます。眼を閉ぢれば勇ましい姿とすぐ会へます。

どうぞ兄さんの志をうけついで一生懸命に頑張つて下さい。親ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ日々の生活に子として弟として兄として友としてのまごころをつくし一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ずるのみと信じます。兄さんの志をつぐといふ事は、本当に正しい日本男子として学生として生き抜く事です。兄弟仲良く励ましあつて頑張られる様衷心祈つて居ります。(後略)

勇ましき御心つぎで一すぢにつらぬきたまへ丈夫の道

いきしにをこえてつらぬく一すぢの道すゝむのみ大和男子は  
もろともにたすけかはして大君に仕へまつらむ御国護りて

かへし

こまごまとしたゝめ給ひし御文よみ涙流れぬ偲びまつりて

くりかへしくりかへしよみぬはるかにもみたままつりのさま偲びつゝ

安房の国洲ノ崎の里にもろともにごしゝ日々はとはに忘れず

(註 房総半島南部の「洲ノ崎」、海軍部隊所在地)

もろともにごしゝ日々を偲ぶにも遅れし身こそひたにくやしき

いさぎよき桜の花にふみゆかむ道うたはしゝ君がうたはも

桜咲く春をもまたで忽ちに南の海に君は散りにき

年ごとに花咲く桜しが花にとはに偲ばむ君がおもかげ(註 しが、其の)

うつしよに再びあはむすべなくも今は嘆かずやがてあふ身は

くりかへしくりかへし御手紙拝誦仕候 父君様始め皆様方の御心中申上ぐる言葉も絶<sup>たえ</sup>申

候 呉々も御身御自愛の程祈り上<sup>あや</sup>候

草々(昭和二〇・六・一七 福岡)

遺書

上

昭和二十年八月十四日休戦ノ

詔書渙発アラセ給フ 遙カニ

大御心ノ程ヲ俛ヒ奉リ 恐懼措ク處ヲ知ラス

大元帥陛下ノ股肱トシテ干城ノ

任ヲ全クスル能ハス罪當ニ萬死ニ値ス

皇祖大御神下サセ給ヒシ

御神勅ニ曰ハク

豊葦原ノ千五百秋ノ瑞穂ノ國ハ

我子孫ノ王タルベキ地ナリト

臣

然ルニ今日 恐レ多クモ

陛下ノ御上ニ夷狄カ司令官ノ存在ヲ許シ

御一人ノ統治シ給フヘキ

大和島根ヲ彼カ軍政ニ委ヌルニ至ル

關知シマツラスト雖モ遂ニ此處ニ至ル 罪當ニ云フヘカラス

事既ニ定マル 肇國三千年未タ夷狄ノ悔リヲ受ケサル無窮

國體ヲ防護シ奉ル能ハス臣カ罪當ニ逃ルヘカラス

大御言葉ノマケノマニマニ國家再建ノ微力ヲ致スヘケレトソノ確信無ク一死以テ臣カ罪

ヲ謝シ奉リ併セテ帝國軍人タルノ榮譽ヲ保タムトス 願ハクハ

魂魄トコシヘニ

祖國ニ留メテ

玉體ヲ守護シ奉ラム

國政ヲ議シ奉ル恐懼ノ至言ヲ知ラス

微臣

昭和二十年八月十九日

恐惶頓首謹言

海軍少尉

臣 寺尾博之

## 長島秀男中佐の遺書

天皇陛下ノ御命令既ニ發セラレタルニ拘ラズ御心ニ背キ奉リテ自殺致シ候不忠ノ段誠ニ恐レ入り候 然ル處此ノ度ノ戰ハ勝チタル場合ト雖モ臣等ノ努力足ラザルニヨリ斯程迄ツラキ戰ノ相トナシ唯ニ

上御一人ノ御心ヲ惱マシ奉リ候ノミナラズ一億國民ヲ艱苦ノ底ニ沈マセ候事誠ニ申シ譯無之 所詮死ヲ以テ御詫ビ申スベキ次第ニ候 況ンヤカカル事態ト相成リ臣等國民ノ命ヲ救フ思召ニテ戰ヲ收ムル御心ノ程誠ニ有難ク辱キ次第ナガラ

上御一人ノ御心ヲ惱マシ奉ルノミニテ臣等オメオメト生キ残り得ル筈ノモノニモ無之候 今トナリテ唯々心ニ懸ルハ御國ノ運命ニ候モ最早臣等ノ爲シウル處ツキタリト思込

ミ候次第頑迷ノ段御詫申上候

遺歌

<sup>すめらぎ</sup>天皇の御楯となりて死なむ折を失ひし我ながらふべしや  
<sup>すめくに</sup>皇國の戈取りてたつ秋來なば民と生れん七度八度



油山の碑

以上

二、百ひやく武たけ禮れい之し



百 武 禮 之

大正十年十一月十四日佐賀市に生れる。旧制佐賀中学校を卒業後、昭和十四年、旧制佐賀高等学校に入学。同年、神奈川県原当麻はらたいまで行はれた全国学生合同合宿（註「東大文化科学研究会」主催）に参加。続いて十五年七月、信州菅平すがひらにおいて行はれた全国学生合同合宿（註「日本学生協会」主催）に参加。この遺稿集の最後に登場する江頭俊一えがしらじゅんいち（百武の紹介に当つては、この江頭を抜きにして語ることはできない）らと共に、佐賀高等学校・同信会の中心となつて活動した。当時、この「佐高同信会」は、思想上の確信を欠いてゐた文部省からの指示もあつて、学校当局によつてその活動を停止させられ、百武禮之ほか二名は、「停学処分（五十日間）」、江頭俊一ほか四名は、「出校停止処分」を受けた。また佐高同信会の顧問教官であ



られた高橋鴻助教授は姫路高校に、小林弘教授は山口高校にそれ／＼強制的に転任を命じられた。この事件の渦中であつて、彼はよくその志を貫き、同志諸友と共に佐高同信会の存続に挺身した。

昭和十七年四月、東京帝国大学文学部倫理学科に入学。東京「正大寮」(註「日本学生協会」学生寮)に入寮。十八年六月、親友江頭が九大病院で危篤に陥るや急拠東京から駆けつけた。その壮嚴なる臨終を告げる百武の文章(本書八六ページ)は、友情の極致を示してゐるやうに思はれる。

その年の十月、ビルマのパーモ首相が日本政府の招きで来日した。政府は、国賓として一日東京の歌舞伎座に案内した。百武もたま／＼観劇中であつた。興行が終ると主催者は、パーモ首相に敬意を表して「パーモ首相萬歳」の音頭をとり、観衆もこれに唱和した。しばしの間を置いて、一人の青年が立上つて「天皇陛下萬歳」を叫んだ。これは聖寿の萬歳が唱へられるものと思つてゐた百武が、主催者側にその動きがないのをみて、間髪を入れずに行つたものであつた。

同年十二月三十一日、学徒出陣、久留米の西部第四十八部隊に入隊。二十年四月、ジャワの予備士官学校を思賜の賞をいただいて卒業。同年八月七日、ジャワからビルマに移動する幹部候補生の輸送指揮官として、海路シンガポールに上陸。部隊の先頭に立つて行進中、突然敵機が来襲した。身を隠す間もなかつた。道路に伏した一瞬、低空で敵機が銃撃を浴びせて飛び去つた。彼は遂に再び立たなかつた。時に数へ年二十五歳。陸軍少尉。

## 菅平合宿を終へて

(註) 昭和十五年七月十六日から七月二十五日まで行はれた、「日本学生協会」主催の「全国学生合同合宿」

2. 百 武 禮 之

(前略) 青年が青年を教育する新しき指導者教育、それは嘗て何人によつても試みられた事のないものであつた。而も僅か一週間の訓練により三百名もの学生が皆異口同音に、今迄の学校教育に於て嘗て経験しなかつた事を経験したと言葉にあふるゝばかりの感激を以て体験を告白し、従来の学校生活に於て皆無であつた所の、人生観の問題、民族・国家の問題等々が、お互ひの体験告白により十年の知己の如く、又兄弟の様な親しみを感じ合つてゐるなごやかな空気の中に、真剣に討議されたのであつた。そして最も重大な事は、合宿の最初に於ては意志的でないため皆と本当为一体となる事が出来なかつた人も合宿の最後に於ては、失はんとしてゐたいのちをよびめざまし、正しく生きんと、即ちまめやかに大君につかへまつらんと意志しはじめ、もろともにたすけかはして

學術維新を実現せんと誓つたのであつた。そしてその時はじめて、青年は一体たりといふ命題を実現したのであつた。この感激は恐らくすべての人が従來の人生體驗の中で最勝稀有のものであつたらうと思ひます。(後略)

書き終りて

さやさやと木ぬれさやがし吹く風に雨さへまじる音のきこゆる

小夜嵐吹きて木の葉の鳴るなべに雨ぞ降るなり更けゆく夜半を

大いなるいのちこほしもたゞひとり友とはなれて病みこやる身は

ただひとり病みふす身には日一日友ひとひこひしさのいやまさりゆく

幾山河へだてをるともわれらが心常にかよふともへば心強し(註もへば、思へば)

西東別れすむともみ国おもふ一つ心にたゞかひゆかなむ

雨後窓外

みのかさに身をばかためてしづのをがかへす水田はうるほひにけり(註しづのを、賤の男)

雨雲のうすくたゞよふ山の端をかすめて一羽黒鳥のとぶ

かなたなる山の頂雲はれて真青なる山肌あらはれにけり

谷間より湧きいでたらむ白雲の頂きこめてたちのぼる見ゆ

何時しかと雨雲はれて白雲の細きあはひゆ青空輝く (月刊『学生生活』昭和一五年九月号)

故北白川宮水久王殿下奉悼歌 (註 昭一五・九・四、蒙疆にて御戦死)

新聞社の掲示の前にたゞならずこゝだくの人つどひてありけり

「北白川宮御戦死」と一目見るよりおどろきに胸ふたがりてことばもあらく

おもはざることにおどろきめさめしめられとよめく胸ぬちたゞごとならず

つどひたる人も同じき思ひにやたち去りがてに掲示見つめぬ

水茎のあともしめりて寄りつどふ人のおもわに悲しみみてり

国民の心ゆるめるこの秋にかなしきことのおこりけるかな

去年の夏かしこくも合宿に臨御なるときゝし感激は未だ忘れざるに

合宿をはじめむとする今日の日になししらせにあひまつるとは

(「佐高同信会」合宿を開始せんとして)

やごとなき御身おんみをもちて戦線にたちたまふだにかしこきものを

大君のまけのまにまにかへりみぬみたみのみちをしめしたまへり

(月刊『学生生活』昭和一五年九月号)

家庭生活を乱すものと指弾を受けて

み国今危き時ぞとたらちねにみ国の乱るゝ様を語りぬ

思想の乱れ母に語りて反国体思想討つこそ学生の本分とは述べぬ

しかれどもまごころ足らず言葉足らずたらちねつひに肯んじたまはず

「学生の本分あくまで学校の課業に励む事」とてゆづりたまはず

思はずも言葉を荒らげ友達の反国体思想見過すは不忠なりと言ひしも

教育は教師の職分にていましらに未だその資格はあらずとのりたまふ(註　いましら、汝等)

資格未だわれになくともこの様を見過すは臣の道ならめやも

(謄写劇『たゝかひ』昭和一五・一〇)

昭和十六年——二十一歳——

(書翰から) われ等の運動に學術性を欠く時、われらの戦が改革のため改革、直接行動

化する恐れを痛感致しました。(昭和一六・一・一七)

(書翰から) 真に／＼危機は気付かれざるが故に危機であり、希望を失へる国民の生活は統制の強化と共に益々荒廃しつゝあるに、日米武力戦ともなれば如何なる事態を惹き起すやもせれません。意志を失へる故に無感覚なる、それ故に危機を部分的物質的にのみ発見して総合的に見得ざるが故に愈々統制を強化して、楽しくにぎはしかるべき国家国民生活を崩壊せしめんとするのであります。(昭和一六・二・二二)

中国連絡会議に寄せて

明治天皇御製 巖上松(明治四十二年)

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほに根ざす松のごとくに

大御歌誦しまつれば今の世の様思はれてたゞにかしこし  
乱れ行く世をみそなはず大君の大御心をろがみまつる  
国民は希望を失ひいひ知れぬ不安のうちに生きゆくらむか

大みいくさ五年となりて国民は戦意を失ひ世は乱れゆく（註 みいくさ、御軍）

くにぬちの思想の乱れきはまりてそのいやはてはいかゝなるらむ

今の世の乱れの源くにたみの思想の乱れとわれらは見拔けり

根源を我等見拔けば神州は不滅の確信いよ／＼かたし

あらし吹く世にはたつともすめぐにのいのちを信ずれば力わきくる

もろともたすけかはして嵐吹く世に貫かんわれらが信を

あらし吹く世にも動かぬますらをの雄心とぎてともに戦はん

松陰先生のみ心継がむとみゆかりの地につどひたる君らゆかしき

こよひはも地図をし開きはるかなる君らが集ひをしのびてやまず

萩といへば何ぞ恋しき先生のもゆる思ひのとよまれる地なれば

（謄写刷『神州不滅』昭和二六・二・二二）

（書翰から）唯一人が苦しみ疲れるといふことは同信生活に欠陥のあることを、即ち協力が実現されてゐないことを反省されねばならぬと思ふ。同信生活に一個人の決意、奮



斗あらしめてはならぬと思ふ。全ては協力生活没入の合成威力によつて生れたものでなければ、その人も傷つき他の人も傷つくものであることを痛感してをります。

(昭和一六・九)

(書翰から) 動かし難き人の心をこそ動かすべきが我々の務めであり、現日本に生を享けた吾らの不可替の責務と決心せしめられます。(昭和一六・六・二五)

をりにふれて

難きをさけ易きにつかんとする一瞬の心のゆるみうちてしやまむ

「ますらをら心なゆるびすすめぐにのくるしきたたかひまなさきにあり」  
すめぐにのくるしき戦ひわすれたる時しいづべし心のゆるみ

また

窓をうつ雨音たえて更くる夜の窓辺近くも蛙の声たかし

友よばひ友をもとめてこゑのかぎりなきつゞくらむかなしその声



いのちかけなきつゞくらむこゑきけば心もしぬに友らしぬばゆ（註 しぬに、墓に、しのに）  
時しらに更けゆく夏の長夜をば鳴きあかすらむ蛙しあはれ

友をよび友をよばひて夜もすがらなくこゑきけば胸いたきかな

かそけき生命こめてなくらむその声をきけばかなしも友恋ひをるに

（謄写刷『たゝかひ』昭和一六・六・二五）

友に

ちゝのみにまめに仕ふるひまもなく戦ひ戦ひきましゝ君はも（註 ちゝのみ、父の枕詞）

すめぐにの今の乱れにちゝのみを置きて戦ひきましゝ君はも

悲し思ひひめつゝこゝだ日数をば戦ひつゞけしみ心偲ぶも

ますらをの胸どにひめし悲し思ひ消ゆる時あらじ生きゆくかぎりは

人の世はかなしかれどもますらをは耐へて生くべし大君のため

人の世はおのがさかしき心もてはかるべからず神のまに／＼

なつかしき君が面影しぬびつゞくりかへし読みつそのみたよりを

（月刊『新指導者』昭和一六年八月号）

松江高校同信会宛 寸刻の思ひを直ちに表現せむ 友よ、友らよ。表現せざれば忽ち涸渴す 悲しあが生。たまゆらの生命を無窮の生命につながずして我等いかでか生きん。個体生命のはかなき生命も、ことばによつて天壤無窮の祖国のいのちにつながる。われらのことばをして神人交通ののりと、たまよばひののりと、「天皇陛下萬歳」の絶唱たらしめん。念仏も表現である。秋草の露のいのちをよもすがら鳴きあかす名もなき虫を思はずや、君。『たゝかひ』にて藤原兄（註 藤原邦夫、旧制松江高校生の友人）の遺稿『靈戦』出版発行のしらせをうけ諸兄等感慨無量なることを偲び居りますが、我等は今こゝに百武尚美君（理乙）の急死（急性肺炎）を告げねばなりません。藤原兄・野中兄（註 野中孝夫、旧制水戸高校生の友人）の戦死にあひ、今又、百武兄（註百武尚美、旧制佐賀高校生の友人）の死にあふ。今こそ生の意義を、即ち戦死の意義を再確認すべきであり、今直ちにその意志を具体化すべきである。（昭和一六・九・二七）

この頃のおもひ

「淋しさにたへてぞ生きしいくとせのつみかさねたるねがひは消えじ」

この歌のしらべ忘れえずいくそたびくりかへしよみしか身をかむおもひに

天地にたのむ人なくただ一人生きゆくおもひのたえせぬこの頃

淋しさのたへがたけれど友しらの上をしもへば力湧きくる(註もへば、思へば)

淋しさは胸ぬちきえねどむらぎもの心おちあらず世の様おもひて

心せくおもひに日数すごしつゝたよりもせざりき東の友らに

淋しおもひたへて生きこし先人のこゝろをもへばつとめざらめや

重ねたるねがひはきえじとうたひてしこゝろをもへば涙ながるゝ

ことだまのくしき力かこのうたをよみつゝあれば胸ひらけきぬ

淋しさの胸ぞこわきてたへがたきおもひもはるゝよこのうたよめば

大空をさわたる月のくまもなきこよひは友もいねがてぬらむ

はるかにもおもひかよへと大空にかゞやく月をひたあふぐかな

昭和十七年——二十二歳——

ひぐらし

もろ蟬のこゑ消え果てし秋の日の夕淋しくひぐらしのなく  
ひぐらしのなくこゑきけばふるさとのおからはらからいたもしぬばゆ  
腸をしぼるが如きそのこゑのいよゝ身にしむふるさと偲べば

(謄写刷『正大寮しきしまの道』昭和一七・一〇・一五)

飛行機

朝より夕にかけて大空に爆音の音の絶えぬ此の頃  
今日も又晴れたる空に勇ましく爆音轟かせ飛行機とべり  
二機三機爆音高く秋晴れの澄みたる空に入りみだれ飛ぶ  
上になり下になりつゝ空中戦の演習ならんはげしく飛びかふ  
急降下錐もみ上昇反転と技練るつはものの苦しみ偲ぶも

み軍の上俣ばれて爆音の絶えぬひゞきに心みだるゝ

み国守る道はひとすぢつはものの苦しみ俣びつ我等も励まむ

弟のやがては乗らん飛行機と思ひて飽かずながめつるかな（謄写劇『たゝかひ』昭和一七）

朝の杜

雨滴したたる森の下道を朝けに行けば小鳥鳴くなり

朝の気のいたく冷く人氣なき森の中行けど心はたぬし

小鳥らのこゑもまじりてにぎやかの雀のさへづり聞くがともしさ

武蔵野の朝けの森を一人してゆくが楽しさ人知るらめや（謄写劇『たゝかひ』昭和一七）

（報告書翰から）（前略）去る十月六日夜神田共立講堂の講演会の当日、聴衆の約三分の二は学生で、その中には支那の留学生もチラホラ見えたのですが、国民政府宣伝部長の熱烈な講演には聴衆は非常に感激し、寧ろそれに吞まれてしまったかの観がありました。会場の雰囲気は講演終了後稀に見る程昂揚してをり、殊に学生が多かつたので真に学生をして「文化の戦士」たる使命に目覚めさせ、又心ある者の協力を実現するには絶

対の機会だと思つて、映画『空の神兵』を上映するまでの休憩時間を利用して壇上に立ち「支那の青年学生が真に祖国を憶ひその興隆のために生命を賭して戦つて居り、そのために日本の青年の心からの協力を求めて居るのに対して、日本の学生が従来本當にそれに応へるだけのものを持つて居たかと願みて慚愧に堪へぬ」と言ひ、今後の具体的協力の方途を講じたい旨を訴へた所、特高の注意で最後まで徹底して意を述べ得ず、途中で降壇したのですが、聴衆の大半は声援を送り、中には「有難う」と感謝の言葉を発する者もゐて従来見られなかつた新しいものを感じたのでありました、その後で（映画終了後）小生をわざ／＼探して十数名の者が次々と集り、今後の協力を願ふ旨を述べたのであります。所がその中の五名が実に半島出身の学生で、又他の一人は支那の留學生が居つたのであります。そしてその翌日は一人の半島人から熱烈な手紙を貰つたのですが、その中に当日誌した日記の一節だと云つて

「彼の如き有為の青年が我が亜細亞に敵存する限り東亞共栄圏建設も実現され、皮膚の黒白に依る差別侮辱も撤回され、世界人類の平和も必ずや近き将来に実現されるのだ。今宵測らずも彼の如き同志を知り得たるは何と力強く喜ばしき事か、神の恵み

に感謝し祝福したい気持ちで一杯だ。彼と挨拶の際数多くの事を語らうとしてゐた。然し私は唇をふるはせつゝ何一つ言ふ能はず、眼に青年の感激の涙をたゞへて、無言の裡に堅く堅く握手したのみだつた。然しそれのみで既に私の言はんとした数々の感激は胸奥に通じたのであつた。それは彼の眼の光が、私の眼の光に示してゐたのだ。正に心と心。充実した融合だつたのだ（中略）奇しき因縁によつて彼の存在を斯くも早く知り得た私は誰にもまして、彼の未来に大いなる期待をかけるものだ。日本のためにも亞細亞のためにも全人類のためにも、彼の健康を祝する至情や切なるものがある。彼は大いなる神から御導き下さつた私の永遠の真の知己なのだ。私は彼と早く融合しよう。そして真の知己として思ふ存分心ゆくばかり語らう。（中略）斯くの如くして私と百武さんとの間に其の絶対的友情が結実したのである。（後略）」

と書いて居ります。それから二週間程に亘つて、五人の半島人の一人一人の下宿を訪ねて話したのですが、行くとその喜び方は非常なもので直ぐに真情を吐露して少しのわけへだてもなく話すので半島人というけぢめは全く感ぜられぬ位で、真の一体感を味はしめられ、それらの人が皆異口同音に「自分を本当に弟と思つて指導してくれ」といふ



のに対しては、事実本当の兄弟の様な親しみすら感ぜられ、従来僕等の知つて居る範圍の又話にきいてゐる半島人とは全く違つたものを見出したのであります。今日半島で小學校の教育を受けた者なら朝鮮の独立等といふことは問題にもならないと云ひ、天皇陛下の忠良の臣民として内地人と一体になつて御国のため尽し度いと、それは実につきつめた思ひで語るのであります。所がこれらの人は皆最近半島から来た人ばかりで、内地人の学生で真に心から語つてくれる者の居ないのを非常に淋しがつて居り、事実、内地人の方から半島人といふ様に分け隔てゝ眺めてゐる事に不満を感じてゐるのであつて、この点は実に反省させられたのであります（中略）今痛切に思ふことは、これら半島同胞の誠心にこたふべきものは、唯一つ、我々自身の国体の信を堅持してゆくといふことです。もろともにも 大君につかへまつるといふ内的平等感に於てのみ永久に渝らぬ友情も確保出来るでありませう。それを喪つたときに、自他を分つ驕慢心が生じてくると思ひます。半島同胞にとつては「お前は朝鮮人ではないか」と最後につきつけられる内地人の差別感情が何にもまして内鮮一体を妨げる越え難い心の溝であつたのであります。僕等の語る一語一語に耳を傾けて聞き入る眼の輝きに、僕等は確かに今新しい時代が開



けつゝある事を確信せしめられます。――未だ来らずともそはたしかに我等青年の心情に内在して居るといふことを。

(勝享劇『たゝかひ』昭和一七・二一・二三)

ひぐらし

人影のたえし夕ぐれ森の中の小道急ぐにひぐらし鳴けり

高もやのたれこむる森をとよもして夕鳴くこゑのさびしかりけり

あなあはれ夏はすぎてもそのいのち終へむきはまでなきつゞくらむ

(月刊『新指導者』昭和一七年二月号)

昭和十八年――二十三歳――

小柳陽太郎宛 (註 旧制佐賀高校の後輩) (前略) 研究方法の正しい認識と確立については、高校時代に十分素地を作っておかれたが良いのですが、同時に語学は充分マスターして下さい。語学の事を申し上げましたが、ロシア研究には、ロシア語の方からと独乙語からのとの二途しか今の所ない様ですが、大兄は確か文乙だったと思ひますから、独

乙語だけは万難を排しても矢張<sup>やはり</sup>高校時代にやれるだけはやつて置いて下さい。小生らの経験からしても語学は怠慢、唯怠慢そのみの理由で、マスター出来ませんでした、苟くも文化、思想戦の戦士として、それでは御奉公出来ぬといふことを此の頃特に痛感してゐます。

米英に対しても、唯単に米英的個人主義、自由主義、功利主義として一括して排撃してしまふ様では真に相手の心を言<sup>こと</sup>向けやはして日本の真意、畏かれども大御心を仰がしむることは出来ないのであつて、この点は現日本の思想界に最も足りない所で「しきしまの道」欠落による研究方法の、即ち人生観の誤謬によるものですが、それ等に代へて、真に国体の威力を発揮すべき文化思想戦における僕等の責務は唯一不可替のものと云ふことを特に銘記せねばならぬと思ひます。(昭和一八・二・九)

靖国神社臨時大祭

桜花ちりにし後に萌えいでし若葉のみどりすがしき朝かも

うららかに春の日てりて参り道<sup>ぢ</sup>の木々の若葉のみどり増したる

勇ましく歩調をとりてつはものら今しまうづる神のみ前に

ふさのみとなりにし軍旗先立てゝ今しまうづるつはもののもとも

天駟りみ国を守らすつはもののみ魂も鎮り見守りますらすむ

年々に春は来れども新しくあまたの神をいはふかなしさ(註 いはふ、齋ふ) (『若桜集』)

江頭俊一死去の報せ 前略、電報にて御知らせ致しました如く江頭俊一君、昨八日午後三時十三分遂に永眠致されました。御家族の御嘆きの様洵に傷いたましく御慰め申上ぐべき言葉も知らぬ次第です。腹膜炎から喉頭結核になり全身を侵されてゐて随分苦しんだらしいのですが唯絶大な意志力のみで小生の着くのを待つてゐたらしく、幾度かこときれんとしては「江頭、最後の妄念ぢや」と加藤に励まされ、奇蹟的に生命を保つてゐるといふ状態でした。小生の着く前に一度危くなり愈々最期だと思つて一同に「君ヶ代」の斉唱を求め、歌ひ終るや、「最期に」といつて苦しい息の中から身をおこして三度までも「天皇陛下萬歳」を唱へ奉り、「江頭俊一は昭和十八年六月八日九大病院北病棟に死んでゆくが魂魄は万代かけてみ国をまもるぞ」といつて皆に別れを告げ意識を失つた

のでありますが、再び息をふき返し、小生が参りますと非常に喜び見る／＼顔に血の氣がさして脈も平脈にかえつた程でその生命威力には医者も驚嘆してをりました。そして加藤、九大の友、佐高の後輩、熊本高工の諸友、小生、皆共に手をつなぎ歌ふ『神州不滅』『進めこのみち』の歌声を聞き嬉しげに皆の顔を交る交る眺めつゝ莞爾として逝きました。それから田所大兄に見せてくれといつて、遺言として、お母様に書留めて戴いたのですが、「皆様ノ厚イ情ケニカコマレテ死ンデユク。今マデオ導キ下サツタ事ヲ心カラ感謝スル。オ国ノタメ思フ様尽セナカツタノガ残念ダツタ。同信ノ諸兄ハワレノ志ヲムダニシナイデシツカリヤツテクレ。ホントウニオセワニナツタ」といひ、辞世の歌として

ウツソミノイノチタユトモマスラノカナシキネガヒヨロヅヨマデニ

コトキレルイマハノキハモスメクニノヤスケキヤウイノルカナ

の二首を残しましたが二首目は息が続かず歌ひ了せなかつたものです。

その死顔の安らかで淨らかな面持は洵に此の世のものとも思へぬ程で一点の曇りも苦しみの跡もなく、恰も天上に舞昇つて行く様な歡喜のほゝゑみさへ浮かべて居り、小生

等も悲しいといふより寧ろ生死を超えた余りにも莊嚴な其の最期の姿に接し、生ける神の姿を目の辺り仰ぐ様な心地すら致しました。

江頭はとう／＼死んでしまひましたが死ぬ直前、苦しい息の中からアツツ島の将兵が傷病者は皆自決して全員玉碎したことを語り「自分はたとひこゝで死んでも永久に君等とともにゐてみ国をまもる」といひみ国の彌榮を信じて「もう何の思残すこともない」といつて逝きました。

江頭の事は思つても思つても思ひ切れませんが、今は只後に残つた者が、身を以てその平常の信を示し先駆となつて散つて行つた江頭の志を継承せんことをひたすら心に誓ふ次第です。(後略)

六月九日

百 武 礼 之

(月刊『新指導者』改題『思想界』昭和一八年八月号。当時「精神科学研究所」幹部は、反軍思想のゆゑをもつて憲兵隊に捕へられてゐたため、誌名を改めた)

霧島にて

霧島の出湯いでゆの里に夜をあかし語りし思ひ消ゆと思へや

山深き出湯の里に今生こんじょうの思ひ出残し我は征くなり

みどり濃きみ山に映ゆる紅葉葉のあかき心を我は忘れじ

さつまがた磯の乙女子ことをそぎてすがしき姿いとほしきかな

ことそぎてすなほの心しが面にあふれて見ゆる乙女めぐしや(註 しが、その)

黒髪を後にたばねうるみたる腫に清き心しぬばゆ

仇波もうちしづまりて四方の海に朝日かゞやくときをこそまで

また

谷川の瀬の音高みうち時しぐ雨るゝ音も聞えずあたり暮れゆく

心しる愛しき友とこよひ又酒くみかはし宴せむかな

うちけぶりくれゆく空をながめつゝ心和たじみて黙し居るかも

また

岩根さくみ奥山道を落葉ふみ友と下れば時雨しぐれふりくる

うつそ身はよし消ゆるともつなされるいのちほろびずといひし友はも  
夕暮るゝ秋の山道は淋しけど友としゆけば心はたぬしも

うつしよにほろびぬいのちに目ざめつゝ共に生くるはうれしからずや  
わが肩に手をおき語る友の心しのびつ泣きぬうれしさあふれて

また

いはばじ  
石走るたぎつ湯の音朝夕にきゝつゝありしを今日は去りゆく  
とこしへに消えぬおもひをかたみにもきざみて今は別れゆかなむ  
わが生命よし絶ゆるとも霧島にとどめし思ひほろぶと思へや

亡き江頭俊一兄を偲びて

いくさ  
み軍に行く日近づき在りし日の君のいよ／＼恋ほしきろかも  
ますらをの君とともにみ軍に出づべきものを早くも逝きける

過ぎし日の思ひ出ことごと一時に胸内に湧きて涙あふれく

手を握り別れつげなば胸内の思ひも晴れむにかなしうつしゑ  
ほゝゑみて励ますごときうつしゑにまむかひをれば涙流るゝ



とこしへにほろびぬ生命に君とともに生くとし思へば心も和めり

(以上、「霧島にて」以下、「若桜集」)

和多山儀平宛 (註 本書に収録) 拜復 御葉書有難う。其後御無沙汰したが、実は

去る一日加藤が上京し、それから二週間程実にはたゞしかつたが、出征を前にして永遠に忘れえぬ交情のつきぬ世界を味はつてきた。最後の合宿をやらうといふことで九日から十一日迄永福町の寺で東大生全部の合宿をやり、十三日から十四日迄先輩と一緒に鹿島神宮に参拝し水郷潮来いたこに一泊、翌日は大吠崎まで長駆して、太平洋に真向ひ、遠くアメリカを睨んで『神洲不滅』を斉唱、思残すこともない思ひで東京に帰つてきた。皆もう別れ別れである。然し何処にゐても、如何なるときも、一つにつながる心を味はひ、互に信じ得ることは実に詞も絶えてうれしく有難いと思ふ。「別るゝにふして思へる心はもとはのかたみとわが胸に生く」(註 三井甲之作)といふ歌の心を新たにしている。では又



昭和十九年——二十四歳——

出発に当りて

数ならぬ身にはあれども大君の御楯とたゝむ秋は来にけり

大君のみこと畏み八潮路の海原こえて今ぞいで征く

何時の日か朽ちなむ花の皇国の嵐に散るはうれしからずや

『忘らんと野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも』(註 萬葉集卷二十、防人の歌)

『水鳥の発ちの急ぎに父母にも言はず来にて今ぞくやしけ』(註 萬葉集卷二十、防人の歌)

『梓弓引き返さじと思ふより亡き数に入る名をぞ留むる』

(註 吉野山如意輪堂に刻みつけた楠正行の遺歌)

天皇陛下萬歳

昭和十九年九月十四日 (註 久留米聯隊から)

三、吉田房雄



吉田房雄

大正五年一月一日、茨城県土浦市に生れる。東京在住の実兄のもとで苦学力行、昭和十年、旧制新潟高等学校文科甲類に入学。校友会誌によく小説や翻訳物を発表した。中学在学中から仏典に親しみ、高校二年の時、黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(註 旧制第一高等学校昭信会刊)を読む機会を得、「一高昭信会」(註 黒上

正一郎氏を導きの師とする団体。今日の「社団法人・国民文化研究会」の源流)の会員先輩と知り合つた。やがて新潟高校の友人、後輩と語り合つて「新潟高・信和会」を創設した。

昭和十三年、東京帝国大学法学部に進み、一高昭信会出身者らが組織した「東大文化科学研究会」に属し、先輩、友人と共に東大の文科系列諸学の学風の中に、日本文化破壊を目指すものある

を見て、これが学風改革の運動に心身を傾けた。しかし、つひに十六年秋、法学部教授の海外出張（田中耕太郎氏の仏領印度支那ゆき）を批判したかどで、退学処分を受けるに至つた。

彼は、生来の情熱をもつて、大学を通じ、友人との切磋琢磨、後輩の指導に情熱を注ぎ、卓抜した指導力を發揮した。他面、落語の名手でもあつて、高校卒業直前の、教職員全校生徒集会で一席披露し、参会者の喝采を浴びたこともあつた。

昭和十六年十二月十七日、「日本学生協会」主催のもとに「出征学生留魂大会」が、神田共立講堂で開かれた。それは、彼の最後の企画であり、後事を後輩に託する意図に出たものであつた。講堂には都下の大学、高専生が立錫の余地なく集まり、日本放送協会（NHK）がその模様を全国に放送した。その時読まれた「留魂文」（本書一三六ページ）は、彼の起草にかゝるものであり、その大会で彼は、出征学生を代表して最後に登壇し、訣別の辞を述べた。

十七年二月一日、宇都宮の陸軍輜重部隊に入隊、やがてニューギニア戦線の戦斗に参加。十九年三月七日、アドミラルティ諸島ロスネグロス島サバカルハウにおいて戦死。数へ年二十九歳。陸軍中尉。

昭和十四年——二十四歳——

便りの後に

友のみふみ読みつゝあればいつしかに胸こみ上げぬうれしき思ひに  
すこやかに学びていませと日に夜に祈りつゝをり都に我は  
はらからと呼ぶるゝことのうれしきにおゝと声をあげぬ友をしぬびて

## 日 蓮 (論文)

### 一 日蓮出現の歴史的背景

後鳥羽院御製

我こそは新島守にひしまもりよ隠岐の海の荒き波風こゝろして吹け

土御門院御製

浮き世にはかゝれとてこそ生れけめことわり知らぬわが涙かな

順徳院御製

思ひきや雲の上をばよそに見て眞野まのの入江に朽ちはてんとは

北条氏の大逆無道行為は承久の乱に至つてその極点に達した。社会秩序は根柢より崩れ国柱傾いて天日暗澹、逆臣国賊は天下に跋扈し、人心は頽廢して畜生道に墮し、思へ！ 日本は正に精神的亡国の悲曲を奏でつゝあつたのである。煉獄に喘あへぐ国史の悲劇を救ふべき忠臣は絶えてなく、国民のすべてが日蓮をして言はしむれば「国敵仏敵」であつたのだ。精神的救国者たるべき僧侶の墮落の如きは言ふに耐へない。加持祈禱以外に何物もなき亡国の邪法は、相踵ぐ天災地変を機として益々その暴威を逞しうし、無智の良民は勿論、ひいては皇室にまで累を及し奉る状態にあつた。

誰か立つべき？ 誰か立つべき？ と悲しくも自問しつゝあつた青年日蓮は、遂に自ら蹶起の誓願を立てたのである。

「四天下之中天無二日てんじにじつなし。四海内豈有兩王乎りやうおうあらんや」との大鐵槌を北条氏一門に叩きつけて先づ国体の尊嚴を悟らしめ、「禁こ謗ご法ぽう之人にん」。重じゆう正せい道だう之し侶りよ。國中安穩天下泰平」と

怒号して国民精神の内的改革を説き、一切道徳活動の根源たるべき内的規範としての正法の顯示を志したのである。正法とは法華経である。

## 二 大慈の折伏

国体を弁へぬ盲目の群生の北条氏一門に阿附追隨蠢動する悲しき光景の明滅する中を、国民覚醒の悲願に燃えつゝも自己の無力を痛感せる日蓮は正法を求めて鎌倉に至り、更に叡山に遊学して十二年の仏法研究に専心したのである。法門無量誓願学！深く諸教義の異目を修め尽して多年の疑雲名残なく晴れ、釋尊も四千余年には未だ真実を顯さず、諸経は無得道墮地獄のパチルス、法華経ひとり成仏の大正法なりとの信に到徹した。

伊勢神宮に詣で、正法弘通の願業を奉告し愈々以て折伏逆化の大法戦を展開すべき準備は整へられたのである。

建長五年四月廿八日払暁、上人は故郷なる安房清澄山旭ノ森の断崖上に現れた。天地蒼茫として残星またゝく中に端坐すれば、やがて旭日は皓々と輝き出づ。屹と容を正して合掌礼拝し凜然たる唱題一声また一声――

南無妙法蓮華經！ 南無妙法蓮華經！

日蓮は一片の仏教研究者に非ずして「法華經の行者」であつた。哲学や科学すらも單なる学理研究に止るべきではないが、宗教に至つては研究のための研究の如きは断じてありえない。宗教の本質は色説しきどく体験にある。三世了達の釋尊が如何に久遠くおんの大法を説かるとも、日蓮の色説しきどくなかりせば仏語も所詮虚妄の譏を免れまい。「若無日蓮もしにちれんなくんばぶつごきよもつ、とらふん虚妄」との大自然こそ末法の世の行者に要請せらるべきである。

抑々仏法弘通の方軌に攝受しやうじゆと折伏しゃくぶくとの二法があるのであるが、白法びやくほう隱没・鬪諍堅固の末法に入りては折伏の方軌を用ふべしとは仏陀の教へた所である。折伏とは破折調伏であつて、誤れる者の執見を一步も仮借せず根柢から紛碎し強ひてこれを化導するのである。日蓮は仏語に従つて末法弘通の方軌を折伏と定めた。むろん折伏を行へば怨嫉迫害蜂起し結恨を懐いてこれを謗する者あるは当然である。しかし、逆縁でもよい、謗法を起さしめてこれと縁を結び、つひに救済を全うすべきが折伏の眼目である。「地に依つて倒れ、地に依つて立つ」と日蓮は言つた。それは大慈折伏の化導であり逆化強毒の徹底救済なのである。「若しは信、若しは謗、俱に仏道を成ぜん」この甚深微妙じんじんみみょうなる偈げ



如何に人間性の深奥を衝いてゐるかを思ふべきである。

「我レ、日本ノ柱トナラン。我レ、日本ノ眼目トナラン。我レ、日本ノ大船トナラン」との大誓願に立てる上人は、不忠大逆の罪を鳴らして北条氏に肉薄し、念仏無間むげん禪天魔真言亡国律国賊と叫んで折伏の利刃を諸宗門に突き刺したのである。法華経以外の諸経はすべて無得道地獄宗と明断し、已に説き今説き当に説くべき難信難解の随自意の正法こそ正に法華経であり、仏陀一代の諸経は法華経に一括せられて始めて始めてその意義を有つことを示したのである。上人の身边には法華経の予言の如く法難頻りに起り、山に山を重ね波に波を畳みかけた迫害は悲惨を極めたのであつた。日月天にまします、須彌山しゆみせん今も崩れず四季も型の如く違はざるに、日蓮を護る天なきは仏陀の予言虚妄なるか、はた又日蓮は行者の資格なきか？ 上人は幾度かくづ折れんとする悲しき情こころを振りおこさねばならなかつた。さうした中に希望をあたへるものは法華経に於ける迫害の予言であつた。「今度、強盛の菩提心を起して退転せじと願しぬ」かく言ひ切るまでの内的煩悶は、ただ独り先覚者のみの体験する所ではあるまいか。

「日蓮ハ何レノ宗ノ元祖ニモ非ズ。又末葉ニモ非ズ」天台・伝教の教義に傾倒したとは



言へ、究極の目的は仏陀の真意にふるゝことであつた。それは法華経であることが明められた。然し、一宗を立つるが如きは問題でない。日蓮の念ずる所は、上 皇室の下、法華経に現れたる久遠実成の永久生命としての仏陀に全國民が齊しく帰依することに依つて、上下貴賤共に内的平等感に徹し一致協力国難の打開に當ることであつた。「立正安国」とは此の謂である。

### 三 日蓮の国体観

北条氏一門ひとり榮えて暴逆をきはめ、國民は長夜の闇に鎖されて精神顛倒し、国体の尊厳性を悟つて立つ者一人もなき時、日蓮は決然として日本史上の謀反人二十六名を数へ上げ、「第二十六人ハ義時ナリ」と断言し、更に「頼朝ハ四位ニシテ居逆臣：源頼朝ノ臣義時ハ逆臣也」と言ひ放つたのである。威望隆々たる執權職を前にして、一貧僧が鐵槌一下頼朝義時を逆臣と判じたる所、国体明徴祖国防護意志の白焰の如き具現を見るではないか。神洲不滅の絶対信に基かざれば、かかる烈火の大思想戦を展開しえないのである。「日本ノ武士中ニ源平二家ト申シテ王ノ門守ノ犬ニ疋候」。肅然襟を正さしむる此の深刻なる筆鋒に接するとき、上人の政治的折伏の難行を偲ばざるを得ない。あ

るひは、「日本国ノ王トナル人ハ、天照大神ノ御魂ノ入りカワラセ給フ王也」と、最も端的に万世一系なる国体の尊厳性を述べてゐるのである。日本国体を開顕して「門守の犬」たる幕府を打倒し、天皇御親政の常態に還るべきことを、既に明治維新を去る六百年の昔に於て絶叫したのであつた。

如何なる宗教と雖も自立民族国家に於て始めて弘通興隆するのである。此の哲理を洞察せる日蓮は、「仏法必ず東上ノ日本ヨリ出ツベキ也」と確言し、「日本国ハ殊ニ法華經ノ流布スベキ所ナリ」と予言するのである。宗教と言へば直ちに世界的と空想するが如き無国家空漠思想は日蓮の彈呵を受けねばならぬ。日蓮の国家観はまことに雄大である。

「世界トハ日本国ナリ」この力強き言葉を聞けや！日本よりも世界の方が大きいとやうの幼童思想が瀾漫する今日、八紘一字の御精神さながらに世界とは日本国であると思せし法華經行者の宣言を聞けや！世界は限なく皇化に浴せしめらるべく、大君のみ<sup>もと</sup>下一切衆生悉く法華經に帰依すべしとの大鐵案は、恐怖悪世鎌倉時代の闇を突き破つて燦然と輝き渡り其の光箭は千古に流るゝのである。上人は天竺に仏教なしと断じた程

で、所立の仏法は大陸仏教の無批判的直輸入ではなかつた。即ち、「サレバ仏法ハ必ズ国ヲ鑑ミテ弘ムベシ。彼ノ国ニ好カリシ法ナレバトテ、此ノ国ニモ好カルベシトハ思フベカラズ」。こゝに仏教の日本化に対する熾烈な願業が察知せられるのである。

外来文化摂取の根本規準を示させ給ひし、

明治天皇の御製

国

よきをとりあしきをすて、とつくに外国におとらぬ国となすよしもがな（明治四三年）

を拝誦しまつりつゝ、只今たゞちに吾らは宗教選択を最も厳粛に行はねばならぬ。

附記 『日蓮大聖人御書新集』、堀内氏著 『勤王の聖者日蓮』、小林氏著 『日蓮上人遺文大講座』

を参考とした。（月刊『学生生活』昭和一四年五月号）

（「民族研究方法論」から） 科学とは仮説を基盤として畳み上げられたる世界にすぎない。科学は「変るもの」を捉へてゐる。そこには流転の炬火が明滅してゐるだけである。その世界では、如何に良いものがあつても、それを最高絶対と考へられることはな

い。アインシュタインは、彼の求めた原理に相対性と銘打つて、科学の無力を表白して了つた。一つの主義は早晩他の主義に取つて代らるゝであらう。一つの思想は懐疑と分裂とに崩壊してゆく。又そこには批判がある。然し無限に繰り掛けられたる批判のプロセスからは、決して絶対の真理は出て来ない。そこには又理解がある。だが理解とは単に誤解しないと云ふ消極的態度にすぎない。その世界の一切は相対的であり、消極的である。更に極言するならば、そこにあつては自己の真の姿を見ることができない。と云ふのは、絶対の真理を発見しそれに対して魂の底から真剣になることが出来ないからである。又「字あるの書」は尊ばれても「字なきの書」は絶えて顧みられない。我々が科学の世界に躊躇する限り、千万巻の書を繙いても、宇宙の真義、人生の真諦に触れることはできぬ。即ちそれは学術的にも無智である。如何に多くの知識を積み上げても、それを摂取する中心が科学的人間であるならば、無用有害な「化物ばいぶつつゞら」となるであらう。かゝる知識は多ければ多いほど、人を迷はしめて清明正直なる真理洞察力を鈍らしめるのみである。(月刊『学生生活』昭和一四年一月号)

合宿短歌抄

うつそみのこの身ひき裂き荒潮にひたして置かばと思ふ日もあり  
これの外に道はあらめやかく思ひかく信じつゝますぐに行かむ

(月刊『学生生活』昭和一四年一〇月号)

友とあげつらひて帰るさに

言葉なく心しづみて歩みゆけば道のかたへに蝗ら飛ぶも  
うつむきてしづかに歩むはらからの後姿をかなしく拝む  
みんなみを遠くのぞめば秋雲の真白き中に雲水峯うづみねそびゆ  
はらからよゆるしたまへや君を責めしわれの心も苦しきものを

(月刊『学生生活』昭和一四年一〇月号)

(「同信生活を乱るもの」から) 外なる姿は鏡にうつして正すべく、内なる心は友の心  
にうつして自らを珠と磨きあげるのである。(月刊『学生生活』昭和一四年一〇月号)

3. 吉田 房雄

た  
ゝ  
か  
ひ

もろともにも

たゝかひこし

足あとは

あまりに

ちひさく

おぼろにはあれど

しかれども

われら

ともどもにも

一すぢを

ますぐに

あゆみてはきたり。

一すぢを

ふみゆくことは

かたけれど

ふみゆかば

さはるものなし、

「断じて行へば鬼神もさく」と

古人は

言ひき。

われら



3. 吉田房雄

今

そのことわりを

しかと知りぬ、

疑ふなかれ

決意の現実的威力を。

ああ、

思はざること

さには

おこりて

荒るゝ日、おほき

一とせなりき。

神のみまへに

ぬかづきて

かなし心に

祈り

いのり

祈りつゞけて

ひたすらに

目に見えぬ杖を

たよりに

たどりきにけり、

われら

もろともに。

されど

3. 吉田房雄

いま

こゝに

われらの

いとなみに、

新しき時代は

あけそめぬ、

見よ！

向伏す雲の

きえゆく

さまを。

その

うすれゆく

雲間より

もろ手さしのべ

をたけびあげて

あらはれ

きたらずや

若き友らは。

「友よ!

とよべば

友は来りぬ。」

と歌ひし

詩人の

うまし言葉よ。

玉きはる

いのちのかぎり

たじろがず

ひるまず

3. 吉田 房雄

戦はむかな、

われら

ひたむきに。〔讃仰〕創刊号 昭和一四・一一

をりにふれて

ときえざるなやみとくべく今日もまた岸べをゆけば秋ふかみかも  
よるもひるもおなじなやみになげきつゝ遂にときえず死にゆく我か  
大地を底ひゆゆすりさけびなばこのさびしさの消えゆくものか

ある日

秋雲のながるゝかなたいやはてにうすむらさきの筑波嶺そびゆ  
村墓地はいたく荒れはてあぢさゐの花のみ咲けり訪ふ人なしに

祈り

あめつちをひとつこぶしに握りしめうちふるごとき力はなきか（以上六首『讃仰』昭和一四・一一）

## 明治天皇御製拝誦（論文）

### 蓮満池

いけみづは蓮の浮葉にうづもれて露のみひかるあさぼらけかな（明治二十七年）

池も狭しとひろごる蓮葉、みのもは隈なく葉かげにうもれ、黎明の一瞬、しら玉の露の光は天地にみつるのである。そをみそなはし給ふ光焰莊嚴の大御姿は、かたじけなくも現しく仰ぎまつらしめらるゝを覚ゆる。非情の自然も大御心にひとしく総摂せられて、永遠の芸術的生命を獲得するのである。

この御製は明治二十七年に詠みましゝものである。ふかくあまねき大御心はまた東亜の禍乱をしづめ給ひ億兆の心を安堵せしめたまふ。「朕平和ト相終始シテ以テ帝国ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ専ナリト雖モ亦公ニ戦ヲ宣セサルヲ得サルナリ」と仰せられし、日清戦争宣戦布告の勅語にあふがるゝ悲痛の大御心のありがたさよ。全宇宙をも覆はせ給ふひろきみ恵みをかうぶりつゝ生きまた死ぬるみ民らの幸こそ、極楽と称し天

国と謂ひて人類のあくがれしものゝ現実化にはあらざるか。承諾必謹の臣民道を一すぢに、「海行かば水漬くかばね 山ゆかば草むすかばね 大君の辺にこそ死なめ かへりみはせじ」と直進する大和魂の現実的威力は、大御心をいたゞきまつることに依り日本人すべての胸に湧きくる金剛不壊の神通力である。それは地上人間生活に於て味はひうる至高至大の生命力であつて、浩然の気などと謂ふも既にその類を絶する。

冬眺望

笹原も小松がはらも霜ふりて枯野まばゆく朝日さすなり（明治三四年）

と詠ませ給ひし 大御歌をあはせ拝誦しまつらうとするのである。「露のみひかるあさぼらけ」「枯野まばゆく朝日さす」と詠みましゝ光景は、古来幾多の歌人に詠ぜられしところであるが、それらとは比すべくもあらぬ博大綜合の御精神をしぬばしめらるゝのである。歌は人生の表現であるとの真意義が、これらの 大御歌を拝誦しまつりて今おほけなくも悟らしめらるゝ次第である。草にも木にも否無生物にも共感あらせらるゝ大御心は、蓮の葉におく露、枯野の霜、すなはち朝あけの静止の自然に、無限のそれゆゑに微妙の変化を認めさせたまふのである。はかない霜露の瞬間的生命の、朝日に匂ふ情



景は目にみる如く偲ばるゝ。「一切衆生悉有仏性」と云ふ如き概念的説明は、それのみに偏すると枯淡に墮し、生けるものゝ生命を奪ふのであつて、直接体験をありのまゝ表現する詩に伴はしめられねばならぬのである。狂信者を救ふべき道、そはたゞ一つ、彼らに詩をあたふることである。〔歌仰〕昭和一四・一二

## 山 桜 集 研 究 (論文)

日露戦争は、全アジア民族を滅亡の淵より救済し新文化秩序を世界に実現せむとする人道的使命達成への悲劇的序曲であつた。世界史は道徳の威力が実現せらるゝ煉獄なりと言はるゝ。世界史の中核は実に日本の歴史である。日本民族が世界史上に現実の第一歩を踏み出したのは日露戦争である。日露戦争の真意義は明治天皇御集を拝誦しまつることに依つて覚知せしめられるのであるが、我らは今、大御心をあふぎつゝ戦に献身せる皇軍将士の詞華遺詠を研究することによつて「まことの詩人は忠臣である」との鉄則を少しく実証してみたいと思ふのである。

第一回閉塞の事ありたる時長くも聖詔を拜し奉りて

戦死 海軍中佐 廣瀬 武夫

天皇の御声かしこしものなのなにかたるべき功なくして

金州攻撃の時衣帽に香水を濺ぎて

歩兵少尉 鈴木 禮吉

とこしへに御旗まもらむ大君に捧げし命よし絶ゆるとも

辞世のこゝろを

戦死 歩兵少尉 大崎 安治

生れ落ちて君のみためにつなぎたる臣の命を今日ぞ献ぐる

陣中にて

騎兵上等兵 遠藤右馬佐

大君の御旗の下に死してこそひとと生れし甲斐はありけれ

出征にのぞみてよめる

戦死 一等卒 岩崎 豊馬

数ならぬ身にはあれども大君の御楯となりしけふの嬉しさ

これらの歌を読んでゆくと直ちに思ひ浮べるのは防人の歌である。何れの国、何れの時代に於ても戦争は多くの愛国詩を生む。然し諸外国の場合は、戦争そのものが無原理であるため、そこより生るゝ詩もまた統一せらるべき中心がない。たとひあるにもせよ、祖国とか民族とか云ふ様な漠然たるものである。かれらの祖国愛が多分にセンシメ

ンタリズムを含んでゐる所以もそこにある。すなはち、感情的要素が非常に多く、宗教的信念には至つてをらぬ。「闔国の人は闔国のために死し」と叫び、「七たびも生きかへりつゝ」と絶唱した松陰の悲願は彼らにとつて知る由もない。むろん少数の例外はある。キリストがそれであり、ソクラテスがそれである。

しかし、彼らの祖国は亡び其の意志をつぐべきものもない。国破れて山河ありと云ふ冷酷な現実があるのみである。諸国の国家形態は、礼拝の対象を中心に仰ぎまつる宗教的結合体ではない。国家と個人との結合には必然性が薄いのである。そこでは国家をばなれた個人の存在も一応は考へらるゝ。契約説が生れ、独裁政治が生るべき地盤は十分にあるのである。王権神授説の唱へられる時代もあつたが単なる理論に永遠性のあるべくもない。すなはち要約すれば、国体がないのである。共産主義者でも、社会主義者でも、自ら愛国者と言ひうる。ソヴェエトをみよ、支那をみよ、インドをみよ。戦死者の霊は永遠に祭らるべき何らの保証もない。国家興亡は世界史の事実である。ギリシヤの廃墟を眺めよ。万里の長城を眺めよ。国家興亡、王朝の変易は愛国者の標準を一変する。愛国者は結局に於て殉国者たらざるをえない。殉国とは、国家と共

に亡び去ることである。

我らには「日本は亡びず」の絶対信がある。み民われらもろともにまめやかにわが大君につかへまつらむとちかひまつらむ、これあるのみである。天壤無窮は理想であると共に現実であり又悲願である。祖国のために命をさぐる者の霊は、天皇の大御心にすべをさめらるゝのである。天皇陛下萬歳が一切である。かくして個体有限生命は祖国無窮生命に包摂せらるゝ。忠臣の悲願は永遠に生きる。

明治天皇御製

折にふれて

戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ (明治三七年)

凱旋の時

外國にかばねさらしゝますらをの魂も都にけふかへるらむ (明治三八年)

をりにふれて

國の為いのちをすてしものゝふの魂や鏡にいまうつるらむ (明治三八年)

をりにふれて

國の爲いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ（明治三九年）

をりにふれて

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて（明治三九年）

これらの御製を拝誦しまつりつゝ前掲皇軍將士の歌を読むとき、臣民の悲しきねがひは大御心のあつきみ恵の下にすべをさめられたりと信知せしめられ、日本人われらの行くべき道は明示せられたと思はるゝのである。

留守宅に送りたる歌の中に

戦死 工兵少佐 小須田 電太

我死ぬも子を守りたてゝ大君と御国につくすことな忘れそ

これが続けつゝ、

明治天皇御製

子

みなし子にかたりきかせよ國のため命すてにし親のいさをを（明治四〇年）

との大御歌をいたゞきまつるならば、民をあはれませたまふ大御心のありがたさに我ら

の心はめさめしめらるゝばかりである。

出征の折よめる―抄録―

猿田 只介

君の為国の為なりとはいへど老いしちゝ母思はぬにあらず

いさましきはたらきせよといひさして涙にくもる母のみことば

門の辺におくるみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるゝ

これらの歌は、萬葉集第二十卷にみる防人のそれと全く同じ情意を詠んだものであり、それは又たゞちに

明治天皇御製

折にふれて

たゝかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして（明治三七年）

と詠みましゝ大御心につながり生きしめられてゐるのである。日本には、「無名戦死者」と言ふ如きものはない。「匹夫にして神と祭られ雲の峯」（註 正岡子規作）である。

最後に、

明治天皇御製

歌

戦のいとまある日はものゝふも言葉の花をつむとこそきけ  
(明治三八年)

との大御歌を拝誦しまつりて後、次の歌を朗誦したいと思ふ。

陣中にて

歩兵大佐 仁田原 重行

みぞれふる荒野のみちは人たえて砲音つくおと遠く日はくれにけり

長き対陣にうみて

歩兵大尉 三谷 仲之助

けふもまた砦ながめて暮しけり木影にいさむ駒をきよつゝ

前進の途すがらよめる

一等主計 名取 爲吉

生きながら打ちすてられし馬あはれ国のためとてともに出でしを

東八里庄秋雨

歩兵少尉 松井 石根

宿りせる里の小路の風さえてきびの枯葉にあめそよぐなり

秋興

黍の葉の枯れふす野辺の夕風に山鳩鳴きて日もかたむきぬ

斥候を

砲兵軍曹 古澤 新作



斥候のしばしやすらふ河岸につばくら啼きて日は暮れむとす

ここで一言しておかねばならぬのは、非戦論者の一群についてである。幸徳秋水等を中心とする社会主義者の一派、内村鑑三を主とするキリスト教信者の一派などがそれぞれある。かうしたパチルスが、如何に戦争の進行を妨げたかは想像にあまりある。全アジア民族解放の炬火をかゝげた聖戦の真最中明治卅七年十一月十三日に、幸徳らの組織する平民社はその機関誌上に共産党宣言の日本訳を企てたのである。これら非戦論者輩の国賊的行為は実に枚挙のいとまがない。ああ！ 明治天皇の大御心はいかにましまししか。我らは、涙ながらに次の大御歌を拝誦し奉る。

述 懐

たゝかひの道にはたゝぬ國民もちよに心をくだくころかな (明治三七年)

國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも (同)

(月刊『学生生活』昭和一四年一二月号)

昭和十六年——二十六歳——

をさな心

うつせみの世ははかなしとおもへども老いたる母をみれば悲しも

灰色の髪をなでつゝ一合のともしき酒に父は酔ひましぬ

のこりなく齒はぬけはてつと母上はさびしく笑みぬわれを見つめて

うつし世に生きとしいけるものなべていとしくなりぬこのごろの我は

みちのくは雪さへ降りしをみやこべは菜の花すぎて麦みどりなり

みちのくゆかへりてみればむさしのくぬぎ林ははやめぐみ居り

ひさしくも枯れはてたりし木の枝にめぐむ緑のなつかしきかな

益良雄はおもひ入りたるひとすぢの道きはむべしいのちのかぎり

新体制とふ仮面ひき剥ぎ痴れものゝ憎き正体あばきてやらむ  
戦の場にたふれし同胞のみ魂の嘆きは地をとよもすに  
天つ日のくゞもり晴れてさはやかに仰ぐ時いつぞと待てば悲しも  
をちこちに別れ住む友こゑを合せ進みいでなむ今こそ直ちに

〔地熱〕昭和一六・二・二二

荒木兄に（註 荒木稔、友人長岡高工生）

公園の木はことごとく芽ぶかひて春深みぬれわが友はいかに  
野も山も青葉にしげるその時は友よひと日を楽しく遊ばな  
会ひてまた直ちに別るゝさだめをば嘆かす心わが胸に生く  
君が住むあたりの木々も今ごろは緑まさりて美しからむ

別れては心のしらべ歌に詠み送り交さむ生くるしるしに（日刊『日本太郎』昭和一六・四・二三）

夜久大兄（註 夜久正雄、東大の先輩）のみうたをよみて

病む友のみうたよみつゝ朝風のすゞしき岸べ行きかへりすも

病むひとの歌とはもへず君が歌よめばあふれ来つきせぬいのち

散歩

つかれたるあたま休めむと昼餉ひるげどき表にいでぬ歌文もちて  
その姿目には見えねど空たかくうたふ雲雀ひばりの声はさやけし  
こきざみにさへづる雀のこゑも聞えくるかな松の林ゆ  
音たてゝ流るゝ水に心ひかれ橋のたもとに腰を下しつ

花びらを水脈みをになしつゝ流れゆく春の川水ながめあかぬかも  
をちかたの橋わたりゆく遠足の子供の列はあいらしきかな

日の照れる岸の堤に咲きそめししどみの花にふるさと思ほゆ

(日刊『日本太郎』昭和一六・四・二四)

山下教授送別の歌の序(註 新潟高校時代の恩師)

師に贈る歌かきをればいつしかに夜くだちゆきぬされど疲れず

悲しとはかくのごときか行く水の流れのまにま歌いづるなり

(日刊『日本太郎』昭和一六・四・二五)

明治天皇御集一卷これしあらば恐るゝものなしとしみくおもふ

山吹の花

見るかぎり若葉となりつそのかげに黄色く咲ける山吹の花

山吹の花にまじりてくれなるの躑躅の花も咲きそめにけり

枝先の地につくばかり咲きみちし山吹の花は見るに哀しも

葉も花もけぶる小雨にぬれそぼちかすかにゆるゝそのさ枝はも

萌えいでし若葉のかげにうちならび咲けるこの花めであかぬかも

いにしへもおなじ黄色にこの花は咲きたるならむ春のしるしに

この花を歌にもうたひ絵にもかきめでたるならむいにしへ人は  
(日刊「日本太郎」昭和一六・五・一)

新潟の友へ

みさゝぎにまうでまつりて詠みましし友らの歌はいつかしきかな

このみ歌よみゆくなべにいにし日の合宿のことども偲ぼるゝかな

急流に沿ふてつづける岩間道のぼりゆきしか友らを訪ぬと

冬枯れの草にまじりて咲きをりし菫の花の目に浮びくも

(日刊「日本太郎」昭和一六・五・六)

東大にて

かぎりなく湧きくる思ひに心せかれたもとほりけりこの池のべを  
吹く風のあらしに堪へず枝はなれ飛びゆく若葉水の面に落ちつ  
岩間わけはつかにのびし名も知らぬ野草のいろはなつかしきかな

この水も大和島根の神たちのめぐみと思ふにかしこきろかも  
やうやうに浮びし藻草さゆらにもゆらく心の抑へかねつも  
(日刊『日本太郎』昭和一六・五・  
一三)

日本太郎紙上に粟屋先生(註「日本太郎」発行者)のみ歌を拜して

愚かなる我らを友と詠みまし君がみうたはありがたきかな  
日本太郎いただくごとに神前に先づさゝぐるがならひとなりぬ

幾重山はなれ住むとも悲しかるねがひのゆゑにつながる我らは  
(日刊『日本太郎』昭和一六・  
五・一三)

夏夕

ふるさとの夕べ思ほゆ螢子の飛びかひ初むる頃をまぢかみ  
酒をのむ元氣も萎えぬと便りさす父の御言は淋しかりけり  
愚かなる我をかなしみさまざまに心くだかすかたじけなさよ

よき酒をたづさへゆきて父うへの淋しき御心なぐさめたきかな

(日刊『日本太郎』昭和一六・六・一二)

遠き世もいまのうつゝによみがへり悲しきろかも大御言葉は

大御言葉たゞにいたゞき生き死にも神のまにまとすゝまむ友よ

いかほどにさみしき時も大御言葉あふぎまつれば心はれゆく

民草のひとりし嘆くかなしみもすべたまふらむ大御心は

朝露のはかなく消ゆるわれ／＼の命にしあれば何かもとめむ

大御言日ごといたゞく喜びに支へられつゝ生くるなりけり

(日刊『日本太郎』昭和一六・六・一)

夕べの思

ゐろりべに蚊遣たきつゝ我が帰る時をまつらむ我がたらちねは

今もなほ迷へるわれをかなしみてかなしむあまり怒りたまふらむ

ねがひつゝ思ひつゝ遂になしえざることのみ積りこゝだ年へぬ

たらちねと同じき家に起き伏して暮さむ時よ来れふたたび

(日刊『日本太郎』昭和一六・六・二)

歌

裏山にしき鳴く小鳥ときのまま鳴きやまぬかなあはれその声  
なれもまた生けるしるかくまでにうたふか小鳥しき鳴けしき鳴け

写真

師の君のうつしをみれば三十年みそとせのかなしたゝかひしぬぼるゝかも  
行く水に流るゝ雲にいのちあたへ詠ましゝみ歌日にけにあふぐ  
(日刊『日本太郎』昭和一六・  
六・二五)

述懐

寄る浪のとゞろ鳴る音あさなゆふな耳にひゞき来うつゝともなく  
浪しぶく浜辺に立ちて海空のきはまる思ひ歌はむはいつ  
(日刊『日本太郎』昭和一六・七・六)

友らに

寄る波の追ひしくごときひたむきの心もつべしすらをのとも  
岩がねにせかれてひゞく敷島の大和心をいまあらはせや  
うつゝとも夢ともわかぬ人の世に生くるししかこの苦しきは  
うたへども語らずといふ遠き代のこゝろよみがへれ乱るゝ御代に



雨すこし止みたる森ゆはれ／＼と聞えるかなひぐらしのこゑは

わが身をば灯明となして燃え尽きし薬王菩薩のこゝろをしぬべ

火も水もいとはず進むひたむきのその一念に世々はこもれり

とほき世も来む世も今の一念にこめて歌はむやまとの歌を

その身をば焰のなかに立たしむる不動明王の姿かなしも（日刊『日本太郎』昭和一六・七・二〇）

（書翰から） 日本国民は、余りにも永い間、ゲッペルスの所謂「胃の腑の問題」のみに終始して、「痛々しき精神の飢餓」には気付かなかつたのであります。

新しき時代！ それは先づ我々の精神内部に目ざむるのであります。

我々の信を全同胞の胸に憩ふべき秋が参つたのであります。我々は、言葉を惜しんではならない。一個の労を厭うてはならない。袖触るゝ凡ての人々に語りかけよう。そこから新しい時代は開けてくるのであります。（以上謄写劇『たゝかひ』昭和一六・八・二）

『一念』創刊号をいただきて

すぎし世も来む世も今の一念にこめてぞ生きなむすらを我らは

果てもなくひろごるいのちこゝにあつめ刷りいだしけむこのふみかしこし

分れてははかなきいのちもあつまれば力づよきかな何か恐れむ

よむ歌に力あらせて乱れゆく世をためなむぞわれらがねがひ

寄居浜夕べしづかに打ちよする波の偲ばゆこの刷り文に

波の音ききつゝ生きし三とせまへのひとりのさびしさ夢のごときかも

すぐれたる友ら数そひにぎはしき世界ひらけぬ神のまにまに

(日刊『日本太郎』昭和一六・九・  
五)

## 新潟の後輩に

(一) (前略) 思想に弾力を与へるには歌の修業以外に道はありません。自分で思想をする修練を積みませう。(中略) 僕等は、まだゲーテの所謂「哲学病」から脱却してゐない様に思はれます。天地と共に律動するやうな情意を現成げんじょうしようではありませんか。それが千秋の人

といふことであります。

『一念』を続刊して下さい。表現の苦悩を死ぬるばかり味はひつくさなければ、眞実の人生にふれることはできません。あゝ芸術よ！ 八月二十二日午前一時

(二) (前略)「志」を貫くといふことが最も大切なことだと信じます。それだけだとさへ思はるゝのであります。「ものゝふ」の心とは左様のものであります。つらぬけぬやうな志ならば立てぬ方がいいのでありまして、大丈夫として実に恥づべきことであると信じます。俗衆の上に立つためには、時代と文字通りの死斗をせねばならぬのであります。思ひなやむよりは、積極的に実行してゆく方が道も拓かれるのです。

(三) (前略) 同信生活の内奥を宇宙のごとく広い豊かなものたらしめたいと切願しつゞけてゐる次第です。一切は我々の双肩にかゝつてゐるわけです。

橋本左内先生の言葉を紹介します。

「天地間の理は、周流活動至大至広のものにて、一人一心の区々にて死縛致すべきもの

にてはこれなし」

一人一心の区々にて物事を判断するぐらゐ危険なことはありません。友の役者たきしやとなつて、真実の協力の世界を再び実現して下さい。あらゆる事態の襲撃に備へて置くことが肝要です。(後略) (『一念』昭和一六・九・一一)

友に

しきしまのみちふみわけて千秋の人とならなむますらをのとも

うたかたの消ゆるがごとく亡びゆくたゞごと歌はうたふなよゆめ

いにしへの人に劣らぬ歌よみてとこしへの世にいのちのこさむ (『一念』昭和一六・九・一一)

九月一日

さかしらのたばかりすてゝひたすらに踏みわけゆかむ千代のふる道

うつそみは生くるも死ぬるも悔なしとしみく思ふに力おぼえつ

『靈戦』(註 本書収録の藤原邦夫の遺稿集)を讀みて藤原兄を偲ぶ

短くてことのこゝろのとほりたる日記の言葉の涙ぐましも

いかならむことにあひてもおほらかにゆたかに君はみうた詠ましつ

あきらけき月の光の大空にみつるがごとし君が心は

傷つきしからだの痛みこらへつゝ詠ましゝ歌の何ぞかなしき (日刊『日本太郎』昭和一六・一〇・二)

友に

たくらみの心をすてゝありのまゝ思ひのぶべし我らが歌は

たしかにも跡あるところゆ一步々々ふみわけゆかむ文の林は

「野に立ちて空をばあふぎ人にかへりむねのなさけに活きむと思はずや」

(註 三井甲之作)

大空を仰ぐ思ひに海原をのぞむおもひに日々をすぐさむ

一日の苦勞は一日にて足れりとふイエスの言葉忘れかねつも

矢のごとく過ぐる月日に甲斐もなきことを思ひて暮すべしやは

ありとある力かたぶけ過ぎてゆく其の日その日を努めむ友よ  
(日刊『日本太郎』昭和二六・二)

正大寮一周年に

わが生くる道を見いでしよろこびにおどる心のおさへかねつも

木々の葉の舞ひ散る見つゝはるかなる行手おもふに心きほふも

天におどり地におどるとふ親鸞の言葉うつしもとよめる胸に  
(月刊『新指導者』昭和二六年一〇月号)

友に

吹きつゝのる風にむかひて飛ぶ鳥のつばさの張りよ見るに哀しも

さりげなくのたまふ時のみことばもいのちこもれり悲しきいのち

君こそはやすらひたまへみ病の癒えていくかもあらぬ身なるを

## 暴風雨の朝

雨音しげし

森に声あり

3. 吉田 房 雄

心せかるゝさびしき朝。

しづかに坐りて

拝誦したてまつる

順徳天皇御製数首

胸せまり

言葉も絶えて

ひた嘆かるゝ。

日本海の磯へ、

日ねもす夜すから

鳴くらむ千鳥、

追ひしく浪の

とどろの音よ。

あゝ

七百年の悲しき歴史。

我らがうへにかゝれる使命を

ともに果さむ

友らよ！

めをあげよ

忠魂のまねくまにまに。

(日刊『日本太郎』昭和一六・二二・六)

## 留 魂 文 (留魂大会宣言文)

恭しく宣戦の大詔を拝し奉る

まことに米英兩國は百有年来祖国日本の自立を脅威し来れる不俱戴天の宿敵、今や之が撃攘は畏くも勅命あらせたまふ所なり、全国民全滅の覚悟を以て大御言葉に従ひまつりつゝとこしへに聖慮を安んじ奉らむ

日清日露兩戦役当時のまた記紀萬葉時代の素朴雄渾なる国民的感激は正に全同胞の胸



奥に怒濤の勢をなして蘇りつゝあり、祖先も亦掃妖の密策を提げて我等と共に戦ひつゝあるなり、恐るゝものあらむや

茲に我等学生は勅命のまにまに筆を投じ征衣を纏ひて蹶然征戦に赴かむとす、もとより生還を期せず、斃るとも護国の鬼となりて神州不滅の信を世界史上に客證せむ

昭和十六年十二月十七日

(註 昭和一六年二月一七日、東京共立講堂において出征学徒の留魂大会が行はれた。その宣言文、吉田房雄起草)

夜久正雄宛 寒くなりました。さぞ凌ぎがたいことゝ存じます。御無沙汰ばかり申しまして誠に恐縮至極です。僕は愈々二月に入営です。二月と言へばあの水戸問題が今となっては実になつかしく思ひ起される次第です。色々の事が走馬灯のやうに去来して止みません。

3. 吉田房雄  
病床の大兄をお偲びしてをりますと胸も張り裂けるやうな悲しい思ひに駆り立てられることがあります。水戸といえは直ぐ『日本の歡喜』を聯想致します。始めてあの詩集を披見したのは水戸館の一室だったやうに覚えてみます。大兄が『我らも共に戦場に』

といふ一節をくりかへしてをられたのを実にはつきりと覚えてゐる次第です。

一昨夜の出征学生留魂大会は予想以上の成功を収めることができました。僕らの運動は共立講堂で発会式を挙げたわけですが、今同じ講堂に於て壮行会を開いていたゞき誠に／＼感慨深いことでありました。僕も訣別の辞を述べましたが、ふと「いばらき会館」を思ひ起して非常になつかしい気が致しました。実際、最近水戸問題（註 昭和十六年

二月、旧制水戸高等学校・共信会に属する学生五名が、思想改革をめざすその活動のゆゑをもって無期停学処分を受けたことをさす。がなつかしく思ひ起されてなりません。殊に野中兄が！

さて、田中耕太郎氏の仏印交換教授問題に就いては大成功を収めることができましたけれども、遂に僕と浜田君（註 浜田収二郎、旧制新潟高校の同輩）は退学を命ぜらるゝに至りました

た。浜田君は今朝通知書を入手、僕は明二十日午前十一時の予定です。亡びゆく大学の最後のあがきといふ感が濃厚です。今度は大学改革も相当進捗する見込です。夜久兄のよく口にせられた言葉「掃妖の密策」を練りに練り上げねばならぬわけです。入隊までの一ヶ月間を全く滅尽してひた押しに押し進む覚悟です。三井先生のみ歌「吾がちから減ぶるときに目に見ゆる山川くさき命満ち満つ」を口ずさみつゝ一向直進です。

宣戦の大詔は実に／＼ありがたく拝誦しました。殊に、「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」の大御言葉を拝しますと、自力のはからひ一切が雲散して了ひます。

プリンス・オブ・ウェールズを轟沈せしめたのは、殆ど全て少年航空兵だつたさうです。すなほな雄々しい海鷲を手本にしてひたすら進軍をつゞけたい念願で一杯です。申しあげたいことが山のやうにありますけれども、激忙に逐はれて一向にまとまりません。せめて一日でもいゝからゆつくり眠りたい気が致します。

『原理日本』今月号の「金槐和歌集序論」を少しづゝ繰返し読みつゞけてゐます。果てしない心のゆらぎを覚える次第です。「言葉のしらべ」が最近どうやら分りかけて参りました。死地に身を投じたことの功德をしみ／＼と思ひます。

来春四月ごろには愈々日ソ開戦を見るさうです。僕らはシベリヤの雪原に骨をさらすことゝなるかも分りません。心が益々素朴になつてゆくことを感じます。

又、何れ半日ぐらゐの暇を作つてお訪ねしようと思つてゐます。当分は大学問題の方に全心を投入するつもりです。最近は何夜午前二時ごろに就床する始末です。

お体を大切にして下さい。(昭和一六・二二・一九)

昭和十七年——二十七歳——

## 象牙の塔に闘ふ

(註 本人が東大法学部の学風改革運動により退学処分を受けたあと、出征する間の論文)

—

僕の大学生活は、何一つとして喜びのない暗い日々の連続であつた。それは、かへりみるさへおぞましいものであつた。

今、制服を脱ぎ棄てゝみると、まことに晴々とした思ひがする。何らの誇張もなく言つて、学生服は伸びゆく生命の牢獄であつた。人々は、この言葉を信じてくれるであらうか。これから僕は、僕の身辺に起つた二三の事件を語りたい。

ファウストの言葉を借りるまでもなく、現代日本の大学が真に偉大なる何物も与へえないことは周知のところである。今、こゝで僕の思想的遍歴を語る暇はないけれども、法学部に入学したといふことは、既に或る戦ひを用意してのことであつた。

僕が大学へ行く前の年、経済学部教授矢内原忠雄氏の××論が重大問題化して、氏は遂に辞職といふことになった。氏の恐しい言葉は、今もなほ僕の胸に深く刻みつけられてゐる。僕は、これらの言葉を読みつゝ二、三の友達と恐しさのあまり打ち頼へてゐたことを覚えてゐる。自分が間もなく入学するであらうあこがれの大学に於て、このやうなおぞましい思想が実際に教授されてをるのであらうか。氏の辞職は、当時のジャーナリズムに於て恰も殉教者のやうな扱ひを受けた。僕は、それらの一つ一つをはつきりと覚えてゐる。

その頃——今でも矢張りさうかも知れない——最も多く読まれた書物は、経済学部教授河合榮治郎氏のものであつた。河合教授といへば、高校生達の間では救世主か何かのやうに崇められ、その書物を読まなければ時代きど後れになるといふやうな有様であつた。実情を知らない者にとつては、恐らく全く理解しがたい現象であらう。この河合氏の思想なるものは、矢内原氏や××氏にも優る強烈な××的反国家的内容のものであつた。『××××主義を青年界に支持する心理は尊ばるべき我が社会の財産である。之こそ地の塩であり世の柱である』といふ××××主義讚美の言葉は、同氏を知る何人の耳底に

もはつきりと焼きつけられてゐる筈である。その思想は、嵐のやうな勢で、純真な青年の魂に刻み込まれて行つた。高校時代のある時、漢文の教授が河合氏の思想に対して少し批判がましい言葉を吐くや、突然教場が騒然としてしまつて収拾のつかなくなつたことがある。それは、此の眼でたしかに見たことであり、何の誇張も含まれてはをらない。河合氏の思想こそは、その真理性の疑はるべくもない大前提となつてゐたのだ。河合イズムに反するものは、一切が反真理であり非学術的であつたのだ。

而も、河合イズムなるものは、唯たまたま河合氏がチャンピオンになつただけのことであつて、少くとも東京帝国大学法経学部を支配圧倒しつゝある思潮が凡てこれだつたのである。

すなはち、『世界を標準として人類の法律秩序を考ふるとき従来の××××、××××の法律理論は顛覆せざるを得ぬ』といった国家否定の世界主義を標榜する法学部教授の、カトリック信仰に基く神社厄介物扱ひ思想が亦、多くの青年達から怪しいまでに嘆賞せられてゐた。氏は当時法学部長であつたから、入学試験科目の一つである作文の虎の巻として、其の数多い著書が実に叮嚀に読まれてゐた。これらのことは、書けば全く



限りのないことである。

国家主権を真向から蹂躪する国際法至上主義者の思想が、再三再四問題化しつつあることは今更述べるまでもあるまい。殊にワシントン・ロンドン条約、スチムソン主義を禮讚した氏の行状に至つては、大東亜戦争下に於ては思ひ起すだに不吉のことである。こゝでくはしく触れるのは差し控えたい。

これらは、実に確然たる事実である。当時もさうであつたし、現在も亦寸分たがはぬ様相を呈しつつあるのである。

僕は、かうした世界に足を踏み入れなければならなかつた。事、大学に関する限り僕の身辺に明滅する一切の問題は、凡て一私事ではないといふことをひし／＼と感じ始めたのである。

兎も角、僕は四囲に顧慮せず率直に筆を進めようと思ふ。

## 二

唯、大学がつまらないといふのでは、個人的好悪の問題に止るであらう。それは、大学に対する罵倒でしかない。

我々は大学をして大学本来の使命を全うせしめなければならぬ。殊に、国家総力戦の云々される今日に於ては、十全にまで思想戦参謀本部としての役割を果さしめねばならない。然るに、東大法経学部の実状は、かやうの次第である。それは、東大のみに止らない。全国的の風潮である。

×××××学生を最も多く輩出したのは実に東大始め各大学であった。極言するならば、法経大学の存在は国家の崩壊をもたらすものに外ならない。文学部に至つてはあつて無きが如きものとなつてをる。誰が此の悲しむべき事実を否定できるであらうか。

だが、学生は学生たるの身分に束縛されて、思ふまゝの批判が許されなかつた。『学生ノ本分』と云ふ変幻自在の言葉よ！ 学生は本分を守らなければいけない、即ち教授の思想について云々してはならぬ、黙つて勉強すればいゝのである、といつて学生の根本的な疑問は晴れぬまゝ葬り去られるのが常であつた。今も全くさうである。

日本人は一般に学校といふものを非常に信用してゐる。上級学校に息子を送るといふことが、即ち何よりも安全な教育法だと心得てゐる。

学校は、教師は、此の日本人の健全なる常識を逆用するやうのことがあつてはならぬ



い。然し、實際の問題としては、意識的にまた無意識的に此のいまはしき逆用を試みつつあるのである。今や我々は一切の色眼鏡を外して、学校殊に大学教育の内部光景を洞察せねばならない。これは、国家的問題である。一部の人々によって、大学法文経学部の一時期閉鎖が唱へられてをるのも決して単なる過激論といふことはできないであらう。まことに過去数十年に亘る其の罪業は重いのである。

明治十九年、東大に行幸あらせられた際『大学今見ル所ノ如クナレハ此中このなかヨリ真成ノ人物ヲ育成スルハ決シテ得難キナリ』(聖諭記) (註 明治天皇は、東大行幸から還幸の後大学の教育に疑問を抱かれ侍講元田永学にこまごまと御感想を述べ

られた。永学はそれを手記して聖諭記と題し、ひそかに保存してゐた。)

と嘆かせ給うた

明治天皇の大御心は、偲びまつるだに誠に

畏れ多いところである。その誤れる学風は、遂に改められなかつた。大学の構内には赤旗を振る学生の群が再三見られたし、入学試験問題に共産党宣言の一節を出題する助教授も現れたのであつた。何れも皆、生々しい記憶である。その記憶を失はざる者は、大学の改革を深刻に考へてくれる筈である。

僕は、この大学に対して真剣に取り組みたかつた。志ある友人と共に、問題となる教

授の著書を、片つ端しから読破して行つた。未熟なものではあつたけれども、全身の力を振りしぼつて研究した。大学初めの二ケ年は、一見極めて単調な然し乍ら僕にとつては容易ならぬ此の労作を倦むことなく続行した。悲しい誇らしい僕の思ひ出である。それにしても先輩の温い心づかひは忘れることができない。

今、僕はこれらの書物を整理しつゝ感慨無量である。

現在では、大学の改革といふこともどうやら常識化して来たやうであるけれども、真に学術的に検討した結果でなければ、所詮幾度か試みて失敗したところの機構的改革に止ることであろう。かうした安易な改革論を随处で耳にするのであるが、それは問題を永久に遷延せしめるものとして、断然排斥されねばならない。真に改革を思ふものは、学術の權威を守らうとする勇氣を備へなければならぬ。大東亞戦争の赫々たる武勳に限りなき国民的感激を覚ゆるほどの学徒は、今こそ起つべきである。

毒虫の存在を知りつゝ、而も避ける者は如何なる弁解にも拘らず、凡て卑怯者である。教育の改革は即ち学術の改革である。学術を忘れた改革は、全くのノンセンスである。然し、そのノンセンス改革論が如何に多いことよ！僕は、荊の道を辿らうと思

3. 吉田房雄

ふ。今、こゝまで書いて、僕は烈しい憤りの感情を抑へることが出来ない。

兎も角、僕は此の手馴れたペンを投じなければならぬ時が来た。勅命である！ 眼前には、やがて赴くべき戦線の情景が去来する。旧臘、一先輩から贈られた御歌の一首を心ゆくまで朗誦したい。

ハワイ海戦に仕へてかへらぬいくさ艦しぬぶおもひを君にさゝげむ

僕は、常に悲しく愛誦する詩の一節を引用したい。

たゞならぬ

今の世に

まよへる民は

野をゆくよ、

うらさびしく！

さびしかれども

二人ゆく

あひかたりつゝ（註 三井甲之作）

晩秋の午後の教場にあつて独り苦しみ悶えつゝ、此の一節を幾度かよみ続けたことであらう。まよへる民は、野をゆくよ、うらさびしく！

アカデミー、それは国民の純一素朴なる労苦生活とは余りにも縁遠い存在であつた。労働価値説が乱舞する、弁證法が横行する。

此の浅間しい修羅場を緘口して過ぐることはできない。少くとも僕はできなかった。僕は思ひ切つて戦ひを宣言したのであつた。此のまゝニコ／＼と卒業してゆくことは、余りにも大きな罪惡だと信じたからである。僕は、自己の素朴なる生命感情をどこまでも伸び／＼と育てたかつたのだ。

誤れるものを誤れりと判断することが、学生に対してのみ封ぜらるゝ理由はない。

学生は、齊ひとしく大学の持つ国家的使命を古今東西の歴史に照しみるべきである。それは決して生易しいものではないことに気付くであらう。その生易しからざる使命を大学の權威のためにも敢然と守らなければならない。銃剣を手に執つて起つことゝ何等変らざる決死の勇氣を要するであらう。時代は、あらゆる勇者を要求しつゝあるのだ。我々

は自らの立てる所に於て先づ真の勇者とならねばならない。将来を期するといふ如きは弱者の口実である。学生は、学生として真の勇者とならねばならない。学術へ！

詩もなければ宗教もない、世界観もなければ政治もない、徹底した空漠さが大学の全雰囲気を成してゐる。戦ふか、妥協するか。何れかの一途しか残されてをらぬ。高文と就職と結婚とのためにのみ存在するやうな贅沢物、これと戦へぬやうの青年が果して何の役に立つであらう。

我々は、かやうの学風に禍されて何時の間にか純一な国民感情に曇りのかゝつてゐることがある。今こそ、凡てを禊祓して、清らかな生命に立ちかへらなければならぬ。今や、「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」との大御言葉をくりかへしくりかへしいたゞきまつる。あゝ、限りなき国体の威厳よ、国史の成績よ。僕は、今大学の姿を描いて見た。大学が如何に有害なものであるかを語つたのである。世の常識とは、恐らく相容れぬ点が少しくあるであらう。然し大学に関する限り、世間は甚しく、或は殆ど全く誤謬を犯してゐることを更に改めて訴へたいのである。

我々は 大御言葉に信順し奉る。こゝに尽きせぬ勇氣と確信とを恵まるゝ。それを阻

む一切のものは、打ち亡されねばならぬ。大学を改革しよう。どうしても改革しよう。

僕は、いま入營するに当つて、自分の力足らず勇氣足らず、志したことの十分の一も実現しえなかつたことを誠に情なく思ふのである。(月刊『新指導者』昭和一七年二月号)

夕映え

風にみだれ四方にとびちる黒雲のひまゆ射しおろす夕日すさまじ  
つるぎなす山々の峯は燃えさかる日にひた映えてゆらくがごとし

友に

我をたのむ空しき心なげうちて御祖のいのちたごうけつがむ  
思ひ悩みたためらふよりも叫びつゝ戦ひゆかないのち死ぬまで  
み空ゆく雲のゆくへに心はなちものはおもはむ世は乱るとも

(以上五首『櫻の木集』昭和一七年四月)

小田村寅二郎宛（註 精神科学研究所・日本学生協会・東大の先輩）

大君の御楯となりていでてゆく我ならぬおもひを君にさゝげむ

万感交々胸中を去来致しまして言葉もございません。元気にやつて来ます。

山桜花もろともに散り果てしみ祖のいのちなつかしきかな

（昭和一七・一・二九）

小田村寅二郎宛 やうやく心も落ちついて参りました。涅槃境とはかういふものかとも思はれるほど平静です。東京の友らの上がしきりに偲ばれます。只今附近の宿に居ります。明朝八時に営門をくゞる予定です。田舎にゐる老父母が、淋しがつてゐるので、身も切られるやうな思ひを致しました。

（昭和一七・一・三二）

初陣述懐五首

朕は汝等軍人の大元帥なるぞとふ大御言葉のかしこきかなや

くだくだしものは思はずひたすらに戦ひゆかむみことのまにま



天つ日の光あびつゝ仇といふ仇みなすべてうちてしやまむ

くにのため命さゝげむひとすぢの悲しきねがひをとげしめたまへ

愚かなる我をも友とめでたまふ友らのなさけを忘れておもへや

(昭和一七・二・一 宇都宮東部第四十四部隊)

昭和十八年——二十八歳——

夜久正雄宛 戦ふ身にも内地の逼迫した情勢が犇々と感ぜられます。新聞や雑誌の反故ぐらゐしか見ることはできませんが、何も彼も手に取る様に分ります。前線は敏感です。

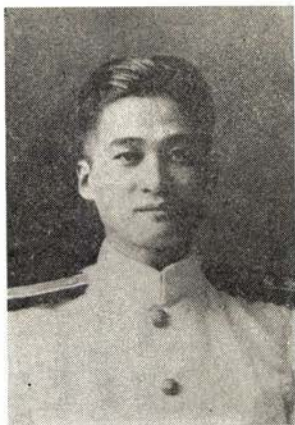
御無沙汰申しては居りますが、決して怠けて居るのではありません。死に直面した緊張を毎日経験して居ります。

手塚君 (註 国学院大学生だった同輩・手塚頭一、戦死) にも誰にも遭ふ機会を失ひました。研究所の諸兄を思へば、何んな苦勞も物の数ではありません。

(昭和一八・八・一〇)



四、な名川が川良り良三よ三う三



名川良三

大正七年九月、東京府荏原郡大井町(現品川区)に生れる。昭和十一年、旧制東京府立第一中学校卒業。同時に旧制第一高等学校文科甲類に進み、十四年卒業。引続いて東京帝国大学法学部に入學し、十七年卒業。

一高在学中は「ラグビー部」員として活躍、同時に「一高昭信会」に参加。かうした二つのサークルの双方で責任を果すことはかなり困難があつたと思はれるが、彼は一高昭信会員としても、終始リーダー格で活躍した。いつも明るい笑顔を絶やさず、そのいさぎよい性格と豊かな行動力は、一高、東大を通して、多くの先輩、後輩の敬愛をあつめた。昭和十七年、東大・京大ならびに全国の高専校における学風改革の学生運動(「日本学生協会」が展開したもの)に対して、政府の弾圧

が次第に強まる中で、夏の恒例の全国学生合同合宿を行ふにはさまざまの困難が立ちふさがつてゐたが、彼は、合宿地を求めて上越の各地を尋ねめぐるなど、常に、この学生運動の推進力となつてゐた。

尊父侃市氏は、有名な弁護士（東京弁護士会長）で、また衆議院議員（政友会所属、当選六回。東条内閣のときは非推薦）であつた。尊父としては、彼に対して法曹界への進出を期待せられたものの、彼は東大卒業と同時に、毎日新聞社に入社した。わが国思想界の混乱に対して、その是正に挺身する覚悟であつたやうである。翌昭和十八年一月、海軍に入隊。海軍経理士官として、上海武官府に勤務後、軍艦「香取」に乗艦。昭和十九年二月十七日、トラック島沖の海戦で戦死。時に数へ年二十七歳。海軍主計大尉。

昭和十三年 — 二十一歳 —

(書翰から) 夜久さん(註 夜久正雄、一高昭信会での先輩)がいつか僕に「日本人として本を読む目的は日本人としてほんたうに大君によるこびいさんで命をさゝげまつる事にある」といった意味の事をいはれました事が、宮脇兄(註 宮脇昌三、同前)の論文をよんでゐる中にひよつと頭に浮かびました。自分の読書、勉強の蔽とした目的の事実に行き会つた様な安心を感じました。(中略)

くにたみの中にはびこるあしき草いざもろともに根こそぎにせん  
くさをわけ石をおこしてあし草の根やきつくさん国民われらは

(昭和一三・八・九)

昭和十五年 — 二十三歳 —

## 岡倉天心

——「茶の本」について——（論文）

現在日本の思想的大動乱の中にあらゆる学生批判が、学生をして右に左に鞭打ちながら、然も真に学生を思ひ学生に正しき方向を指示せし人なき時、「自分も学生である。」といふ前提の下に、学生なるが故に、現代の学生の種々のなやみ、迷ひを感じ、その経験に敗けず、体験として雄々しく立ち上つた友等に、ともすれば崩れんとする心を励まされ、率あられて来た自分にとつて、天心の茶の本“*The Book of Tea*”を一読し、其の茶の香り高き芸術論に現代学生に与ふ可きもの大なるを見たのである。もとより、此の一卷は岡倉氏が外国に在つて、外国人に与へしものである關係上、その表現形式としては、幾分、人生に対して計量的、形式的、傍観分立的なる所はあるが、一卷に、氏が茶道に於て茶道に墮せず、日本文化の複雑性を、素直に表してゐる直き心を見るのであり、老仏二思想が、日本の大自然、一貫せる不可思議生命に対する感応に融化せられて、芸術的に表現せられたる「寂び」、最も複雑性を有する「寂び」の精神に、現実生

活を生きぬきし者の告白が描かれてゐるのを見るのである。

氏は茶室と題する第四章に於て、茶室の不完全を説くに道教及び禅の完全といふ概念を説き「彼等の哲学の動的な性質は、完全そのものよりも、完全を求むる手段に重きを置いた。真の美は只『不完全』を心の中に完成する人によつてのみ見出される。」と書いてゐる。而して更に第五章に、「傑作と云ふものは我々の心琴に奏でる一種の交響樂である。」と芸術鑑賞の極意を説いてゐる。思ふに現在の学生は、之程の強き意慾を以て人生に対してゐるであらうか。現代の学生は、學問に於て一足とびに、完全として出来上つたものを与へられん事を求めすぎてゐるのではないか。(完全とは成長停止である)それが故に現代学生は、良きも悪しきもなく、完全を与へられん事を願つて、自主的態度なく、無系統に本を読む。而して真に求めんとする意志的生活の欠如の故に、それらの本の思想的貫性はなくその本の内容は、たゞ教養として、夫々に完全なものとして、ゴタ／＼と蓄へられるのである。此の事に関連して、道元の重雲堂式十ヶ条の一つ、

一、堂のうちにては禅冊なりとも文字を見る可からず。堂にては究理弁道すべし。明

窓下に向ひては古教照心すべし。

をよく味はふ可きである。学生は学問の窮極対象たる、民族性を有する、具体的人間としての人生を求めて、その生活体験をもつて、研究を支持しつゝ、あらゆる学科を此の一貫せる目的に関連せしめんと意思せねばならない。こゝに於て我等の学問は、祖国のいのちに生きしめられ、一貫せる方向を有する体系を確立するのである。こゝに始めてキリストは日本人の心の中に生き、仏陀は日本に眞の生命を見出すのである。喘ぎ、傷つきつゝ尚励まし合ひ、如何に日本人として生きぬく事の難きかを思ひ、人生の悲痛が心の底からこみ上ぐる時、この大なる体験に始めて、民族同胞を思ふキリストの悲痛の叫びも、民族の根本原理を体现した仏陀の祈りも、我々の心の琴に、共感するのであり、かくして、又眞に外国文化の融化は可能なのである。現代学生は決して、形式、組織の中に無苦痛に生活してはならない。「此が学生生活なんだ」と、今までの既成学生生活に満足する所謂秀才は、我々の最も嫌悪する対象でなければならぬ。我等はこの既成生活を越えて、眞の生命の命ずる学生生活とは何であるかを共に考へ、共に語らねばならぬ。氏は、利休がその子紹安の、庭を掃除し水をまくのを見て、掃除の妙諦を示す

に、塵一つなき庭に、秋の錦を、片々と散らした話に關して、「利休の求めたものは清潔のみではなくて美と自然とであつた」と結んでゐる。此處に於て、紹安は、掃除といふ既成の概念にとらはれ、眞の掃除とは何であるかを考へざりしを恨むのである。かゝる事は、日常我々の周圍に数多起つてゐるのである。我々はあくまで紹安の愚を、学生生活に於て行つてはならない。我々は時代の意志を感じ、時代と共に生くる学生生活を正しく生活せねばならぬ。今や日本は、思想的大動乱のさ中に立つてゐる。歴史を忘れ生命を失ひし者らが、たゞ青白き頭のみ幽霊が、日本に横行してゐるのだ。此の時、我ら青年は、若きが故に、ほとぼる生命の炎中に、青年は一なりと叫び、全国の学生と志を通はせ、そこに生るゝ雄々しき、新しきいのちに生きんとするのである。世の学生諸兄よ、この事実を、この大なる事実をなんと見るのか。

氏は更に「茶の原理は、倫理、宗教と合して、天人に關する我々の一切の見解を表してゐる」と述べ、「彼等（註 茶人）はいつも多少でも葉があればこれを花に添へて置くといふ事である。といふのは、彼等の目的は花の生活の全美を表はすにあるから。云々」と続けてゐる。嗚呼、現在の学生が斯の如き総合的な體驗に乏しいのは何の罪であらう



か。一見不完全な茶室にあらゆる名工、名匠の血のにじむ苦心を滲ませて、無限の余韻をたゞよはすさ中に、一瞬、自己の心の大きく、自然にとけ入り発動するのを直覚する。

なよ竹のちちのさ枝のはは枝のその節々に世世はこもれり（金槐集）

一瞬に人生を、直接經驗的に統一する直き心なき者がどうして祖国に随順する情意を感ずる事が出来ようか。花に葉を添へて花の全生活、即ち自然を全体的に捉へんとする姿、そこにはまつたく、自然と自分との分離はない。然るに、花のみを見る者の心理は、既に、その花を自然の中の花と見ずして、固定せる存在物として、傍觀的にながめるのである。歴史を書く人が、日本の歴史を、自然科学的に研究せんとし、その歴史から遊離せるが如き状態より歴史をながむる人の如何に多き事か。何も歴史に限つた事ではない。凡ゆる人文科学が、かゝる思考能力剝脱者に踏みにじられてゐる。これらの人々は、花に葉をつけてながむる心を如何に解さうといふのか。頭でつかちに、花と葉を数学的に結びつけるといふのか。かゝる体験なきものにとつて、人生は、肯定的に肯定せられた物であり、枯死物であり、固定物であり、無進展であり、完全にして不完全、調和にして不調和なる西洋建築の如くである。



「茶は点<sup>た</sup>てる毎にそれ／＼の個性を備へ、水と熱に対する特別の親和力を持ち、世々相伝の追憶を伴ひ、其れ独特の話しぶりがある。真の美は必ず常に此処に存する。」と氏は又いふ。現代学生は概念的に、パーツと体系を形式的に樹てゝしまつて、そこに創意はなく、あるのはたゞ形式のみであり、亜流のみである。従つて死物のみ積み重なつた日常生活の滓のさなかに、無苦痛に生活し、その結果与へられ、やらされる断片のみにししか眼はとどかず、そこには自分の意志をもつて貫かれた一貫性はなく、従つて歴史の必然性を痛感する体験もなく、此の概念的な断片を知的に連絡せしめて満足してゐるのではないか。嗚呼、重ねて云ふ、嗚呼、かく学生を、青年の情意を誤らしめしものは誰ぞ。而して更に思へ、かゝる事の今日もなほ改められず続行してゐる事を。

我等はかく思ひ、かくなやみ、かく信じ、学生なるが故に、学生生活を愛し、憂ふが故に、全国の同じきなやみになやむ友等との、無窮の生命の開展を意志し、実行しつゝあるものである。

(月刊『学生生活』昭和一五年六月号)

九重ここのへの尊みき御身みもてたたかひのにはに神あがりましゝみたまかなしも

秋たちし都に遠き蒙疆の野に逝きましゝみ心如何に

なき宮のみ心しぬびてたらはざる御民の思ひを更になげきぬ

号外の鈴かなしくも宮殿下の神がくれましゝをくぬちに伝へぬ

おどろきとかなしみの思ひくにぬちにまき湧き起りぬかなしきしらせに

鈴の音におどろき悲しみ国民は足らはぬ日頃をかへりみなげきぬ

雨もよひくもりし夜空になき宮のみたまは都に今かへりませり

氣を付けのかなしきしらべ秋空にひゞけばみ車近づきにけり

最敬礼ひゞきわたりてかなしみの御車はやも我らが前に

なき宮をしぬびまつりて一筋のこの道進まんわが生くる限り（月刊『学生生活』昭和十五年九月号）

昭和十六年 — 二十四歳 —

うちよする波のひゞきは伊豆の路の八十の群山になりとよむなり

木の間よりかゞやく伊豆の海みれば大阪の友らしぬにしぬばゆ  
難波なは潟がたうちよする波を一望にみはらす山辺に友ら戦ひますか

四人にて雄々しく進む友どちの姿しもへば涙わきくも

伊豆の海のはてはろかなる友しぬび大きな力のわきいづるかな (『御橋句報』昭和一六・一・二五)

松嶺

闇の夜にたゆる事なく松が枝をわたる風の音いやさやに聞ゆ

高くなりひくくなりつゝたえもせず夜空をこめてうちひゞき来も

静まりて地のそこひゆひゞくかともへば高なり行く律動よ

闇おほひとはに伝はりゆく律動のいのちつらぬき生きんと思ふ

(『青葉集』昭和一六・四)

かへし

心かけ心にもひつゝいらへせず五日あまりの日数へにけり

「うた給へ」とふ君がみことばに怠りの今日この頃のひたにくやしも

なにとなくくさくごとかゝづらひすごしゝ五日を君許しませ

いらへせんと君がたまひしみたよりを再びとり出しよみまつりゆく

窓の外の杜の若木にくもりかゝり春のなかばに冷たき雨ふる

春雨にけぶるみどり木さみどりのわかきいのちに君偲びつゝ

みうたにししぬびこし君とうつしくもあひまつりにし時をもひつゝ

まことたらはぬはからひに執してともすれば迷ひ行く我を導き給へ（『青葉集』）

東大精神科学研究会解散の事を思ひつゝ、井の頭の夜道をくるに、一つ灯にてらされし桜の、冷たき雨にたゞかれ、いろあせしをみて

たゞかひにつかれ家路を急ぎつゝ夜のしどまの国道行きぬ

ふりつゝのる雨のさ中に花々はかたみに寄り合ひたへつゝ来ぬらん

友よ友よかたみになしきたまきはる思ひかよはせうたひあげ行かなむ

「かなしきはいけるしるしぞたへ行け」とふ師のみことばのしぬにしぬばゆ

藤原兄のみうたをよみまつりて（註 藤原邦夫、本誌収録）

かくばかり強きいのちのますらをがこの世去りしはうつゝとおもへず

さよ更けてへやぬちにひとり友おもひ友のみうたにいのち連なるも

もえ上る思ひのみうた身をなげくざんげのみうた神のまにまに

うたつくり初めてゆわづか一年の友のみうたの高きしらべよ  
みくにもる意志に貫く一時にとはのいのちのこもると知りぬ

「大詔発せられたり」と告ぐる友の言葉に目ざめて

大みことたまふとつぐる打ちふるふ友のことばにおどろき目ざめぬ

大君のみ心たゞに仰ぎまつることのかしこさ何にたとへむ

光みつる代とは今の代日の本のみ民と生れしよろこびみちて

宮城参拝、祈念をこむる民草多し、との新聞記事を読みて

うれしさに涙ながるも日の本のいのちはつきずとうつつしく思ひて

決死的ハワイ大空襲敢行のニュースを聞きて

大君のしこのみたてと次々に海原こえ行く心偲ぶも

心打つ決死とふことばひとすちに渡り行きけむ大丈夫の心よ

大君のみたてと進むますらをの行手をはばむものやあるべき（以上、「大詔発せられたり……」以下、

謄写刷『連絡部報』第一輯第三号）

「心貧しき者」(学生運動靈戦史要から) 歴史とは精神史であり、精神史とはコトバである。心貧しく生くる者らの、それ故に実人生を回避せず、人生のそこひの清らかな傷つき易き思ひに、歎きとおそれとうらみと悲しみと喜びとを、もろともにうたひ、心をひびきかはしてなり出でしコトバの律動である。

(月刊『新指導者』昭和一七年一月号)

夜、時雨の音を聞きて

雨雲は八重に掩ひてぬばたまの夜空はてなくしぐれ行くかな  
とこやみに底ひもしらず迷ひつゝゆくへも知らに時雨すぎゆく  
秋深くすぐる時雨の音高みこゝだくの思ひのつぎつぎにわく  
星くづも見えぬ夜空に木々ならしすぎゆく時雨のこもり音ききつゝ

秋といふに、この日頃くもりつゞくるを

たなぐもり空むすぼれて時じくにさすうすらびのかそけきろかも

秋深み空たなぐもり 南みんなみの方をさしてやむらどりの行く  
むらどりの渡りゆくらむ南のみ空はてなくあまぐもこめぬ  
たゝなはる遠山さやに秋の日のさゆるみ空をひたにこひつゝ  
遠山のはてしもしらずわき上る思ひかけりて叫ばむものを  
大浪のさかまきよする島崎にいでも日をこひ祈るも我は

(『櫻の木集』昭和一七・四)

和多山儀平宛(註 旧制熊本高工生だった友人、後出)「つらなりて目ざむる祖国のいのち」  
貴兄の御葉書で以上の言葉が心に浮かびました。

帝大等で人と話してゐる時など、時々ひよつと松江の寮の姿が思ひ出されたり、仙台の寮の事が思ひ出されたりします。勿論一度たづねた事のある寮が心に浮かぶのですが非常に心さはやかに人とはなしがつゞけられてゐる時におこるのです。

最近、かくして素直に人に対する事が出来る気がします。通学途中の電車の中でも、よく隣の人などに話をします。我々は御集一卷でたゝかつて行けるといふ事をしみぐ実感致しました。

(昭和一七・四・二五)



和多山儀平宛 御手紙有難うございました。品川で共に誓ひ合つた夜はほんたうに人の真心が、人の誠が、更に信知せしめらるゝ夜でした。

出征も近く、我が力の足らざりし過去の学生生活をふりかへつてみれば、徒らにあせり自力にのみ走らんとした時、ほんたうにあの晩は友の真心に生きかへらしめられた思ひのする夜でした。(中略)

昨日家にかへり「現役證書」を拝しましたが、勅命を直接戴きまつりし感激を新たにしたのであります。難波津より不知火筑紫をさして出でゆきしみおやら、又明治二十七年三十七年に出征せし先人らも、幾度此の感激を味はつた事でせうか。我らの体験はただちに歴史に連なり行くのであります。(中略)

今までふんで来た十七年の学生生活に一度でもかゝる感激は与へられた事はありませんでした。而もその学生生活に対してつひに決定的な生の刻印をおすことを得ず卒業するのです。あゝ大君に対し奉り又護国の神靈に対し奉り何とおこたへすべきか。然るにかゝる不忠の我らにも兵役をたまたうたのであります。その広大無辺の大御心。あゝ我らの思ひ極まりたゞ／＼涙のごひつゝ護国の神靈に、とげ得ざりし我らの悲願をそし



てそれを継ぎ行く同志信友の願ひをとげさせ給へと告げこひまつるのであります。九月は戦死の月であります。北白川宮永久王殿下を始め奉り、黒上先生、野中、百武兄の戦死の月であります。此の月こそ我らのたましひを永久に国土に留らしむ可き月であります。西東所へだてつゝよびかはしよびかはし前進させう。(中略)

今日は第九回大詔奉戴日です。今朝、全寮生で井の頭の林の中で大詔を奉読致しました。

朝ぎりはあはく流れて野の道に落葉ちりしき秋は来りぬ

あさつゆに落葉しめりてあかときのしぐまに大みことばいたゞきまつりぬ

「米英に戦を宣す」とふ大御言葉たゞにかしこし

「已むを得ざるものあり」とふ大御言葉に何とこたへまつらむ

ひたすらにたゞかひ進み大御心の万分の一にもこたへまつらむ

秋空は松のこずゑにすみまさり大御言葉はみ空にひゞきぬ

神つ代のしぐまさながら草も木も大御言葉にしたがひまつりぬ

では之で失礼します。(昭和一七・九・八)

## 入營に當りて (註 入營に際し友に与へた書翰)

昨日、本年十月入營する我々に田所大兄(註 田所広泰、「一高昭信会」の先輩、日本学生協会理事長)より御手紙を戴いたのであります。大阪のはげしきたゞかひのさ中より、我々の上を偲ばれて下さった御手紙をよみ、あらはす言葉もなき大兄の近頃の御氣持を、直接拜するを憶えたのであります。此の御手紙をよむにつけても、我々は先輩及び後に残られる全国同志諸兄の御心を偲び、現役證書をおうけしてからの自分の心が更に定まるをおぼえたのであります。ふりかへつてみますれば、松陰先生が「心蹟百変挙げて数へ難し」と留魂録の冒頭に申された如く、入營が確定してから今まで、世の動き、刻々に變化して行く日本の現状と、そこに予測される将来を考へて、或は不安におそはれ、憂憤に心閉し、焦慮にかられて、自分の力でなんとか打開しようと考へて心安き思ひなく過して来たのであります。今ふりかへつて見ますれば、それらの思ひは一度にせき上げ、たゞ何もなし得なかつた空<sup>から</sup>まはりばかりしてゐたとしか思はれません。

我が心の中で憂ひてゐる事が学生、及び一般国民の心の中に、一体どれだけ浸透する事が出来たか、国民生活全般に対する見通しなく、それ故に安らかに日々を送る人々に向つて、予想され得る将来の危機感を、今まで訴へつゞけて来たのでありますが、我々に対抗する者のテンポは更に早きをおぼえるのであります。此らの思ひがもう入営期日までいくばくもない今、一時にせき上げて来るのであります。

然し昨夜、田所大兄の御手紙を拝し、それに連なる全国同志諸兄の御心を偲びまつる時、今まで内心の不安に耐へられず思ひも極まつて宮城を参拝し、大内山の松のみどりの最中もなかに拝する大宮のみすがたををろがみまつるとき「日本は大丈夫だ。君が代は千代に八千代にゆるがず」と心にひろがる生きる意志に、安心と確信を与へしめられた体験がうつくしく心に目覚めてくるのであります。「我々の思想戦は、はかない人間の努力を以て、何ら附加することの出来ない、ゆるぎない国体の存在を信ずることから出発するのであります。」とふ田所大兄の御言葉そのままに、生死を貫く祖国防護意志に出征致します。もう一年間の余裕があればと、残念に思ふ心もありますが、全てを神のまに／＼悠久の日本国体を信知し、友らの上に我等のいのちの連なりゆくを実感しつゝ

入営致します。然し「反省の許されぬ軍隊生活」に入つても、必ず我々のコトバと、御製を中心とし奉る我々の雰囲気とは必ず確保します。

我々の一生は、承詔必謹の臣道に、大君の大御心のまに／＼捧げまつるのであります。不動の志はハッキリと心に確立してゐるのであります。三井先生は「我が身を分ちて、此の世に遊ばむ」と申されたのでありますが、我等はいづこに行くとともに必ず一筋の信を切り開いて行きます。

諸兄よ、同じ志に生くる者として、我々の心は時空をこえて諸兄らの上に通ひゆくを信知して居ります。

大御心を戴き奉り、神に祈り、共に共に祖国の無窮の生命を祈念しつゝ、よびかはし偲び合ひ、此の現実国民生活のさ中に国家永遠の基礎を確立せんと念ずるのみであります。

(昭和一七・九・二二)

(書翰から) 元気一ばい、秋空の下で訓練に邁進してゐますから御安心下さい。たゞ、今までの一般の学生生活の缺陷から、補修学生の中には相当だらしないのが多いのが残

念です。世界観の確實なる教育と、そこに生まれる使命感による、昭和の文の戦士としての学生の全身のたて直しは絶対に必要であります。

然しそれらの点に關しても心あるものは非常に心を痛めて居るのであつて、今夜第廿四班の者同志で話合ひ、皆の真情の吐露を聞いて非常に心うれしく感じました。話せば必ず響くのが人の心であり、人のまことであります。「友よと呼ばば友は来りぬ」とふ三井先生の御言葉がうつしく偲ばれます。

(第二信)

(前略) 入校後ふれる戦友には非常に思想の正しき人があり、それらの人が学生時代どうして我々と連なる機会がなかつたかと残念に思つてゐます。世の中のかゝる人らを真につなぎ合はせて、この戦時下の国民生活を磐石の安きに置き、大御心を安んじ奉らねばならぬと思ひます。

(謄写刷『たゝかひ』昭和一七・一〇・二五)



五、石綿一郎



石綿一郎

大正九年、小田原市に生れる。旧制小田原中学校を経て昭和十六年三月神奈川師範学校を卒業。温厚で、ユーモアに富んだが、本質的には、何事にも全身全霊を傾ける努力家であった。このことは軟式庭球の選手として昭和十四年秋の全関東の大会で、二時間三十分の熱戦の末、覇権を獲得したことでも知られるところである。

5. 石綿一郎  
昭和十六年四月、師範学校卒業とともに、神奈川県・足柄国民学校訓導として赴任した。師範学校の友人を通じ、東京高等師範学校「信和会」(かつて黒上正一郎先生が作られたもの)の会員と連絡をとりながら、日本の古典を学びつゝ友情を深めてゐたが、その豊かな情意は、教へ子たちとの心のふれ合ひの場にも、顕著な教育精神の発露となつてあらはれてゐた。

翌十七年四月、横須賀海兵団に入団（同年冬、病により父を失ふ）。初め、駆逐艦「雷」に乗組み、次いで巡洋艦「摩耶」に移り、キスカ島撤収作戦、南太平洋海戦に参加。遂にレイテ沖海戦において、敵の魚雷攻撃を受け同艦は沈没。戦艦「武蔵」に収容されたが、つひに戦死。時に、昭和十九年十二月二十四日。数へ年二十五歳。海軍上等兵曹。

彼は、数多くの海戦にほとんど出動したが、最後の出動に際し、令妹に「この次はミカンの赤くなる頃かな」と告げたのが、肉親への最後の言葉となつたといふ。



「足柄国民学校時代」

明治天皇の御製を崇たかく白壁にかゝげまつりてをろがむ朝はも

生徒が切りぬきて置きし皇室関係のお写真を、不動明王のきよらかなる火にてたきたてまつりて  
児童等こどもがあつめし皇室の御写真をきよらなる火にたきまつる朝

放課後のしづけき教室にて、ひとり半はん伽がをくみて、壁にかゝげ置きし国宝地藏菩薩の絵姿に向ひて  
寂然と半かを組みて経よみぬ地藏菩薩の像に向ひて

多感な青春の幾年を、幾度か生死の間をさまよひつゝも、最後まで強く生きよと無言のうちにはげま  
し、かく生かしておいて下さつた不動明王にさゝげむとてよめる歌一つ

吾生きぬ二十余歳のこしかたは不動明王の加護をうけつゝ

朝、教室にて『留魂文鈔』をよみつゝ（註 日本学生協会編纂の古典文鈔）

靈妙なる祖国の生命いのちをいかにしてこの教へ子にしらしむべきや

戦勝の祈願ひたすらに児等も吾もひんがしの雲をしばし拝むくらが

ひたぶるにわが恋ひをれば明星の嶽のあたりに雲みだれ飛ぶ（註 箱根外輪山の二）

枯れ枯れの雑草あらくさまじりにさくら蓼花たで咲くころよりひと恋ひにけり

乙女子と別れゆくこの道の辺に咲く茶の花のしたしかりけり

生き死にを超えてつらぬくとこしへの恋に生かまく生かまく恋に

この川のこのつり橋は日の暮れに乙女と吾われがわたりゆく橋

野菜のせし荷車ひきて街へゆく旧師の姿に涙す吾は

「一郎君」あななつかしやこのみ言葉いまもかはらずかく呼びたまふ

水くさの浮葉のかげにやすらひし水蜘蛛みづぐもはしばしみじろぎもせず

いつしかに秋は来にけり道の辺のあら草まじりに蓼の花咲く

足立原茂徳宛（註 神奈川師範の同輩）

蝗取りをやりました。

そして早速帰つてから詩を作らせてみました。

児童はまさしく詩人です。小さな詩人です。何ものにも歪められた事のない、純一なる、偉大なる、崇高なる詩人です。たとへ、ろくに字は書けなくても、たとへ計算は劣つてゐても……

彼等の持つるといふ詩的な感覚のひらめきは、到底私達教師の及ぶところではありません。彼等が無意識のうちに使つてゐる言葉の不可思議にはおどろかされます。彼等は吾々の氣付かぬ、適切な、他にはこんな美しい言葉はないと思はれる適確な、言葉をもつて、文字をもつて綴ります。無心につづります。彼等の心はおほらかです。

御製の「あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな」の御精神を地上に実行しつゝあるのは彼等だと信じます。吾々の如き、多少なりとも歪められた思想を持つてゐる者には、到底考へも及ばない事を彼等は考へてゐます。

私は彼等に所謂現代語としての理知、知性は望みません。

昨日の二時間目には、ひとり熱いものをまぶたに感じました。計算練習にしづまりかへつてゐる生徒の中に「お写真々々々」と真剣になつてさゝやく声。

わけも分らず「口をむすべ」と私の声。

それでも「お写真々々々」と真剣なる声。

「何だ」と問ひ正してみれば、——何と、特異児童・某が本のカバーに靖国神社御拝の御姿のある新聞紙を用ひてゐるではないか。私は泣きました。そして「お写真お写真」と言ひつゞけてゐた児に感謝しました。民族の栄光は実にかゝつて幼きものゝ魂にあります。純一なるものは児童だ。

兄への切なるお願ひ——宿望達成後は中等学生の国体観念を！ それには、まづ現実の、眼前のものを突破して下さい。

函嶺かんれいの麓より、離れ住む同信の友——共感の友——魂の友——永却の友——の宿望達成を神かけて祈りつゞけてゐます。（註 函嶺、箱根山）

「蝗取りの児童の詩」

田口誠一

びん／＼にげる 蝗がにげる

かしこい蝗は たやすくとれぬ

日本のお米は だいじなお米

蝗とるのは 一つのしごと

みんな元気で お国のために

こばから蝗をとつちまへ（註 こばから、片っ端から）

「とつちまへ」の語でも知れるやうに、この児の決断力には時々感心します。  
最も勇敢な児でせう（副級長）。

中島 努

くつきり晴れた 秋の日に

小川の水は さら／＼流れ

小川の岸では 蝗がはねる

蝗はねては 小川に落ちて

足を動かし 泳ぎだす

小さな体で ちやぶちやぶと

小川の水をあびてゐる

いなこの夏は秋なのか

真面目な実に真面目な児です。自分でした事が失敗すると泣く（女性的にあらず）児です。

その真面目さが、こまかい観察となつて表現され、そのかげに幼き魂の共通性を含ませてゐるのでせう。蝗の夏は秋なのか——ほゝえましいではないですか。

（昭和一六・一一・八）

足立原茂徳宛

（前略）この前の御手紙には、修身の時間に——手紙を手にしつゝ

5. 石 綿 一 郎

——とは恐縮でした。然し、皇軍武運長久の日参もお百度も、皆児童の純一なる行動です。私は思ひます。昭和のみ民に与へられた臨戦態勢を、かむながら神のまに／＼執りつゝある日本の一大使命の中にあつて、最も純一に行動してゐるのは児童ではないでせうかと。(後略)

貴兄がさぞお待ちして居られるだらう児童の詩を同封して置きました。何れも夏期に於ける自由作であります。(略)

柳 川 繁

おつかひの

かへり道

もう夕方

この道を

早くかへらうよ

むかうの方で

かな／＼と

さびしさうなこゑがする

夕方の田舎道の感傷です。この児の女性的な感傷をお笑ひ下さるな。何とこの児が相撲、鉄棒、ランニングの大選手であるとは。私もこの児の指導には、武人と詩人の綜合的人格に目標を置いてゐます。

誘蛾燈

興津守良

田んぼ道

誘蛾燈をつけに行く

ひとりで行く田んぼ道

夜つゆが光る

どこかで



5. 石 綿 一 郎

すゝ虫が鳴いて居る

稲がさわ／＼と風に鳴る

この児の詩情にはいつも芭蕉的なところがあります。この作がよいといふ程ではありません。いつもこのやうなよい作品を作ります。

初秋、田園の夜のしづけさを思ひ浮かべて下さい。そして田んぼの中に点ぜられてゐる誘蛾燈も思ひ浮かべて下さい。

(小さな声で静かな夜、読んで下さい。)

やかましいせみ

常 盤 時 吉

僕が勉強するではないか

やかましいせみだな

あんまりなくとつちまふぞ

またないてゐるな

やかましくて

勉強ができないぞ

これこそ真実の子供の心情です。詩題はかゝる所にもあると思ひます。  
夏期、吾々でも味はふ窓辺の一景です。  
真実の叫びを尊ぶ故この作をとりました。

夜の空

黒い空

星が出てゐる

「あ、」お月様が

かさをかぶつてゐる

明日も雨か

伏見 圭二郎

素朴な、原始的な、しかも童謡的なよい詩ではありませんか。唱歌の雨ふりお月様を思ひ出させるやうな作です。子供の真実の詩情です。

郷土の観察で指導した「天気予報の色々」（理科的）を、詩的にして表現したのを私は喜ぶのです。

理科は直観を尊ぶとか……。

（昭和一六・九）

昭和十七年～十九年——二十三歳～二十五歳——

天皇のしこの蒼生みたまと生享いのちうけて益良雄われの征く日ちかしも

白壁に防人の歌の短冊と絵姿かゝげて征く日待つも

生還は期しえぬ吾ぞ老いさきを真幸まさいくありませ父上母上

いやはての海にも征かむ男の子われ昭和の御代たひの新防人と

防人の血を享けつぎしあづま男が勇み征くべき時は来にけり

横須賀にて

あかね雲いまもしづかに流れゐて軍艦旗おろしのラッパひびくかふ  
岸ちかくきらきら光るさよなみは小さばの群を遊ばせにつゝ

南洋の地図に向ひてよめる一首

みんなみの地図に向へば雄ごころもおのづと湧きく黒潮のごと

吾子の乗る艦はいまだも横須賀に在泊はつるとおぼすかかの母刀とじ自は  
出撃は秘して来ぬれば母そばの便りに上陸の日を知らせよと

父母と妹のみの寄書よせがきを吾持ちて居り肌身はなさず

魂こもるこの寄書はこの胸にしかとしめつけ吾征でゆかむ

吾子よ征け心おきなく御戦にさきがけるべしとふ母のみ文や

妹に

はたち髪のかよわき妹にきかせむと吾が歌ひける「海のつはものの歌」  
なれこそは大和の乙女をみなぞ国内こくににありて護れよ美くはしこの国土くにつちを  
母そばも妹もまさきくあれませな吾は征くぞよはる過か聖戦みくさに

海に征くわれに食はせむと老いらくの祖母ばばよりとどきし川浸餅かはびたりもち

(船にのるものは食べるとよいといふ風習があり、祖母が砂糖もあまりないのにつくつてくださった時の一首)

空ゆかば神の靈火ひの火箭やとなり飛びていゆかむ大和丈夫

かたじけなな大みき聖戦いくさにいのちありてふたゝび玉のおん砂利を踏む  
天皇のすべたまふ国のつはものと召され征くぞよおろかなる吾も

天皇をみおやといたゞく蒼生たみわれらこぞりたちたり大みき御業わざに

ひさにして聴く六段の曲しらすべなり籬まがきの小菊おもひ出ださる

うす霜の庭に黄菊の咲く頃かやさしき妹の便りとゞきぬ

まづまづは父母まさきくありませと祈りてやまず伊豆の見え来て

おのが飲む水さへさきて盆栽にかける兵は楽しげに見ゆ

房総の山々とほくつらなりて巻積雲はひろごりやまず

あたらしき靴下はきしすがしさよ墓参休暇の許可書手にして

父の死に（註 昭和十七年十二月歿）

かさかさと風に落葉のなる頃にひとりさびしく先だちたまふ

土産にと買ひきしバラオの絵葉書ぞ見えますかこれこの絵葉書が

をりあらばこの地図ひらきて静かなる南の海の旅をなしませ  
一郎に食はせるのだと残しおきし五つの柿の熟れて赤しも  
日曜にはやさし父上のみ墓べにひとり暮さな歌をよみつゝ

亡き父

氷雨ひよめふる音はさびしもさらさらと亡き父上の靈魂たまをよぶがに  
やさしかる父なりしかもわが子にはその生きの身の死のきはまでも  
かるやかにひらきたまひし死の眼にも吾子の土産はうつりましけむ  
かるやかに眼ひらきて一郎の帰るを待ちぬしやさし父はも

波こえて幾千海里を征きゆくもわが亡き父をいかで忘れむ

相模嶺ねに雲ゐる冬のまひるどきなにを思はむ父亡きあととは

さくら咲く春べよかなしこのみ冬やさしき父はみまかりましき

老いらくの母とやさしき妹を残してふたたび征でたゝむとす  
この国に大君ましまし父母いましこの吾男子と生れ出でけり

横須賀を出でたちしよりいく日ぞも眼に映らふはたゞ波と雲と  
果てしなき波また波がいく日ぞよ島らしきものはさらに見えずして  
闇にまぎれたゞ必殺の氣に燃えてガダルカナルへひた進みゆく

天皇すめらみの一の御楯と召され来てはてしも知らぬ海原をゆく  
すでにしてサソリ座は真上にかゞやきぬおもへば遠く身は召され来し  
天皇の一の御楯と海原をおもへば遠く越えて来しかも

サイパン島の思ひ出

校門を入らむとすれば「コンニチハ コンニチハ」と兒等の愛らしき声  
色黒き島の兒等すめらみはも公学校に皇民と育ちつゝあり  
指さして問へばたくみに「タコの木」と日本語で答ふる島の兒等はも



日本語をたくみに使ふ島の児のひかる眸の愛らしきかな  
一生を島の教育に捧げむとあまたの教師こゝに集へる

過<sup>はら</sup>かなるソロモン攻撃のさきがけにわが艦ふたたびたち向かはむとす  
征<sup>か</sup>かむかな御艦とともに火<sup>ひ</sup>箭<sup>や</sup>となりソロモン諸島のたゞ一点に  
神たけび撃ちてし止まむと立ち向ふ御艦のみよしに水しぶきあがる

潮なりにまじりて聞えし銃声もしばし絶えけり暁ちかみかも

出撃の命<sup>めい</sup>令<sup>い</sup>うけてよりはや七日ペラホミンダの島影を見る

潜水艦を捜しもとめて僚艦ははや水平線にかくれそめたり

アリューシャン作戦より

ひさびさに阿<sup>あらいと</sup>頼<sup>と</sup>度<sup>と</sup>富士の姿みせて幌<sup>ばら</sup>筵<sup>しる</sup>海峽はひな曇りつゝ

(註 阿頼度島、千島列島東北端に在り。その南が幌筵島)

阿墨奴アムリカを撃てとつぶさに火の神が生まれたまへる阿頼度御島

(註 阿頼度島の東方はカムチャツカ半島)

阿頼度の大き神山曇らせて占守しめじまの瀬戸やみどり潮疾とき

(註 占守の瀬戸、同島とカムチャツカ半島との間の千島海峡を指すのであらう)

はろかなる蝦夷の山壁あざやかに染めて夕陽は落入りにけり

待ちまちし妹の便りはけふ着きぬうす薔薇色の封筒にして

妹より薔薇の押花とゞけども千島のはてはまたも吹雪来く

ソロモンの海に敵艦あたぶねくたくべくこゝに集へる第六駆逐隊

砲員みな電動機発動に打揃ひ白鉢巻をしめなほしたり

旗艦より吊光弾ははなたれぬ初弾の装填まつたかるとき(註 まつたかる、全く在る)

「よし俺が」と一言さけびし砲員長は旋回舵輪を握りしめにき(註 砲員長、砲操作兵の長)

照準孔が小さくかぎれる夜の海を吊光弾のひらめきやまず

突撃の火箭あがるや集中弾に三千丈の水柱たつ

いまでもぞ集中弾の水しぶきもろにかぶりてひた突き進む

天蓋にさだかに残れる旋回手の腹を射抜きし弾痕かこれ（註 振仮名は当時の読み方による）

「畜生ッ」と一言なれども旋回手のいまはのきはの言葉するどし

こゝにして旋回手はつひに戦死せり舵輪を固く握りしまゝに

明王のこの御神符の守護なるか天蓋はたと敵弾をとめき

われの師がたまひしこれの御神符は箱根権現身がはりの札

ただ一言「世話になった」と言ひのこし眠りたりしかあはれ砲員長

転舵するたびに頭を弾台にぶつけて覚めぬ艦かたむきて

即発の備へと自ら名づけたればせまきに耐へて寝るにたのしき

索敵の六日七夜を弾台の横に寝ねけりせまきに耐へて

揚弾機のコムかおのれの死場所と今朝も揚弾機に油をくれぬ

父よ母よ妹よさらばこよひこそ二十三にしてはつる吾なり（註 はつる、果つる）

二時間後の生命はすでにわかたねば揚弾機にもたれしばしまどろむ

すでにして死を決したるその夜さの夢に出できし父母のみ姿

六、米重政行



米重政行

大正十年、鹿児島市に生れる。旧制鹿児島第二中学校を経て、昭和十四年、旧制熊本高等工業学校採鉱冶金科に入学。在学中は学校総務、また、採鉱冶金科の応援団長としても活躍、学校当局にもまた学生間にも極めて信望が厚かった。

昭和十五年、「日本学生協会」の道統に連なりながら、「熊本高工同信会」を発足させ、学友との切磋琢磨、後輩の指導に情熱を注ぎ、後輩の敬愛を集めてゐた。その間、佐賀高校、山口高校また山口高商などの同じ道統に学ぶ「同信会」員との交流を深め、後輩への指導にいつそうの力を傾けた。

高等工業の卒業弁論大会に際し、原稿も持たずに登壇し『明治天皇御集』一巻を手にして、「国

家庭生活における愛と信」について、長時間の熱弁をふるつたこともあつた。彼の雄弁と応援団長としての独特のヒゲ面は、今なほ旧友の忘れ得ざる思ひ出となつてゐる。

十七年二月、久留米の陸軍戦車部隊に入隊。満洲国公主嶺で幹部候補生としての教育を受け、抜群の成績で卒業。原隊の教官として残るやう要請されたが、進んで前線の部隊に加はり、ビルマ戦線に参加。戦車第十四連隊本部連絡将校として、インパール作戦に従事した。十九年三月、マウル県ウイットクの英軍陣地攻撃に際し、左突入隊として攻撃命令を受け、同十七日、右突入隊との連絡に伝令二名とともに出発。敵の前進拠点を強行突破すべく近接するや、突如至近距離から機関銃と迫撃砲の集中砲火を浴び、その一弾が頭部を貫き、壮烈な戦死を遂げた。時に、数へ年二十四歳。

陸軍中尉。

池上明宛

(註 旧制佐賀高校生の同輩)

前略

小生十七日までは卒業試験と徴兵検査で

多忙を極めますので、九州巡遊は十八日から四日間、五日間の予定で挙行したいと思ひます。御言葉の通り、まづ十七日に佐賀に参りまして、充分冬の合宿に対する策をねつた上で巡遊したいと思ひます。戦によつて鍛へられたる性格が、どれ程みんなの心に訴へる事が出来るかを疑ひ、不安であります。神靈の御加護を信じて、己の全感情の激越なる表白をもつて、この度の重大使命を果したいと思ふのであります。今度の冬の合宿の成否が、一に自分の九州巡遊にかゝつて居るのを思ふと、あまりの重大任務に戦慄をすら覚えるのであります。力のかぎり、身ぬちの力の尽き果つるまで、必ず、此の度の私の全九州巡遊をもつて九州全体会議の光明たらしめんと覚悟して居ります。(後略)

(昭和一五・二二・二 鹿兒島)

熊本高工同信寮宛 諸君が外部に於ける「たゞかひ」に敗北感をもつ事が万一あつた場合には、諸君の確信の中に、祖国日本を礼拝し大君にまめやかにつかへまつらむとする信仰思想の消滅しつゝある事を、思はなくてはなりません。(昭和一七・一・七)

倉前義男宛 (註 熊本高工の後輩) 日本国体が万邦無比であると云ふ事は、日本国民がその精神的統一を求めて、世界人類のいかなる民族にもまして苦闘し来り、苦闘するといふことに外ならぬと信じます。キリストの——我と偕ならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は散らすなり——といふ悲痛な言葉も思ひ合はされるのであります。然し乍ら、我等の苦闘が、大みいつに摂取せられ国威の発揚となることを思へば、み民と生まれて之にすぎる喜びはなく、此に人類の理想は至極すると確信するのであります。「忠」とは、人類の求めてやまざる理想の実現せらるゝ意志精神に名附けられたもので



あります。

(昭和一七・一・九)

倉前義男宛 如何に我が国の国土が貧弱だからといって、我々がこの国土に生まれ  
た限りは、此の国土こそかけ代へのない祖国である。これに始めから敵意を持つものも  
なければ否認的態度をとるものもあるまい。経済だつて同様に、かけがへのない祖先か  
らの遺産であり、敵意や否認どころか、尊重と同情とをもつてこれをよりよくすること  
だけが、我々に課せられた課題であるべきはずだ。たま／＼日本と諸外国とに通じる資  
本主義なる共通の性格があるからといって、「日本の二千六百年の歴史の結果、あるが  
如くにある日本経済」に頭から敵意を持つと云ふのは、同じく国土といふ共通觀念があ  
るといふので、敵性国の国土と同様に我が国土に敵意をもつといふのと同じではないか。  
日本経済は、資本主義の名によつて否認的であるよりは、日本経済といふ名によつて日  
本人の愛護を受けなければならぬのだ。

日本人としての我々が経済を考へるときは、この歴史の結果として現れた日本の経済  
を如何にして導き如何によく改善するかと云ふことを相手とすべきであつて、計画経済

主義者が始めから否定的観念として規定してゐるところの「資本主義」に拘泥すべきではないと思ふ。日本人が近来、日本人としての従来考へ方をかへて、すべてが否定的な観念が先に来てゐるといふ事實は、国民精神崩壊の危機をもたらしものとして重視しなければならぬ。

(昭和一七・一・一五 鹿見島)

百武礼之外諸兄宛 (註 旧制佐賀高校生、前出) 近頃「連絡は生成、隔絶は死滅」なるをしみじみ味はふのであります。心知る友なき悲哀をかこつにつけても、連絡によつて、安逸と疲労との生活も「暁のこころ」によみがへるのを感じます。田所さん(註 日本学生協会理事長、田所広泰)の「五分の余暇があつたら葉書を書け、十分のひまがあつたら手紙をかけ。」の言葉も、新たなる感慨をもつて蘇つてくるのであります。

建武中興、明治維新の国民的覚醒は、志士の全国的連絡によつて進展したのである事は御承知の通りであります。吉野朝時代、宗良親王が、御生涯の大半を東国に送られ、御足跡を知りえぬ迄東奔西走したまひて民草の心を開発教化せられ、勤王の士を連絡統轄したまひし御心も、仰ぎかへりみしめらるゝのであります。

(昭和一七・一・一九 鹿見島)

熊本高工同信会宛 我らの志が強化すればする程、不可測な危難が思はざる時所に襲来するのであります。それは白だすき決死隊（註 日露戦争旅順攻略の決死隊）に加はるべしといふ勅命としてかしくみまつらねばならぬことであり、死所の来りたるを当人は実感すべきであります。そしてその時の到来を見誤らない事は、同志の配慮に依るのであります。

切腹を命ぜられた同志に、泰然自若の心がまへを備へしめ、涙をふるつて介錯するのが、時に臨んでの同志の心付けでなければならぬと存じます。幾度か死線を切り抜けて、しかも死線に多くの優秀な同志俊才を失ひつゝなしとげられた明治維新の実相を、異つた形に於て我々も切実に回想すべき時と存じます。死線を回避せぬといふ事は、事に當つて、忠義を以て日々の行動の価値基準として一貫するといふ事であり、親の具体的な心の動きの如きに心が動揺することは武士の名折れであり、ものゝふの資格すらない者と考へて行きたいと存じます。天命はいつ降るとも測り難く、ふりかゝる苦難を神のみ旨としてかしくみまつることは、何よりも心に銘じて行きませう。分離せしめられるときはいよ／＼出征の時、と考へて。

（昭和一七・一・一九 鹿児島）

小林国男宛（註 旧制佐賀高校生の友人）友よ、まだ見ぬ友よ。（中略）如何なる障害も、

如何なる権力迫害と雖も、兄等の性格を鍛へる以外の何物でもない事を、学校といはず日本国中に示してやるのだ。学校との徒らの対立は愚の骨頂なる事を考へ、対立の彼方に立つて、対抗し得ざる精神的學術的優位を確保せよ。

戦捷は合成威力の發揮に依るは論を俟たざる所なるも、合成威力はあくまで各自の心に把持する信念の問題なる事を思ふべきである。

（昭和一七・二・一二 久留米）

和多山昭三宛（註 和多山儀平―後出―の弟）（前略）我々日本国民の、大君を中心とする、魂の交流こそが、神洲の不滅を実証してゆくのであります。今や訓練（註 久留米部隊に在隊中）は猛烈を極めて居ります。

本年中には、日本歴史上いまだかつてなき危機を予想せしめらるゝ事態が到来するかも知れません。然し決して負けてはならない。勝たねばならぬ。今こそ、全国国民総戦死の決意もて立ちあがらねばならない時であります。本年こそ！ 皆様によろしく。

（昭和一七・二・一三 久留米）

筑紫を出で征くに当りて

懐良かねながの宮に詣でて久米くめの子が誓ひし願ひ消ゆる日あらめや（註 懐良の宮、八代宮）

久米の子の生命うけつぎみ祖おやらのみあと偲びつゝ筑紫をいでゆく

み祖らもかく思ひかく雄健をとけびつ筑紫野を大陸さしていゆきましゝか

久米の子のいのち受けつぎいや高く育ちて行けよ樛の木のかずく

われゆけど日向の国に友ら恋ひつゝたゝかふ君のみ姿忘れじ（註 久留米子備士官学校時代）

6. 米重政行

父の霊前に お父さん 濟みませんでした。今お父さんの御写真の前で此の便りを書いて居ります。お父さん お待ちになつた事でせうね。政行はまだ帰つて来ないか、まだか、と言ひながら死んで行かれた事を思ひますと政行は、はらわたをたちきられる様な思ひであります。天皇陛下に捧げた子故に、死ぬ迄、愛しい子供に危篤すら知らさず死んで行かれたお父さんより、お父さんの病氣すら知らず、子として親の死に目にする会へずこの電報を受取つた政行の方が、どれ位残念かわかりません。お父さん残念だつたでせうね。三人の子供の誰にもみとりされずに死んで行かれたのですもの。政行

も、お父さんの尊い汗の結晶で八月末には立派な見習士官。誰にも負けない将校になるのです。でも、ちつとも嬉しくありません。今日までの努力は、只、お父さんに政行の立派な姿を見て貰ふためだったのです。

(字がきたなくて済みません。よみにくいでせう。)

(昭和一七)

(妹宛のハガキから) 何れ兄さんも出征する事になるだらう。然し父のみ霊が護つて下さる事を思ふと、恐るゝものはない。

昭和十八年——二十三歳——

妹みどりに

愛かなしかる妹を恋ひつゝ大君の任まけのまに／＼吾は征くなり  
行き行けど忘るゝすべなく父母をひた偲びつゝ野山越え征く

祈健康勉強

妹の便りを貰ひて

吾なくば母をまもりて大君に仕へまつれよ兄に代りて  
明日知れぬ吾をも兄と慕ひ寄る吾が妹見れば悲しかりけり  
征く吾に雄々しくあれと只祈る妹ありと思へば何かおそれむ  
斃れても霊鬼となりて日の本を護らむ願ひ吾忘れめや

陣中に母を偲ぶ

たらちねの母のはぐくみ偲びては泣かじとすれど涙こぼるゝ

大君に生命捧げし身なれども吾が父母は忘れせぬかも

身はたとひさかりてあれど母を恋ふわが魂は母のみ胸に（註 さかる、離る）  
うつせみの世の悲しみにたへつゝも生きむとぞ思ふますらをなれば

一日、なでしこと覚しき花、咲けるを見て

たゝかひに傷つき倒れしますらをの床べに香れますのなでしこ（註 満洲<sup>ま+</sup>）



夕置きて朝は消ゆる露の身にせめては香れますのなでしこ  
闇の夜の行く先知らぬ吾に似てあはれもよほすますのなでしこ  
いたづきに悩める吾を慰むるますのなでしこ花散るなゆめ

病床に君を偲ぶ（註 君、和多山儀平）

病床に君を恋ひては御名を呼び呼びては涙あゝまた涙が

君を呼ぶ我が声とどけ火の国にたゝかひいます君のみ許に（註 火の国、熊本県）

いたづきの身の苦しみにたへつゝも生きむとぞ思ふますらをなれば

おろかなる吾をも友とめづ君が情し忘れせぬかも（註 めづ、賞づ）

身はたとひさかりてあれどますらをの行くちふ道を共にすゝまむ（註 ちふ、といふ）

私の負傷は左指三本で訓練には差支へません。一ヶ月の予定です。苦しいとき、悲しい時、君らの事のみ浮かびきます。たより下さい。十月卒業の予定。

首藤雅也兄に（註 旧制宮崎高農生の友人）

友どちらにはげまされつゝ外国にたゝかふ我は力湧きくも



ますらをが誓ひし願ひ一すぢにつらぬきゆかむ生命死ぬまで  
君しのぶ心よかよへ日向路ひうがぢにたゝかひいます君のみもとに

首藤雅也兄に

懐かしき君のみ便りよみゆけばみ姿うつしく浮かびくるかな  
戦車兵に合格せりとのみたよりに心躍りぬ会ふ日をまちて  
このよろこびこの感激を胸にひめて雄々しくゆきませ大君のへに  
たゝかひて生命のかぎりたゝかひて斃れてやむべしますらをわれらは

妹に（在ビルマ陣中日誌から）

今日今日と吾の帰りを臥し床にいか待ちけむと思ふだに悲し  
うつし絵を見つめてあれば父は猶生きてあるかに思へてならず  
人の世を正しく歩けと告げましゝ御言葉まもり吾生きゆかむ  
如何ならむ道をゆくとも亡き父のみ霊と共に吾はゆくなり

新聞紙上に、戦死せる吾子の帰りを待ち侘びてありし母の悲劇的手記を読み、

家の事思ひ出されてならず

言葉には死んで帰れと励ませど心は泣きて吾を送り給ひし  
黒髪の少くなりしみ姿を偲べば涙流れてやまずも

たよるべき父なき家を母上と二人で留守する妹いとほし

### 和多山儀平、智子宛

死を以て君に報ゆる外になきますらをのこのゆくてふ道は

同信寮より贈られた日の丸は常に私と共にあります。

とくゆきて生命の限りたゞかへと友が贈りし日の丸かこれ

矢叫びの最中にいのち消ゆるとも怖れず進まむこれが御旗と

大丈夫ますらをのかなしき心なぐさむる久米のなでしこ花散るなめ

御両親様へくれぐれも宜しく(註 ビルマから)

〇〇〇〇に皇軍進撃の跡を弔ひて驀進、戦闘意志燃えあがり意気軒昂たり 於ビルマ

さきがけて花とちりにしますらをのあととぶらひつひたすゝみゆく  
ものゝふはかくこそあれとみいくさの真先すゝみてたふれし兵はも  
たまきはるいのちのかぎり身を砕き心くだきつ進まむ吾は

仏印、マレー、ビルマと各地に足跡を残して参りましたが、日本世界政策と言つても、日本国民の一人々々が如何に天皇親政の尊厳性またその唯一原理にめざめてゐるかに帰着すると思ひます。魂の底よりゆり動かされたもののみがよく祖国防護の第一線にたちうるのであります。

(月刊『新指導者』昭和一八年六月号)

昭和十九年——二十四歳——

母宛 任官手当です(四〇〇円)。

正月の間に合はなかつたのは残念ですが自由にお使ひ下さい。祖国の為死ぬのは本望ですが、死ぬまで何の御恩返しが出来なかつたのが心遣りです。みどり(註 唯一人の妹)に

宜しく。

(昭和一九年三月、ビルマから最後の便り)

七、  
加藤信克



加藤信克

(仙台)を訪ねて深い感銘を受け、間もなく入寮、研鑽に励んだ。

昭和十八年九月、学業を終へ、陸軍軍医として入隊。東京牛込の陸軍軍医学校に入校した。或日路上で、三カ月余の憲兵隊留置生活から解放され、近くに新居を構へてみた小田村寅二郎先輩に偶会。同氏のすゝめにより小田村家に止宿、出陣までの間教導を受けた。出陣に際し小田村氏に聖徳

大正八年、父五六、母すめの長男として新潟市に生れる。五歳の時、父転勤のため仙台に移住。

旧制仙台第一中学校を経て、昭和十五年、旧制第二高等学校(理科)を卒業。直ちに東北帝国大学医学部に進む。大学一年の時、柔道を通じて知友であった旧制水戸高校出身の斎藤高明氏と共に、「日本学生協会」の道統に連なる「東北正大寮」

太子の十七条憲法の揮毫を求め、その全文を墨書した絹布を、死ぬまで肌身を離さないといつて、腹に巻いて出征した。

彼は求道心の熾烈な反面、ユーモアをも解した。それは次のような詩作（昭和十八年八月作）にも窺ふことができる。

雨をたまへよ 篠しのつく雨を やんさのえ 稲が枯れるよ 龍神さん

水汲み掛けるを いとひはせねど せめて七分も穫れるまで（註 七分、七分作）

彼にとつて人生の道とは、随所に己れを生きしめることであり、決して皆みなごとを決する態ぶいのもではなかつた。派手にふるまふことをしないでだけに、彼に接する人にゆたかなぬくもりを感じしめた。小田村氏によれば、軍医学校在学中、その勉強はきびしいもののやうであつたが、試験の前日といふのに、同期生であつた朝鮮出身の学生の求めを快くうけて止宿先に伴ひ、夜遅くまでいっしょに勉強してゐたといふことである。

所属部隊はフィリピンの戦線にあつた。米軍の反攻が激しくなつた昭和二十年六月十一日、ルソン島オリオン岬の激戦に際し、部隊長がマラリアに冒されて発熱し、担架輸送も困難になつたため、その看護のため兵二名とともに残留し、部隊との連絡が絶えた。軍は戦死と認定。時に数へ年二十七歳。陸軍軍医中佐。

昭和十六年——二十三歳——

靖国神社大祭の日に

玉砂利をふみしめたまひかしくも魂たままつりますか今日のよき日に

大君と心一つに国民も魂まつりする今日のよき日よ

国の為命捨てにしますらをのみたまいまこそよみがへりますか

我も又みあとをしたひ大君のしこのみたてと今いでたつも

戦闘の意力みねも身内に満ち溢れ共にゆかむと心にちかひぬ

屋上より夕日の沈むをみて

紅くれなるにたなびく雲のあひだより燃ゆるが如く夕日さすなり

美しと思ふも早くくれなるの雲間に沈む春日なるかな

兵營にて

久方の雲はれゆきて遙かにも高く星空仰ぐ夜半よはかな

長雨も晴れてしづけき舎後の道家鳩しげく餌をあさるなり（註 舎後、兵舎の裏）

車中にて

長雨も晴れて照る日に田も畠も緑に息吹くをみればうれしも

天地に朝もや深く立ちこめて町ゆく人かげさだかならずも

夜汽車にて母校のあたりを通りて

五年を此の学び舎に過しと暗闇すかしみるもなつかし

同胞の御心偲びて

同胞の厚き御心背に負ひて出で立つ我はさきくもあるか

（以上「靖国神社大祭の日に」以下、『地熱』第二卷第四号）

## 現代医学批判とその総合学術的再建

——アレキシス・カレルの「人間」を読みて——（論文）

ルネッサンスは神学の奴隷たりし科学を解放したと云はれるのであるが、再び科学は



直ちに理性迷信の學術的誤謬の奴隸に墮してしまつたのであり、此の迷信はその後一世紀を経た現代もなほ根強く学界を支配して居るのであり、医学も亦その埒内に在る。而して又「人間の知力が富と快楽を齎した成功に圧倒されて、当然道徳的精神的価値は下落した。理屈が信仰を一掃して了つた。」之が、現在帝国が思想混乱の中に徒らに呻吟を続け、当局者をして支那事変解決の曙光すら見えぬといはしめた根本原因である。而も、国内思想統一が支那事変解決の根本方途なるに拘らず、次代を背負ふ枢要の人材を養成すべき高等学校大学に於ける教育は、我々に確固たる人生観上の確信を与へようとしてゐるのであるうか。人生観なき知識、人生観なき学問、それらあり得べからざるものが横行してゐるのである。それらは所詮水面に浮ぶ浮草に過ぎない。我々は理化学的体系でも法則でもないのに、物理や化学や力学や哲学に属する概念や原則が我々にあてはめられようとしてゐるのであり、殆んど圧殺されんばかりである。正に理性迷信の科学が試みた現代教育が無批判の儘に輸入せられ、帝国の生命を断たむとしてゐる。更に現代医学は我々の心身の完全な活動から来る自由と喜びとを与へたであらうか。成る程現代医学の進歩により伝染病で死ぬ人は少くなつたが、「我々は昔の人と同様に慢性腎

炎、黴毒、腦溢血、高血圧及び之等の病が招く知能と道德感と生理的機能の減退などといふ不幸の爆撃下にさらされてゐる。神経中枢の病氣に至つては無数である。病氣は少しも減つては居ない。病氣の種類が變つただけである。」病時に於ても健康時に於ける如く肉体と精神とは分離する事は出来ないのである。而も医学は今猶其の自然科学的理性迷信の、人間を直接取扱ひながら人間に直接し得ぬ研究方法を続けてゐるのである。或る医学者は云ふ「動かさうと思へば手足は動く。無形のものより手足が動く」と云ふ有形のものは生じない。故に精神は物だらう。」と成る程神経的心理的活動は大脳細胞の解剖学的状態と同時に、内分泌腺や組織から血液中に送り出される化学的物質に關係してゐるであらう。然しそれら化学的物質が発見されてもそれは我々に精神の完全なる活動の喜びを与へ得ないのである。重要な事は神経的心理的活動がそれら化学的物質に依存するよりは、我々自身の精神状態に本質的に依存してゐる事である。内分泌腺や組織の機能さへ我々自身の精神状態に依存してゐるのである。要するに医学が此の儘の道を如何に進まうとも、我々の精神と肉体との劣悪化を防ぐ事は出来ない。

現代文明の進歩と共に我々は退化し衰へてゆくのである。カレルはいふ「夫等は吾々

の本質を全く知らずになされたからである。」と。正に我々自身と我々の経済的社会的環境の改造がなされるべきであり、今直ちに我々自身に就いてあらゆる方面より分析的総合的研究が専門分科に於て正しき研究方法のもとになされねばならぬ。カレルは「経験する事が出来ない様なものに就いての概念は無意味である。」といふブリツヂマンの实地概念のもとに、二十五ヶ年の献身的努力により人間の科学—解剖学、生理学、化学、物理学、心理学、病理学、医学、実験遺伝学、食物化学、教育学、美学、倫理学、宗教、国民経済学、理学—を一身に修めた人格の成就せらるべきを説き、斯くして我々自身並びに現代文明の改造のなされるべきを説くのであるが、此のカレルの意志を徹底的に実現する事は、個人能力の及び難き所であり同信協力の協同研究による他はない。同一の人生観に基く確信に燃える同信諸友により、山鹿素行の格物致知の研究方法のもとに人間の科学は研究せらるべく、かくて分析的研究は同時に総合的研究となり得るのである。格物致知の研究方法は飽く迄現実実に密着して学問の研究せらるべきを要請する。従つて、自然科学に於ては研究主体たる「人」の精神作用を客観的研究対象に投影したり移入したりせず、対象そのものゝ性質を研究する研究方法となり、精神科学に於

ては研究主体たる「人」の心理を研究対象に投影しつゝ研究して行く研究方法となるのである。医学は自然科学と精神科学との中間的科学であり、人間を取り上げる総べての科学の中で、自然科学精神科学の両分野にわたる最も包括性大なるものなるが故に、人間の科学の特異的存在として他の密接なる提携の下に従来の理性迷信の研究態度を脱却し、文明に於ける従属的地位より指導的地位へ大きく開展すべきである。なすべき事は多く力は少い。友よ来れ。

〔地熱〕二一三、昭和一六・五・二二

昭和十七年 — 二十四歳 —

をりにふれて

すなほなる幼心を一すぢに守りて生きむと友よ思はずや〔櫻の木集〕

夜久大兄にかへし

つたなかる我等の歌を読み給ひ我忘れつもとみ歌給ふも〔櫻の木集〕

昭和十八年——二十五歳——

ゆたかにも心みがゝむ来む秋は召めしに出で立つ我にしあれば（二月三日）

久方のますみの空に澄む月を仰げば心すむ心地する（二月八日）

愛らしき幼子二人まなびやにいそぐ姿のうるはしきかな（三月九日）

幕前にて

はらからの厚き情によりてえし太刀の光をそへで止むべき（四月二日）

ゆくすゑは見えずなりけり一すぢにますぐにのぼるとみえし煙も（五月二日）

病む人をあはれと思ふ心より医はなり出でしものにあらずや（五月二四日）

アツツ島を米軍攻略すとの報をきゝて（五月三〇日）

悲しかる決意さだめし隊長のみ心憊せば涙こぼるゝ

湊川の決戦思ほゆ寡勢よく敵に切りこみ給ひしときくに  
いつの日かアツツの島に再びも御稜威輝く日を祈りつゝ

たのしきは一日のつとめ終へはてゝゆあみしつゝも歌うたふとき

雨や雨大雨やーと田人らたびとと共に叫びしとふ友のみたより（以下二首七月二〇日）  
大君は年の初にゆたかなるみのり続けと祈りましゝを

町々に雨乞ふ人の声溢るゝを見て（七月二日）

にぶき陽の一日さしつゝ今日も又過ぎむとするか雨降らずして  
木々の葉をにぶく照らして蒸暑く雲低くたれし二日は過ぎぬ  
いたづらに木々の緑は目にしみて雨なくすぎしこゝだの日数よ

降り出でし雨の音、軒に心地良く（七月二日）

木々の青葉はゝゑむ如くそよかぜに揺ぎて軒に雨の音する  
如何ならむ管絃の音も軒をうつ此の音にしくはあらじと思ふ  
降るからは篠つく如くふりふりて民の憂をはらせと思ふ

まなかひにかゝりて未だ忘らえず我を思ふと言ひし少女は（七月二三日）

ガダルカナル島にて戦死せる将兵のみたまは午前九時仙台駅につき給ふ（七月二三日）

慰霊の樂は 国民の祈りをあつめて 敵かにみ空にひびく

現津神我が大君は 五十鈴川流れも清き さく鈴の五十鈴の宮に 御身もて 此の国  
難に代らむと 祈らせ給ふ かしこさに涙溢れつ 相擁し 敵撃滅を誓ひしとふ勇士  
のみたま 送葬の喇叭と共に み民我等 をろがみ奉る前を今過ぎさせ給ふ  
勇士のみたまは 白木の柩捧げもつ戦友の胸に 奉迎の民の胸に 南海の弧島に寄す  
る大波はさゞなみなし さゞなみは大波なしてぞ通ふ あゝみ民我等 諸共に めし  
ひたるえみしことごと そねめつなぎて撃ちてし止まむと 我が大君に誓ひ奉らむ



ああ

せゝらぎの音のみすなりひろせがは訪ねしかじかの音はきかずして

(註 仙台・青葉城下の広瀬川。以下六首八月五日)

河床の起伏のまにま流れ行く瀬の音清く澄みわたるなり

せゝらぎの音をきくからに打ちつれてかじかを聞きし友の偲ばる

をちこちに別れ住みても寮を思ふ友の心はいやまさりつゝ

日の本の絶えせぬ限りみちのくに集ふ心のいかでたゆべき

雨をたまへよ　しのつく雨を　やんさのえ　稲が枯れるよ　竜神さん　水汲みかける

をいとひはせねど　せめて七分もとれるまで

十三日より五日間募参

ふるさとの野山の緑目にしむる初秋の日をみたまと共に

一日生きなばよき事一つなすべしと語り給ひし事の思ほゆ



人の為つくし給ひしみ心をしをりと仰ぎ生くべし我は  
初秋のみどりいやこきふる里の小川の音のなつかしきかな

### 外宮参拝

十二日夜宇治山田着、人の情で宿を得たり。十三日朝齋藤高明・本間繁太郎両兄（註 共に東北正大寮生たりし東北帝大並に同医専の同輩）とともに参拝。

### 明治天皇御製 をりにふれて

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな（明治三十八年）

白木しろきのみ鳥居はみ空にそびえ

無限の力を 宇宙に放射す

み祖おやの神たちありましゝ日の如ごと

しげり合ふ木々の緑 映し流るゝ清き流れ

### 明治天皇御製 水石契久

さゞれ石の巖とならむ末までも五十鈴の川の水はにごらじ（明治二十二年）

絶ゆる事なく 流れて止まぬ

清き流れを渡りてゆけば み民の心は

現つともなく

天照らす神のみ光に吸収せらる

神風の伊勢の宮居の

宮柱太しき立てし古ゆ

清き流れに

みそぎせしみ祖等偲び

今の大御代に生くる御民等諸共に

その同じき流れを汲みて

手洗ひ 口滌すすぎ

大神に詣でんとするみ民の心は

おごそかに なごやかに

はれゆく思ひ

歩むともなく 引かるゝ如く

大神のみ前に参る

しげり合ひ み空に聳ゆる木々

幾年へたる

神気を湛へ 道ゆく民の心と共に

形成す宇宙日本

明治天皇御製 社頭杉

しげりあふ杉の林をかこひにてちりにけがれぬ神のひろまへ（明治三十八年）

同 神社

いにしへの姿のまゝにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける（明治四十五年）

あゝみ民等は今

大神の大御社のみ前にあり

白木のみ社

白木の神垣

そをめぐる木々の　したゝる緑

大御光は　天地をつらぬきとほり

八方に放射す

かしこきかな　みもたなしらず

拝み奉る

生もなく死もなく

身も心もあらなく　たゞあるは

神国日本

ただあるは神国日本

神国の玉砂利のその一つとだになりて砕けん大君の為

斎藤兄離仙（九月二〇日）

一

兄を送る人々あまた集へる中に  
我等は

送り送らるゝものみな一つ心に

『神州不滅』をうたひ

そを確信し

『進めこのみち』をうたひ

そを誓ひぬ

送る我等の数は少く

我等の歌声はともすれば

周囲の騒音に掻き消たれしかど

君のみうた周囲の騒音に

かつ聞えかつ消えつゝ

君がみ心ひたに迫りく

我等が胸に

君がみ歌に答へまつりて

我等は共にうたひ奉りぬ

聖武天皇の大御歌

「大夫まさらおの行くちふ道ぞおほろかに思ひてゆくな大夫の伴」

周囲の騒音忽ち消えて

我等の歌ごゑ天地にしみ入る如し

斎藤兄萬歳

斎藤兄萬歳

斎藤兄萬歳

三

誠をこめて寮を守りし君

今我等と涙をふるつて別る

あゝ誠心のきづなは切れず

と確信するが故に

去りゆく君を思ひ

つながれし我等の心は

見えずなりても

今み前にいますと感じ

頭たるれば

滂沱と溢るゝ涙

止めんすべなし

四

人影稀なる

プラットホームの端に立ち  
去り行く君のみ名を呼べば

「たのむぞ」と一言

此の言葉ぞ

三年のちぎりこめたる

此の言葉ぞ

我は忘れじ

五

み友等と共に帰るさ

溢れ来る涙ふきあへず



去り行きし君のみ心偲へば  
颯々と吹く風

雨雲たれしみ空の下

我等は共感す

寮は亡びず

我等は確信す

寮は亡びず

六

み友等と寮につどへば

み友等の兄を偲ぶ思ひ

一つとなりて

兄が食事の時に語りし

寮は亡びずとふ

み言葉

現しくなりぬ

己知る友の言葉をしるべにて命すぎなむ大君のため

夜もすがらなき明かすかや庭の面の葉末にすだくあはれ虫の音  
なく虫のこゑを分けゆく心地して車の中に君は征くらむ

(九月二〇日)

秋の夜の虫の音に

ながあめの音は軒端にたえせぬにいづこの石のかげになくらむ  
なきかはす友はなけれどあやにくにはれぬながあめにぬれてしきなく

大崎八幡神社参拝の折に

あいらしとのみ思ふかなわらはべの雨をいとほまなびやにゆく

入隊を前にして(九月二七日)

大君のみことのまにまいでたゝん幸に胸内うちふるふかな

夜久正雄宛 (註「吉田房雄」二二三ページ参照) 十月五日入隊致しました。出発に際し

大兄より送られたみうた、友らのみうたと共に誦し力を得て居ります。

昨日、隊の護国神社参拝に参加しました。楓隊に数名同輩が居りますが参加は自分だけでした。

ほのぼのと裾野けぶりてうすぐもるみ空に聳ゆ富士の高嶺は

霊祭る昔の手ぶりおごそかに行ふ時し君の偲ばゆ

(昭和一八・一〇・二〇)

倉前義雄宛 (註 熊本高工生の友人) 其の後いかゞおくらしですか、大部元気を回復

された事と存じます。軍隊は大きな同信団体でなければならぬといふ事を痛感せしめられると共に、対照強化的に我々の寮生活の国家的重要性を痛感せしめられ、しきしまの道により生くる感激を友らにつたへゆくべしと決意せしめられてゐます。今宵兄よりい

ただいたみうたを誦し

なつかしと筆をとっては床にありて友偲ぶらむ君を思へり

ゆつくり養生し、速に元気を回復し給へ。では又。

(昭和一八・一一 静岡中部第三部隊)

夜久正雄宛 御手紙拜見。青年教育に専念せらるゝ由、全く大切の事と思ひます。仙台の寮も今高橋、大竹君中心となり、懸命にやつて居ります。大兄の創業を無にせざらん為、常に念頭に浮ぶは寮の事であります。秋季演習があり、静岡より名古屋迄東海道をてく／＼と歩きます。自分達は岡崎迄で帰りました。軍旗を中心にどん／＼歩きました。

快き涙溢るゝ一時は軍旗に捧銃さしげつゝをする時

たをやめもおぼえて咲ける花みれば

しばしは足のいたみも忘れ

此の一足此の一足に力をこめ

大丈夫はゆく今日のよき日を（二月三日）

いすゞ川清き流れを思ひてはたゞに歩きぬ汗をふきつゝ

おのづからみ空仰がれ足かるし友と参りし宮を偲べば（昭和一八・一一・七 静岡中部第三部隊）

倉前義雄宛 海なりに祖国の生命の脈動を感じ給ふみ心有難く拜見。其の後御身体

具合次第に快方にむかはれて居ると思ひます。昨日久能山、三保方面へ行軍しましたが磯辺によせる波のすがたに、たゆむことなかれとふ自然の教訓を感じました。久能山には東照宮があります。家康の靈に詣づる気はせぬが、千百五十九段の階段を登り、山上より駿河湾を望見する気持は友等と共にあらばいかばかり楽しからましと思はれます。軍隊へ軍隊へと学生の気はむいて居りますが、飽迄も個人生活を内に支へる祖国生命の感得なくしては完勝を期し得ないと思ふ。では又。(昭和一八・一一・二二 静岡中部第三部隊)

夜久正雄宛 田所大兄はじめ諸大兄その後如何おくらしですか。夜久大兄には御体の具合いかゞですか。自分はあと十日もすれば軍医学校入校の為上京致します。諸大兄にあふ事を思ふと心をどる思ひです。先日南方戦歿者の部隊葬がありました。

ますらをの靈の荒るゝかたま祭る日はうすぐもり南風ふく

砂をまく南の風はますらをのあらぶる靈の舞ふとこそ思へ

いでたちし日のみすがたも偲ばれぬ之ぞみ霊と柩抱けば

ますらをのたまよやすかれ国民はたゞに続かんと祈りてあれば  
しこばらにうちたふされし君が仇うたで止むべき我等ともども

(昭和一八・二二・四 静岡中部第三部隊)

昭和十九年——二十六歳——

昭和十九年元旦

みちのくの野山は枯れて雪雲は低くたれつゝ年たちにけり  
国の為いのち捧げし大丈夫のたま安かれとひた祈るなり  
しきしまの道ふみ分けむ世の中のだしごとには心うつさで  
あさ緑すみわたりたる大空を榮さかゆく国のしるしとぞ思ふ  
世の人に勝る力はあらずとも心のかぎりつとめ尽さん

雨雲霽れて(三月八日)

はたゝがみ鳴りひゞくかとみてし間に光さやけく夕月の照る

母上に（四月二〇日）

咲くもあり散りゆくもありふと目には花の盛りと思ふ頃にも

夜久正雄宛 永らく御無沙汰失礼致しました。六月一日を期し小田村さんの御宅に参り厄介になる事に決しました。秋野兄の居た室です。三月、四月、五月と仙台から友が屢々来られ、東北正大寮を何とか守りたきものと努め来り、現在法文の一年が三名居るのみとなつて居りますが、懸命に求道致し居ります。五月中は半島出身の少尉で石山といふ同級生と同宿、同信生活を展開。しきしまの道を求むる友をえし事を喜び居ります。一昨日学校の帰途何時になく本屋に立寄りし所、大兄の新著あり「縁ありしなり」と二部求め、一部を石山に贈りました。「分るとも共にふまなむ武士のよりて生くべき敷島の道」と巻末に記しました。

み友等の上偲ばるゝ春の夜の庭木にかゝる月をし仰げば

（昭和一九年 東京軍医学校時代）

楽しきは野山かけりてしこばらをうちてし止まむ術学ぶ時（以下三首、五月一四日）

苦しきは「まづい」と知りし我が案に通らぬ理屈のべたてる時

何となく物足りなきは我が案げんあんと略々ぼぼ一致せる時

(註 原案、戦術などの問題に対し、最も妥当として採用された結論をいう軍隊用語)

なげやなけ山ほとゝぎす北国に戦ふ友を偲ぶよすがと (以下二首、五月二〇日)  
ほとゝぎすなく音をきけば北国に戦ふ友の偲ばるゝかな

石川曹長船団護衛の為、魚雷に体当りの報道を聞きて (六月四日)

ふねまもるつとめ果すといやはてに魚雷めがけて散りし君はも

おろかなる身も君偲びものゝふのかぐみと仰ぎ戦ひ進まむ

大君の御聞おとよんに達すときくからに君がみたまも和なごみますらん

ちりほこり洗ひ流すとはたゝがみ鳴りひゞきつゝ夕立のふる (以下二首、六月六日)

大君のいます都のちりあくた流すと降れやこれの夕立



大詔奉戴日

(六月八日)

友と共に夜更けて

宮城に参拝す

馬場先門の前の広場を

ひかるゝ如く玉砂利踏みつゝ

進みて行けば

国民の上は如何にと御軫念あらせ給ふ

大御心のたゞ有難く感ぜしめられ

初夏の風颯々と吹き渡れば

みいくさに戦ひ斃れし丈夫のみ霊の

尚皇城を護り給ふかと思はる

眼をとぢ心しづかに

陸海軍軍人に賜はりたる勅諭を誦し奉りぬ

「朕は汝等を股肱と頼み」との

大御言葉のおほけなきかな

誦し終り眼開けば大内山は

夜のしよまにとざされ

おごそかに万世もうごくことなく

静まりまし 無限の力を

宇宙に放射す

み民我等身も心もあらなく

暫し立ち尽し

去る事能はず

二重橋のみあかしあか／＼と

(註 みあかし、御灯)

照り輝き

大御心の安らけく

ましまさむ日を

み民我等諸共にひたのぞみつゝ

かけゆかむ戦列へ

はやかけゆかむ戦列へ

七月十二日 長内兄へ（註 共に正大寮生たりし仙台高工生の友人、昭和十七年入隊、当時満洲の航空

隊にあり。義弟）

うつしゑに君が苦斗を偲びては出でたつ秋をたゞにまつなり

木々の緑風にそよげばさや／＼にみ友の上のたゞに偲ばゆ

大海の底ゆく艦にのり出でし友偲びつゝ君もいまさむ（註 潜水艦に乗ったのは斎藤高明）

今の世は仇なす仇をくだくべき男心オモココロ歌ひかはし進まむ

七月十四日 八月十日卒業との事副官殿より布告せらる。御府ぎよふ拝観の件質問せしに同

輩の笑ふあり。数十名なり。何事ぞ口惜しき限也。危く「馬鹿者奴」と叫ばんとせり。

御府の何たるかを弁へぬ者が何の将校ぞ。

(註) 御府、聖慮によつて設けられた戦歿者記念館で、氏名・写真・記念品などを収め、陛下は時々親しく之を訪ねて當時を偲ばせ給ふ。振天府ハ日清戦争・台湾征討関係、懷遠府ハ北清事变関係、建安府ハ日露戦争関係、惇明府ハ日独戦争・シベリヤ出兵関係、顯忠府ハ濟南事变・滿洲事变・上海事变関係、その他の(総称)

七月十七日 母上に便りす。本日で戦闘演習無事終へて来月四日より約五日間募参休暇ある由を知らせ、東西南北何れへゆくにしても必要な禪数本を取揃への程を依頼す。

出立たむ日は近づきぬ一日一日心の限り尽し生きなむ

はらからはまめにいませば出で立たむ心はいよゝ爽やかにして

七月二十日 サイパン玉砕の報に肅然襟を正し、泣いて正しき者の勝利を祈れり。今

上陛下の御製を拝誦し奉り、新しき世の開展しゆくことを祈念。

大御歌誦し奉れば胸底ゆ我生くらくの思ひ湧きくも

皇国の道はたえせじみ民我等たゞ国護ると征きて死すとも

はからずも我が門出をはげますと夢に入りにし君をしぞ思ふ

国の為生命捧げし大丈夫の靈のなげきかきみだれのふる  
大丈夫の靈なぐさめむ道はたゞ君をあがめて仇あだはらふのみ  
八重やへむら葎茂れる草の一本を咲く花よりもあはれとぞ思ふ  
もろともに心こゝろ協あはせて此の国を護らむ願ねがひ胸内に燃ゆ

八月十九日

愈南方に向ひ離京するに際し

国思ふ心に二つなけれども父母偲おもへば涙溢るゝ

本朝小田村さん、秋野兄、石山少尉と明治神宮に参拝致し、次の歌を献進  
み友らと朝参りする神園のいでたちの日はすがしきろかも

八月二十四日（台北から）

益々元気です『飯食へばねるばかりなり……』御判読を 又南下  
御健康を祈る



八、  
和<sup>わ</sup>  
多<sup>だ</sup>  
山<sup>やま</sup>  
儀<sup>ぎ</sup>  
平<sup>へい</sup>



和多山儀平

大正十二年一月五日、八代市に生れる。昭和十年四月、旧制八代中学校に入学。十六年四月、旧制熊本高等工業学校採鉱冶金科に入学。十七年一月、八代市の宗覚寺で行はれた合宿（註「日本学生協会」主催）に参加。合宿後、市内の代陽小学校講堂で行はれた「全九州興亜学生講演会」で最初に登壇、「八代市と勤皇の伝統」と題して演説。その後、九州地区で行はれた合宿や連絡会議に常に出席。元気潑刺として、一見豪放磊落に見えたが、彼の数多くの和歌、ことに自然を詠んだ歌に見られるやうに、微妙繊細な一面を持つてゐた。

十八年九月、熊本高工卒業と同時に海軍予備学生として土浦航空隊に入隊。選ばれて新入予備学生の教官となる。十九年一月、学生運動の先輩にあたる寺尾博之（前出）が、大竹海兵团から和多

山教官のもとに転入してきた。ある日和多山教官は、寺尾に対して情容赦のないビンタを喰はした。寺尾はそのことを「うれしかつた」と告白し、二人の友情はさらに深まつていった。同年九月、第九三一航空隊（大分県佐伯市）に転出。十一月三日、家族が面会に行つた時「二十日を過ぎても連絡がなかつたら、戦死したものと思つてくれ」と言残し、軍艦「神鷹」（大型商船改造の特設航空母艦）に乗り組んだのである。その年の六月にはサイパン島が陥落し、軍需品積載の船団が次々と撃沈されていった。わが軍はその頽勢を盛りかへすべく、対潜航空機を塔載した空母の投入を計画した。彼はこの時進んで「神鷹」に乗り組んだのである。このことについて一つのエピソードがある。それは、彼と同期の某少尉が乗組む順になつてゐたが、彼は「君は一人息子だ。自分には弟も多い」と自ら志望して出たといふことである。

この「神鷹」について、『大東亜戦争戦史叢書』第四十五巻に次の記述がある。『「神鷹」は「ヒ八一八船団」を護衛して門司を出発し、シンガポールに向け航行中、十一月十七日済州島西方海面で敵潜の雷撃を受け沈没した」と。乗組員中、駆逐艦に救助された者はわづかに十五、六名であつたといふ。沈んだのは真夜中で冷氣厳しく、救助作業もまゝならなかつたやうである。「和多山少尉は、海中を何かにつかまつて流されながら、戦友を励ますやうに元気な歌声を響かせてゐた」といふ生存者の証言がある。時に数へ年二十二歳。海軍中尉。



昭和十七年——二十歳——

姉宛 今日には実にうらゝかに晴れた気持ちのよい日です。学校は只今二時間休講になつてゐますので思ひ出すまゝに手紙を書く事に致しました。一切の挨拶をぬきにして言ひ度い事を言つてみます。先日僕が買つて来ました吉川英治の『日本名婦伝』少しは読まれましたか。雅子にも此の手紙を見せて下さい。現代日本に於いて最も注意すべきは教育の問題であります。それは次の時代を背負ふは一に吾等学徒にある事を感じるが故にです。然し乍ら此の事は兎角男子の教育のみに目が向けられてゐるのであります。女子の教育は決して決して軽視すべきではないと思ひます。女子教育の欠陥は男子教育を如何に改革してもそれを片つ端から崩してゆくことになりはしないのでせうか。此の事に充分注意して下さい。従来<sup>の</sup>婦人雑誌、それは婦人倶楽部、主婦之友等々、附録により家庭の便利となる様な例へば、『洋裁の奨励』等に役立つてゐた事は事実であります。全部が全部さうであつたとは申しませんが何時の間にか新たなのを追う様な婦女子の心理

を昂進せしめた結果になつて来た事を残念に思ひます。又婦人公論等の、女子の知性を目的としたインテリ（修養）向きの雑誌はその思想傾向に於いて現代偽装赤化思想に連なるものである事を注意します。女子共産党黨員が婦人公論の読者であつた事も一言附記します。結局斯かる乱れに乱れた一般の婦人雑誌こそ女学校における教育の不徹底と共に日本婦人の道を一一つ覆滅して行つた禍因である事を感じます。女子に思想は不要等と思つたら大問題であります。只々女子の場合にはその教養（全てを含めて）が家のために次々積まれてゆくべきである事を信じます。

明治天皇御製と昭憲皇太后御歌との御調和こそ、をとこをみなの道のお示しであります。結局今の姉上に最も必要なのは女大学でも又菊池寛の新女大学でも何でもありません。昭憲皇太后御歌に示さるゝ日本女性の伝統に正しく立つ事であります。自分はその事を意志して姉上に『日本名婦伝』を送り、『夢かぞへ』を送つたのであります。雅子は相当本を読む様であります。余り濫読に過ぎると思ひます。姉上は母上に代りて責任を以て雅子の本を選択してやつて下さい。センチメンタリズム（感傷主義）の文学が結果に於いて女らしさを失つて来るのであります。

(書翰から)連絡は生成 隔絶は死滅 友よ呼交よびかはせ 集れば神となり 分るれば「ヤ  
マトダマシヒ」となる 吾等のいのち 身内の力のつき果つる迄 神意に随順して  
獅子吼せん！友よ！

(昭和一七・一・二)

友の後姿を拝む心、これが連絡である。

(昭和一七・三・四)

開戦の日に

たへにたへ待ちにまちたる時は来ぬいざや進まん友よはらからよ

暁闇にたゞ一筋のみひかりを仰ぎまつりし臣のうれしさ

大君の御旗の下に国民は集ひ集ひて今ぞ起つべし

大詔おほみこと畏み畏み拜めば胸内迫りて涙あふるゝ

戦を宣らせ給へる天皇の大御言葉のかなししらべよ

悲痛なるしらべのうちすに統べ給ふみ民吾等のかなしねがひは

『久米の子等』 昭和一七・一

夜眠らむとすれど越後蒲原に静養中の高瀬伸一君（註 旧制佐賀高校生の友人）の偲ばれてならず

南の郷さへいよゝ寒さます頃ともなりぬ越路はいかに

君が棲む越路の山は深雪みゆきふり見渡す限り白野原ならむ

寒さいよゝ激しくなりし夜半なれば君があけくれ偲ばれてならず

みやまひは如何いかあらむと友どちを偲びてあれば眠られぬかな

ものはみな静まりわたる此の夜半に響きて来るは電車の音か

此の頃の夜半の寒さを君は如何にすぐすかと思へば胸のふたがる

只一人淋しくいます友なるにたよりもせずて怠りしか吾は

おとづれの事もなさずてすぐし来し愚かなる吾を許し給へや

昭和十八年——二十一歳——

二月二十五日 午前六時家を出て八代駅やっしろより同信寮に向ふ。父上母上はわざ／＼起きて送つて下さる。久子がかはいゝ姿で家の戸まで送りいつまでも「さよなら」といつて

送つて呉れた。暗い町を急ぎつゝも久子の声に涙が出さうになつた。

いとけなき年にはあれど吾が立つと聞きてか妹は送りに出でけり

吾が影の見えずなるとも送らむと思ひてや妹がしきりにおらべり(註 叫ぶ)

妹はこの寒き中まだ立ちて叫びてゐるか声のきこえ来

行くてには友らまつなり吾妹よしばしわかれむさびしからめど

再度とかへりゆく日はいへづとをさはにもちゆかむしばしまて妹

(註 家苞を多入たくVさん)

今年より学びの舎へ入るといひし妹の面わのわすらえぬかな

父母の手伝ひするは嬉しとふ汝が言葉の何ぞやさしき

そのこゝろそがまゝにのびしきしまのやまとをみなのかぐみとこそなれ

吾が家の門辺に立ちて送りたる汝が面わを忘れておもへや

夕、机の前に (二月二十五日)

くさぐさに想ひやむより歌よみて心を放つは嬉しからずや

歌よめば言葉の奇靈くしび天地につながりてゆくかしこからずや

むらぎもの心のまゝにつらなりてあらはるゝ奇靈かやまとのうたは

言の葉の道をさめよもろものしをりをここに大和の言葉に

やまとの歌なつかしきかな天地の開けし時ゆ伝はり來しとふ

天地の命のまにまおらびなきしむかしの人の言葉なつかし

いにしへゆたぐひまれなる此の度の大御軍に歌なきはかなし

青山を枯山からやまなすとふいにしへの力あることばに目覚めよもろびと

九重の宮居はろかに拜みて安らけくませとたゞいのるなり(以下三首、三月三日)

生き死にのけぢめをこえて大君に仕へまつるはうれしからずや

むらくもをいぶきはらひて御光をたゞにあふがむ春の日もがな

三月四日 朝起きて見ると姉よりの速達、僕の事に心配をし通して、尚も自分を励まして下さる父母姉の心に手を合はせて拜んだ。

姉の手紙を轉載しておく

「試験を前に控へ胸中如何ばかりかと御察し致して居ります。唯沈着に素直にみぐるしき行動に出ない様のみです。

自分の信念に向つて忠なるますらをのゆくとふ道をひたすらに邁進されん事をお祈り致します。今まで貴方等の精神がかくも友人と相呼応されてゐたか、全く感心致します。益々学業に精励しあらゆる点に於いて貴方等の精神を全人類に示してやりなさい。では御奮闘をお祈りします。三月三日 家内一同より」

此の時にしも

事にあたりたゆまず進めとはげましのみふみたばりぬ此の時にしも

茨路をいゆきなやめるあがどちを励ましたまふか家なる人らは  
ますらをのゆくとふ道をますぐにぞ進めと言はすか吾が姉上は

あゝ今はおそるゝ事なしむらぎもの心のかぎり進まざらめや

家人の想ひこもれるこれの身はのどにはくちずたゝ君のため（註のど、平安、無事）

君のため国のためなりこれの身の朽つともなごて悔ゆるべしやは



神代よりたゞにつたへし一筋のいのちにたちて進みゆくのみ  
斯くすれば斯くなるものと知りながらはげましたまふ父母のおもひよ  
たへがてのおもひをいだき父母は吾がゆくみちを祈りますらむ  
すべろぎのいやさか祈りゆく道をみまもりたまへ四方の神々  
故郷の空をはるかに拝みて今は進まな神のまにまに  
ひゞき来る電車の音をきゝつゝも此の一時は父母を偲ぶ

山上にて

春霞裾にたなびきほのかにもけぶりて見ゆる開聞かきもんの岳  
群山はふせるが如く開聞のみ嶽はひとり天つくが如し

開聞のみ岳の裾ゆはるかにも西にひろがる大きわたつみ

見はるかす水平線のいやはてにほのかにみゆるは硫黄島なるか

(註 硫黄島は開聞岳西南約五十軒に在り)

その島のいたゞきのあたり白雲とまがふばかりに煙ふく見ゆ  
海空のさかひけぶりてふきつくる風のすがしさ潮の香ぞする



白雲のみ空をつたひはるかにもかけるをみれば友し偲ばゆ

白雲の力美とよしも忽とちにみ空かけゆく南に北に

わたのはらたどに見放みくる山の上になみずむすがし潮風のふく

つとめ終へし夕ごろみ空を仰ぎつゝ空ゆく雲にわれ恋ひ渡る〔若桜集〕

雷 雨（四月二三日）

南みなのみ空黒むと想ふ間に稲妻きらめきいかづちとよもす

疾風のま横飛ぶ雲ゆたちまちにみ空つんざきとどろくいかづち

久方の空にかたぶくむらくもの触れのひゞきに心おびゆる

現し世のいのちのたけびきくごとくかみなりはなるそらもとどろに

黒の瀬戸（註 不知火海の南端にあり）

黒の瀬戸の名に負ふ速潮突出でし岬をめぐり空に散るかも

流れ速きうしほ行き交ひたちまちに渦潮まきて船呑まむとす

目ざす方たちまち失ひ吾がのれる船傾けり潮けぶるに

つきすゝむ発動機船の舳をどり波間に沈み影かすれゆく

人皆のおびゆるまでに荒れ狂ふ此の速き瀬戸いかにかこえむ

船長室に舵輪握りて黙しつゝゆくて見守るたくましき老人

幾年を海に鍛へしその人の潮焼けし頬よするどきまなこよ

かへりみれば三笠の村の渚はも波間波間に見えかくれする

隼人はやひとの薩摩の瀬戸の名に負へる速潮をこえて吾は旅ゆく〔若桜集〕

球磨川にて(六月二日)

夕葉川夕さりくればせゝらぎの音のみ聞え想ひはてなし(註 夕葉川は球磨川の別名)

ほの白く光れる川瀬いづかたとわかず消ゆるを見ればさびしも

近きあたり岸辺の家ゆともし火の川の面てらせりゆらげることくに

大わたの潮みつればかせゝらぎの音もはつかにかそけくなりぬ(註 はつか、わずか)

朝日子は未だのぼらね木群移る鳥の鳴く音のはずみてきこゆ(以下七首 六月二六日)

あふるゝいのちにふるゝがごとき想ひして松の下道露ふみてゆく

久方のみそらをつたひ九重の宮居をはるか拝みまつる

御空伝ひ神言聞ゆる心地して明治天皇御製拜誦しまつりぬ

天つ日や今のぼるらし東の山のいただきほのあかみたり

鳥の音の外には聞ゆるものしあらね賑はしきいのちあめつちにみつ

野も山もゆたにさしくる天つ日の光に映えていのちみなぎる

河崎由雄大兄(註 旧制熊本高工の先輩)の戦死(五月七日)を弔ふ(八月九日)

南のわたつみわたり夷らにいむかひゆきて君はかへらず

ありし日はますら雄心ふるひてし君にしあれば潔く散りけむ

ものゝふは命死ぬまで御門<sup>みかど</sup>辺を護るものぞと言ひし君かも

戦死の報<sup>うつ</sup>現に聞けどなつかしき君が御命失せしと思へず

先なるはのちをみちびき後なるは先をとぶらふとふみおやの言葉よ

現し世のけじめを超えて君が霊こゝに降りませ今の現に

天草洋<sup>たみ</sup>(八月一〇日)

切りたてる岩が根めがけうちよする波の穂しぶく百重に千重に

見さくればはてしもしらず一筋に空か海かも横引くすぢは

海のはて雲か山かも真夏日のてりゆるゝ波の面空うつあたりは  
横なびく煙かあらずあま雲か沖辺たゞよふほのぐらきかげ  
ほづつつみ醜らをうつと海原をはせゆくみふねをにはかにおもひぬ(註 火筒積み)  
七重八重荒波わきてゆくふねのいくさに従ひめさるゝはいつぞ

牛深を立つ(註 天草島南端に在り) (八月一〇日)

わたつみの波しきうちて砕けちる大きいほのすがたをゝしも

わたつみのたゞ中すゝむ船の上に弓張月をあかずながむる

真弓なす海原ゆけばつらなれる島山はるけしくれゆくそらに

ほのかにも月の光に白雲の空ゆくすがたてらされて見ゆ

舳きる波の音きゝつ大空の星をながめぬねむれぬまゝに

この旅にまゐでござりし友どちはいかにしあるらむしたはしきかな

船ぬちのゆらぎてやまぬ甲板にをりたちおもふ心はてなし

けぶりたる空にたゞよふ月影の光くだくる波のさゆれに

いなづまかあらずあかりかぬばたまの夜空かけりてきらめく光は

渦まける白水泡みなわあはく一筋にはてなくつゞけり来し方のぞめば

ほのぐらきあかりの下に吾がともはもはやいねたりねいきのよろしも

よひやみの中に黒ずむ島の端に船か家かもあかりてり見ゆ

あまつそらふりさけみれば月の暈かきしるく出でたり明日はあらしか

北の方指さす如く七つ星今日も出でたり友らしぬばゆ

島と島のはざまいゆけばたちまちにうしほをはやみ舟躍りゆく

ふなべりにひたうちよする荒波のすさまじきかもくだけとびちる

百千船ももち泊はつる港辺賑はしくあかりてりたり人影も見ゆ

汽笛ならしゆるやに八代の港辺に吾が船は入るひゞきあげつゝ

## 遺書

(註 入宮に際し、伯父に託したもの)

帝国興亡之秋ときに当り陛下の御召に依り、海軍予備学生として土浦海軍航空隊参著を命ぜらる。欣喜極りなし。生きて神州の防人となり、死して護国の鬼とならん。

身は南海の空に桜花と散るとも魂は永遠に国土に留め祖国を護らん。

天皇陛下萬歲

大日本帝国萬歲

現下国家情勢逆睹を許さざるものあるも、神州不滅は吾等の確信。帝国の興隆は国体の威嚴と国民の忠誠とに存す。今、日本学生の先陣を承り出陣するに当り、想ふ事、神州の興隆のみ。誓つて四夷を撻伐せん。祖宗の遺訓を身にしめ決して人に後れざる様奮斗せん。

畏きや命かみことふり夷らを打攘ふべきときはきにけり

君のためいのち死すともしきしまのやまとしまねをとほに護らん

みくにいまたゞならぬときつはものと召されて出でゆく何ぞうれしき

吾死なば後につゞきてとこしへに御国護れよ四方の人々

昭和十八年九月八日出発

伯父上様

十一月十九日

(前略)

棒倒しの折、余は防禦軍にあり、棒の三人支への中の一人とし

て棒を守護しありたり。戰鬥終りて後、兵器学生某我等に誠めて曰く「二十五歳にも相成りて戰鬥中悲鳴をあぐる者あり、少し考ふべし」「戰鬥中に声を発すべからずと言ひ置きしに声を出すものあり。仮令其の声味方激励の爲と雖もそは卑怯者のなす事なり、考思せよ」と実に卓言と言ふべし。吾等命ぜられたる通りに上官の意図を忖度して戰ふこそ真の勇にはあるなれ。予備学生の事兎角言はるゝ由聞知せる所なるも、今日斯かる者を出せる事自らの責務として痛切なる痛手とは感ぜざるべけんや。(中略)

「死守」と言ふ言葉あり、アツツ島の山崎部隊の最期を想起す。此の場合、目的は守るとふ現実の問題にあらずして永久の留魂にあり。これ、身を以て示しゝ日本人の最期にして、この気魄戰鬥精神こそ永遠に国民の胸底に残るものなるべし。後來の子孫、大東亞戦争を後観するとき、斯かる事実を必ずや日本人の伝説と見るべし。これ山崎部隊の永久の留魂ならざらむや。思考未だ至らず、他日再考、再思を期する次第なり。

十一月二十二日

(前略)

同信寮の家族の者のみでしきしまの道会をひらく由誠に結

構。家庭の諒承ありて王事に勤むるを得るは実に日本人に生まれて最大の幸福なりと言ふべし。今まで如何に多くの志士が、母の言葉に又妻の言葉に歎喜を覚え又覚悟を決めてその道に励みしか。又目先の事のみによりて家庭の反対に合ひ遂に千載に汚名を残せしか。実に予は幸福なる家庭に生まれ幸福に今軍務にはげみゐるなり。尚一層奮励せざるべけんや。

辻本幸一兄に（註 旧制熊本語学専門学校生の友人、戦死）

あらつちを泡雪なして蹶<sup>く</sup>系散らし君はたつらむ今防人と

（註 『古事記』スサノヲノミコト昇天の時のアマテラスオホミカミの条参照）

龍ヶ嶺を日毎夜毎に仰ぎつゝあけくれすぐす君ししぬばゆ（註 天草、竜ヶ岳町にある山）

海原の波のしぶきともえさかる想ひのまにま一筋にゆけ

醜草を払はむすべもが高潮の巖を噛みて碎け散ること

相次ぎてたちゆく友ら偲びつゝ想ひ新たに我も励まむ

われらがわざ我等が言葉つたなくも一筋の道失せむと想へや

今更と何をか想はむいにしへゆつたへし道に立ちてゆくのみ



みくにのいのち永久に滅びずと信じつゝ奇しき力をかゝふりて生く

姉宛 (前略) 加藤大兄の手紙に「親鸞は感恩奉報謝のために念仏を申すと言つた。

僕等は友らにながつてゐた御恩を報ずるために之からの生を送りたい。念仏は全体にながらむための悲しき内心の叫びではあるまいか」とありましたが全くしびれる様な気持ちで此の言葉を繰返して読みました。不可測の人生の事実も祖国に連なり生きむと願ふ心に統一されて生きゆく人こそ真の日本人であると想ひます。姉さんから実に限り無き心尽しを頂き御厄介になつて来てゐた事を近頃は特に身に沁みて感じます。此の事を想起する度に「後(おく)れてはならじ」と心に誓ひつゝ戦斗意志を燃えたゝしてゐるのであります。君の恩、親の恩、友の恩、そして私は誇らかに姉の恩、と友に語る事が出来る様になりきつてゐます。

(昭和一八・一二・八 洲ノ崎海軍航空隊)

8. 和天山 儀 平

姉宛 拜復 二日附の手紙拝見しました。何と言つても残された家の者皆が元気でゐる事程心強い事はありません。心に余裕を持ちつゝ軍務に励む事が出来ます。出征同志家族のしきしまのみち会は実に嬉しく存じます。何だか同信寮時代の雄々しく素直な

そして血を吐く様な思ひに語りし日々の事を再度現出さす様な気配が感ぜられ痛快であります。

姉さんの歌を読み、姉さんも随分変られたなあと思ひ乍らも安心を感じて居ります。今こゝまで書いて入隊当初の新しき感激が再度心に起り来るのを禁じ得ません。海軍の生活、それは一言にして言へば「男らしさ」を吾等に要求されました。今では何でもありませんが入隊当初、駢足をやり流汗拭ふに由なく、呼吸困難、眼前暗黒、刻一刻もう倒れるかも倒れるかと想ひ乍らやつと隊門の見えた時の嬉しさ、そして号令台前迄辛うじて落伍せず辿り着き青息吐息の時、二期先輩の楫少尉かきが「男は如何なる時でもにっこりと微笑むだけの余裕を持つものだ。どんなにきつても苦しい顔をするな。にっこりと笑へ。これが男だ。」と怒鳴られました。又、之も入隊当初の事ですが一学生が夕食後、甲板（海軍航空隊では居住区を斯く呼んでゐます）椅子の上で足を組み横つちよになつて手紙を書いてゐたのを先輩に見付かり鉄拳を戴いたのであります。その時、皆之を見てゐて黙り込んでしまひました。丁度此の場にこられた楫教官が「吾々が皆に一番要求するのは男としての逞しさを一日も早く持つ事である。絶対に、なぐられたからと言

つて萎縮してはならない。済まあしてゐる。なぐられても済まあしてゐる。」と言はれま  
 した。紋上は海軍生活当初に於けるあわたゞしい毎日に於けるほんの一寸した出来事で  
 ありますが、私は今以て此の事を忘れる事は出来ません。先輩教官の雄々しき言葉、之  
 が如何に全予備学生の心に歓喜となつた事か。入隊以来三ヶ月も漸く近き此の頃、久し  
 く忘れんとしてゐた此の事が再度胸裡に蘇り来り、一日も早く海軍士官たらむと決意し  
 てゐます。三ヶ月、早いものです。何時の間にか頭にも帽子のあとが歴然と残る様にな  
 りました。(後略)

(昭和一八・一二・九 洲ノ崎海軍航空隊)

十二月三十一日 (前略) あゝ国にとりても私にとりても多難なりし昭和十八年も暮  
 れんとす。アツツ島玉砕、山本提督戦死、キスカ撤収、マキン・タラワに於ける玉砕、  
 全てこれ神州防護のために鮮血を以て彩られし神州不滅の客証なりき。

八月末御召にあづかり、空ゆかば散る桜花と、土空(註 土浦海軍航空隊)に入隊、越えて十  
 月一日海軍予備学生に任命せられ房州の空に訓練を上げむ様になりて、はや三ヶ月、且  
 に富嶽の雄姿を仰ぎ夕べに鏡ヶ浦の海波に親しむ。軍艦旗の下、身命を捧ぐるは固より

生が本来の願ひとするところなり。

二十一歳の年漸く逝かんとす。戦斗意志これのみぞ、全ての障害を破砕するものなり。生きては護国のますらを、死して尚皇基を護らんは古来志士の志とせる想ひならずや。昭和十八年逝かんとして思ふ事余りに多し。而して只残るは 戦斗意志のみ 戦斗意志のみ

昭和十九年 — 二十二歳 —

一月六日 第一次大戦、それは独乙にとつては——否列国にとつてもしかりであるが独乙は直接その経験者自体であつた——実に複雑な国民生活の体験であつた。そして遂に之が統一出来ないまゝに敗戦の結果に立到つたのである。再起を誓つて又そを後進に頼んで、号泣しつゝ戦場に斃れて行つた独乙戦士の胸中は実に涙なくしては偲び難いものがある。現下の日本の国情を翻つて想ふ時、独逸戦歿将兵の憂ひの中に綴られた言葉は痛切に偲ばれると共に、全く三千年のゆるがぬ国体、天皇御親政の威厳により今尚躍

動してゐる国力を想ふのである。

比類なく勇ましく戦つた国民が減びなければならぬとはどうしても信じられない”  
と告白しつゝ戦死してゆく人々と

君のため何か惜まん若桜散つて甲斐ある命なりせば”

(註 ハワイ突入の特潜艇長古野繁実少佐の遺詠)

と散つて行つた帝国軍人との気持の差は、実に三千年の国家生活の威厳の然らしめるところである。独乙戦歿将兵の手紙を読んでそこに見るもの、それは国家生活防護の悲泣であり苦斗である。これを読んで想ふ事は余りに多い。三千年来の国体防護。実に吾等の使命は大きい。故江頭俊一大兄(註 旧制佐賀高校生の友人)が歌に

天つ日をさやるむらくもたちまちにいぶきはらはむますらをのとも

とあるを想ひ出す。日本国家生活の危機も、古来歴史が示す如く常に天皇の御悲願により切りぬけて来た。今の困苦な時代も辛うじて天皇の御稜威により支へられてゐるのである。皇国の列国と異なる所以の真髄を發揮するのは、又、それが要求されてゐるのは実に今である。我等は軍人、外征の師に命捧げよう。夷狄を斃さう。而して国内に於ける

天つ日をさやるむらくもは全ての戦時体制等に先行して攘はねばならぬものである。ここに永遠の祖国防護の戦ひはつゞけられてゆくのであり、日本民族の血路はあるのである。

佐賀、松山、山口の友らに応へて（昭和一九・一・七）

とこわかのいのちむすぶと筑紫辺つくしへに集ひし友の息吹きか此のふみ

いまだ見ざる友らもまじりて呼びかくる声きく想ひす此のふみよめば

亡き友のみ魂のふゆか年々に新しく開けゆく我等の集ひは

おきていのりふしてぞおもふますらをのかなしきねがひ神もみそなはせ  
すめくにのみ代やすかれとひたいのるおもひにつらなり生きゆく今はも

山田輝彦兄に（註 佐賀高校生の友人）

時来なば君がかたみと送りたる言葉を胸に吾立ち征かむ

一月十日 家から手紙が来る。久子よりの音信は片仮名で、風船を折紙にして送つて



来たのには涙が出さうであつた。登の手紙は、一日も早く大きくなつて兄さんの後を継ぎ御国の為に忠義を尽したいと。雅子の手紙は、萬葉集を全巻読んだが良く理解出来なかつた、休暇は三十日より三日迄、体力章検定中級、五日の誕生日には御馳走が陰膳にそなへられた等書いてあつた。登、雅子、久子に手紙を書いて元氣をつけてやつた。久子の音信の中には母上の音信が同封されてあつた。元且も私が居なくても写真を飾り淋しくないと頑張られた様子が偲ばれる。幼き頃、父から叱られた時でも一緒に泣いて元氣をつけて下さつた母であつた。父は全て大きく見てゐて下さつたが、母はともすればいぢけ勝ちな自分を温くなくさめて励まして下さつたのだ。出発の時生還を期さない覚悟も、母の面々を見てより強化された。母、自分にとつては天地にかへ難きものである。熊本駅頭に帽を振り送つて来られた父上の面影と、ブリツヂの下に黙つて頭を一度下げそのまゝ見送られた母上の面影は如何にしても忘るゝ事は出来ない。そしてこの回想こそ私の戦斗意志の源泉であつた事を、今更回想してゐる次第である。

二月二十一日 今朝方<sup>がた</sup>実に言ひ様の無い夢を見た。誌す事にする。場所は母の実家、

大島（註 八代市大島町）の海岸、軍刀を吊して見慣れた家の前の防波堤より降りて、之を最後と八代の家に帰らうとする時、渚より母は眼に涙を浮かべつゝ実に忘れられぬ顔をしながら、儀平ちやん、何も想ひ残す事はないから一生懸命働いて天皇陛下の御為に死んで来なさい、と胸にすがつて泣くのである。私は万感胸に迫り言ふ術を知らず唯三首の歌

明日ゆりや海原越えて夷らをとりにひしがむつはものわれは（註 ゆり、より）

現し世の語らひ今はと立ちいづる心に残る母の面影

みどり木のときはかきはと末永くまさきくましませはしき母刀自（註 真幸く・愛しき）

を母に贈る。母上は歌さへもよく読まぬ様に、しかしながら、決して取り乱してはゐない。ひたすら皇軍に捧げた吾子との別れに生じ来る別離のかなしみと武運を祈る心との交替する複雑なる面わである……私を送るのである。その時家の門に父が現はれる。

別れようと父に最後の握手を交さんとすると、父は母を見返り、儀平、元気で行け、と言ひつゝ握手をのけて私の身体を抱きかゝへられる。腰の剣がだらりと下つた重味に目がさめる。気がつけば甲板の釣床の中。何故斯かる夢を見たのであるか私自身よくわか



らない。唯私は決して之を望郷心とか家を想ふ心とかを以て解釈する様な想ひは起きない。現実に斯かる別離であつても、戦場にて接敵した場合、俺の戦斗意志は大磐石だ。安んじて戦死出来る。「個体の悲劇は日本の歓喜」と詩人はうたつた。母の面影、父との別離！ シドニー特別攻撃隊の松尾敬宇中佐は最後の面会に於いて母上に抱かれて眠られた由である。

所感詠（夢中詠）

君のため命こそ惜しまね父母の面影しのぶいくさにありても  
帰り来る吾を送ると門の辺に吾がからいだきわかれし父はも（註 から、身体）  
想ひのこすことなく働き大君のみために死ねと宣らす母はも  
わが胸に顔を押しつけしぼしのまはなれたまはぬかなし母刀自  
たちがたき恩愛の絆しみじみと想ひかへさる別れゆく身は  
にぎはしき吾家のあけくれ今はとて立ちゆく想ひこゝにのこさむ  
若桜散りぎは清しとふ言のごと散りてもゆくか吾もまたずて  
来む春に花咲く桜見給はば吾がゆくみちをしのびたまへや

父母の膝元離れ立ちてゆくますらをわれやあにおくれめや

二月二十三日

(前略) 我々は果して真に改革を要する問題につき当つた時、近道だ

から之をやると言つた様な氣にどうして成れるのであらうか。先師黒上正一郎先生が身を以て示された求道は、直接に接する人をこころと尽く感化せしめずんば止まぬ底ていのものであつた。(中略)

現に今九州の方に湧き起つてゐる『まほろば』に連なる吾等の遺家族の結合は不可思議のつながりにより、けぶるが如き友情の中に真の日本国民の生活を示してゐると確言できる。全世界皇化とは斯くして行はれ得る事を夢寐にも忘れまい。私が故国を詔を被つて発つ前の夜、熊本同信寮の友十数名が家に来て終夜語り飲み且つ歌ひ、舞つて門途を祝して呉れた盛事は、私の両親、姉、弟に嘗て私が口を酸つばくして説いた吾々の生き方と言ふものゝ千万倍にも優つて、一瞬にして親族一家をして実に高き宗教的なる雰囲気を作らしめた事実を想起せしめられる。そしてそれが今尚つゞいて手紙の端毎に「儀平ちゃんのお友達のお蔭」と言はるゝ父上、母上、姉上の言葉は、真に学生々活、国民

生活のあり方がいづくにあるかを證して余りある事であり、身を粉にしても尽す交友の世界を沁々想ふのである。

夕、補科終りて卓に帰る。米重みどりさんから手紙が来てゐた。十月以来兄より手紙が来ずとの事、鹿児島航空隊の予備学生の姿を見つゝ吾等のあけくれを偲び、又、母上涙を流さるゝとの由、実に涙ぐましまでに身につまされる想ひす。温習時、頭痛激しく寝る。(註 補科、補習授業。温習、自習。)

江頭俊一大兄の母君に

はからずも会ひ得し友と開き見し君がうつしゑ何ぞをゝしき

をのこやも雄々しくゆけとうたふごと宣りし言葉も現にきくごと

人の世のけぢめをこえてあり通ふ信の世界に吾は生くるか(註 あり通ふ、通ひ続ける)

やがてゆく生き死にわかたぬ戦場も君と共にと想へばやすけし

いづ方に身ははつるともおそれずにすゝみてゆかむつはものわれは

亡き友とわれらはゆくなりふるさとにいます母君まさきくましますせ

米重政行大兄戦死を弔ふ巴調（註 自作歌の謙称）

桜島煙はいまもかはらねど雄々しき君を見る由もなく

我死なば後に続けとたからかに歌ひし君の眼交まなかひ去らず

武人の常とは言へど帰り来ぬ君を想へば吾が胸いたし

屍をのり越えゆけと呼びかくる声聞く想ひす君想ひ居れば

金戸出かなとでの雄々しき君が姿はもこの現し世の別れとなりしか（註 金戸出、門出）

ものゝふは斯くこそあれと死に行きし部下を悼みて歌ひし君はも

送出撃賦 佐伯基地より

妖霧一掃策秘胸 空之丈夫今出撃

暁闇未明駆愛機 長駆一撃欲撃敵

右手振りて別れをつぐるますらをを見送る心あにたへめやも

エンジンの轟高く我が頭上幾まはりして友ら飛び立つ

つねのごとかたへにありて食事せし友の面影眼交さらず

出で行くも送るも同じ一筋の道につくさむすらをなれば  
さはあれど仇屠らむと出でてゆく友をし見ればともしきろかも  
あゝわれは何日か羽搏き大空に出でてか行かむとまたれてならず  
弓矢とる武士のならひとにこやかに生き死に言はず征きし友はも  
出で行かば再び会はむ日もあらし先行く友よまさきくありこそ  
皇の御代すめらみに生れてみかどべに果つる命のはれがましきかも

戦死せりとふ友を偲ぶ

機上より片手振りつゝにこやかに笑みさへ浮かべゆきし友はも  
うちつゞく僚機の真先を翼ふりて飛びてゆきけり一番機彼は  
初陣うらじんのたけびか友が機上より拳かためてふりけるさまは  
君ゆきしその日のまゝに室内は手触れずありけり帰る日待つとて  
果てもなき大海原のたゞなかに君らゆきしときくがかなしき  
常のごとベッドの上に脱ぎおきし君が軍服見るにたへなく  
海原のいづこに果つともものゝふの常にはあれど吾が胸いたむ

友の遺品かたみかたづけしつゝ次々といで来る品に涙にむせびぬ

のこすべきものはかねてゆのこしおきし君が心のいぢらしきかな（註 ゆ、より）

おもてにはさりげもあらぬ君なれど斯くある事には備へおきしか

そこばくの髪を手握りはつゝに君しぬばすらむ国なる人らは

亡き友を偲ぶはかなししかれども弔ふいくさに今より吾は

（註 遺詠、遺文特に記載なきものは、本人の姉がまとめた遺稿集による）

九、藤原邦夫



藤原邦夫

大正十一年六月十日、京都府に生れる。昭和十年四月、旧制京都府立福知山中学校に入学。精勤ならびに首席をもつて卒業。十五年四月、旧制松江高等学校文科甲類に入学。しばらくして「松江高校同信会」会員と知りあひ、真剣な思想生活に入つた。同年九月、同会の校内での合宿に参加、十二月には京都で行はれた「近畿学生合同合宿」に次いで翌十六年三月の「中国地方天倫寺合宿」(註 いづれも、「日本学生協会」主催)に参加した。四月十日、心身を傾けての思想生活の故か、当時、学生たちの身体をむしばむことの多かつた結核に罹り、発病。初め腎臓炎の疑ひが持たれたが、結核性腹膜炎と判明。同年五月二日永眠。時に數へ年二十歳。

彼は「同信会」(前出の「佐高同信会」「新潟高校信和会」などとともに、各地の高専校に同名の会ができてゐた)の諸友と交流しはじめてからわづかに一年、その純烈の魂を燃焼しつくして亡くなった。同年九月二十一日、遺された学友たちによつて、『靈戦』と題する彼の遺稿集(A5版、活版刷六八ページ)が刊行された。彼の死は、「日本学生協会」発足以来最初の死であつた。私達はこれを、国のため命を捧げた「戦死者」として、戦場にたふれた人々とともに祭つてきた。本書は、その遺稿集から一部を抄録したが、彼の戦死者に連なる志は必ずや汲みとつていただけるものと信ずるのである。



昭和十五年——十九歳——

一畑電鉄車中にて

数々の便りは来れど父母の情あるには及ばざりけり

麦畑を見るにつけても思ふ哉我が故郷の出来は如何にと

九月初旬の合宿終りて

奮ひ立て大丈夫我は大日本帝国男兒ぞ大御宝ぞ

むなぬちには祖国防護の意志満ちて息することも苦しかりけり

偶感於路上

大空も山の青木も田の稲もわが大君につかへまつれり

北白川宮永久王殿下御葬儀

大空も今日の御儀をかなしみて雨の涙ぞしげくふらする

戦ひてしこのみ民はみな死なむ宮の御鏡しをりにはして

思故郷

美しき雲を眺めて思ふかなわが故郷のたらしねの事を

たらしねはこの美しき雲もみで唯ひたすらに働き居らるゝか

山田にて飯とり出だしたらちねも美しき雲眺め居らるゝか

白雲は動かずながら秋風の吹き来るみえて稲穂そよぐも

十一月十日皇紀二千六百年記念式典の日に

天照大御神あまてらすおほみかみより一筋の天つ日嗣は尊きろかも

住みなれし日向ひらがたゝして東ひんがしの方に向ひて移りゆかせき

登美毘古とみびこのはなちし醜いたやうしの痛矢串いっせ五瀬の命の御手にあたりつ

命をたけはも男建おとこたけびしつゝ神あがりましゝとぞきくこの傷のため

登美毘古はとりてきさみてふみつけよ命のいのちとりし賤奴やっこぞ

大横刀おほこちの布都御魂ふつのみたまは神なれや賊はたふさえ御軍みいぐさぞ起つ(註 たふさえ、たふされ)

兄宇迦斯えうかしはおのが作りし押機おしのため押し殺さえつあな心地よし(註 殺さえ、殺され)

御軍に弓ひくものはことごと尽かくの如くに死にゆくものぞ

登美毘古を打つ戦は復讐戦打ちてしやまむと御軍進みき  
四方の国打平げて 天皇は橿原宮に即位しましき

こゝにしてわが日の本の礎は巖とかたかくかたまりてけり

橿原の御代のはじめゆ今までに二千六百の年はすぎけり

この長き年月の間皇統は唯一筋に伝はり来りつ

いまの世はまことよき世とまめやかにわが大君に仕へまつらむ

いたくつかれて

息をすひ息をはくにも胸内はヅキ／＼いたみ心なやます

願はくはこれのいたみも病にはもとづかざれとひたにいのるも

手も足もまたく弱りて思ふこと断えだえになむすぐすこの日ぞ

をのこやもむなしかるべきと涙して雄叫びしける人もあるものを

息をしも深くしかぬる身の様をわが父母にはしらすじと思ふ

病みて

三十まり八つの熱とわが言へば友どち皆の驚きましき(註 まり あまり)

逢ふ毎に身体はいかにと友どちの間ひますきけぼうれしくかなし  
まだ熱は三十七度三四分はあれども人にはなほりぬといはむ

木下先生のお話をききて

わが病ひなほる頃ほひわが会に危機迫らむと師はのたまひぬ  
何者か同信会をつぶさむとこそく動く奴のあるらし  
わが会をつぶれむ事は生命のたえさる事ぞ戦はざらめや

なるべくは易き事せんと思ふこそうちやぶるべき我がにぞありける  
同信の生活いかで出来うべき何より先に我執すてずば

唯今の思ひは我執にねざせりと気づきし時の身のはづかしさ  
わが身をばかへりみなくてひたすらにわが大君につかへまつらむ

平賀元義歌集をよみて

萬葉の長歌のごとおほらかにうたひたまへる君のみしらべ  
アメリカのペリリ男のよせきしをききても君はたじろぎ給はず

アメリカの黒艦よするも日の本は神のみ国と信じたまひぬ

日の本にたはわざすなとから人をしかるが如き君のみ言葉よ（註 たはわざ、戯業）

えみしらをうち平らげて勝鬨をあげむと君は雄叫たがびたまひぬ

しこぐさをはらはむとするわれらはも此のみことばはひたに身にしむ

松江駅前に軍旗を奉迎せるとき

大君のくだし給ひし軍旗いくさはた現れませばをろがみまつる

み旗もるますらたけをのすゝみゆく其の足音は大地とよもす

軍旗ゆくらむ方に勇ましきラッパ聞えて尊くありけり

勇ましきラッパしきけばみ軍をさへぎるものはあらじとぞ思ふ

皇太子殿下御降誕の日に

神ながら世をしろしめさむ日の御子の生れましける今日のみよき日よ

御所に参りて

九重の宮の瑞松拝すればこの世のものと思ほへぬかな

あなかしこ 明治天皇の折々になつかしみ給ひしこれの松はも

ヘルシンキ大学に日本講座開かるゝ由新聞紙上にみて

歐洲の北の端にも日の本の国の光のさしそめにけり

選ばれて講師となりて行く人よ国の教をうつしうゑてむ

日の本の国の光を北歐の国の人にも仰がしめてむ

世界中大和言葉の言靈ことだまをきゝしる時は何時か来るらむ

## 「折にふれて」と題するノートから

山上憶良沈痾之時歌一首

をのこやもむなしかるべきよろづよにかたりつくべきなはたたずして (萬葉集)

語調もひきしまつた立派な歌である。余命も少い頃、病状をとほれありのままを語つた後一生をふりかへつて見ての作である。若い時も万世に語り継ぐべき名は立てず、晩年は病床に臥してゐた。若い時の苦勞、天朝の御恩、神々の御助等々を思ひだしてこの歌がなり出たのである。このまゝではどうしても死にきれぬのである。起き上つてあ

くまで奉公したのである。

この歌は以上の様な気持を詠んだものである。最後の句を「たてずして」と読み（原文は名者不立之而とある）、この歌は憶良の現実への強い執着を示すものだと簡単に片付けてしまつてゐるのはいけない。「なはたてずして」としては甚だ下品である。清盛の最期の言葉と少しもかはらぬ実に下らぬ思想となつてしまふ。「たてず」とするのなら「なをたてずして」とした方が語の感じとして続きよいのである。然し「なを」とは読み難い。方々「名はたたずして」と読むべきである。

尙万世に語り継ぐべき名をたてるといふ事は大忠臣となると云ふ事である。これのみ万世に語りつがれ、永久に生きる唯一の道である。

明治天皇御製 心（明治三十八年）

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな

「すなほなるをさな心」を忘れさせるものは教育である。（真の意味の教育でなく現行の教育をさすのである） 学問すればする程「をさな心」を忘れ去る事が甚しいのであ

る。これは現代の学問教育が誤れるからである。全国民はミソギして諸々のケガレをはらひ「すなほなるをさな心」に帰つて直ちに純誠をもつて大君に仕へまつるべきである。我等は現代教育によつて「すなほなるをさな心」を失はん事を最も警戒しなければならぬ。「惜しくもあるかな」とのたまはせ給ふた大御心に驚きめさめしめられるのである。この「すなほなる」心が忘れられると、忠が理論でさへも解らなくなる事に心せしめられる。

#### 慈悲の心を

物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ（金槐集）  
いとめでたい歌である。三句以下の調べは非常に高い。特に四句五句は全くすばらしい。上の二句はまづい。現実的威力をもたぬ。特に「四方のけだもの」は概念的になつて弱い。この二句に生々しい視覚にうつたへたものをもつて来るべきである。

建曆元年七月洪水漫<sub>レ</sub>天土民愁歎<sub>レ</sub>せん事を思ひて一人奉<sub>レ</sub>向<sub>三</sub>本尊<sub>一</sub>聊致<sub>レ</sub>念と云

ときにより過<sub>す</sub>ぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめ給へ（金槐集）



下の句はまことに大將軍のみ、なし得る高き調べである。八大竜王も雨をやめないわけにはゆかないであらう。上の句は少しまづい。「物いはぬ四方のけだものすらだにも」と同じくもつと具体的にすなほに云へばよいのである。新古今集には、「阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいの仏たちわが立つ杣そまに冥加あらせたまへ」と云ふのがあつて形がよく似てゐる。しかし実朝の歌には比ぶべくもない。

太上天皇御書下預時歌（註 土御門天皇）

大君の勅ちよくをかしこみちゝはゝにこゝろはわくとも人にいはめやも

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも

ひむがしの国に吾が居れば朝日さすはこやの山の陰となりなき（金槐集）

太上天皇の御書が如何なる事を宣り給ふてあつたかを自分は知らないから最初の歌の意味が全部は分らぬが、第一の歌「勅ちよくをかしこみ」「こゝろは、わくとも」等特に強く云つてゐるのは古歌の暗誦をそのままに書いたのではなく、こよなく悲痛な決意をした事を示してゐる。

第二の歌「山は裂け云々」は唯「どんな事が起きても」と云ふ事ではない。まことに山が裂け海があせる地球上の大動乱を思はしめられるのである。その真直中であつて君に一つ心につかへまつるのである。嵐の夜、強力な細い探照燈が唯一筋光るやうに。

第三の歌これもまことに悲しい歌である。幕府の存立が朝廷に対しまつてよくない事が分つたのである。驚くべき悲しむべき力なき告白である。しかし彼は「はこやの山の陰となりにき」ですましてしまつたのであらうか。おのれを知り乍らボカ／＼と歌を作つて遊んでゐたのか。彼は確かに無力であつた。しかしそのまゝにしてよい問題であらうか。「山は裂け」の歌の出て来た意志を何処へかくし置いたか。

大海原汐みち来れば籠崎の大門ゆ入来る八十の大船（平賀元義）

汐がみちて来て大船が沢山入つてくる所をそのまゝ動的に全体として擱んでゐる雄大な歌である。

若の浦に潮みち来れば瀬をなみあしべをさしてたづなきわたる（山部赤人）

この歌は前の歌とよく似てゐるがこちらの方が記述が細かい。潮が満ちてくる。今ま

で鶴が遊んでゐた瀨にも潮はおしよせて居場所もなくなつた鶴は葦の生えてゐる所へ鳴き乍らとんでゆくのである。「大海原」の歌は高い処から遠望したものであるかの如き歌であるが、とにかく汐がみち来り大船がおしよせて来るやうな気がする。「若の浦に」の歌はそんなに遠望したのではあるまい。満ちて来る潮の不可抗威力にはじつとしてゐられず逃げ出す。逃げ出すのは鶴だけでない。我々の心もそれと共に逃げだす。とにかく潮の不可抗威力と満潮の発展開始があらひのまゝに力強く写し出されてゐる。

明治天皇御製 教育（明治四十年）

いさがある人を教のおやにしておほしたてなむやまとなでしこ

現代学校の先生は「いさがある人」ではないのである。更に「いさがある人」を讃仰させて間接に「いさがある人」を「教のおや」にすることもしないのである。徒らに人格とか何とかをひき出すには及ばない。我等は直接に「いさがある人」の伝記著書を読んでのみ「いさがある人」を「教のおや」にもてるのである。我等は直接に楠公を師とし松陰先生を師と仰ぐのである。

明治天皇御製 歌（明治四十年）

おもふことうちつけにいふ<sup>をさなご</sup>幼児の言葉はやがて歌にぞありける

歌は「うちつけに」「ありのまゝに」つらねるものである。心にうつるまゝをうちつけに云ふべきである。だから和歌は最も科学的であつて科学の研究方法態度の根本である。従つて如何に科学が進んでも和歌は亡びることはない。ます／＼研究さるべきものとなるのである。自然科学が「うちつけに」「ありのまゝに」研究されねばならぬのは勿論で如何に立派な議論をたてたとしても実験と合致しなければ無効である。精神科学も現実の人生が説明出来なければ如何によく体系づけられてゐても全くの空論に他ならぬ。即ち精神科学も歌をよむやうに全く芸術的に実人生に密着した研究をしなくてはならぬ。実人生をはなれた、具体的でない学問をすることより多くの誤謬が生ずる。自分の信ずる説は死をもつて守るだけの学問をしなくてはならぬ。学問の為に命をかけねばならぬ。自分は戦にゆくのはその学説に反するが、仕方がないから行かうと云ふやうなでたらめの学問をしてはならない。生死をかけての学問とあれば我等が日本人である以上「大君は神にしませば」「大君のみことかしこみ」「大君のへにこそ死なめかへりみ

はせじ」と云ふのが学問の究極にならねばならん。さうでなければ我等は矛盾の為に死んでしまはなければならぬ。我等の学問をして戦死にめざめしめよ。

### 歌よみに与ふる書を読みて（論文）

子規先生の歌に対する改革意志は十度の「歌よみに与ふる書」に充分現はれてゐる。

「仰おほまの如く近来和歌は一向に振ひ不申候」と書き起されたこの文は烈々たる先生の熱意の表現であつて、文そのものとしても威力ある強き日本文である。

『日本文学の城壁とも謂ふべき国歌』云々とは何事ぞ代々の勅撰集の如き者が日本文学の城壁ならば実に頼み少き城壁にて此の如き薄ッべらな城壁は大砲一発にて滅茶々に碎け可申候。生は国歌を破壊し尽すの考にては無これなく之、日本文学の城壁を今少し堅固に致し度、外国の髯ひげづら共が大砲を発はなたうが地雷火を仕掛けようがびくとも致さぬ程の城壁に致し度心願有これあり之、しかも生を助けて此心願を成就せしめんとする大檀那は天下一人も無く数年来鬱積沈滞せる者頃日漸このころく出口を得たる事として前後錯雑序次倫みち無く大言疾

呼我ながら狂せるかと存候程の次第に御座候。」

何たる威力だ。熱意だ。孤軍奮闘、めちや／＼の歌よみ連中の中へ突撃された様誠に『文化の戦士』と称すべきである。

子規先生が萬葉集と実朝の歌とを大いに賞讃されたのは異論ないとして、平賀元義や井出曙覧の歌も相当賞し乍ら幕末志士の『血になく声』に気づかなかつたはどうした事か。

命が短かつたのも一理由になるであらうがとにかく甚だ気のすまぬ事である。

「……………この外の歌とても大同小異にて駄洒落だじゃれか理窟じくッぼい者のみに有之候。……………何代集の彼かン代集のと申しても皆古今こきんの糟粕そうはくの糟粕そうはくばかりに御座候。」

ものすごい勢である。当時の歌人は多分腰をぬかしたであらう。しかし全部が全部糟粕のみではない。その一例として畏れ乍ら後鳥羽天皇の御製を引用しまつらんとするのである。

建曆のころ南殿なごんの花しのびて御覧ごらんすとして詠ませ給ひける

吹く風もをさまれる世の嬉しさは花みる時ぞまづおぼえける（続古今集）

住吉の歌合に、山を

おく山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ（新古今集）

述 懐

人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにも思ふ身は（続後撰集）

題しらず

夜をさむみねやの衾ふとんのさゆるにもわらやの風を思ひこそやれ（続後撰集）

これらの御製は少しも糟粕ではない。枕詞さへ用ひてないのである。しかも或は感泣し、或は憤激せしめられ、吾人の根本より動かされるのである。最も近代的な御製である。

「生は和歌に就きても旧思想を破壊して新思想を注文するの考にて随つて用語は雅語俗語洋語漢語必要次第用ふる積りに候。」

この説は又歌よみを驚破せしめたであらうが賛成である。「ボール」「タマ」「球」その時々を感じにより何れを使つてもよい。要するに思ひをさながらに表はす言葉を選択すればよい。



「愚考は古人のいふた通りに言はんとするにてもなくしきたりに倣はんとするにてもなく只々自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現はすのが本来の主意に候。故に俗語を用ひたる方其の美感を表はすに適せりと思はば雅語をすて、俗語を用ひまうすべく可申……。」

これが先生の歌に対する考であるが、も少し発展してほしかつたと思はれるのである。歌は単に美を現はすものではない。歌は自己の生命をコトバによつて芸術的に発表したものである。その生命は折にふれて躍動するのであるから「美と感じた趣味」に対して生命は躍動する。しかし生命の躍動を感じるのは唯その趣味に対した時のみではない。吾人がみ国をうれひ、友のたよりを得、實際行動をとる等々の時に大生命にふれて歌は生まれ出るのである。そしてその生まれ出た歌は一人でかくしてゐられるべくもなく発表されるのである。自己の生命の躍動をそれによつて伝へるのである。ここに共感世界、歓喜の世界は展開されるのである。即ち歌は人と人をつなぐミチであり、歌を詠み、詠みかはす事は統一を要する日本臣民の義務である。

かく謂ひ来れば前に挙げた御製の如きはまことの『歌』である事は明らかであつて子



規先生の目につかなかつたのは、よまなかつたのかも知れぬが誤である。

けれども先生によつて和歌が革新されて遂に今の「しきしまの道会」に発達したものであるから、その功勞をばまことに大としなければならぬが、今一步の所で早く世を去られたのは惜しみても余りある事である。三井先生の歌論を子規先生の墓前に捧げたならば、かかる歌の出て来る事を予感されたと思はれる先生は手をうつても喜ばれる事であらう。

昭和十六年——二十歳——

一月五日（日） 石原より福知山へ歩いて行く。めつたになく良く晴れた日ひ和わで非常に良くすみきつて居り又ぼか／＼として実に気持が良かった。前を見、後を見、懐旧の感にひたり乍ら歩く。

石原より福知山に歩みて

久方の御空雲なく晴れ渡り日のうららかにてれる今日かも

うららかに日てり輝き山の端もさやかに見えて心地よきかな  
青々とさやかに見ゆる岡の森も昔おぼえてなつかしきかな  
歩みつゝ家に林に木に道に昔の事を思ひ出しぬ

一月六日（月）

数学の時間に

あゝみくにたゞごとならず昼中にみくにをあざける者らの居るとは  
あじぎなき増上慢の教授の声に歯を喰ひしぼり一人しのぶも  
聞くにだに耐へざりにけり笑ひつゝ思ひ上りてはく言の葉は  
教授に和して生徒もどつと笑ふなり可笑しくもあらずにくくしきに

一月十日（金）

現代は大いにオゴリ、タカブツタ時代である。信順意志の歛落せる  
おそろしき時代である。新体制新体制と云つても最初の人生観を代へねば不可でありそ  
のためには思想改革が必要である。

孝明天皇の大御言葉ををろがめば唯畏くて涙ながれぬ

井伊大老は少しばかりは忠誠の心もちて居りしと云ふか

我は唯井伊の奴にはいさゝかの忠誠心もなしと断ず

大君の大御心にまつろはで如何にか忠と云ふを得べしや

天朝は尊きものと知るともなど忠節といふを得べしや

大君のみことかしこみまけのまにまつろひまつらでは忠義にあらず

大君のみことかしこみ身を忘れ仕へまつるぞ臣の道なる

「大君のまけのまに／＼ひたすらに仕へまつらん命しぬまで」

この如き大和言葉の悲痛なる高きしらべを汝は知らざるか

戦はむいざ戦はむ力ある大和言葉のくぬちにみつまで(註 くぬち、国内)

9. 藤原邦夫

一月二十二日(水) 授業時間中に山鹿素行の配所残筆をみて之はすばらしいと思ひ

「真陵」(註 寮内紙)に書く事に決心した。そこで放課後その準備にかゝつて十時まで

に四枚原稿紙に書いたが風邪だから早くねる事にする。

配所残筆をよみて

山鹿素行の配所残筆ひもときてよき言葉えてうれしかりけり  
今知りぬ山鹿素行は日の本の思想系譜の正道ふめるを

我々の思ひと同じかなしかるひぶきにみてるふみにてありぬ  
徳川のにくき時世にまさりてぞにくきは今の醜しとばらにして

今の世の小田村兄の問題と同じき事のおこりしかあゝ(註 東大・小田村事件)

東大の法学部長の云ひし言は徳川の世よりまだ乱れ居り

北条に出す可く書きし案文をよめばうれしも日本人にして

この文をよめば小田村問題とまたく同じき心地こそすれ(註 またく、全く)

一月二十四日(金)

近頃身のおろかさをつくづく感ずる様になつた。他の人はもつと頭がするどいのにと思へば残念で仕方がない。

教室より外に出て

教室を出でて外気をすひ込めば生きかへりたる心地ぞせらるゝ

寒き風ふく廊下よりながむれば自然は清く大いなるかな

大いなる自然をみれば今にして我生きありとくしく思はる

一月二十六日(日) 自分の歌及び文章が不味いのは身体全体で歌つてゐない所から来てゐる事を養田先生の歌をよんで気付かしめられた。即ち小手先をもてあそんでゐる気がするのである。之が根本的原因と信ず。

一月二十九日(水) 八時過ぎ同信寮に行く。山口、大阪、東北より「すりぶみ」が来てゐて大いにはりきらされた。まことに同信生活に「しきしまの道」は伴ひ、文通は不可缺である。

読書について今感じたのであるが本は目を通したのでは駄目である。一句一句を体験に密着せしめてよまねばならぬ。読書は知を得るのではなく非常な体験となるのでなけ

れば駄目である。然らば本に向ふには武器を持つて戦はんとするに似た気持でなければならぬ。

山口の友に

嵐吹くさ中に雄々しく戦ひいます山口の友のひたに思はる  
友どちの破竹の如き勢を思ひやりても力わき来る  
嵐吹く天つみ空をかけめぐり友らと共に進む心地す

『をたけび』をよみて

『をたけび』を東北支部ゆうけとりて「しきしまのみち」をむさぼりよみぬ  
討死の決意言葉に表はれて雄々しきかなや東北の友  
み歌よみ「病みます」友の戦ひていますみ姿目にうつるかも  
「病みませる」友の病の一日も早くいゆがにひたに祈るも

一月三十一日（金）

バイブルをよみて

イスラエルの民の病も心をも清め行きつるイエスの意志よ  
異邦人の途みちに行くなと使徒たちに厳命したるイエスキリストはも  
羊を豺狼の中に入るゝが如しと云ひつゝ使徒を送りし心よ  
我は剣を投ぜむ為に來れりと云ひしイエスの決意かなしも  
この如きかなしく雄々しき決意もて戦ひ敗れしイエスの生よ  
今の世にキリスト教はひろまれどイエスの悲願は忘れやられぬ  
キリストの悲願をうつしくすべ給ふ大御心のあやにかしこし  
全世界を一にすぶる史的現実威力祖国日本よ

二月二日（日）

御製 孤島松

波たかき沖の小島のひとつ松いつの世にかも根ざしそめけむ

雄々しくもたてる小島のひとつ松深き思ひにみそなはし給ひけむ

日の本の遠つみ祖の建国の苦闘の様もしのびましけむ

日の本の国ひらかしゝみ祖らのはげしき戦しのびつゝ生きむ

み祖らの生命うけつぎはげみなばならざる事はあらじとぞ思ふ

二月十五日（土） 運動場の真中に出てホイットマンの詩を唱した。難しくてよく分らないが彼の高度な精神生活だけは感じられる。あふれる元氣もて天地万物によびかけるのが彼の生活だ。

二月十八日（火） 母上及父上より手紙及葉書が来た。母上のは特に鉛筆で記されたものであつて、二枚だけであつたが言々句々胸をうちつらぬき流涙を禁ずることが出来なかつた。かくばかり父母をなやまして誠に申訳がなかつた。時世の罪とは云へ自分の誠足らはずよく話しておいて心配をかけない様にすべきであつたのが文字まできたなくなつた葉書を送つた事何とも云ひ様がない。ほんとにハガキ一枚を書くにも前にいますか如く再拜して書くべしと思はしめられる。「大義親を滅す」と云ふ言葉があるが誠に



つはりである。いくら大義を行つてゐても親は滅することは出来ない。あくまでも親にひかれるものである。親に背きて大義を行ふと云ふことは云ひ得ぬのである。

母上が手づから鉛筆で書き給ひしみ文をよみて涙ながしぬ

母上のはじめての文かきましゝ御心しぬび涙ながしぬ

わがまことたらず父母をかくばかりなやましゝ事のひたにくやしき

二月二十一日（金）『岳南』第二号をよんでみると歯が悪いのも体が総合的に悪いからだと云ふ。頭に血がよく上るのも総合的によくない証拠とならう。

夕食後直ちに散髪に行く。二人分まつた。その間講孟余話を読んだが松陰先生は第一の鶏鳴にもう起きて天下を案じ同志を親兄弟を思はれたとある。自分などはとてもはづかしい次第である。

二月二十二日（土）東洋史は遂に支那事変の所には及ばないこと明らかになつた。

昔の出来事を知つたり時代の特徴を概括することのみが歴史と考へられてゐる。現実の

支那事変等には一言も及ばずして何の歴史ぞや。

電車で今市町の伯母上を訪ふ。車中つかれてどうしても本が読めない。大して弱い身体になつたものだ。伯母との話、いと宗教的のことゝなる。武夫兄（註 従兄弟、病逝）の死によつての打撃はこちらのとても想像がつかない。ロボットの如き感といはれた。然し之を我が父母の事に思ひをやれば我も死なれず。父母の事が頭の中にない様になると人間のやることは変になる。

二月二十三日（日） 今日、伯母上が武夫兄の死去について色々語られたのを思ひ出すに、「もし兵隊に行つてゐる間に死んで居たら」と云ふのが非常に出た。で今、自分は国民宗教を一般に普及せしめなければならぬ急を悟つた。戦死ならば何とも思はぬものを、内地で死んだが故に親の心は無に帰したるが如く思はれるのだ。吾等の職場職場をして無窮国体防護戦線の一戦地たらしめよ。

二月二十四日（月） 試験の発表があつた。故郷へしらせれば、又母上は氏神様へ参

られることであらう。父より又、師長には絶対に従へと云つたハガキが来る。御心にはうたれないわけにはゆかぬが実際は学校には従ひ得る師長はなか／＼ないのだから困る。

二月二十五日（火）外に出て春が来たと云へば四月の桜をすぐ聯想する。城山の下で新しい友と語り会ふ日は何時来ることやら。ほんたうに早く一緒に話したい。あゝ春が来たのだ。

三月十三日（木）皆より二十分程早く起きる。東の方、日輪の昇るをみる。たとへんかたなし。

朝自分が御製拝誦す。今日のはじめて心の底ひよりよみあげ身にしみて感ず。感想には絶叫す。のどのかれんばかりなり……

午後慰霊祭の準備。愛宕神社ですばらしい祭場をつくる。夜、火をたき慰霊祭を執行する。

献 辞

大君のみことかしこみ父母を里にのこしてわが海原わたり筑紫路さして発ちゆきし遠つ御祖よ。西に東に転戦し夷を払ひ打払ひ終つひに雄叫をたけび神あがりましましゝみおやらの悲しみたまよ。尊王攘夷を唱へて東奔西走し血を吐く思ひに幕吏の非道の手にかゝり武蔵の野辺の露と消えましゝ志士らよ。又われら同信のみおや、黒上先生はじめ諸々のしきしまの道の先輩よ。今吾らこゝに集ひてもろともみ魂安め参らせんとするこのいとなみをみそなはし給へ。吾らもろともに敷島の道に歌ひあげ天駟あまがひります神々の悲痛の国体防護意志を身内みうちに体し意志し国内に満てるもろもろの劣弱精神をそ根芽つなぎてうちてしやまむ、外国のあたなす輩ことごとく打ちてしやまむと、いさみ雄叫ぶをきこしめし給へや。

藤 原 邦 夫

三月十四日（金） 夜しきしまの道会。最も痛烈な攻撃をうけた。もつと日本語を研究せよと。言葉の難しさを痛感す。

三月十八日（火） 福沢諭吉の文集の序をよめば、彼の外国文化撰取の態度が示されてゐて面白い。今のインテリの学問の仕方とその意気込がてんでちがふのである。あくまで原理は「日本」であつたことはなつかしく思はれる。しかし徹底してゐない。

四月二日（水） 前の山に行つて木を伐り乍ら考へる。人によつて法を説くと云ふことがあるがこれは「人みな党あり、さとれるもの少し」と云ふことを前提とするものである。さとつてゐないが故に方便をつかふのである。すべての人にときたいのであるが人毎に私情があるからこれを利用して段々発明させる様にするのである。

自分を考へてみると自分程無能なものはない様に思ふ。何をしても成功なんかしさうではない。自然の流れに従ふより他にないのかも知れぬ。

寛容は美德であるが全部感心すべきでない。有時の決行がなされない事がないでもない。それには自信が必要である。寛容は相手を恐れてのそれではなく、「共是凡夫」のころにもとづいてのそれではなければならぬ。

四月三日（木） 常会に出る。何でも彼でも皆統制してゐる。もう一、二ヶ月もすればゆゝしき問題になる。唯国民の忠誠心に訴へるばかりだ。「不忠」とか「赤」とか云ふ言葉はこれからはあまりもちゐてはならぬ。一般に聞かせてはならぬ。安心と決意とを一般に与へることが最重要である。

四月四日（金） 最近食糧増産で大きわぎをやつてゐる。増産第一なんてスローガンはなさけないものだ。学生も大学生より小学生まで動員すると云ふ。大いに面白からぬ現象だ。

明治天皇御製 学生（明治三十八年）

世の中の風にこゝろをさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ  
おこたらず学びおほせていにしへの人にはぢざる人とならなむ

以上の御製を拜誦しまつて、学生をかりだすのは舶来の出鱈目であることを思ふのである。勿論勤労が悪いと云ふのではない。唯「いにしへの人にはぢざる人」となることが問題なのだ。知育偏重だつたからと云つて野山へかり出すことが正当なる処置では

ない。それは無学者の思ひつきである。勤労はよいけれども命ぜられて働かされるのは学生のとる所でない。憂国の情やみ難く、われらも一歟なりとお手伝せむと云ふて働くのは「いにしへの人にはぢざる人」とも云へるであらう。しかし乍ら牛馬の如く無生命にされて何の体力、何の学問ぞや。

四月五日（土） 早朝御製拝誦す。

大御歌をろがみよみてやすみなき大御しらべにめさめられつも

日本語の妙味を知らざること久し。日本語は一語一語力強く空虚な所なくしかも角なくひびくものである。

迷ひとは沈滞の謂であつた。全体生命を感じなくなることである。「具体的にひらく情念の無限世界」のないことである。今まで迷つてゐた。しかもそれと気がつかなくなつた。早く松江へゆかねばならぬ。

四月六日（日） 自分が死んだら釈迦に引導はたのまぬつもりである。



仏詣でをしても自分は祖先をこそをろがむ。アミダ様は拜せぬのである。

歌がしきしまの道として、月花のもてあそびより全体生命にふれる道となり、全国民に拡められることはこの非常時に際し最もねがはしい事である。

憶念は生活を指導しなくてはならぬ。さうでなくては憶念とは云はれない。古の吉野を思つては春なほ寒く、国民のことを思ふてはあつしとも云はれぬとのたまひし大御心を仰ぎまつるのである。あくまで想像ではだめである。今市の伯母がゼイタクはしようと思へばいくらでも出来るが出来ないと云はれた心を又仰ぐのである。思想が精神（生命）の弾力であると云つたのはこの辺の消息を云ふものであらうか。

四月八日（火） 六時頃起床、洗面、神仏に祈願、朝食（ウメボシ、ダンジャコ）の心づけあり、出発、母は神社の前まで送つて下さる。父は神社へ共に参り又駅まで送つて下さつた。最後まで心にかけて乍ら来てしまつた心ぐるしさ。松本の伯母も門に立つて見送つてくれたが今日こそは拝むやうな気がした。父母の事がたのまるゝのである。

中村、川井、小生三人で高山彦九郎の遺文に接す。楠公の死に比す。楠公は賊手を一



手にひきうけてうらみ骨にしみてたのみなく死す。高山は否、後にたのむところあつて死す。松陰の如し。

外国文化は祖国防護の戦によつて撰取生命化せられるものであつて、防護意志がなくなれば外国文化の中毒にあふのである。政治、教育共に神社を中心とすべき所以もこゝにある。

四月九日（水） 国积法華經を買つて太子の法華義疏を研究しようと思つたがどうも原本が両者違つて面白くない。太子の「言ふこゝろは」と云つて言を出す心理を憶念せさせ給ふのは、明治天皇の、巖上の松にさへみ心をそゝがせ給うたのと比較して学ばしめられるのである。

（註 遺詠、遺文は藤原邦夫遺稿集『靈戦』による）



十、池田正一



池田正一

大正十五年一月二十四日、米蔵の長男として川崎市に生れる。昭和十三年、東京府立工芸学校に入学。のち結核に冒されながら、高等師範学校進学を志して努力してゐたが、十八年一月二十日、つひに不帰の客となる。数へ年十八歳。同年末、遺稿集『留魂』（A5版、騰写刷一二九ページ、写生画など挿入）成る。彼もまた、藤原邦夫に続

いて「思想戦の戦死者」として祭られてきた。

彼は絵画を能くした。日記は克明で、大東亜戦争勃発後のそれには、国難の到来を敏感に受けとめてゐたあとが顕著であり、自己の病状についての記述は殆んど見出せない。二回にわたる病氣休学に挟まれた期間（昭和十七年の上半期）は、小康を得て全力を奮つて活動した。その状況は、本



世

書に収録する通りである。

死の前日、家人に日本人の道について、二時間に亘って所信を説き、医師に「此の儘では死に切れないから切腹させて下さい」と懇へたといふ。当日、夜明けを待つて訪れた友人に「仏には成らない。神と成つて御国を守る」上海に居られる先生には知らせるな。

自分で会ひに行く」と告げ、『明治天皇御集』一巻を胸にいただいて逝く。先生とは、小学校の恩師で同信団体「猶存会」の指導者、小淵武氏である。同氏はその追悼文の中に「無双の死」とも、また「当代の志士」とも讀へ「涙を拭つて彼の信 天皇陛下萬歳に生きよう」と述べてゐる。

辞

辞 世

ますらをのたまをかぐみにみがきたるこの身にあれば惜しからめやも

昭和十六年 — 十六歳 —

舞ふ鳩に碧空高し明治節

ひとすぢの探照灯さつと闇を截る

戦車行く轍の跡に野菊かな

落葉積む山路つめたし神詣

時雨しぐるゝや灯のにじみたる酉の市

車ゆく音からからと冬の朝

綿入れを縫ふてる母に燈を下げぬ

南天の実の美しく霜烈し

霜枯の畦に陽負ひて子守唄

はるかへし障子に映ゆる夕日かな

郷里にて

水青き初冬の利根や不二白し

昭和十七年一月一日 靄深き皇居眼のあたりに、赤子等わき上る熱塊をぐつとこらへて、萬歳。萬歳。静かに流れる、君が代の声、いつの間にか自分も歌つてゐる。

無念無想の一時。清麻呂の銅像までとは、いたんで来た足をひきずつていった。ほつと一息すると寒さがひしひしと感ぜられる。(註 和氣清磨像は大手門前から靖国神社に向ふ途中) 靖国神社で参拝した時の気持。丁度月光の如く澄んでゐた。理窟を言ふまい。たと熱誠、熱誠あるのみ。

ぬかづきて皇居拝せり東天紅

(註 猶存会会員はこの日、前夜深更母校鷹番校発、強行徒歩参拜をした)

一月二日 大いなる時代にあひて日の本の御民ぞ我らうれしかりける

鷹番の級会で遠藤は五ヶ条の勅諭を実行せむと言ひ、蛭田は今迄にない大きな自覚を

述べた。即ち、八日の感激の披瀝が立派であること、皇国史の研究がなされつゝあるといふことである。松宮、大庭共に公憤を論ず。

大いなる時代にあひて我もまたゆかむと思ふ大丈夫の道

小淵先生はたゞ、公憤よし、然れども深く考へよと言ひぬ。遠藤、渡辺と語らひて藤田宅で談笑をまじへたり。深更に及び「蒙古来」を吟ず。

マニラ落ちたり(中略)現在までの報道ニュースが如何に貴重なものであつたかを覚つた時、一枚の新聞、一片の記事をも感謝なく見ることは出来ない。

一月五日 大祓の祝詞を書写した。丁寧に書いたつもりだがよく見たら割合乱筆であつた。日あたりにごろりとなつたが物足りなさを感じて、『草枕』を出してひろげた。以前国語の「峠の茶屋」を読んでから漱石がすきになつたのである。夕立にあつて、ぬれた漱石と茶屋の婆さんと雨があがつた景色と、とても斬新な、愉快な、すが／＼しい気持がいつまでも忘れられずに、漱石といふとすぐ頭の中に浮かぶ。そして漱石と『草枕』、この関係が強く働く。いゝ月夜だ。

一月六日 轟々と天地をゆすり銀翼一千帝都の空を征く。老若男女を問はず、仰ぎ見る者をして、益々皇国の偉大さを知らせたのだ。己の職分を完うする時の姿がこれなのだ。光る銀翼が目にはいたい。

あかつきの雲破れたる大空に益良猛雄の華と散りゆく

マレーの空に、はたまた幾千里の海上に靖国の華と散りゆく、大丈夫の勇士燦たり、世紀の朝。

一月七日 醉生夢死に終ることは誠にあはれであり且又残念とする所である。『啓発録』は「立志」の編で醉生夢死を、訓へて居る。如何にせば有意義に悔いなく生命を終るか。正しいと信じたことに対して心ゆくまで、満足するまで、躬行実践してゆく、うやむやに過ぎない、このことが大切ではあるまいか。一つの言葉、一つの行ひ、これに自己の生命を生かすべきだ。後世名をあげる大器晩成も良いだらう。然し現在の自分を現在の心境で生かす。即ち誠実に悔いを残さないといふこと、これが人生を明朗にするであらうことを疑はない。(註 『啓発録』、橋本左内の著)



一月八日 我を捨てる、このことはいつの時代でも自己鍛錬の第一歩である。我を捨てるといふことは自己は如何でもよいといふのではない。むしろ、自己がその資本である。自己を磨くには先づ我利に目がくらむ様ではいかんといふのである。心を大きくして他人の為に力を尽せば自分がかへつて他人から尽される様になつて来る。此の道義を知るべきだ然して行ふべきだ。己のまはりの人々がさうだ。世の中が、そして世界が。日本は今、大東亜の為に己を捨てゝ戦つてゐる、正義の為に。その姿を見て東亜の何者が反抗するか。かへつてこれに尽力して居るではないか。その日本もかつては、あらゆる苦難とたゝかひ、ひたすら己の鍛錬をおこたらなかつた。大詔奉戴日にしるす。

一月十二日 大東亜戦争と吾等の覚悟と題して筆を進めたが一枚二枚と書いてゆく内に、初めの興奮がさめ、ぐんぐんと己を三思の深淵に引きずつてゆく。はつと思つた一瞬、いままでの、覚悟として書かれた原稿が虚言に近かつたことに気付いた。何故なら己は今自身の鍛錬、それこそ大東亜戦争に当面したる自己の全力を傾注すべき方向なのだ、それが根本だ。徒らに社会の一部の者に対する公憤を述べて、自己が之によつて根

本をおろそかにすることは之亦公憤とする所なり。真の若人は健全たるべきだ。

戦捷の春つゝましき福寿草

一月十七日 小石川の伯母曰く、広師（註 広島高等師範）に行く考へなら、その考へを以て東師（註 東京高等師範）にしては如何。東師なら懇意な先生もあるし、何かと指導給はらば、身の幸、聞く所、浪人出来難き由、東師なら四月からでもその気で勉強すれば大丈夫ならむ、まだ先長い話故、と。

男子は初一念をまげず易を欲せず、たゞ満身の努力を以て初一念を貫遂する迄なり。約束の土曜日、三名ともに有意義を感ず、四方に論を飛ばして深更に及ぶ。

一月十九日 学習には教科書を中心にして学ぶことが大切なり。数学によらず、皆好まぬ学科は始めから敬遠してしまふから宜しくない。書を見もせて難しいと一概に思ひこむは学習態度のよからぬ一つなり。文を見てしみじみ味ひぬ。鈍愚はよろしく百再の労を取るべし。

一月二十四日 大神の社御前に嚴として襟正し伏す真まこともて（註 祖父と伊勢神宮参拝）

朝の光が杉の大木の間から燦としてもれ、白鳩の餌を求めてあるくありさま、実まことに静かで、又身も心もきよめらるゝ思ひがする。五十鈴の冷水、神苑の木立、参拝者の足並み、一触一感、全霊が我が 大神に通ず。

（このよき日は我の第十七回誕生日である）

何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ（西行）

本当に、ぬかづく膝の上に熱い涙の流るゝなり。たゞかたじけなさに、云ひあらはし様のないうれしさに。

一月二十九日 友に送る

お前は何を望む

金か位か煩惱か

小さい小さい

見てごらん不二を

俺は不二を望む

黙々として世にこびず

大きく笑つて雲の上

生もない死もない

此の超越の姿こそ 美しい

去る二十五日汽車の内より夕映の不二を望みて詠む

一月三十一日 風が強い、午後祖父と靖国神社に行く。

遊就館を見る。戦争の場にたふれたる我が忠烈の士の遺物を拝見すれば

「若人、おん身らは皇御国すめらみくにを背負ひし者ぞ、起てよ、努めよ、おん身等こそ我等の後跡を継ぐ唯一の者ぞ、おゝ日本の若人よ、健やかなれ」

と烈々、血涙をしぼつて叫びつゞける忠霊に、我しばし黙として動くあたはず。

我等は皇国の臣民ぞ、大君の辺にこそ死なむ。

尊大なるかな日本、偉大なるかな我等の生命。

二月一日 純白の雪を見てみると、思出されるのは建武の中興の忠臣楠公で、彼の清い純忠の生涯を思ふ時、この雪の白さが、彼をたゞへてゐるかの如く見えた。そして楠公が消えると、読本でならつた孔明の一ヶ所を口ずさんだ。(註 孔明、蜀の忠臣・諸葛亮孔明)

雪ふりみだるゝ冬のあしたに

風なほ冷たき春の夕べに……

雪を見つゝ渡辺に便りを書く。何ものにも屈伏せず。此の一条を認む。

二月十六日 戦場を偲びて左の五ヶ条を實踐すべし。

- 一 本分を尽し真摯敢闘の事
- 一 英靈に恥ぢぬ一日を得る事
- 一 自然に服従する事
- 一 生命を大切にすること
- 一 忠孝の大本を片時も忘れざる事

感謝の誠を尽し、以て男児の真面目を發揚すべし。

三月二十三日 大庭と遠藤と三人で『猶存』を書く。同窓会の檄文を印刷する。

(註 『猶存』、本人所屬の同信団体・猶存会機関誌)

### 同窓生及び父兄の方に

大詔を下し賜はつた十二月八日は、臣一億が新たなる希望に燃えた感激の日でありました。大いなる時代にあひて、私達若人はやむにやまれぬ熱血の激流するを如何ともしがたいのであります。そして私達の感激を、相互の意志疏通の機関であり機会であるべき同窓会を通じて交通せしめ、更にその感激を深め、尽忠報国の決意を高めたく思ふのは、単に私達のみならず、諸兄も御同感のことゝ存じます。やゝもすれば薄れゆかんとする人情を、同窓会により日本伝統の美風たる「和」に帰せしめ團結することは、戦時下日本の喫緊事であり、銃後を護る私達の義務であります。しかるに、母校も、其の名を国民学校と改め、今や第十回卒業生を世に送らんとしてをる時、未だ同窓会の結成を見て居りませぬ。これに対し、最近一部の同窓生及び父兄の方々の間に、これが結成を期待する気運の見えます事は極めて当然の事でありまして、誠に御同慶に堪へませぬ。云ふまでもなく同窓会は、其の結成を実現させねば、如何に期待しても無意味でありま

す。同窓生、父兄は一丸となつて学校当局に同窓会結成の実行を迫るべきではないでせうか。

諸兄の心からなる御協力を期待して已まぬものであります。諸兄に於て、同窓会の必要性を認められ、それについて御意見など吐露していただければ幸に存じます。

諸兄の熱誠溢るゝお便りを希望致します。

鷹番国民学校第六回卒業生有志

薄井 宛 (註 府立工芸の先輩) (前略) 私は先日の空襲以来本当に日本の為に死ねるといふ事を実感致しました。私達は戦争をして居る兵隊さん方と少しのかはりもありません。一刻一日が弾丸の中をくゞつて居るのです。武器をとらぬ私達は強い精神力で見えぬ弾丸の中に突進致して居るのです。私達は不滅なる神洲を信じて居ります。絶対に不滅であります。ねがはくは

兄が神洲不滅ともろともに永遠に生きてゆかれんことを。

軍神の遺歌を再び詠み味はひたいと思ひます。(註 軍神、ここでは古野繁實海軍少佐。三首とも、同少佐の作)

君のため何か惜をしまん若桜散つて甲斐ある命なりせば

いざ行かむ網も機雷も乗り越えて撃ちて真珠の玉と砕けむ

靖国で会ふ嬉しさや今朝の空

私もしさゝか遺歌を詠みて感ずる所あり

あゝ散りし九軍神

若桜散りし命は大君の御楯となりて我等受継ぐ

七度も生きかへりつゝ夷をぞ攘はむ心われ受継がむ

及ばずとは思へど所感となす。(下略)

(昭和一七・五・四)

(書翰から) 教育勅語を拝誦しまつりて

あゝわれらみ国背負ひしつはものぞたゞに真直ますぐに「斯ノ道」ゆかむ

学校の事もいろいろ苦しみましたが、私もどうやら四年生として仲良くやつて行ける様になりました。級の間に自治会の様なものを作らうと級長にも話しました。事有るにつけて一步々々進んでゆきます。

(昭和一七・五)



五月二十六日 明治生命講堂にて開かれた井上良一独唱会に行き、芸術的雰囲気の必要さ、又なごみ、といふ気持を持ってなかつたことは此の独唱会の一大欠点であることを感じた。会場の重厚さに調和せしめ、一輪の花があつたら。

始める前に静かな曲のレコードが聞けたら。挨拶もなしにいきなり歌ふとはもう最初に於てまづい。

「浜辺の歌」又「いてふ」「風光」「木の葉」「少年」等の歌は本当によかつた。しかし少々洋曲のくせが入るのがいやだつた。

七月十九日 先生行かれたあとの第一回の級会を開催した。集る者八名、真剣に批判討議をなす。又同窓会の感想を述べあひ、積極的に第六回生の結合を致さむと決議す。功兄の母が見えられ、彼の病気を告げ欠席をあしからずと伝言下され、我等の今日の会合を益々力づけしめられぬ。かく熱心な友もあるのだ。泣けさうになつた。先生行かれたあとのこの淋しい会を、本当に発展させてくれるのは皆、かゝるつながる思ひによつてであると感ぜしめらる。八人で先生に寄書を送る。(註 先生、猶存会指導者・小淵武)

## 北富士野營の所感（感想文）

掲示板を見て北富士野營の件を知つた時は、今迄に噂されてゐた夜行軍、試験後の野營、それが皆の予想を裏切つて、意外にも早かつたので驚かされました。此の時、本当に野營の意義も解せず、たゞそは／＼とした嬉しい期待を抱いて居つたことは、今にして赤面致す次第です。小雨模様の二十二日、私は、寸時、雨に弱い身体故、天気も悪いし、如何せんとためらひましたが、一年に一度の大切な演習、そして皇軍の赫々たる戦果に答ふべき錬成の野營、又この機会に、協力、団結、責任感等の修練を積み、益々精神の向上をはかり生徒の本分を歩まむとする野外演習であると、教官殿の申されるお言葉に、目覚めしめらるゝを感じ、万難を排しても参加致す決心を致しました。

幸ひに体の具合もよく事故なく見学致すことが出来まして、よろこびに堪へません。

二十三日。早朝の事で電車の便悪く、五時二十五分の電車まで待たされ、あせる気持

を落着けんとして苦しんだ。其の車中に藤木教官殿を見出し、少々落着いた気持になつたが、かゝる事柄も、充分調べておけば出先においてあわてずにすんだことを感じました。

駅前で、皇居を遙拝したとき、心のしんからびんと伸び、斗魂の燃え上るを禁じ得なかつた。死地に身をさらす、此の境地で演習を見学せんと誓ひました

元氣な中隊長の宣誓を聞きつゝ、訓練に制限なしと堂々世界に叫んでより、正々と夷狄の圧迫に戦つた祖先の面影を思ひ浮べた時、戦友達の一層訓練に心構へる心の緊要なるを感ず。互に演習中に於てみがかんと思ふ。汽車輸送の際の自覚的行動は工芸健児の気概を充分發揮することで、互に慎み、いましめ合ふ無言の思ひを感じた時、心の晴々する、明るさを思はしめられたのです。

汽車が山脈を縫ひ初めた頃、冷気が身にしみ呼吸の荒くなつたのに心配したが、さ程のこともなく、車中、分隊長、又、兵の、真摯な勉強振りに接した時、吹飛ばされてゐた。戦場に向ふ勇士の様な感激にひたりつゝ、其の間、大月で乗りかへ、貨車にゆられて、吉田に着いた。街は静かで気持がよい。

浅間神社での休憩は、長道を覚悟してゐただけに、案外にも思ったが、杉木立の元に腰を下した一時は忘れられない。

途々尖兵の動作を見学したが、見学者の態度には気魄がない恥づかしさを感じた。共に戦闘して居る此の気持を持ちたい。小雨降る。梨ヶ原を行く。身軽な自分達でさへ苦しいのに執銃の友等は如何と思ふ。廠舎はすぐだ、とお互にくりかへしつゝ進んだ。自分は大変元氣であつた。ホルスト・ベツセルのナチス党歌等が沸々と胸内に高鳴り来つて、益々士氣旺盛と云ふか。廠舎近くなつた頃、戦友が一人、二人と倒れた。背囊も銃も持つてやらう俺が、と思ひ来ると淋しくなつた。

廠舎の前に整列した時、やれやれと思つた。目の前の山塊が清々しい。自分の居所を定めて、持参した昼食をとつた。時計が大分廻つてゐた。入浴は本当に愉快かつた。川村先生も一緒に入られて、背中を流す者、歌をうたふ者、泳ぎ出す者、一日の疲れを忘れての入浴。富士が見えると一人が叫んだ。

本当に窓越しに美しい富士が見えた。そして、此の高原にかうして温い湯煙につままれて入浴出来るうれしさをひし／＼と身に味はつた。

夕食だ。ラツパが鳴る。昼食も遅れてゐたし、また、夕食には早過ぎる様な感じだつた。驚いたことには御飯の充分過ぎる事だ。残すのはどうかと思つて、無理々々食べたが、苦しかった。

夜の訓話には一同で軍人に賜はりたる勅諭を奉誦致しましたが、唯一つの誠心こそ大切なれとの大御言葉に、誠に誠心なくてはと奮起致しぬ。轟々と屋根を打つ雨にも優る大声上げて団欒の一時を歌ひ続けぬ。藤木教官殿の琵琶歌は残念にも聞けず、今以て心残りがあります。消灯！ 疲れてゐるので皆すぐに安らかな軒を立て始め、いつしか自分も目を閉ぢた。張りつめた一日だつた。

二十四日。『よいしよ』掛声も勇ましく起床ラツパともろともに飛び起きた。洗面をすませてゐた者等もゐて、笑ひ合つたりした。両肩がばかに痛む。朝の体操、私達は互に此の高原に一ヶ月程も暮したら病氣もなほるなあと、見学者一同で嘆息した如く、朝の廠舎、かすむ山々を眺め、大気を吸つて体操する友等を見、富士の偉大さに感嘆致しました。鯉織の様に、大空を一のみにせんばかりに、清い空気を、胸底までしみ入らせ

た時のよろこび。

胸はりて大空眺め息吸へばあゝ清新の血よおどりわき立つ

一気に朝食を平らげた。小隊長から廠舎の掃除を命ぜられた。土間を一通り掃いたが、案外骨の折れるものだ。牧田、増沢の二名が具合悪くして床に臥してゐるので、機嫌などたづねたが、わりに元気だった。増沢が少々発熱の模様であつたので、掃除を終へて、先生方に連絡に出た。それから皆の演習地に帰つて見学す。巍々として千秋に聳ゆる不二を前に後に右に左に、山麓に演習する私達の使命のいかに重きことか。教官殿の熱心な御指導には、たゞ／＼有難く感じ、見学の身も、銃執る者に劣らぬ、燃ゆる思ひの、禁じがたきものを感じず。午后の分隊戦闘教練には、本当に身の病がなげかはしかつた。

戦友がしかられた。機銃の両翼に増加する時の五番以下の動作が、何度云はれても、出来ない。私もじれつたかつた。やはり都会生活の惰気が一掃されてゐなかつたといふこと、本当に戦陣にのぞむ覚悟の出来てゐないこと、昨夜の勅諭を如何に奉戴致したのか、見学してゐる自分が苦しくて堪らぬ。足下の草叢を思ひきりふみつけた。演習が終



つて、見上げた不二は、すつきりと其の靈峰を中天につき出しつゝ出してゐた。教官殿から「休憩十五分、大いに不二を眺めよ」とお言葉があつた。

夏草繁る高原に、ごろりとなつて、じつと富士を見つめてゐると、偉大なものにつながる血汐を感じ、何がないうれしくなつた。手帖を出して、不二を書いた。友等も、しきりに鉛筆をはしらせてゐた。軍歌を唱ひながら廠舎に帰つた。入浴の一時が訳もなく戦塵の顔を笑ますのです。夜間の教練に附いて出た時、寒さが身にしみ、ろくに見学も出来なかつたが、教官殿に先生が、我等の寒がつてゐることを伝へられた時、教官殿が「寒いか」と一同に問はれた。私は一瞬、「寒い」と腹の中で叫んだ。いけない、こんな事では、と自責の念にかられたが、寒いと正直に答へるのが率直だとも思つた。皆、はつとしたらしい。「がまんせい」と大喝された。私は身体がびり／＼とふるへた。夜襲等を撃滅する戦闘教練を暗き山麓に展開し、土氣益々旺盛に、夜間演習を終へた。廠舎に帰ると夜食のうどんが用意されてゐた。暖い思ひやりを感じ、胸がつまつた。一睡後、不寝番に起きた。

ねむくてよわつた。今朝「皆にねぞうが悪いなあ」とからかはれたが、さて自分ばか

りかな。明日は皆に話してやらう。そんなことないぞと思ひつゝ、又次にかはつた。

三十五日。ザザーと雨がトタン屋根を強く打つてゐる。武装すると小降りを見はからつて、広場に集合した。馬小屋で雨の上るのを待ちつゝ、学科を学んだが、益々盛んになつて降りつゞく。一応廠舎に帰ることになつた。雨の中に飛び出すと、もうぐつしよりぬれてしまつて廠舎に入るとすぐ火を起して服をかわかした。雨に打たれたので、随分体を心配したが火をかこんでゐる内に、元氣も出て来た。綿引教官殿の学科が続けられたが、講義半ばにして、思ひがけなくも遠藤先生が来られた。最後の一日を立派に過ぎさうと決めた。昼近くなつたら雨も小降りになつた。

山中湖の方へ出かけるかも知れない、と皆云つてゐたので楽しみにしてゐたが、雨が降つたので取止めらしかつた。ライスカレーの昼食と聞いて、よろこんだ。食事のラツバがとても待ちどほしかつた。塩味のないライスカレーには、さすが期待がはずれたが、甲斐には昔から塩がないのさ、とか上杉謙信が死んでしまつたので塩がもらへないのさ、とユーモア的な話題に、談笑しつゝ頂いたことは、思へばよいことだと感じまし



た。不味いとさも大人ぶつて云ふ者達に對して、始めから苦々しく感じてゐたが、私はこの高原で魚を食べたときの嬉しさ。考へれば、もつたいたいと思ひました。それなのに、不味い／＼と、云ふのには痛憤をおさへることが出来なかつた。一体、君は、いただきます、ごちそうさま、を誰に云ふのかと問ふた。すると彼は一言得々として、豊受の大神様と答へた。しからば不味いとは誰に云ふかと問ふた。彼は答ふることが出来なかつた。廠舎にあつて誰しもが食の不味いことを云ふた。自分も不味いと感じた。しかし、それが小さなことであると感じ、話すこともなかつたが、友等の心を憫べば憤然たらざるを得なかつた。

あれ程降つてゐたのに、もう晴れ上つた。

案の定、山中湖行きは中止、小隊戦闘教練を以て最後の演習となつた。広い草原で、空砲を撃つてゐる友等が、無性に羨ましかつた。戦闘教練の雄大な形成にも、胸がわく／＼した。皆、一生懸命だ。しかし、私は、突撃の号令がかゝつてゐながら、平気で、——多分空砲を全部撃ちたかつたのであらうが——射撃してゐる分隊を見受け、**“突撃”**とどなつた。

一番あとから、のこ／＼と突撃した兵が、口惜しくてならなかつた。小さい／＼こんなことに心をうばはれて、戦陣の気持を忘れてゐるのには、残念だつた。防備軍の方が士気旺盛なので驚いた。演習終りのラツパが夕暮の山麓にひゞいた。結局、決意のない戦闘教練が行はれたに過ぎない。一切の障碍もこゝにあると思ひます。戦友の水筒を共にさがしてから廠舎に歸つた。

明日は非常呼集があり、又帰校なので、夜は早く消燈になつた。然し、廠舎は消燈後も、騒然としてゐて、何時迄も静かになりさうもない。“静かにしろ”と左右の者に、又は他の隊に注意したが、かへつて反感を買つた。日直、不寝番の取締りの不十分なことには、寝ることも出来ないはがゆさを感じた。静かにねようと決めて目を閉ぢたが、なかなか寝られない。すると隣の部屋から、藤木教官殿の怒声が聞えた。皆、はたと静かになつた。私はぐきりとした。なぐられてゐる者は直感的に自分等の小隊であることを知つた。教官の云はれる、何のために演習に来たのか、又、断腸の叫びに、たゞ申訳ないと感じたがそれは、たゞ其の者のみに云はれた言葉にあらず、全員への訓戒であつた。毛布の中で、私は、齒をくひしばつて、泣いた。責任感といふことは誰もよく知つ

てゐる。しかし知ることがいかに無意味であるかを感じた。日直も不寝番も起きてゐながら、よくも戦友の失態を見てゐられたものだ。無責任極まりない。たとへ見学者でも私は第三小隊だ、毛布をけつて单身教官殿の寢室に戦友の失態をわびたがゆるして下さらなかつた。今後の行動如何だ、といはれる。本当に今後のお互の錬成にあると感じ、氣持をくんで戴いた。寒い野外に立たされてゐる戦友を思ふ時、彼一人の失態ではすまされない。それは小隊の不名誉だ、そして中隊の不名誉だ。かゝる問題のあつたことは野営中を通じて一番惜しいことである。将来、大東亜の指導的地位に立つ我等がかゝる無責任なことではいだらうか。良く考へねばならないことだと思ひます。

帰校して、藤木教官殿は、富士の姿と我々の内心とを比べられたが、貴重な訓話だと思ひました。又、廠舎の女達の態度を賞せられて居りましたが、恥入つた次第です。

北富士の四日間は、実に貴いものでありました。私も一層学校教練の重大さを認識して勉強につとめんと決意しました。此度の所感も、自己の内心の決意なくして書かれるならば何の野営の意義も感ずることが出来なかつたことに外ならぬと思ひます。率直に野営中の氣持を述べた次第です。

雷（八月一七日）

大空をおほへる雲のあしはやく澄みたる空の消えはてにけり  
いなづまの黒雲破り光れりと見る間もあらで雷鳴すごし  
地軸をば流さむばかり雨は降り雷鳴身边に狂へるごとし  
いなづまの縦に一条轟然と地軸もわれむ落雷のおと

一学期を迎へて

文机のところを変へて新たなる学ばむ決意に燃えたつ我は

みかへしの端に胸内の思ひを（八月二九日頃）

今の世のみだれる教へ浄めむと雄心燃ゆる数ならぬ身も  
愛し子にあとをたのむと強く云ふ師のみ心は語りつたへむ

（註 師の日記をよんだ所感）

友人宛 前略 一別以来十余日を送る。過日の無礼はお許しの程を。男子が切に悔  
いてこゝに非礼を謝す。語れば長い思ひに胸がいたむ。しかし省略の止むを得ざる今、

簡単に其の後を述ぶ。吾、二学期登校すること二日、其の後は病める身を床に横たふ。肺炎カタルなる由にて、今後一ヶ月の安静を宣言されたり。その後は専ら身体一方に心して行かむ心算なり。退学することになるかも知れぬ。吾にとりては三度の難題。この度は決心致し居ります。一時を得て便りいたすも、み親のみ心をいたためつる程の病ひ。今胸内の思ひ書きつゞるもかく悲し。兄よ、我が不明を責めよ。

吾は生命消ゆるまで、御製一卷をしるべに生きむと悲願立て申しました。

草々 さよなら

(昭和一七・九・二二)

夕立

ひぐらしのなくね淋しき吾が窓べ友らのみ便りひたまちに待つ  
夕映えのひろきみ空のをゝしさに心うたれて吾はみつめぬ

決意(九月)

ますらをの靈を鏡に露の身もさゝげまつらむ大君のへに

長期戦論者よ目覚めよ

長期戦論かしましく日ごとくにつのるぞくやしき

うつそみの身は病めるともをごろのはやりたかなり憤ろしき

更けゆくまゝに（二〇月二日）

軒端うつ秋雨の音一人きく心静けし更けゆくまゝに

ほそぐと降る秋雨に夜も更けていづくにか泣く虫の音高し  
一人居のもだせる思ひ友どちに早く語らむ時こそ待たるれ

柿

故郷ゆ送り来りしうまし柿手にとり見ればながめあかぬも  
国守るをごころなくば百年のいのち保つも甲斐なきことよ

りんご

うるはしき二つのりんご手にのせて友らのあつきみ心偲びぬ  
つややかに光るを見れば何となく心なごみて涙こぼるゝ

友どちのみ心こもるりんご二つ神のみまへにそなへまつりぬ

たそがれ

たそがれのくるゝもしらでをさなごの遊ぶを見れば心たのしも  
くももなき夕なぎの空ながめつゝ故郷の山々思ひうかべぬ

晩秋の朝

薄みどりくまなくすみし大空を一人ながめぬやみどこの上に  
さはやかに大空はれて枕べにさく白菊のゆかし色はも

梅津兄へ (註 府立工芸の友人)

お便りひらきみれば

苦しみの跡か文字も乱れて

幾度かよむ吾の

胸内もくるし

あゝ友よ!

なやめる思ひ黙しつゝ

心の底を語らばで

苦しみ進む

唯一人して

友どちよ！

吾らは同じはらからぞ

日の本守る若人ぞ

たぎる血潮は

神代より

汝が身に

吾が身に

受継ぎて

君の御楯と誓ひしに

なやめる思ひ語らばで

など去りたるか



友どちよ!

思へば吾も幾度か

苦し思ひに耐へかねて

千々に心の乱れしを

友どちあまたに励まされ

たどり来にけり

学びの道を

落葉

はらはらと風に舞ひ散る紅葉葉に秋のなごりのしのぼるゝかな  
吹く風にはらはら落つる紅葉葉の一葉ひと葉に薄日かげりぬ  
あかねさすみ空もいつか薄らぎて枯木に吹きくる夕風寒し

たゞならぬ(二月三〇日頃)

曇日の大きき空をふきわたり風とよめけば胸内ふるふも

たゞならぬみ国の秋を意気地なくいたづき過しぬあゝ三月  
とくなほり友らと共にひとすぢの道をさぐりて戦ひ進まむ

夕空（二月十日頃）

ゑのぐにて写さばいかにあらはさむみ空をわたる雲のさまぐ  
うす雲のいつしか消えて暮れわたるひろきみ空を鳥飛びゆく  
風やみていつしか暮るゝ大空にまたゝく星の光うつくし

正月には起きられるかと聞かれ、師走も半ばになりになれば心待たれて詠める

歌よめぬ苦しさはあれどこのごろは暮もつまりて心待たるゝ  
このごろはあふ人ごとにやみ人と思へずなりぬといひてくるゝも  
よきしらせあまたの友に知らせむと端書をとりにて便りしたゝむ  
いたつきの身にさはるとふたらちねの言の葉聞けば心悲しも  
とくなほり安めまつらむたらちねの休むひまなき心のうれひを

み便り来る（二月十五日）

友どちの便り来ると家人のわたしくれたるなつかしき文

母上の筆のあとかと思はるゝやさしき文字のみたよりにして

母に早くよくなる様切望されし時詠む

生きてよとひたねぎたまふ悲しさにたへつゝ生きむ身は病めるとも

思ひよせ病める吾が身をいととしてひねもすみとる母上あはれ

心をば静めて母はいひたまふおやおしへをよくまもりてよ

親思ふ心にまさるとうたひてし悲し思ひに涙流れぬ

宛先不明 戦ひは実に私達の内心の敵たる盡忠意志の欠落を撃つことに外ならないと思ふのであります。長期戦論に曇如たるが如き、又、私達が学んで来た世界歴史のどこに百年戦争の勝利が明記されて居つたでせうか。実に百年戦争は人類の愚昧以外の何ものでもないではありませんか。畏くも「速ニ禍根ヲ芟除セヨ」と詔あらせられますを拝し、又「はやくはらへ」と祈らせ給ふ大御心を仰ぎ奉るだにも、長期戦論は違勅なことを痛憤致すのであります。その責任はかゝつて私達の責任でなくして何であります。不忠懺悔求道精進背私向公のみが私達に残された唯一の道なることを確認致すの

であります。青年こそは時代の決定者です。されば私達が今日一日の思想的学術的研鑽の怠慢は、次代の苦悶への誘導に外ならないのであります。海軍魂の伝統なくして今日の海戦に勝利のないことは現実の歴史に明らかにされた所ですが、国民生活に於て現代の苦悶を青年自らが開拓することなくしては次代の光明は来るべくもありません。開拓するとは現代に於ける不忠意志の責任の分担をはたすことであり、懺悔求道することにあります。

明治天皇御製を国民宗教の教典と仰ぎ奉りて、求道致しますことによつてのみ速かに世界の禍根が芟除せられることと考察致して居ります。しきしまの道、そは、神のひらきし敷島の道をふむことによつて……

(二月二七日頃)

昭和十八年——十八歳——

大庭匡宛（註 鷹番小学校の先輩）たび／＼のお便りありがとうございました。暮の二十七日頃より感冒をひき軽い肺炎をひき起し、苦しい正月を迎へました。熱がなか／＼とれず、毎日をあへぎつゞけてをります。

益々激しくなりつゝある戦ひを思ふにつけても早くなほりたいとそのみです。病床にたふれては死んでも死に切れません。国民生活の苦悶の中に雄叫びつゞけてゆきませう。我等の信

天皇陛下萬歳、萬歳！！

萬歳！！

（昭和一八・二）

（註、遺詠・遺文はすべて池田正一遺稿集『留魂』による）



11. 石田安治

十一、石田安治



石田安治

昭和三年九月富山市に生れる。昭和十六年四月、富山縣立富山商業学校に入学。程なく同校の「正信会」(「日本学生協会」の道統の会)に加入、八月同会の「長岡村合宿」に参加、以後積極的に活躍。最年少の同志として一同の信愛を集めた。十七年(十五歳)十月、学校の弁論大会に「標語を正せ」と題して、言葉の乱れから思想の混乱に説き及び、憂国の熱情を絶叫、「正信会」の最も有力な後継者と見なされてゐた。十八年(十六歳)「正信会」の先輩は次々と入営、一方彼は七月肺浸潤にかゝり、十月以後は絶対安静を医師に命ぜられる。翌十九年容態悪化、彼は死ぬまで『明治天皇御集』『古事記』『万葉集』の三冊を枕もとから離さず、三月一日遂に永眠。時に数へ年わづかに十七歳。



富山商業正信会及高岡同志（昭和18年）後列左から3人目  
石田安治

彼は清純な資質に加へ素朴かつ誠実な人柄で、一筋に「道」を求めて苦闘し、憂国の情に燃えて同志を思ひ、彼を知るすべての人から玉のやうに可愛がられた。富山商業の「正信会」では、お互ひに苗字で呼びあふのが普通であったが、彼に対してだけは「安治君」と呼ぶことが多かったといふ。それは最年少だったためばかりではなく、その美しい人柄と、この世に留めた烈々たる精神の故であり、それらは以下に摘録する彼の遺した歌文に宿り、力強く息づいてゐる。



天長節

けふの日の喜び鳥にもあるごとく嬉しげにも飛ぶ鳥のこゑ

友に

身はたとへ粉になりても我々は  
大君のため尽しまつらむ

八月 長岡村合宿のとき

今までは語りしこともなき友とむつびあひつゝ語るうれしさ

ともくゝに笑ひあひつゝ語りあふこの合宿のうれしくもあるかな

一つ釜の飯を食べつゝ語りあふこのうれしさを何にたとへむ

立山

あかねさす夕日に映えて雄々しくも神さび立てり立山連山は

雲をぬき群山ぬきて夕空にそびゆる山のなんぞをよしき

大御歌によませたまひし立山はいま厳然とみ空に立てり

昭和十七年——十五歳——

龍野清澄宛

(註 佐賀高校生の友人)(略)十四日の日に富山商業の講演大会があり私達

講演部員は御民のかなしき思ひを雄叫びしました。しかし聴衆がさわいだたため大部分失敗に終わりました。(略)私の誠の足らなかつたことを非常に残念に思ひます。しかし来るべき講演大会こそは我等の気持を全校生徒に訴へようと思つてゐます。

(略)私は此事を鍛冶兄に言ひました。すると大兄は「同志を作るべきである」と言はれました。(略)私はこれより同志を多くする事を心の中で誓ひました。国を憂へ国を防護する同志を多く作ることを誓ひました。(略)

(昭和一七 富山)

一月五日 長き冬休も今日一日である。思へば一日以来勉強は全然出来なかつた。あゝ明日自分は死ぬと思ふ事である。自分が明日死ぬと思へば、勉強に於ても行ひに於ても必ずよくするであらうと思つた。今日、明日を終りに私は死ぬと思ひ勉強した。夜(略)除雪作業を行つたが、此も此が最後の親への孝行と思ひつゝ行つたので、大分はかどつた。

東京なる有沢・広瀬両兄へ

雨の野にまたは病みどに伏す兄は今はいかにとしのぼるゝかな

大久保塩村へ行きけるとき(八月一七日)

ゆくてなる西の空にぞ太陽は真赤き光を放ちをるかな

真赤なる大きな玉はいままさに山の端にぞ没せむとする

敵として迫らぬ太陽見て居れば大和の武人の心おもほゆ

大空にたなびく雲は夕日かげうけてひときは神々しく見ゆ  
しづみ行く夕日に向ひ歩み行くわが影ながく田面たのめに引きつゝ  
ほのぐらくなりたる小みち母と行けば水田のうへをそよ風の吹く  
かなたには親馬子馬前うしろになりつゝ帰る仕事もをへて  
幼かる馬とゞまりては走りつゝ親につれだち家路をぞ行く  
川水はさやかに流れふみいれし足にあたりてざわ／＼と鳴る  
戸のすきを洩るゝ灯見えて家のめぐりのくらき草むらに虫ぞ鳴くなる

さめ／＼と雨は降れども我が心たのしくありけり病やまひよき時は

塩村にて（八月二日）

たらちねは遠き道をもいとはずに吾が身いかにとたづねこらるゝ  
遠き道いとはずこられしたらちねのみ姿みれば涙あふるゝ

夕立

雨雲の空にまよひてうすぐらくむしあつきかな苦しきまでに

くる雲のひろがり行くと思ふまにはや二三滴落ちそめにけり

雷鳴りとともにぞ降りて夕立は瓦をたゞき木立をぞ打つ

雨あがり草に宿れる露はみな玉のごとくに光放てり

病み床にあふぐ青空ゆるやかに鳶まひもどりまたも隠れぬ

友もなき病みどにあれば舞ひ去りし鳶のふたゞび来るぞ待たるゝ

広瀬誠宛 (註 富山中学の先輩)(略) 大兄 私は必ず病をなほしてからまゐります。大

兄のみ教を守り、厚き恩に報いんが為に。私は幸福者です。草木を見て居るとその間に  
貴大兄の顔が見えてくるやうな心地がいたします。今、せみの声と遠く川の瀬の音が聞  
えてまゐります。

ふるさとを遠く離れて住居すればわがたらちねのこひしかりけり

さびしさをまぎらはさむと庭にいでて瀬の音にまじる蟬の声きく

木の間よりわがたらちねのやさしくも我が名呼ばるゝ心地するかな

九月十九日 本日は自分の生れた日である。母の言によりて気付く。(略)我が国に於ては忠孝一本なり。故に孝は忠なり、忠は孝なり。よろしく親に孝なる可きなり。己が身のおろかなる事、言に表す可からず。(略)我が病を亡し御国の為尽し奉らん。

十月十三日 夕食後石坂兄(註 石坂進、富山商業の先輩)と語る、久方ぶりなり。やはり心知る友と話すのは楽しい。しかしこれも又小日ならん。召されし君がからだ、思ふにさびし。然れども(略)時なり。私事にこだはるなかれと言へども三年間共に進みし神ながらの道、苦しき中に悲しき中に一切を投げ共に進みし我が兄、(略)目にこそ見えねど兄は永久に我が心に生くるであらう。我が友、真の友、誠の友、悲しみの友、同信の友。友よ我は進まん教育道を、兄のみ心を受けつぎて。自分は今迄石坂兄ほど親しく悲しみ苦しんだ友はなかつた。しかし心知りあふやうになれりと思ふにはや別れんか。しかし進むべき道は同じ忠義の道に。心の友、同信の友。

独りして心しづかにしてをれば虫の鳴くこゑしきりに聞ゆ  
独りして静かにきけばよもの原みな虫なりと思はるゝかな

手をとりにて共に行きたし子供らがたのしく山にのぼるときけば

秋晴の田畑に働く若人が脱穀機ふむ音こゝちよし

野を圧しひゞく脱穀機数はあれど君ふむ音はひときは高し  
たゆまざる力をもつて働ける君がみ姿みるもたのしき

米沢兄に（註 米沢清一、富山商業の先輩）（二月八日）

笑顔にて入りて来られし大兄のみ姿みればうれしかりけり  
世にいでて得し友どちは多かれど心の友ぞすくなかりける  
諸共に苦しき道を歩むべき友を得たるがうれしかりけり

十一月十三日 石坂兄未通知なりといふ。あゝ悲しきかな。残念なり。男子に生るれ

ば必ず強健ならざるべからず。しかし国に尽す道は多くあり。いはんや石坂兄に於てはしきしまの道言伝者としての重責あり。石坂兄よ憂へず共に進まん 明治天皇御製を拝誦しつゝ！「国をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも」

友を見送りて (二月二五日)

闇ぬちを遠ざかり行くわが友が列車の尾灯赤く光れり

走りゆく列車の影は見えねども後に光れる赤きともしび

大兄のみこころしめす如くなる赤きともしび遠ざかりつゝ

(註 有沢・米沢と共に広瀬の上京を見送つた折の歌。有沢・米沢は程なく入營することになつて居た。)

夕日かげうけてたゞよふ雲のいろもさびしくありけり冬にもなれば  
たのしかる罫おもふか鳥一羽はゞたきも早く冬の空行く  
雨まじり雪ふりつゞく冬空の晴るゝをぞ待たむ心長くも

入營する有沢兄に (二月八日) (註 有沢清、富山商業の先輩)



おのが身は病にあれど我が魂は君が身ぬちに添ひてぞ行かむ

庭の木の枝より鳥の飛び立ちぬ一こゑさびしく空に鳴きつゝ

山里は雪のつもりて寒からむ町の中にも鳥くるみれば

十二月十六日 前十一月二十三日咯血して以来記帳を止む。思へば早一ヶ月も流水の如く過ぎ未だ先程を見ざるは残念なり。一時も早く病を治さんがため左の条を掲ぐ。必ず厳守すべし。

一、病氣中ハ間食一切之ヲ断ツベシ

一、一食百回以上嚙ムベシ

一、食後一時間静臥、読書ヲ禁ズ

十二月十七日 本日は晴天なる故二階にて寝す。静かな所はいゝ。古事記を拝誦す。床に就いて居ると色々な考が浮んでくる。自分は辰年である。竜は海に千年、陸に千

年、而して雲に乗りて空に登り雨を呼び風を呼ぶと言ふ。我今病床に在り、これ竜の在海千年ならん。我病を治し在陸千年の日が待たれる。空に登る時はこれ国の為死する時なり。

明治天皇御製 竜（明治三十七年）

わたなかに潜めるたつも大空の雲をおこさむ時はあるものを

昭和十九年——十七歳——

一月三日 今年に入り始めて御製を拝す、我が心元旦なり。広瀬大兄再び来らる。本  
当に我が心すが／＼し。

病いやし体鍛へて君のため御国のために命捧げむ

一月十三日 本日、今迄に味はつたことがない程 明治天皇御製が有難く戴けた。自然をよませたまうた御製を拝すると心から有難く感ずる。常に拝さなくては自分の心は

死だ。拜誦することにより、広きく大御心に御触れ申すことにより、又我が心が広くなるのである。

一月十八日 本日又不孝なる心生ず。されど忠孝一本なる我が国にては許すまじきなり。心改めこゝに誓ふ。病人は父母に心配をかける故、始めより不孝者なり。されど病は人の身なれば避くる能はず。故に一向養生に専心し言語挙動につゝしみて父母が安心せらるゝやう心すべし。

うすぐらき夜明のうちに起きいでて暖かければ嬉しきろかも

広瀬誠宛 富山では雪が一尺二、三寸積つて居りますが何分にも寒いので何する事も出来ませんが、唯 明治天皇御製を拜誦する事により心が安らかで豊かによき生活を続けて居ります。今日は朝より、からりと空は晴れて居ります。

雪はれて雲間々々に青空の見ゆるは嬉し春近づきぬ

一日一年の思ひで春を待ち養生に専心致して居ります。

(昭和一九・一・二二)

広瀬誠宛 大兄御便り有難う御座いました。いよ／＼(戦局に関する個所略)ラヂオを聞きつゝ病の身をなげき一刻も全快の早からん様養生専心して居ります。

本日は久しぶりにて晴れました。紙障子には明るく日の光が当つて居ります。まだ二階に行き日光浴をして居りませんが、午後から少し行つて見ます。

立春と聞けば嬉しも我が病なほらむ春は早近づきぬ

あたゝかき春近づきぬわが病なほして行かむ春近づきぬ

(昭和一九・二・六)

二月十二日 朝、体だるしと思ふも怠心なりと自ら戒めて家の手伝等す。(略)

二月十三日 (略)古事記は二回目を拝誦す。何度読みてもあくことの知らない強い調べである。又萬葉集もまた。休むなかれ常に勉めよ。

二月十七日 父の注意により(略)朝は仕事をせず。(略)

二月十八日 (略) 毎日々々父上母上の立働かるゝに我何一事もなさずとは何たる不孝ぞ。されど思ふべし。

二月二十三日 昼暖く、二階にて母と日光浴をしつゝ本を読む、萬葉集なり。我には今、歌書の外に書は不<sub>レ</sub>欲。(略)

二月二十四日 晴るゝかと思つてゐたが、どん／＼降り始む。しかしすこしは暖くなつて来た。

11. 石田安治  
二月二十六日 身体愈々だるく起くる不<sub>レ</sub>能。昨日の発表にては朝香宮殿下第二子であらせられる方が御戦死せらると。あゝ何と悲しき。我病床にあればいかんともせん方なし。(註 音羽正彦侯爵。昭和十九年二月六日、マーシャル方面において壮烈な御戦死。海軍少佐)

二月二十七日 体の調子悪しきにより朝食後、神仏を礼拝す。

(註 最後の記である。二十八日は日記を記す力もなく、二十九日の深夜、即ち三月一日午前一時過ぎるころ遂に永眠。遺詠・遺文はすべて広瀬誠の手写したノートによる)

十二、江<sup>え</sup>頭<sup>がしら</sup>俊<sup>しゅん</sup>一<sup>いち</sup>



江頭俊一

大正九年七月七日、満洲の撫順で生れる。旧制撫順中学校を卒業後、十四年、旧制佐賀高等学校に入学。百武礼之（前出）と共に、同校学生運動の双壁となり「日本学生協会」主催の昭和十五年夏の信州菅平、翌昭和十六年の比叡山等で行はれた全国学生合宿には、常に率先して参加した。

昭和十七年四月、東京帝国大学文学部倫理学科

12. 江頭俊一  
に入学、「東京正大寮」に入寮。同年七月三十一日から滋賀県の西教寺で行はれた全国学生合宿で彼の所属する第二班は、合宿最後の夜の演芸コンパに於て、創作劇詩「名草の妻」（本書四一三ページ）を上演した。作ならびに演出は彼自身であり、その出演者は右の第二班の全員であつた。彼の喜びはたとへやうもなく、大きかつた。

彼はよく「学生運動こそは男子の本懐である」「正大寮こそは「たたかひ」の力源である」と言つてゐた。その学生運動もまた正大寮も、つひに解散の運命に見舞はれることになつた。その頃彼は身体の変調を自覚し始めた。すでに病は彼の肉体をむしばんでゐたのである。昭和十七年十二月二十四日、「東京正大寮」は解散式を行った。後、日ならずして彼は両親の住む満洲に帰り、ただちに奉天の病院に入院した。翌十八年三月、彼は、多くの後輩と信友加藤敏治（註 山口高商、九大学生であつた同輩）たちのゐる福岡の地で、自らの最後を送りたいとして、九州帝大の病院に移つた。

しかし、肉親や友人の必死の看護も空しく、病状は悪化の一途を辿り、遂に六月八日、母と弟妹、友人らに見とられながらその最期の息を引きとつた。時に数へ年二十四歳。いまはのきはの模様は、百武礼之が、息をもつかせぬ筆致をもつて活写してゐるとほりである（本書八六ページ）。それは、友らの胸から永久に消えざる思ひ出となつた。その後いかに多くの人々が彼を語り、彼を偲んで和歌に詠んだことか。本書に収録した寺尾、百武、和多山の遺稿を見ても、顯著に窺へるところである。彼が「不知火の筑紫の野辺にますらをがたてし誓ひの消ゆる日あらめや」と詠んだ志は、戦後も寺尾博之自刃の地、油山での慰霊祭の厳修の中に脈動し、やがて昭和三十一年、現「国民文化研究会」の誕生につながつてくるのである。



昭和十四年——二十歳——

元寇の昔をしぬびて（二月二七日）

あたびとを沈めにけりとふ此の海の色の青さの目にしむるかな  
あたびとを撃ちてしやまむとこの浜に集ひし男の子の姿しぬばゆ

昭和十五年——二十一歳——

（菅平合宿のノートから）（七月一七日）

ほのぼのとあけそめにける此の丘に朝露踏みて友らと集ふ  
大御歌拜み読めば人の世を生きぬく力湧くと友云ふ  
あかときの露に濡れつゝ野の路を友と歩けば心楽しも

真心をうち明けて言ふ友どちのするとき言葉我をうつかも

もろともにたゞき合ふまで語らむと涙ぐみつゝ友の叫びぬ

菅平合宿にて 私は学校内に於ける同信団体に入つてゐます関係上、校内に於ける合宿には度々参加致しましたが、今度の様に全国各地から参集して来られた青年学徒同輩達と共に一週間、寢食を共に語り合つた等は全く始めてでありました。然し始めの中は何となく理論に走り、本当の意味の生命の一体感を沁々と感ずる様な機会もなく、皆の態度に不満を抱きながら自分の無力を痛感して、どうかしなくてはならないと思ひながらその惰性から脱け切れませんでした。

けれども、私達班員の魂は昨日完全に結ばれました。生命の不思議な交流と共感、それは我々の言葉に依つては表はし様のない様な人生の真の姿でありました。此のまゝではいけないと感じた友が心の底から我々全部をどなりつけたのです。さうして我々自身反省して御国の様を思ひます時に、我々の心の中には何かしら雄々しい決意がたくましい力となつて湧いてくるのでした。

皆泣きながら自分の決意を語り合ひました。一人の友は、自分は夫君のためにこの瞬間から死ぬのだと叫びました。一人の友は、俺は此こゝから皆をなぐると云ひました。又此の様になつたのは自分がゐたからだ、どうか許して呉れ、然し今の瞬間から頑張りますと、雄々しい決意を告げました。

あらゆる理論も又形式も、普通の学問にどうして此の生命の一体感を感じ心の底から友と泣き、語り、御国の生命を沁々と身に感ずることが出来ませうか。人生を簡単に定義づけて安易な解決に満足し得る様な人がどうして此の雄々しい人生の不可思議な生命に眼醒めた、我々の此の感激を理解し共感し得ませうか。「残るは地熱、祖国の生命」と詩に刻まれた心は、我々青年の心底に残り、さうして葬られてゐた地熱、祖国の生命を今こそ共に味はふ事が出来たのであります。そして祖国の指標を示すべき我々青年は戦の決意をいや固く固めたのであります。

「青年は一体なり」若い我々の生命が斯くして結ばれ合ひ、真の人生の姿に還る時、新しい時代が招来されるのであると確信し、ひたすらに此の道を友らと共に 天皇の詔かしこみて戦ひ進まむと決意します。

朝に山を望みて

はろばろと信濃の山のつらなりてはてしも知らぬ此の朝かな  
はるかにもアルプスの峰眺めつゝ友と集ひぬ朝露踏みて

(註 『進めこのみち』昭和一五年七月、「日本学生協会」が行つた信州菅平における「全国学生合同合宿」記録)

嫁ぎゆきし妹に

おのが夫をかばひながらも己が身の淋しき心告ぐる妹よ  
己が身の不孝許せと書きしるす文をしみれば涙流るも  
いかならむさだめありてか妹の心思へばいとほしきかな  
妹ははや人の世の悲しさを知りつくせるか年月もゆかず  
雨風にうたれてのこる撫子の淋しき姿の思ほゆるかな  
妹のたよりに泣けるたらちねの心思へば言ふすべもなし

久々に雨の霽るらし雨雲は西をばさして流るゝ見れば  
雨雲の途切れし間より青空のほのかに見ゆるが嬉しかりけり  
高粱の茂れる道を弟らと頂さして急ぎゆくなり

岩石の転びし道をやうやくに過ぎて出でけり草原の野に  
をちこちにききよようの花の群れ咲ける紫の色うるほの美しきかな  
弟らは花ありと言ひ飛び行きて手折りさゝげて我に見せけり  
大いなる岩三人でねころびて歌うたひけり空を見上げて

苦力クワリらの赤黒き肌あらはにて日の照る道に土掘りかへす  
あらがねの土かへしつゝ苦力らは歌うたふらしかそかに聞ゆ  
今日もまたあまたの馬車に煉瓦のせ丘の下廻り通ひ行くかな

八月八日夜

ちら／＼とまた／＼く如く燈ともの光れる所に人の住むらむ  
かしこにも明るき家に父母とをさなき子らのまどゐしてあるか

— 渾河 —

三年ぶりにプラットホームに立ちしかど友おはさずて淋しき我は  
雑沓の中にとゞすみ過ぎし日を思ひ出しつゝほゝゑむ我は

柳条溝の案内札の立ちけるをふと見出して足とゞめけり（註 柳条溝、満洲事変勃発の地）  
十あまり三つ四つなりき変起きてたらちねとともに避難したるは

ちゝのみの父つくりたる槍持ちて戦の心かまへてありき

敗残兵の流れ込みしとふ報聞きて胸とゞろかしをのゝきにけり

北大營の戦場に来てたらちねと御戦みいくさの跡とひし時はも — 於奉天駅憶満洲事変—

（註 以上「嫁ぎゆきし妹に」以下は、昭和一五年夏、故郷の満洲に帰つた時の歌、ノートから）

雨風の激しき時に東なる都の友の思はるゝかな

身にあまるつとめなりとも友どちと共にすゝめば何かおそれむ

荒き風いぶき渡るか日の本の御国を思へば心悲しも

「我ら青年は」とかかれたる師の君の古きみ文はなつかしきかな

「人の世のさびしさ人は知らざるか我のみ独り道迷へるか」(註 三井甲之作)  
さびしさに堪へて行きつゝ一すぢの道まもらしゝ人は忘れじ

一すぢの道は滅びず今我らに伝はりたりと思へばかしこし

この道とはに滅びずしきしまの大和の国のあらむ限りは

悲し願ひうちつらぬきてみ国守るみおやのみ魂にこたへむとぞ思ふ

君がみ霊まつれる里は青山の山ふところの竹繁き里

うちつゞく青竹群のさや／＼にさやぐ山路をたどりきにけり

いつかしくさびたる廟にかしこまり君が心をひたにしぬびつ

国のためなげきて死にし人々の悲しき生命よみがへれいま

ともすれば歩みがたくて踏む道もえ行きやらず嘆かるゝかな

友しらと進まん道はかくまでに踏みがたきとは思はざりけり(註 友しら、友ら)

戦の道はひらけず今日も又友と語らへど心安からず

しきしまのみち

富めるものも貧しきものもたづさはりゆくべくありけりしきしまの道  
ことそぎしまた敵しき古の手振りぞ偲ぶしきしまの道に

ある人の訓辞を聞きて（昭和一五年一〇月）

今の世に生れし事を樂しげに喜ぶ言葉うとましきかな

忠誠の意志をはなれて口々に世を喜ぶは世をあやまたむ

おのが身の不忠を知らずて大君につかへむといふもそはまことならず

たらちねの母の便りをうけとればなにとはなしに心樂しも

寒くなれば体にこゝろせよといふ母の心のありがたきかな

故郷も冬近づきぬとふ御言葉に木枯吹くらむ山を思ひぬ

（註 以上 三七四ページ「雨風の激しき時に……」以下は、ノートから）



昭和十六年——二十二歳——

やうやくにめざむるいのち若草の萌ゆるみどりに表れてあり  
冬の日の寒さに耐へてやうやくにもえ出でにけむ緑の小草よ  
迫りくる春のいぶきを思はする真白き梅の香りよろしも  
しらぬひの筑紫の梅の香りをば東の友につたへまほしき  
とりがなく東の友を思ひつゝ共に集ひてたよりに書きぬ

(謄写刷『たゝかひ』昭和一六・二〇)

12. 江頭俊一

吾妹子の事の忘らえず此の頃は物思ひのみすぐすわれかな  
車にてわづかにかはしゝ数々の言葉忘れず思ひ出づるも (ザラ紙の走り書から)

五月野の青葉茂れる周防路すほうに集ひし友の偲おもはるゝかな

友しらのみうたよみつゝなつかしきおもわつぎ／＼思ひ出づるに

こゝだくの思ひ湧き来てもろともに歌はむ心わき出づるなり

コトノハの調べあはせてもろともに生命の限りゆかなむ我らは

(謄写劇『神代ゆ今に』第二巻第五号)

さみどりのみ空ますみて一片の雲すらもなきこの朝かな

にぎはしきいとなみあらむ群鳥のその声々もさま／＼にして(ノートから)

校長先生に奉る書 初夏の候と相成り校長先生には益々御健勝の段御慶び申し上げます。就きましては去る五月十日私達五名に申し渡されました「日本学生協会の図書講読を禁ずる」といふ件に就きまして、私達の微志を告白させて戴きたいのであります。

私達と致しましては学校の命令をとやかく申すのでは御座いません。只私達の誠意の足らざるを憾み如何にかして私達の意をお汲みとられむ事を神かけて祈る次第で御座います。殊に私達は此の問題は重大なる問題であると考へますれば、以下少しく佐高の校

風はどうであるか又それと此の問題と如何なる関係があるか、私達の拙き体験に基づきまして此処に告白致したいのであります。

凡そ佐高内に於ては先般東大或は京大に於て検挙された私達の先輩たる赤化学生が在学中、校友会、寮、各部に於て、佐高全学風を支配リードしてゐたのであります。

いま校友会誌、文芸部雑誌中露骨極まるものを引用いたします。(校友会誌第三七号)

詩「牛」(抄)

齒の抜けた牛も居る

抜けないものもある

牛は柵の中にある

柵の中の草は

遠く彼方へ

高原の草とも統いてゐる

牛は反芻する

牛は真理の草を

反芻し 反芻する

乳搾りが来る

牛の乳はしぼりとられる

牛の乳はしぼりとられる

牛の子のためにはない

牛の乳は槽に入れて

もつて行かれた

反芻しつかれた牛は

青空に向つてモウーと啼いた

青空の黒板には

核、電子、原子

詩「石胎女の歌」(抄)

まいまいつぶり

まいまいつぶり

狡猾なまいまいつぶり

石肌の垢を歯舌で舐めて

腐肉を作つたお前は

殻を作ることを忘れなかつた

お前はだから賢明だ

だからお前には発展がない

今日も明日も

固い殻の中に無限の自由を

空想する

懶惰で狡猾な幻想を破れ

闇を通して暁は近ければ

などであります。先づ詩「牛」に於ては、牛とは被搾取階級としてのプロレタリアを意味し、柵とは明らかに資本主義社会機構を意味するものであり、プロレタリアが資本主義社会機構の中に於てブルジョアの搾取にあひつゝも、科学的真理を求むといふ事を陰險に暗示致してゐるのであります。次に詩「石胎女の歌」に於ては「まいまいつぶり」

は資本主義を意味し、其の殻とは資本主義社会機構をさし、腐肉とはこの資本主義社会の墮落弊害をさしてゐるのであります。「固い殻の中に、無限の自由を実現する」「闇を通して暁は近ければ」は共產主義者の常套句でありまして、実に彼等は公然として校友会誌に其の思想発表を行い全校生又之を読んだのであります。又、論文「模写に於ける実践」では「従て、認識発展の歴史的制約は即ち階級的制約であり、ここから理論の階級党派性が導き出される。かくて理論は、それが先進的、進歩的、階級的階級性を持つ時に、より正しく、より真理に接近してをり、より科学的であると云ふ主張が真理である。」と申してをるのであります。

昭和十二年以来、私達同信会が日本精神研究の目的を以て学校の許可の下に公然に集会を行ひ、佐高の校風刷新に邁進し始めてより、私達同信会に共鳴する者多く、新しい高校生活の創造といふ未曾有の希望と理想に燃えてゐたのであります。松陰先生が「一人より十人、十人より百人、百人より千人、千人より万人」と云はれました様に、私達の友は明治天皇の御製を拝誦しまつり、天皇に直屬しまつる私達臣民の歓喜に溢れて、真の感激とはかゝるものかと幾度か友らと語り合ふ同信同朋生活の喜びに浸つたのであ

ります。

私達は、佐高の正しき伝統を打建て、国民生活の共感共鳴の世界を、それをこそ高校生活の真の意義たらしめむと只々念じつゝ居るのであります。即ち私達はたゞ命令や訓令で集つたものではなく、ひとしく日本国民として己が身の不忠を懺悔しつゝ唯一の生の源泉を明治天皇御集ををろがみまつる事に求めんとする歓喜も悲哀も一にする同信同朋であります。シキシマノミチを毎日実修し、日本古典思想史を研究し、東西文献を比較検討し、そこに私達の依拠すべき先人の教へを如何にかして、私達学生生活に於て実現し、当校こそ国民宗教実践の礼拝所として、又正しき学問の道場として「古今ノ史実ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長シ執ル所中ヲ失ハス嚮フ所正ヲ謬ラス」と学問研究の具体的方法を御教へ給ひ「負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ」(註 今上陛下「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」とふかしこき大御心に随順し奉らむことを日夜かへりみ、たゞ／＼大御心に信順しまつらむと念願するので御座います。然るにこのたび私達の誠意未だ足らずして幾多の誤解を招きつゝあることは深く私達の痛恨と致す所で、只天を仰ぎ、地に伏して慟哭致すので御座います。

私達のひたすら思ひますことは、只、佐高の正しき伝統の確立でありまして此こそ、御国を憂ひ御国のために戦ひ仆れ給ひて神上りましける先輩の英靈に応へる唯一の道であり、天がける御祖の御靈も必ずや私達の誠を照覧あらせらるゝと確信いたす次第であります。世の乱れと申しますのは北畠親房卿も仰せられし如く、草木の色の変ることではなく、現実具体的には国民思想精神の紊乱であり人の心の通はざる時であり、もろともに、陛下の御民として内的平等感激を語り合ひ、よろこび合ふ一事のなき世であります。人の心の通ひ合ひます時にこそまことの道は開け、国民生活に於て真の和が実現せられて行くのであると思ひます。私達は学校生活にこそそを実現せむとしてゐるものがあります。先生も生徒も共に国家永久生命に一つ心に結ばれ同じき信を語り合ひ、もろともに喜び悲しみ、そして歴代 天皇の勅語・御製ををろがみまつることによりて生の依拠を見出して安心せしめられて、生き且つ死する臣子の感激をこそ、高校生活の真理を求めつゝある青年の歡喜たらしめんとしてゐるのでございます。私達が思想戦と申しますのも 天皇に直屬しまつる承詔必謹の臣民としての内的平等の共感共鳴の世界にもろともに帰せんとするのであり、陛下のもとに等しく臣民であると云ふ国民平等の内的



精神世界にこそ、永遠の生の依拠を求めんとするのでございます。そして私達の先人が申されました「日本国体が万邦無比であると確信することは反国体思想とたゞかふことである。」とある如く、大御心をいただきまつらぬマルキシズム、自由主義等を學術の正確を以て批判説伏し、正しき學術研究をする事が私達学徒の重大なる使命と存するので御座います。

私達一同は校長先生が国体の本義を闡明下されて、迷ひつゝある学徒に剛健にして希望ある佐高校風の樹立に御努力下されん事を伏して御願申し上げ、心から期待致すものでございます。

私達の念願の一切は「居常聖旨を奉戴し、日本精神を体得して国家有用の材となり、以て皇恩に報る奉らんことを期すべし」とふ校訓第一条を常に謹読して、佐高に於ける私達の実生活に校訓五ヶ条の御精神を確保実践せむとするものであります。

右幾多の欠礼をも顧みず潜越の言葉を申し上げたので御座いますが、何卒御寛恕下さいまして私達の切なる念願を御受納下されむ事を連署を以て取り敢へず心せくまゝに申し上げます次第で御座います。

(註) 昭和十六年五月、佐賀高等学校当局は江頭俊一等五名の者に対し、日本学生協会と連絡し活動せるゆゑをもつて出校停止の処分を行つた。その際校長に対して提出した上申書。江頭俊一起草)

友よ、同信相統は我らの生命。生命伝へよ、新しき友に(松江高校同信会に) (昭和一六・七・八)

すめぐにのますらをのこの国思ふ心はいつか通ひ来るかな  
通ひ来る生命のまゝに語らへば友しみくとうなづき給ふ  
もろともに語りてあれば自ら湧き来る喜びとどめ得ぬかも

大君のみあとしたひてうつし世を去りにし人のしぬばるゝかな  
外国とくにの人の書きにし書なみとへど涙もよほし君思ひけり

(註) 外国の人、『乃木』の著者スタンレー・ウォッシュユバーン。とへど、といへど)

たぎちなす胸内の思ひうちしづめ君御軍みいくさを統べたまひけり  
外国の人も君をばちゝのみの父の如くにしたひしといふ  
幼き日友らと共に旅順なる戦の跡を尋ねしものを

今もなほ草も生えずとふ山道にたふれし人ら多くありけむ

歳月は射る矢の如く君去りて早三十まりの年はへにけり

(註 以上七首は乃木將軍を偲ぶものであるが、詞書もなく作歌月日不明である)

昭和十七年——二十三歳——

こぶしに寄せて

梓弓春のめぐみに武蔵野の池の面近く咲けるこぶしかな

真白なるこぶしの花の吹く風にかつはゆれつゝ花びらの散る

白雲と咲けるこぶしの春風の吹きのままに／＼散りゆく惜しも

筑紫野の友に見せまし武蔵野のこぶしの花の白ゆふ花を (註 白木綿花)

幾度かこの花恋ひて友しらと語りすぐしゝ日もありけるを

たぎつ瀬の白ゆふ花と岸の辺に真白にぞ咲くこぶし花かも

夜、友を待ちつゝ (小田原合宿)

さねさし相模の海の荒潮のとゞろく力あらせてしがな

身内なる力の限り相模灘寄せくる波を歌はむものを

虫の音のしげき今宵も遠灘の波のひゞきは絶ゆる間もなし

山のごとうねり重なり水底みなぞこゆ逆巻きよする相模荒潮

遙々と来らむ友を待つなべに虫のなく音のしげくなるかな(註 なべに、につれて)  
鳴く虫の声に交りて大地の底ひゆひゞく波の音かな

(以上十二首、『不知火』第一号)

さねさし相模の海の朝潮のみちくるなべに友ぞ思ほゆ

都なる友恋しみてうねり来るその逆波に心もゆらぎぬ

わたつみの底ゆとゞろく海鳴りのその真力を我にあたへよ

うねりくる波に真向ひ朝日子のとよさかのぼる海をみるかな

友に

よもすがらとよもし聞ゆ海鳴りの音の絶えせぬ君がすまひかな

友と一夜つきせぬ思ひに床につき耳すましつゝ海鳴り聞きしか

古のことそぐ力か絶えもせで夜をこめとどろく日向海鳴り

黒潮のしぶく海鳴り聞きつゝも友しぬびます君思ふかな  
海鳴りのとよもす思ひ叫びつゝ日向路遠く君いますらむ  
たまゆらのつきせぬ思ひに春雨に濡れて別れし君恋ふるかな

(以上六首、昭和二七・五・二)

一隊の兵士 — 写真を見て —

北海の果 氷雪とさせる荒野を

声もなく進む 兵士の隊列よ。

背景は果てもなき雪野原

つきすゝむ一隊の兵士は 生の悲劇か。

雪踏み 雪踏み 踏みつくる大地ゆ

起り来る 歌の調 「雪の進軍」

あゝ歌の律動に合はする

兵士の歩調よ、 進軍よ、 その心よ。

荒野行くとも、つきせぬ喜び、日本の歓喜。

(正大寮『しきしまのみち』昭和一七・六・二七)

## 寸感

僕の帰りを待つてゐるといふ

妹からの便りが来た。

取出してはよみ取り出しては読み、  
胸が高鳴つてならないのだ。

父母よ。妹達よ。

僕は名を一つ一つつぶやきながら  
あの顔がはつきりと浮んでくる。

とんで早く 帰りたい。

遠くわかれて 今

「かく戦つてゐる」

と話してやりたい。

親と子と、兄と妹と。

思ひ思はれ 恋ひ惚びつゝ

堪らないときは歌つてゆくのだ。

たゞ それ丈だ。

それが人生だ。

(正大寮「しきしまのみち」昭和一七・六・二七)

渦巻きて流るゝ早瀬をわらべらの泳ぎ騒げる様おもしろし

赤銅の色に焼けたるわらべらの小魚の如く水にくぐるも

崖の上より岩間の淵に飛び込みて早瀬乗り切るわらべ雄々しき

流されしと見るまに早も泳ぎ切り岸辺に着きて高らかに友呼ぶ

さら／＼にものを思はずおほらかにひなのわらべは水とたはむる (ノートから)

飛行機を見て

爆音のとゞろきたちまち近づきて編隊飛行の雲間に見ゆる

つばらかに見ゆる飛行機群なして天がけりゆくはいづれの方か

急迫せる祖国生命告ぐるごと堂々の群我が上を過ぐ

天つ雲ちわきにわきてかけりゆくますらをのこを偲びてやまず（註 ちわき、千別き）  
天つ空ゆりとよもしてかけりゆく編隊飛行見れど飽かぬかも（フートから）

合宿を前に、宮城に詣でまつりて

大内の松のみどりの清すがしくも見ゆるがなかにそき立つ白壁

すめろぎの我が大君のおはします大宮所仰ぐ今日かも

「みたみわれらもろともにまめやかに我が大君に仕へまつらむと誓ひまつらむ」

（註 当時常用した神拝詞）

濠水の水面みなもかゞよひうすぐもは影落しつゝ天つ空ゆく

天つ空かけらひわたる神言の響き来るなりもだす胸内に（註 かけらひ、かけり）

九重の宮居はるかに通ひ来る神の御言を友に告げなむ

（『うたごゑ』昭和十七・七）

百武尚美兄を偲びて（註 旧制佐賀高校の後輩、病歿）

ゆきましゝ友を思へばかそけくも夢路をたどる心地するかな

一年の月日とは云へ限りなき思ひ尽きざる一年なりき



去りゆきし友を思ひつゝ都路に筑紫を思ふ此の秋にして

胸内湧きたぎちとどろくひゞかひの絶ゆる日もなし御国思へば

あかときの御空ゆく雲汝のごと飛びてゆかなむ筑紫路さして

ゆきましゝ友の御靈のとどまりし筑紫をいたも恋ふる朝かも

戦ひの半ばにたふれうつし世を去りにし友を今日祭るかな

生死いきしにのけぢめもあらぬ戦ひに早ゆきましゝ友ぞ悲しき

もろともにはげましあひてこゝだくの苦しみ堪へてたどり来にしを

相別れ見ゆる時まふを恋ひまちつ吾は来にしを君ゆきましゝか

一年のめぐりと思へどこゝだくの年月かさねし心地せらるゝ

ゆきましゝ友のあとつぎ御国守り一筋道に生命捧げむ(ノトから)

友に

見さくれば筑紫群山白雲のいよりたなびき遠白くあり(註 いより、寄り)

つばらかに見れば白雲一ときもやすむひまなく流れやまずも

うちにひそむ生命の力か久方の空かけりゆくあはれ白雲

秋の日の光照りはふ野路ゆきつ仰ぐみそらのか青にぞすむ(註 か青、青)

か青なるそらにたゞよふ白雲にひそむ力の痛いたもこほしき

いたづきにやみふす君も東のみそら仰ぎて友を恋ふらむ

御国思ひ友偲びつゝ野辺に咲く菊手折りけむ君ぞ恋しき

未だ見ぬ君がみうたにはつゝに君を偲びつ胸つく思ひ

いえまさむ日をこひのみてもろともに天がける思ひ歌ひてゆかな(『櫻の木集』)

堤辺に坐りてあれば

堤辺に坐りつ仰ぐ朝雲のかさなる空はさびしかりけり

ほとぼしる水の流れか堤辺にもだしてあればかそけく聞ゆ

かそけくも聞ゆる水の草くより流るゝ果てをたゞに思ひぬ

汝も鳴くや堤の木々をとびわたり鳴きもつゞくる小鳥ぞあはれ

胸内にうづまく思ひほとばしりあさけの空に鳴き続くらむ

あらがねのこの大地にいきづける悲しき思ひ汝もあるべし

夕

かつ／＼に空の晴れ間ゆ青空を見るがともしく窓辺によりぬ  
仰ぎ見る夕の空に秋雲のけはひしるけく流れもゆくか  
世に立ちていでなむ時をひた待ちつ偲ぶ思ひに御空仰ぐも

朝

朝ぐもるみそら吹く風武蔵野の野草ゆらぎついたもさむしも  
身にしむる風は吹けども武蔵野の遠の木群はたちも動かず  
吹く風はすゝきが原をすぎて又いづくへゆくか武蔵広野を

曼珠沙華

秋草にまじりて赤くひとときはにはほへる花の愛かなしきかなや  
真愛しきその花ともし子規居士の文にしたしき曼珠沙の花  
紅の燃え立つ色に咲きにはひ堤に群れし曼珠沙の花  
うつし世を去りにし人の霊迎ふ時しも咲ける花のさぶしさ

(以上「堤辺に坐りてあれば」以下、正大寮『しきしまのみち』昭和一七・一〇)

巡回報告 (註「寺尾博之」二二ページ参照) 昭和十七年十月十四日 午後二時松本駅着、齋藤君に迎へられました。非常に喜んで当寺に案内して貰ひ旅装を解きました。松本に於ける根拠地として当寺を宿所とします。

今朝(二五日)

なつかしき都の友らしぬびつゝ前進の計画こらしつゝあり

信濃なる山路の果てにはるゝと遠くぞ旅に来つるものかな

新しき友も得にけり都辺の友らに喜び早く告げなむ

大御歌をろがみまつり一筋の道ゆく旅は嬉しきろかも

十六日夜も四人集まり座談をなし色々語り合ひました。

最後に順徳天皇御製を拝誦しまつり、七百年祭を迎へまつり承久の乱に於ける 御皇室のかしこき御苦闘を偲びまつつたのであります。そして談は靖国の英靈に及び「日本国民の人生の最高意義は、天皇陛下萬歳の一事につきるものであり、学問の出発点であ

り、帰着点である。『文化』に於ける武士道を今こそ確立すべき時である」と交々語り合ひました。

## 旅より

いま、明けゆく

薄明の空、

仰ぐひととき、

なつかしき言葉

くちずさみぬ。

『いづこより流れ来しか

この水よ』

『流れてやまぬ

この水よ』

『いづこより』『又いづこへ』か

我は知らず、

されど此処に

戦ひの教令。

ふかみゆく秋のみそらの下

信濃国原かけゆく旅よ。

鳥の声あり、

窓の外に。

小鳥さへ

生くるいとなみいそがはし、

止るべからず。

されば、

けふ

また新たなる旅に

いでたゝむとす。

## 再び旅路に

今去りゆくよ

なつかしき友らのもとを。

つらなる山々

右手に走り、

遠のく家並

射る矢のごとし。

別れ来し友の面わの

眼交ひ去らず、

手を振る姿

まなこ  
眼底消えず。

四人の友の克明の印象

胸にいだきて

信濃連山うち越えて

再びも吾は旅ゆかむ。

あゝ、いづくなりとも

新しき

友をもとめて。

二十日 神ながら成り出づる新しき生命に身内の底ひゆ振ひ立つ力を覚え、前進の意欲と果てしなき喜びに堪へられぬ思ひでありました。松本高校の友ら四名が駅頭に立って送ってくれました。その面影が今尙眼交ひ去らず、友らの上に祈念をこらさずには居られません。

(略) 前途は尙艱難は予想されますが、その苦難を乗り越えて友ら五名が南信濃にすくやかに戦をひらき、全国の同志との交流前進の歩調に合はするであらうと確信します。その為には、正大寮を中心として濃やかな憶念の情意を具体的協力の世界に展開す



べき不断の努力と細心にして大胆の実行あるのみと思ひます。全国同志再び一つの祈念の下に、亡き師友の御霊の下に、生命にみてる一つの同信団体たるべきであります。而して東京はその最高機能中枢として、同志の断えざる切磋求道が要請されるのであります。

「正大寮運動」として「正大寮」（註 東京・井の頭公園内にあつた日本学生協会の東京学生寮。全国各地に「正大寮」があつた）の名を全国学生の憧憬の対象とすべきであります。そして真の教育、学生生活の実内容を以て、現代の不幸に沈潜せる青年学生に唯一の光たるべきことを只今痛感し念願せざるを得ないのであります。「呪ひは時代に 愛は個人に」と申しますが、かく巡回の旅に語り合ひし青年学生は余りにも不幸であり、寧ろ斯くも時代の底ひに顧みられざる不遇の中にあつて、易々としてすぐしつゝある青年学生を僕らは只悲しむが故に愛さざるを得ないのであります。沁々と今度の巡回に於て感ずるのであります。斯かる悪むべき時代を匡しゆく責任は只僕ら同志の至誠を以て、此の時代の底ひに沈みゆく青年の純一の精神を奪回して行く外に途なき事を信じます。真に憎むべきは此の時代であります。精神なき教育であり、概念遊戯に身をやつしてゐる学者であ

り、同情と共感なき死屍の如き指導者であり、權威を以て青年の純粹の生を踏みにじる教育業者であります。豚の如く泥沼の中に右往左往しつゝあるものに代つて、真に祖国に仕へる清純の白道を切り開いて行きたいと念願するのみであります。願はくは「積誠」以て兆人を動かし行くべき至誠の求道を祈りつつ、時代改革の底流としてほとぼしり出づる泉の如きわれらの運動を思はしめられるのであります。

松本に於て、十八日夜松高生十数名集まり聖書研究をなしてをるといふ所へ参りまして、心ゆくまで話し合つたのであります。「現在の高校生活の不満は皆持つてゐる。

然し何らの具体的な方途が全然たゝない」といふ、高校生活に何らの希望も理想も有せざる悲觀論を吐く生徒が実に多いのであります。聖書を研究しても、少しも内心に味ははれる喜びもないし、自ら信仰なき事を告白するといふ、悲しみに満ちた友らでありました。聖書・マタイ伝の言葉を引用しつゝイエスの祖国主義に就いて語り、信について内心の体験のまゝ語り合つたのであります。食ひ入る様な友の眼に「貧しきもの」その故に純一の求道の熱に一つ一つ答へて行つたのであります。今こそ君らは立たざる

べからざる事、原理の上に揺がぬ信を求め、友情と献身の青年の理想を自らの手に依つて、自らの心に依つて取り戻さねばならぬ事を訴へ続けたのであります。「我々の中にある神にこそ忠なれ」とのイエスの言葉は現実に僕らのゆくてを示してゐると語りつゝ御製拝誦の意義を語り、礼拝と誦典が形式化せる無内容の宗教は死に等しい、されば我々の只今ゆくべき道は祖国であり日本であり、そこにこそ永遠なる神の存すべきことを訴へたのであります。友らの瞳は異常に輝きに満ちてゐました。次いで高校生活の現状に対して盛んなる意見が述べられたのであります。真に純一のものもの悩みと苦しみに堪へがたき共感共鳴の思ひがせられ「さればこそ僕ら自身が」「共に」ゆくべき事を語り合ひました。終りになると皆の顔に微笑浮び、尽きぬ喜びに満たされたのであります。友らの友情に感謝しつゝ、三井先生（註 三井甲乙の長詩を声高らかに誦して別れを告げました。皆玄関口で並び将来の文通を約しつゝ夜更けて帰路につきました。

「聖者義人を以て自任すべくもなく」といふ言葉を思ひつゝ「友よと呼ばば友は来りぬ」と闇夜の空に高らかに歌ひつゝ帰寺しました。

（謄写刷『神代ゆ今』第一、二号 昭和二七・一〇・一七、二二）

静岡より

山峡の坂路下りつ

仰ぎ見るか青のみそら

みそらの下

起き伏し

連なりそびゆる

群山

あゝその山の背 隅々に

落せる日影

秋の日ざし

秋たけぬ 山路

ふみさき たどりゆく道

友いまさむと

独りゆく此の旅路よ

みそらゆく雲にも

ほのゆらぐ我が下思ひ

紅葉なす木々とびかひ

ゆきましゝ友の声か

「たはむべしやは」と

たまきはる生命捧げて斃れし

友我に呼びかく

確信を実現せむとすれば

鳴くよ 名もなき小鳥だに

湧き出づる胸内の思ひ

古人も旅ゆきぬらむ

甲州街道

ますらをのつとめ抱きて

吾も又行く

山路越えつゝ

落合村に行く途中 (二〇目)

底ひなき苦しみ襲ひ来てやまず

「道絶えたり」と

吾が身に聞かする今

絶望に昼の光も見えず

たえむとするか吾が生命

されど今し友の声あり

ゆきましゝ友 我をはげます

あゝ その声

「死すべからず 死すべからず」と

幾度も書きて記せる友の言葉

よみがへり聞え来るに

あゝ我死してよきや

撓むべきや

再びも三度も

死せる友おこして

もろともに征かなむ

われらの戦場

戦ひこそわれらの生よ

明治天皇御製（折にふれて 明治三十七年）

戦のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ

薄暗い宿屋の一室で、再度の出発をこらしてゐます。では又。諸兄の御健闘心から祈

りつゝ（夜が活動期となつてゐます）

（書き劇『神代ゆ今に』昭和一七・一一・一一）

夕まけて晴れたる空にゆく雲のかつ色づきて流れゆくかな

あふぎ見る夕の空に秋雲の吹きはらはれてとく流れゆく（ノートから）

晴れたりと思ひし空に雨雲のまたもおほひてたれこめにけり

松群にさやぐ小雀のにぎはしき声を聞きつゝ筑紫の思ほゆ

朝風のそよ吹くなべに立ちゆらぐかへでの群葉やゝ色づきぬ

櫛はぢの葉のみぢ染めけむ筑紫路の秋のともしも東に居れば

ふと聞けば庭草なかに虫の音の一つ聞ゆるたえ勝ちにして

亡き友のみ魂祭りてはるけくもゆくて思ほゆる朝なりけり（ノートから）

秋雨の晴れて清すがしき此の朝君がみたよりよみまつりけり

群木立鳴きみ飛び交ふ小鳥らの声にぎはしくあたりにもちぬ



にぎはしき声みちわたり久方の光すがしき窓の外かな  
友しぬび仰ぐ朝のみそらゆく雲の一片も心楽しきひとひら（ノートから）

友へ

なつかしき君のたより読みました。

三鷹の杜は既に紅葉し 散りしきる木の葉に土は埋れ、  
迫り来る冬の気配に

急速の生の律動が追ひこす様に感ぜられる。

一つ二つ小枝をはなれる落葉が

あるかと思へば、吹く風と共にさつと

雪の降る様に散りゆく有様は

実に美しいと思ひます。

やがて又 迫り来る冬

四季の推移

自然の変化、

一時もやむまもなき

うつり押し すゝみにすゝむ

内なる生命

あらはれてこゝに

散れる木の葉

散り落つるよ木の葉

音もなく 大地に

帰るよ 土に。

落ちゆく 木の葉

迫り来る冬の足音

散りゆく木の葉

土に落ちぬ。

小枝はなれて

ひるがへり

舞ひゆく木の葉

いづくへともなく

散りゆく先は

とはに知らじ

ゆくへはなき

散りゆく木の葉

されど落ちゆくよ

此の大地に。

物理法則により

自然の変化と

微動の開展をば

母なる大地を落葉に示す

大地に

帰りゆく木の葉

淋しともなく

二つ

三つ

散りゆくか木の葉は。

にぎはしく友ら集ひてさまざまに語りいままさむふけゆく今宵も

迫り来る冬の夜風も身に沁みて冷たからなむ西の都は

友しらと部屋に集ひてにぎやかに語らふさまを思へばあかずも

未だ知らぬ友もあるらむなつかしき友もいままさむ一つ室内に

## 劇 詩 名 草 の 妻

## 第 一 場

時：神功皇后三韓御征伐の時代

磯鹿しかの浜辺から名草が勅命を被りて新羅の国見に西海に出でてより四月を経たが未だ名草は帰つて来なかつた。名草は磯鹿の海士みまであり、此の近海に於て並ぶ者なき勇士であり、船漕ぎの達人であつたが、先の使の吾あへ笈への海人烏摩呂をまろとは異つて年が若く、それに仕へてつはものとなつたのもつい先頃のことであつた。磯鹿の島は檀日かしひの浦に直ぐ続いた近くの島であり、大三輪の神を神祭してより筑紫の諸国より集ふ兵士共の多くなる頃、名草らの仲間は勅を被りて、鮑、鯛、海松藻み等を貢たてまつり御軍に従ひまつたのである。名草の妻はこの里の主の一人娘であつた。名草は妻に告ぐる暇もなく西海に出でて行つたので、兵士の一人から事を聞いた名草の妻は見るからに哀れであつた。

海に突き出た岬の上に、此の宵も又名草の妻は出てゐる。既に四月目の宵であるが未だ帰つて

は来なかつた。名草は海で死んだのではないかといふ噂が漸く拡つて来るにつれて、名草の妻はたまらない気持で此の岬の丘の上から海原を眺めつゝ泣き暮す日が続いてゐた。磯辺にはつはものどもがたむろしてゐるので、遠くまはつて、一つ離れた此の岬に来るのが只一つの喜びであり、名草が船出して行つたその夜などは、一夜此の岬の上で泣きあかしたこともあつた。沖にたなびく雲の奥から夫の船が帰つて来るやうに思はれて、秋草を分けて岬の先に喘ぐやうにかけ走つて出て行つては声をあげて泣き続けるのである。

名草は未だ帰つて来ない。

### 名草の妻

すめらみことのみことをもちて

西海さして出でましゝ

吾が夫なりと思へども

沖辺はるかに湧く雲の

たなびく雲のいやはてに

一人行きますすらすらをの

君し思へばたへがたく  
今日も岬に立ち出でて

海原見つゝ

うらなげく。

櫃日の浦の夕なぎに

飛び交ふ鳥の三つ四つと

群なし行くもあはれにて

吾が泣く声も添ひ行けと

君征きましゝわたつみを

飛び行く鳥と身はなりて

行かましものをたをやめの

荒磯ありそにはひなげきつゝ

帰り来こ 夫と

おらぶなり。

母

おゝ、また此処に居なしたか、日も暮れように。さゝ、早く帰らうぞえ。名草は、必ず帰る。磯鹿一の海人ぢや。

ますらをの名負ふてみことのり戴きまつゝたのぢや。必ずつとめ果して帰つて来まするぞ、さゝ……

妻

はゝそば、夫は帰つて来ようか。えゝ、船が、船が見えるか。

名草の妻は泣きはらした臉を見張つて沖の海を見渡してゐる。

母親は名草の妻の手をとつてゐた。

妻

はゝそば、あれみ船ぢや。それ西方の雲の下に、なゝ……

母

あれは雲ぢや。黒雲ぢや。気を鎮めて、なゝ。嵐が来る。さゝ帰らうぞえ。

秋草の茂れる野辺に

また伏して音のみしなげく



あはれたをやめ

なが泣きの雨雲よぶか

遠き沖辺ゆ

押し寄する黒雲のあり

風吹かば吹け

雨降らば降れ

吹く風も降る雨も

そのなく声をとどむべしや

立ち去らずなげく姿あはれ

あらいそ荒磯えに立てる松が枝

夕風にさ揺れてやまず。

里の童は、眼を泣きはらして、破れた衣を着たまゝで、岬を指して、ぼんやりと歩いて行く名草の妻の後姿を見ては、面白がつてはやし始めた。

童

それ名草の妻ぢや 泣き妻ぢや

夫恋ひて 恋ひて

岬に立つ女ぞあはれ

童等

誰をか待つと かもめ問へども

とへども

答へず

乙女しき泣く

## 第二場

誰の口からともなく此の様な歌が歌はれ始めた。

大三輪の神を祭つてより人々の多くなつてくるこの里のあたり、秋風の吹くにつれて淋しいこの歌が名草の妻の後を追ふてゐた。

筑前風土記にはこの大三輪の神を祭つた時のことを次の様に述べてゐる。

「気長足姫尊、新羅を伐たむと欲して軍士を整理へて發行たしゝ間に、道中に遁げ亡せき。」

その由を占へ求ぐに、すなはち崇れる神あり。名を大三輪の神と云ひき。所以にこの神の社を樹て、遂に新羅を平け給ひき。」

この大三輪の神の祭りは、氣長足姫尊の御手自らに依つてとり行はれ、その後整はなかつた軍勢に神靈の加護あつて漸く士氣を回復し、先に降伏せし土蜘蛛等もぞく／＼と御軍に従ひまつる様になつた。檀日の宮近くは久米、物部、靱部等の八十伴緒が滞留し、先着の諸兵は開墾しつゝ時を待つたのである。大幡主命を將軍とする神伴緒は精銳部隊として全軍の中心をなして姪ノ浜から小土山一帯に居住し、東国、出雲、丹波、近畿、四国等から御軍に来れるつはものどもは松浦の里あたり一帯幾千となく遠征の日を待ちあぐんでゐた。仲哀天皇の崩御の御事がもれ知られてより一層全將兵の間に神靈の加護を熱禱し氣長足姫尊の御命のまゝにと新羅討伐の士氣は高まり、かくして大三輪の神の祭りに全軍一斉に振ひ起つた。怒濤の如く全大陸に向つて神の御軍が奔流せむとする勢が満ち溢れて来たのである。烏摩呂の失敗に次いで名草は全軍の期待と希望とを負ふて一人西に船出したのである。「西の海に国あり」と云ふ一言の報告が如何に全軍の將士の夢にも待ちこがれてゐた事であらうか。然し名草はなか／＼帰つて来なかつたのである。漸く將士の中に不安と焦燥の思ひがひろがつて来た此頃、今宵も又行宮では氣長足姫尊の御臨席の下に武内宿弥、烏賊津使主、大伴主命の群臣集ひて御前會議が開かれて

ゐるらしかった。

沖の雲が漸く空をおほひ風が荒れて来た。軍船の揺れる音も激しくなつて来る。

### 合唱

夜は明けぬ（反復）

夜は明けぬ（反復）

嵐止みたり朝の海

（少し間を置いて）

渚に寄する白波の

白き波の穂げざやかに

つどふ大船かず知れず

樞日の海の浦わ辺に

群れなす人も賑はしき

（掛声聞ゆ）

よーい よーい よいやさくくくくく

兵士一 愈々神伴緒の出発ぢや。どうぢや、見よ、この荷積みを。

兵士二 劍、矛、鎧に甲に楯あり鞞ゆきあり。新羅の国に押渡る軍の先手は我等ぢや。神伴

緒ぢや。

兵士一 本軍の方の海人の名草は未だ帰らぬ様ぢやが……

兵士三 見張りの者も心を落してゐた。

兵士二 然し今となつては致し方あるまい。

兵士三 でもなう、われら発つ迄に名草が帰つて来ればよいがなう。

兵士一 駄目ぢや、名草は駄目ぢや。出発の準備ぢや、準備ぢや。

(兵士ら合唱)

しづけき海面

横切りてかもめ群なし

わたるなり

御軍船の舳先に

はためく旗も勇ましく

御軍の魁承る

神伴緒のますらをの

歌ひとよもすその声の

浦わにみちて

暁の光に

あけぬ櫃日の宮

大幡主命の神伴緒の部隊が愈々先発の部隊と決定したらしく、先日の廟議に於て名草の帰りも待ちきれずに愈々征韓出師の議が確定し、秘に全軍に出発準備命令が下された。

行宮かりみやの傍に立てられた幡が朝日に映えて松群の中に翻つて居り、それが姫の尊の尊くもまたかなしき御決意を示すかに仰がれてならなかつた。

それまでに如何に気長足姫尊の御心痛と群臣の焦慮が積まれて来たことか、計り知る可くもなかつたのである。

先にこの浦にて角髪みづらに為たまひし時、御側に仕へまつりし宿弥以下の群臣達に詔下したまふたのである。

「夫レ師イナサヲ興シ衆クニオキヲ動かスコトハ国ノ大業ナリ。安危成敗レムコトモ必ニ斯ニ在リ。吾婦女ニシテ加以不肖、然レドモ暫ク男ノ貌ヲ仮リテ強チニ雄々シキ略ヲ起シテ上ハ神祇ノ靈ヲ蒙リ、下ハ群臣ノ助ニ藉リテ、兵甲ヲ振シテ嶮浪ヲ度リ、鱸船ヲ整ヘテ以テ財ノ土ヲ求ム。若シ事成ラバ群臣共ニ功有リ。事成ラズバ吾独リ罪有ラム。既ニ此ノ意有ス。其レ共に議ラヘ」(日本書記)

角髪みづらにあげし大姫の

渚に立ちて曰ひし

大御言葉の畏さに

集ふ兵涙せり。

角髪みづらにあげし姫尊の

劍とりはき兵を

率ゐて海原押し渡り  
国の大業なし給ふ。

樞日の浦の渚辺に

詔いたゞき御軍は

海山河をとよもして

いざや行かんと振ひけり。

「群臣達皆曰さく。皇后天下の為に宗廟社稷を安くせむ所以を計りまし、且罪を臣下に及ぼしたまはず。頓首詔を承る」(日本書記)

磯辺にぬかづく群臣の

姿も声もうちふるひ

寄せ来る波の小波に



眼くもりて誓ひけり

さきつみかどをうつゝにも

仰ぐ此の日の畏きや。

今しも仰げば行宮かりみやに

はためく御旗そびえ立ち

吹く秋風に浜松の

音なり止まずつはものは

大御心をしのびつゝ

水漬く屍と誓ひけり。

### 第三場

兵士ら磯辺に群れて兵器の手入をしてゐる。

兵士一 糧かては調べおへたな。

兵士二 終へた。明日までに軍船に積めとの事ぢや。愈々出発らしい。

兵士一 明日迄？ いたく急いでおはすのぢやなあ。役の者を集めようか。

兵士二 なか／＼今日は集るまい。

兵士三 おーい。おゝ此処おほに座したか。見よあの磯辺を。

兵士二 いや／＼出発らしい。

兵士三 いや／＼出発だな。あゝ、僕わしも早く行きたい。財のみつる国といふが、早く行きたいなう。

兵士一 新羅の將軍をこの劍で一討ちぢや。

兵士三 そちの劍ぢやきれまいが。

兵士一 何を。(大きな声で)

笑声

兵士三 海押し渡り仇の国新羅討たばや。

(歌ふ調子で)

兵士等 討たばや 討たばや 新羅うたばや。

兵士等 抜かずや つるぎ そのつるぎ太刀。

兵士一 なう、それにしても名草は帰つて来ないなう。

兵士二 嵐ではてたのだ。 たうとう名草も帰つて来まいなう。 烏摩呂の卑怯者とは違つてゐたからな。

兵士一 烏摩呂はどうしてゐる。

兵士三 出て来ないのぢや。 ますらをなら恥位知り居らう。

(沈黙)

兵士一 おう清しき空ぢや——嵐のあとの空はなう。 名草は帰らぬが、見よ、白雲の空

をかけつてゐるのが、名草のこぐ船の様ぢや。

兵士三 名草の妻があはれた。 死んだときいたらあの上に気も狂ふてしまはうに。

(童らの歌を歌ふ声淋しく聞えてくる)

兵士二 又あの歌だ。 あゝ気が滅入つてしまふわ。

兵士一　こら、やめろ。その歌を歌ふな。

(大声でどなる)

(童らびつくりして退く)

兵士一　やゝ、にげをつたな。

兵士三　戦ひぢや／＼。氣長足姫の尊様も征でますのぢや。

兵士一　さゝ、行かう。

#### 第四場

(群臣坐してゐる)

宿弥　先発の部隊は、大幡主命、そちの神伴緒を主力とする筑紫の諸兵士を集めて征つて下され。本隊は、臣下<sup>やうがれ</sup>はじめ御仕へ申して物部、大友、久米、佐伯、鞆部の諸氏の兵士を以て編成致す。却つて諸国のつはものども集ふて居れば戦するには難からうと思ひまするが。

大幡主命　御安心下され。兵士共は待つて居ります、征でて行く日を。必ず姫の尊の御

心に答へまつることが出来ようとぞんじます。

大友 え、御案じなさる程も御座いますまい。

宿弥 左様であらう。されどなう。真にこれは国肇りてより以来このかたの大きな御業ぢや。姫の尊様も御心を痛めて居られます。

(沈黙)

烏賊津使主いかづおみ 何時に致します！

宿弥 それぢや。姫の尊様もそれを氣遣ふて坐すのぢやが、名草も未だ帰らぬしなう！  
大友 宿弥様。此の上時を待ちましては兵士共があきます。長戦になりますと怖しう  
ございます。

烏賊津使主 いや、大友氏、あわてゝはなりますまい。じつとしばらく時を待たねばならぬ。名草も帰つて来ぬし、新羅の様子を窺つて船出するにこしたことはありません。ますまい。

(ザワ／＼一座騒ぎ始む)

大友 烏賊津使主、それはならぬ。いや、それはなりませんぞ。兵士の様子御覽し給へ。

此れはすぐにも船出せねばなりません。

烏賊津使主　されば筑紫はどう致します。今のまゝにて筑紫の熊襲どもがまつろひまつるとお信じか。道が断たれますぞ。御国への連絡の道が、熊襲どもに断たれます。

群臣一人　烏賊津使主、それはなりません。

群臣一人　いやまちなされ。

議論は決しなかつた。慎重論と早機出兵との両論が対立したのである。

宿弥は会議の最中黙つて考へてゐた。それが群臣の間には何か宿弥の決意を示すかに見えた。

そしてその夜再び会議が開かれ、氣長足姫尊出でまし給うて、愈々御聖断を仰ぎまつた。万障を排して全軍一斉に神のみをしへのまに／＼出兵と決定した。その時の姫尊は静かに大神のみをしへを告げ給ひて、群臣の協力を誓はせ給ふた。

## 第五場

街道を駅馬が行宮を指して馳けてゐる。全軍の將兵は忙しい。歌声がきこえて、櫃日の浦に寄する白波が光にきらめいてゐた。

突然、後の丘の見張所から鼓の音がけたましく鳴りひびいた。又次の丘の見張所からも、朝の浦わに次々に鼓が打ち鳴らされた。兵士は何ごとが起つたかと不安気に手をとめて指令をま

兵士一 (大声に)

おーい、おーい。名草の、名草の船が見えるぞー

(名草の船だといふ声、一斉にわきおこる)

兵士二 (食糧の積み出しをやめて)

何、名草の船が。

兵士三 見えるといふのか？

兵士四 (かけりながら)

名草の船だ。船だ。

おーい、名草の船だ。

兵士多数 何処に、何処に？

兵士等 あれ、あれぢや。見ろ、名草の船ぢや。

兵士等 あゝ、名草の船だ。

うん 名草ぢや。

名草が帰つて来た。

名草が帰つて来た。溜められた堰が切り落された様に浦わは一斉に騒がしくなってくる。

名草だ、名草だ、と呼ぶ声が満ちて、渚辺に立ち、小舟を漕いでゆく兵士もある。名草の船は懸命に磯辺を指して漕いで来る。夢中になつた喜びが全軍をとらへた。見張のたゞく鼓の音が、松浦あたりにも及び、はやうまの使が入り乱れて走り出した。

旗はかゝげられ、鼓笛がならされた。

(合唱)

ひたまちし名草のふねは

わたつみの波押しわけて

いまぞ漕ぎ来る。



名草の帰り来る船を見た全軍は一斉に歌ひ鼓笛を奏で始め山川も鳴りとよもし、海の面にひろ  
ごりわたるそのひよぎに水鳥の群も一斉に飛びたつ。

既に軍船の上でありし兵士達、まだ磯辺に立てる兵士たちの胸中には云ひ得ぬ歡喜がこの遠征  
の前途に無限の希望を与へたのである。

名草が帰つて来たのは神靈の奇蹟であつた。

それでも行宮のあたりは不思議に静かに只群臣等の往来が見えるのみであつた。神聖と嚴肅さ  
とを湛へつゝ静かな行宮には葺ぶきの屋根が朝の光にくつきり木群の中に浮んでゐた。それは  
この大遠征の前途を深く慮り給ふ姫の尊の御心の如く「夫レ師ヲ興シ衆ヲ動かスコトハ国ノ大  
業ナリ」と仰せ給ひたる大御言葉の調べの如く、深く国家のゆくすゑを案じ給ふ、われらの計  
り知るべくもなき畏き御心と仰がるゝのであつた。木群を飛び立つた鳥が空高くかけ上る。名  
草の船はぐん／＼と近づいて来る。それは吉報を確かにのせてゐた。

そのとき磯辺に立つ人を押し分けて一人の女がかけつけて来る。髪は乱れ、裳もひきちぎれ、  
「名草様、名草様」と鋭く叫びつゝけてゐる。それは名草の妻であつた。

人一 名草の妻ぢや、名草の妻ぢや。

人二 それよけてやれ、なう可愛さうに。

人々はよけて立つた。名草の妻は狂つた様に渚辺にまで辿ると、ぼつたりと水につかつてたふれた。

渚伝ひて泣く妻の

夫せごの舟影みとめては

夢心地

水にまろびつ

磯づたひ 名草の妻の

泣きいさち

小船早くとかけめぐる。

磯辺に集ふますらをも

あはれ乙女の

夫恋ひて

狂ふばかりに

浜づたひ

船まつさまのかなしさに

猛き心のますらをも

涙ながしつ

もろともに

漕ぎ来る舟を待ちにけり。

(註 『日本書紀』卷第九に仲哀天皇崩御の年の九月、氣長足姫尊が「大三輪社を立て、刀矛を奉りたまひ、軍衆自づからに聚る。是に吾瓮海人烏摩呂をして西海に国有りやと察しめたまふ。又磯鹿の海人、名は草を遣して視しむ」とあるのを脚色したものである)

昭和十八年——二十四歳——

夜久正雄宛

厚キナサケコモレルミ歌次々ニヨミユクマ、ニ涙ニムセビヌ  
カクバカリ我ガウヘ思ヒ給フ先輩ノ情ニコタヘムスベナシイマハ  
ミソラユク鳥一群ヨ我ガ思ヒ君ニツタヘヨトタゞニ祈ルモ

カナシミニ閉セル胸内漸クニ力得ニケリ君ノ歌ユエ

ウツソミノ苦シミイヨ、マサルトモ心ユタカニタヘナムワレハ

有難キミ歌繰返シ拝読サセテイタゞキマシタ、苦シミマサルトモ友ラノナサケニ生  
クル幸ガアリマス、サレド痰ガツマツテ苦シミヌイテキマス、ネテ書キマシタノデ  
乱筆御許シ下サイ、キツクナリマシタ、諸先輩ニヨロシク

(五月 奉天市の病院から)

遺言及び辞世（六月八日）

皆様ノ厚イ情ニカコマレテ死ンデユク。今マデオ導キ下サツタ事ヲ心カラ感謝スル。  
オ国ノタメ思フ様尽セナカツタノガ残念ダツタ。同窓ノ諸兄ハワレノ志ヲムダニシナイ  
デシツカリヤツテクレ。ホントウニオセワニナツタ

ウツソミノイノチタユトモマスラヲノカナシキネガヒヨロヅヨマデニ

コトキレルイマハノキハモスメクニノヤスケキヤウイノルカナ

（註 「百武礼之」 八六ページ参照）



## あとがき

この遺稿集の作成にあたっては、前々から大ぜいの知友の方々のご協力をいただいてまゐりましたが、このたびまとめ役をしてくださったのは、六名の編集委員の方々（いづれも、この遺稿集のぬしたちとかつて同じく学び、交はつてゐた方々）でした。その六名の方々からそれぞれ左記の「あとがき」を寄せてくださいましたので、順不同で次にのせることにいたしました。編集作業を終へての各委員の深い感懐の一端をご推察いただければ幸ひであります。

（小田村寅二郎）

## 一

法政大学人事部長 香川亮二

もう十年余の昔になるであらうか、遺稿収集のことが議にのぼってお手伝ひすることになった。まず御遺族の消息と、遺稿や写真の有無をたしかめようと、記入要項を印刷した用紙なども作り、いよいよとりかかつたところで、勤めのつごうで思ふやうに動けなくなつた。そのうち身体をこはしたりしてつい無為の日々を過してゐた。

昨年八月、関正臣君から、遺稿の編集が始まった、といふ知らせがあつた。胃の手術をしてから一年余、身体にもやうやく自信がついてきた頃であつたが、その便りを読みながら、今やらないともうできなくなるのではないか、と心の底からつきあげてくるものがあつた。

それから一年、夢中でやつてきた。考へてゐた以上に重い仕事だつた。果してやり通せるだらうか、といふ心配におそはれることも幾度かあつたが、御遺族を探してお訪ねしたり、残された遺稿を整理してゐるうちに、どうしてもやらねばならないといふ気持が強くなつてきた。形あるものはやがて亡びる。しかし、言葉は亡びない、といはれる。はたしてさうであらうか。友らの文にむかふとき、これを遺し、これを伝えてゆかうと意志し、つとめてきた人びとの「志」が胸にひびいてきた。「みんな死んではゐない」その証しを遺さねばならない。一人一人の名を呼びながら、さう思ひながらここまでつとめてきた。

さうかうしてゐるとき、古い写真の箱の中から一枚の写真がでてきた。その裏に「昭和十八年三月二十六日、加藤の上京を期し、江頭に送らんとして」と記されてある。「加藤」とは、本書の編集委員の一人加藤敏治君であり、「江頭」とは本書に病死者の一人として収録されてゐる江頭俊一君である。江頭俊一君が喉頭結核に冒されて満洲の御両親の許に帰つたのは、昭和十七年もおしつまつてからであつたと思ふ。間もなく東京、井の頭公園にあつた「正大寮」は解散して、そこにをつた者はみなそれぞれに東京のどこかに分れ住んだ。その頃、加藤敏治君が福岡から上京した時、



在京の同輩数人が、病中の江頭君を慰めようといふので写したのが、その写真である。遠く満洲の地に一人病み臥す江頭君を偲んで、不思議にみな「一点」をみつめて写つてゐる。死んだ寺尾博之君も、百武礼之君も、生きてゐる宝辺正久君、加藤敏治君もゐる。この写真を受取つた江頭君は、どんなに喜んだことであらうか。

しかし、数カ月の後、江頭君は祖国の永生を念じつつ天に昇つた。その年の暮、写真に写つた者はほとんど学徒出陣で出征した。戦ひ終つて、百武君はつひに帰らず、寺尾君は、自らの手で、そのすべてを捧げつくして国難に殉じた。寺尾君の御母堂も又やがてその後を追ふやうにして亡くなられた。

一人一人追憶はつきない。いまやうやく、亡き友らの遺稿集の第一冊をまとめえて、み霊のみ前にささげうることになつたが、それは自分らの力ではなくして、なにかの力にみちびかれてこまできた、といふ感が深い。まだまだ、なすべきことは多い。これからまた一筋につづくその道を歩いてゆかねばならない。このしごとが終ると、やつとみんなが待つてゐる彼岸にゆけるやうな気がする。さう思つて、これからの第二冊にとりくんでゆかうと思つてゐる。

## 二

(社)国民文化研究会副理事長  
(株)宝辺商店社長

宝辺正久

この遺稿集に収録した人たちが、戦時中に結集してゐたのが、当時の学生運動団体「日本学生協

「会」であつた。その道統を戦後の昭和三十一年に復活したのが、本書をいま刊行しようとしてゐる社団法人国民文化研究会である。毎年全国六十前後の大学から大学生を集めて「合宿教室」を開催して、すでに二十余年を経過してきた。その第二十一回目の「合宿教室」が、昭和五十一年夏、佐世保で開かれたとき、その理事会でこの遺稿集編集の議が決定された。そして私もその委員の一人に加はることになつたのである。

この事業は、実は十余年前から企図され、一部の原稿は当時集められてゐたので、そのあとを受けて全委員で精力的な遺稿収集にはいつた。集められた遺詠・遺文・書簡の中から限られた本書のページ数に合わせて選別し、やうやくにしてここまで辿りついた。

こゝに載せた方々は私たちにとつて「亡き友」である。いま、決然たる意志を眉宇に秘めた彼らの面影を偲べば、その面影に重なつて、埴輪の武人のやうな、『古事記』の神々と共にあつた名もなきますらを達、建国期の若き青人草とでも言ひたい姿が脳裡にたつ。これら神々に発する長い日本の歴史の歩みの中で、亜細亞大陸の文化を、近くは西欧の文化を、日本固有の民族精神に摂取し、以て国民教化を実現してきたわれらの師父たちに、限りない讃仰と求道の念を傾けたのも彼ら「亡き友」の日常の姿であつた。また、ここに生成護持され来つた祖国日本の永久生命を確く信じ、自らの身をそこに没入することに歎びと生き甲斐を求めた、限りなき多くの先人たちに、つながらうとしたのが、過ぐる戦時下に戦ひ斃れた多くの青年たちでもあつた如く、亡き友らの姿であつたと

思ふ。本書に収録した十二名の青年たちの遺詠・遺文は、そのことを確証して余りあるものと思ふ。この遺稿集が語りかけてくるものに対して、ありましし日々と共に語り合つた私たちにしてみれば、殊のほか深い感動にさそはれてくる。そして、自づと若き日々<sup>に</sup>これらの亡き友らと、ともどもに拝誦した明治天皇のおほみうたが、思ひ出されてくるのである。

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

国の為いのちをすてしますらをのたま祭るべき時近づきぬ  
拝誦しつつ、亡き友らをしのぶ思ひ切なるものがある。いま、この遺稿集が刊行されることを心から嬉しく思ひつつ、本書が若い人々の目に心に、触れてゆくことを切にこひねがふものである。

三 ——— 本書掲載の寺尾博之君を偲びつつ ———

熊本県八代市助役 加藤 敏 治

福岡市の南西郊外に油山と名づける小高い山がある。その中腹、<sup>女だ</sup>泪が原が、寺尾博之君自刃の地であつた。私が最初にここを訪れたのは、寺尾君が自刃したあと一か月ばかり経つた昭和二十年九月のことであつた。油山観音堂から五百メートルほど細い山道を辿り、道ぞひの小松をかきわけて下ると、ややなだらかな斜面に出る。そこには低い若木が点々と生へ、東の方は遠く眺望が開けてゐた。ここが彼の最期の地であつたかと思へば、足もとの小笹まじりの草叢を踏むことさへためら

はれた。そしてそこには真新しい等身大の標木が立ち、寺尾君と一緒に自刃された上司の長島中佐のご遺体のあとには白梅が、寺尾博之少尉のところには紅梅がうゑられてゐた。

現在、その梅はもうなくなつてゐる。そこは整地されて、高さ五メートルの巨大な御影石の記念碑が建立されてゐる。また生長した杉が林となつて視界を遮つてをり、早くも三十数年の月日が過ぎ去つたことを示してゐる。年移り、もの変れども、寺尾君についての思ひ出は薄れるべくもない。在りし日の彼の笑まひと振舞ひとは、ともにいよいよ鮮明に想起されてくる今日この頃である。

寺尾君との今生の別れは、昭和十八年十二月の霧島への旅行であつた。出征直前の私達十名。戦死された百武礼之、松吉正資、渡辺二郎の三君も一緒であつた。旅行中脳裡を離れなかつたのは、さきに病歿した江頭俊一君らのことであつた。酒を飲めば、江頭君が居ればと思ひ、歌をつくと彼のことか歌はれてゐた。また、同じく病歿した藤原邦夫、百武尚美の両君のことも語り合はれた。昭和十六年急病死した二人を、私達は「日本学生協会」発足後、『最初の思想戦戦死者』として祀つたのである。それは平時、戦時を問はず、国のために生命を捧げた人々を、等しく戦死者として崇めたからのことであつた。亡き友の肉体は滅びても、み霊は私達とともにあることを信じたからである。亡き友のみ霊とともに戦場に発つことを誓ひあつたのが、この霧島への旅であつた。

この霧島旅行の思ひ出は、その三カ月のあとに、偶然海軍で再会した寺尾君から和多山儀平君（私の義弟）に伝へられてゐた。それを記録した儀平君の日記を読んだ時には、二人は既に現世を

去つてゐたのである。戦は終つた。未曾有の混乱と困窮の中で、時流に溺れんとする私を支へてくれたのは、先逝いた友らへの回想であつた。

かくて、戦前の「日本学生協会」の伝統は「国民文化研究会」に継承され、「学生青年合宿教室」は終戦後十年を経た昭和三十一年に、やうやくにして復活した。しかし、九州・中国地方にある仲間たちは、合宿の復活する前でも慰霊祭だけは絶やさなかつたのである。十人足らずの友人が毎年かの油山に集つた。その頃から、何とかして遺稿集を作らなくては、の念願は生き続けてゐたのである。それが、いまやうやくにして実現したのであるが、思へば全て亡き友のみ霊のみちびきのやうな気がする。改めて、生死を越えて友らとの「一信海」につながら生きる機縁に感恩報謝するのみである。そして、国民文化研究会二十余年の歩みによつて、亡き友らの志を継いでゆかうとする沢山の後輩諸君が確実な足どりで続きつつあることをみ霊に告げることが、心からの喜びである。昭和五十二年八月、油山で挙行された寺尾君の三十三年忌は、戦後教育を受けた後輩達が主力となつて、記念碑の前で厳粛に営まれたのである。

#### 四

神奈川県舞岡八幡宮宮司  
元陸上自衛隊空挺団幕僚

関正臣

私は、この本の編集委員に加はり、作業を続けてゆくうち、次第に「此の集を、一人でも多くの

方々に心して読んでいただきたいなあ」といふ氣持を抑へ切れなくなつて来た。

この本に見られる学徒戦歿者の文章からも判ることであるが、彼らは、世間で評して来たやうな「戦場におひやられた、あはれな子羊たち」ではなかつた。それどころか、はつきりした自意識と透徹した人生觀を祖国日本の永遠の發展の中に確立してゐた人々であつた。生も死も、一つに考へることが出来た人々であつたのである。そのこと一つだけでも証明し得たとすれば、編者の一人としてこれに越した喜びはない。

日本は戦ひに敗れたが彼等は敗れてなほ存続する所の、祖国日本の永久生命の中にいまなほ生きつづけてゐるのである。彼等は「天皇上に在し、國民挙つて仕へ奉る」といふ、父祖傳承の志を固く心中に宿してゐたが、今日の世相からみて、それが大いに異なるからといつて、彼等が未開野蕃であつたとか、彼等がだまされて出征したとか評することが、どんなに淺薄な言ひがかりであり、どんなに彼等の心中を知らざるものであるかを、考へ及んでほしいと只々願ふのみである。

## 五

高千穂商科大学助教授 名越二荒之助

本書の持つ特殊ともいふべき性格は、「はしがき」をはじめとして、同友諸氏が書かれてゐる「あとかぎ」でもお判りいただけるやうに、「戦死」と「病死」と「自刃」との「死に方」による區別



を乗り越えて、その人々がこの世にをられたときの「生き方」に焦点が絞られて編集されたことである。そのことの意味は、本書掲載の遺詠・遺文が十分に語つてくれているので、ここではつけ加へることを控へたいと思ふ。

ただ一言記せば、此の遺詠・遺文の中には、「戦死こそは生の極致」とか、「祖国無窮の生命の中に」とかの言葉が見られ、今の若い方々にはまことになじみにくいかも知れない。しかし当時を生きた私達の同人は、戦死と病死とを問はず、かうした言葉の中に共通した意志と悲願とを把握しながら、学問の研鑽と友情の連なりを深めてゐたのは、まがふかたなき事実であつたのである。どうかそのことをお心に止めていただきたいと思ふ。

拙い和歌であるが、この編集作業中に詠んだものを次に記させていただくことにする。

言霊のふしぎなるかな三十年を経てよみがへる亡き人の声

亡き人の語りかくるか今生の思ひをこめし言葉のかずかず

厳かしき国のいのちは知られざる人のまことに支へられゆく

名も知れず失せしといへど魂はかくつたはりて御国まもらむ

夢ならず活字となりしなき友のゲラの刷り文ただながめあつ

右は、今年（昭和五十二年）八月二十四日、この本のゲラ刷りがはじめて手許に送られてきたときの思ひを詠んだものである。長い間の夢が、いま現実となりつつあることへの感慨であつた。

願れば、戦中に先逝いたみ友らの遺稿集を編集して、み霊に捧げようといふ願ひは、長い間、同人一同の共通したものであつた。しかし、実際にそれが緒についたのは、いま八代市の助役をしてられる加藤敏治さんが、国民文化研究会の理事長の小田村さんの命を受けて、資料の収集に手をつけられた十年前のことであつた。その折に私は、加藤さんのお手伝ひをしながら遺稿の取捨選択の作業を細々と続けてみたが、忘れもしない八年前の昭和四十五年二月、別府で行はれた会の理事会の席上で、（その理事会には、オブザーバーとして、今は亡き桑原暁一先輩も列してをられた）同席の理事長から「地の底をくぐつてでも、未収集の資料を集めよ」と言はれ、その夜、ねむられぬまゝに

先輩に岩根掘りても遺稿をさがすべしとはげしく言はれし言の浮びく

友の遺稿世に出すわざをおろそかに思ひてありぬ憶ひ足らずに



きびしくも言はるることばなき友の声きく思ひしてききてゐたりき

といふ歌を詠んだことを忘れることはできない。

ついで、昨昭和五十一年の第二十一回合宿教室終了後の理事会で、期せずして「この際全力を投入して、一年以内に発刊にまでもつてゆかうではないか」との決議がなされ、爾来、亡くなつた方々に縁のあつた者は、すべて立ち上つて無我夢中で物故者の御遺族、知人の訪問を再開しはじめた。かくて資料の収集に当りながら編集作業が続けられたのである。

それから今日まで、山をなす資料をどう選別するかといふことを初めとして、思案にあまることばかりであつたが、兎にも角にも無我夢中になつて仕事をしてゐると、不思議にも自然に解決の手法が浮んで来て、亡き友らのみ霊のふゆを蒙ぶりつつこの作業をしてゐるのだなあ、と思はずにゐられなかつた。

亡くなられた方のみ霊は、三十三年目にして神になるといはれる。そのことに気付いたのは編集作業も終りに近づいた八月のことであつた。不思議な思ひにさそはれたことであつた。まことに神となり給ふみたまの呼び声によつてこの本は世に出た、と思はずにゐられない。そしてその声はまた、「私のあとに続いてくれ」と、我等に語りかけてゐる様な気がしてならぬのである。み霊のみに今この本を捧ぐるにあたりみ友らがそのみいのちをかけたまひしものを慕ひ、そのあとに続かんことを誓ひまつりつゝ、思ひをとにもする若きらの陸続たらむことを乞ひ祈りまつるのである。



昭和五十三年二月十五日 第一刷  
昭和五十五年六月一日 第二刷

頒価 九〇〇円 千一六〇円

編者 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

104 東京都中央区銀座七―一〇―一八

(柳瀬ビル)

いのち ささげて

一戦中学徒・遺詠遺文抄一

国文研叢書 No. 19

電話 〇三(五七二)一五二六七  
振替 東京(七七)六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一―四

落丁乱丁のものはお取り替えいたしません

国文研叢書 (新書判)

No. 1	夜久正雄著	古事記のいのち (改訂版) 41・48年	316頁
No. 2	桑原晩一著	日本精神史鈔一新鷲と実朝の系譜 41年	279頁
No. 3	高木尚一著	弁証法批判の歴史 42年	241頁
No. 4	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・上巻(古代・中世)42年	309頁
No. 5	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・中巻その1(近世I)43年	317頁
No. 6	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・中巻その2(近世II)43年	409頁
No. 7	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・下巻その1(近代I)44年	403頁
No. 8	小田村寅二郎編	日本思想の系譜—文献資料集・下巻その2(近代II)44年	381頁
No. 9	川井修治著	歴史と人生観—マルクス主義の超克 43年	283頁
No. 10	小田村寅二郎編	欧米名著邦訳(明治)集 45年	483頁
No. 11	桑原晩一著	続 日本精神史鈔—花山院とその系譜 45年	310頁
No. 12	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のすすめ—創作と鑑賞 46年	309頁
No. 13	夜久正雄・山田輝彦共著	短歌のあゆみ(続 短歌のすすめ) 46年	316頁
No. 14	桑原晩一編	ヨーロッパにおける—マルクス主義批判論集 48年	338頁
No. 15	夜久正雄著	白村江の戦—7世紀・東アジアの動乱 49年	324頁
No. 16	桑原晩一遺著	国史の地熱—聖徳太子と楠氏の精神 49年	293頁
No. 17	戸田義雄編	日本における—マルクス主義批判論集 51年	320頁
No. 18	三井甲之著	明治天皇御集研究 52年	354頁



